

前橋市史

第一卷



前橋市街 背景の山は赤城山



後関天神山古墳出土 二禽二獣鏡



山王麿寺跡出土 水甕ならびに碗と皿



總社神社本殿(県指定重要文化財)



口輪寺の十一面観世音像(県指定重要文化財)

## 序

わが前橋市は、これまで史と申し上げられるような市史がありませんでした。しかし、その編さん、刊行を要望する声は多年にわたり強く叫ばれておいたのであります。

今ここに第一巻が上梓され刊行を見るに至りましたことは、何よりと思う次第であります。

顧りみまするに、本市は明治二十二年東群馬郡前橋町として、町制を施行してから本年をもって八十二年、同二十五年市制を施行してから七十九年を迎えたのであります。

市制施行八十年を迎えんとするに当たり、第一巻が世に出ることは前橋市にとりまして、まことに意義深く感ずる次第であります。

この地に人間の生活が始まったのは何時か、その後の変遷はどうだったのか、これは誰もが、もっとも知りたいことであります。またその歴史のあとをたどりながら、将来の前橋を構想することは大切であり、楽しいことです。

市史編さんは遅れましたが、本市が市史を世に出したいと言う計画は、前々からあったのであります。具体的には昭和十三年当時計画が立てられたのであります。しかし当時戦局は次第に苛烈となり、なかなか市史に力をかたむけると言うわけにいかず今日に及んだ次第です。

昭和二十九年町村合併を機とし「前橋小史」あるいは「前橋の姿と歩み」等の発刊を行ないましたが、史と称するにはあまりに貧弱なものでした。当市は、終戦の直前昭和二十年八月五日大空襲を受け、市街地の八割が灰燼と帰したのであります。しかし、歳月の経過とともに、次第に世人の記憶より消えざる戦災の記録をどうしておく必要を痛感したのであります。依って本市の戦災状況と復興の経過を纏め「戦災と復興」を昭和三十九年刊行しましたところ、大変好評を得たのであります。これに力を得まして引続き市史編さんを決意し、同年十一月市誌編さん委員会規則を公布し、後「市誌編さん委員会」を「市史編さん委員会」と改め、翌年四月委員、参与等を委嘱し、本事業に本格的に取組んだのであります。

爾來、関係の諸先生には豊富な学識に、なお格段の精進研究を重ねられ、市民各位には門外不出の資料を提供せられる等の協力を預り厚く感謝する次第であります。また当前橋市に関係の深い酒井、松平藩に関する資料等の必要あり、さらに生糸の町前橋として幕末維新の資料を吟味する必要があるため、姫路市、川越市、横浜市等より多大の御協力に預ったことを感謝する次第であります。

特に執筆者幹事の庭山先生をはじめ、第一巻の執筆者尾崎先生その他諸先生のご努力に対しましては、厚く敬意を表するものであり、また現在執筆を進められつつある山田先生をはじめ執筆者各位の御努力に対しまして、同様敬意を表する次第であります。

この市史は、本市の自然と古代、中世の各編を収めましたこの一冊を第一巻として、以下近世、近代及び現代に至る各編を順次発行する計画であります。本巻は古代、中世を取扱っておりますが、幸にして当市には古墳が多く、その分野の権威者である尾崎先生に執筆して頂けましたことは前橋市史としてだけでなく、歴史の分野に貢献するところが大きいのではないかと自負する次第であります。殊に、この編執筆中前橋市後閑町坊山の天神山古墳の発掘が行なわれ、極めて貴重な資料が発見されましたことは、なによりの幸せと思っております。

第一巻に引続き、第二巻、第三巻と刊行を進めてまいる所存であります。資料の点その他各界、各方面の方々にいまままでお寄せ下さいました御協力を今後ともお願い申し上げます。

編さん関係者の努力と各界の御協力により、この事業が一日も早く完成し、市民の御要望にこたえ、さらに過去の貴重な記録であるとともに今後の指針としても大いに活用せられますよう念願する次第であります。

昭和四十六年一月

前橋市長  
石井繁丸

## 凡 例

一、前橋市史は、第一巻を自然・古代・中世編とし、第二巻・第三巻を近世編、第四巻近代及び現代（市制施行まで）第五巻現代（市制施行以後）の順に刊行の計画である。

一、各巻とも、それぞれ編・章を立て節に分けて記述し、さらに必要に応じて細分した。

一、本文は、特殊な学術用語以外は、原則として当用漢字、現代かなづかいとしたが、やむを得ないものについては、ふりがなをつけて、読み易いようにした。

一、引用資料は、興味深いものについては、原文のままとし、その他は読み下し、または摘録し、その出典を明らかにした。

一、地名は、便宜上、新・旧地名を記し、年号には、西暦をカッコ内に注記した。

一、古代編中の「後閑天神山古墳」は、従来例としては「前橋」の名を冠すべきであるが、本書では、市中の同名古墳との混同を避けるため、特に「後閑」の文字を用いた。

題簽は、「厩橋城址記念碑」（口下部鳥鶴書）の碑文から採拓

前橋市史 第一卷 目次

凡 序 . . . . . 前橋市長 石井繁九  
例 . . . . .

第二編 自然

第一章 前橋市の自然地理的環境 . . . . . 一  
第一節 関東における體的位置 . . . . . 一  
第二節 標 高 . . . . . 五

第二章 地形・地質 . . . . . 八

序 節 . . . . . 八

第一節 地形・地質の概説 . . . . . 一〇

- 1 基盤岩層(先第四系) 10
- 2 赤城火山斜面 12
- 3 前橋台地 12
- 4 広瀬川低地帯 13
- 5 現利根川氾濫原 14

第二節 各地域の地質……………三

1 赤城火山斜面15 (1)関東ローム層16 (2)成層火砕岩層20 (3)田口付近の孤立丘群21

(4)白川扇状地砂礫層22

2 前橋台地23 (1)褐色火山灰質シルト層24 (2)前橋泥流堆積物26 (3)前橋砂礫層29

3 広瀬川低地帯30 (1)広瀬川発電水路沿いの地質30 (2)広瀬川砂礫層33 (3)岩神の残石・お慶ヶ岩35

お慶ヶ岩35

4 現利根川氾濫原36

5 黒土層(腐植土)の層序38 浅間A軽石39 浅間B軽石40 ニッ岳軽石40 浅間C軽石40

6 地下水41 (1)広瀬川低地帯の地下水42 (2)前橋台地の地下水43

第二節 自然の推移……………四

1 赤城・榛名火山の成立44 2 古期扇状地の形成と前橋砂礫層の推移46 3 前橋

泥流の流出と前橋台地原面の形成47 4 湿地帯の出現と前橋泥炭層48 5 旧利根

川の流路と広瀬川低地帯の形成49 6 現在の利根川49

第四節 地下水(深井資料)……………五

第三章 土壌と土地利用……………六

第一節 土 壤……………六

第二節 土地利用と水利……………七

第三節 水 系……………七

1 利根川79 2 広瀬川81 3 桃ノ木川81 4 天狗岩用水82 5 風石川82 6 馬場

川83 7 佐久間川83 8 吉野川83 9 端気川83 10 白川83 11 藤沢川84 12 盤沢

川84 13 山沢川84 14 牛池川84 15 牛王頭川84 16 染谷川85 17 藤川85 18 宮川85

19 櫛島用水85 20 松妻川85 21 寺沢川85 22 清水川86 23 大正用水86 24 荒砥川86

25 神沢川86 26 東神沢川87 27 桂川87 28 八坂用水87 29 貴船川87 30 群尾用水87

第四章 気 象……………八

気温89 湿度91 降水量91 風94 雪97 雷99 霧100 結氷100 霜100 ひょう・あら

丸雨 日照時 地震誌

第二編 古代上

序 章……………一〇

一、前橋の地誌 二、旧石器期の前橋 III 縄文期の前橋 四、弥生期の前

橋 III 五、石田川式石器と前橋 III 六、古墳と前橋 III 七、地方豪族と前橋 III

第一章 古代人の生活―石器と土器との使用……………一三

序 節・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 二四

第一節 縄文土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 二六

1 笥井遺跡 2 小神明遺跡 3 産業道路東遺跡 4 産業道路西遺跡

第二節 弥生土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 二四

1 荒口前原遺跡 2 板が丘遺跡 3 樽式土器の發掘

第三節 土師器の初現・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 二六

1 大室小学校々庭第一遺跡 2 新屋遺跡 3 稻荷塚北遺跡一号住居跡

第四節 土師器と生活・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 二七

1 土師器の使用 2 土師器の遺跡の分布

(1) 東部地区 (1) 荒砥東小学校々庭遺跡 (2) 荒砥東小学校農場遺跡 (3) 寺畑遺跡

(4) 諏訪遺跡 (5) 前田遺跡 (6) 芝子小学校々庭遺跡 (7) 荒砥保育所遺跡

(2) 北部地区 (1) 青柳遺跡 (2) 上畑野西田ノ口遺跡 (3) 青柳町宿上遺跡 (4) 上

稲井町壬子塚遺跡 (5) 関根町雲居遺跡

(3) 西部地区 (1) 須高塚北遺跡 (2) 山舟跡調査に伴い発見の住居跡 昭和三六、七

年次発掘 同四〇年次発掘 同四一年次発掘 同四二年次発掘 同四三年次

発掘 (3) その他

第二章 豪族の支配と古墳の築造・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 二八

序 節・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 二八

第一節 古墳の分布・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 二九

旧市域 上川灘 下川灘 上隈 総社 元総社 清里 南橋

芳賀 桂宮 木瀬 荒砥

第二節 古墳の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 三三

1 上沖上ノ山古墳 2 今井B号古墳 3 今井A号古墳 4 榑峠古墳

5 小且那古墳 6 阿久山古墳 7 オフ塚古墳 8 荒口大塚古墳 9 龍海

院古墳 10 愛宕山古墳 11 楚穴山古墳 12 前二子古墳 13 後二子古墳

14 前橋二子山古墳 15 不二山古墳 16 塩原塚古墳 17 山王大塚古墳

18 上陽館号古墳 19 瓦使用棺 20 荒口小塚古墳 21 正円寺古墳 22 オフ

塚西古墳 23 朝倉I号古墳 24 朝倉II号古墳 25 今井神社古墳 26 朝倉

Ⅲ号古墳 27 外勒山古墳 28 植野塚古墳 29 八幡山古墳 30 龜社二

子山古墳 31 宝塔山古墳 32 後園天神山古墳 33 五代大日塚古墳

第三節 古墳の編年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 三五

1 火山現象を利用した古墳編年の基準 2 天神山古墳墳丘下の浅間浮石層(A)

層(B) 3 橋名二ツ岳噴出の浮石層(B層) 4 弘安四年の浅間山噴出の浮石層

5 竪穴式古墳の編年 6 横穴式古墳の編年 (1) 石室西壁構造からみた編年基準

- (2) 外侮嚮逐と出土遺物による編年基準説 (3) 古寺院跡の間隙からみた編年基準説
- 第四節 古墳と生活 . . . . . 三九七
- 1 壹の神皇力辨 2 形象墳輪から見た送葬儀 3 死者に対する意識とその変化Ⅱ
- 4 死穢に触れた罪の意識Ⅱ 5 「もがり」の意味と「みたまふり」Ⅲ 6 棺の有無と「もがり」Ⅳ
- 第五節 技 術 . . . . . 四〇〇
- 1 土の技術と石の技術Ⅱ 2 墳丘の築造Ⅳ 3 石室・石櫛の構造Ⅵ
- 第六節 古 墳 群 . . . . . 四〇二
- 1 広瀬古墳群Ⅱ (1) 旧市域の古墳Ⅱ (2) 朝倉古墳群Ⅱ (3) 後閑古墳群Ⅱ (4) 山王古墳群Ⅱ
- 2 総社・清里古墳群Ⅱ (1) 総社古墳群Ⅱ (2) 清里古墳群Ⅱ
- 3 南橋古墳群Ⅱ (1) 田口古墳群Ⅱ (2) 上細井付近古墳群Ⅱ
- 4 上泉古墳群Ⅱ
- 5 芳賀地区に分散する古墳Ⅱ
- 6 旧木瀬地区に分布の古墳Ⅱ
- 7 荒砥古墳群Ⅱ (1) 荒砥川流域地区Ⅱ (2) 二之宮・飯土井地区Ⅱ (3) 荒子・下大塚地区Ⅱ (4) 酒大室・東大空地区Ⅱ
- 第七節 支配者である豪族 . . . . . 四〇五

### 第三編 古代 下

序 章 . . . . . 四〇七

一、 國造から国司へ 二、 国府と國分寺Ⅱ 三、 桑里洞と任氏部

第一章 国司政治 . . . . . 四一〇

第一節 国司の任命 . . . . . 四一〇

1 改新政治の突進Ⅱ 2 国司政治の確立Ⅱ 3 上毛野氏の一族Ⅱ 4 上毛野国車評詔

第二節 国府の設置 . . . . . 四一六

1 国府の位置遷定Ⅱ 2 国府跡推定地の発掘調査Ⅱ (1) 昭和三六年次調査Ⅱ (2) 昭和三七年次調査Ⅱ (3) 昭和三八年次調査Ⅱ (4) 昭和三九年次調査Ⅱ (5) 昭和四〇年次調査Ⅱ

(6) 昭和四一年次調査Ⅱ (7) 昭和四二年次調査Ⅱ (8) 昭和四三年次調査Ⅱ

第三節 国府を定めた群馬の地 . . . . . 四一九

1 「群馬」の地名Ⅱ 2 「束縛」の起源Ⅱ 3 群馬の在地勢力と国府Ⅱ

第四節 在地豪族の權威を示す山王院寺跡 . . . . . 四二七

- 1 山王虎寺塔心礎
- 2 石製馬尾石
- 3 根巻石
- 4 心礎以外の礎石
- 5 出土瓦及び出土位置
- 6 陶製銅軸水瓶及び埴、皿等配置一括遺物
- 7 佐波理墳
- 8 その他の出土品

- 第五節 郡郷の成立
- 1 郡の設定
- 2 郷と里
- 3 河川の変流と郷
- 4 朝倉郷・田後郷
- 5 旧荒紙の郷名

- 第六節 国司と神社
- 1 神社行政
- 2 国司の班幣
- 3 学校院若御子明神

第二章 赤城神

- 第一節 国司政治下の赤城神
- 第二節 一之宮赤城社を中心とした赤城山南麓地帯
- 第三節 赤城社と近戸神社
- 第四節 上毛野朝臣足人と赤城神

第三章 仏教並びに寺院文化

- 第一節 私寺の建立
- 第二節 火葬墓と瓦塔

- 第三節 瓦使用様式
- 第四節 国分寺の建立
- 第五節 上野国分寺
- 第六節 定額寺
- 第七節 神仏習合
- 第八節 日輪寺十一面観世音像
- 第九節 善勝寺の鉄道阿弥陀如来像

第四章 班田取授の法と条里制

- 第一節 班田取授
- 第二節 条里制

第四編 中世

- 序章

一 守護の任命と仏教の浸透

- 第一章 国府の存続と上野国目代

第二章 国府を中心とした武士の行動

- 第一節 源頼朝挙兵のころの情勢……………七九
- 第二節 上野国奉行入藤九郎盛長……………八三

第三章 赤城山南麓地帯の荘園と公領

- 第一節 荘園と公領……………八六
- 第二節 女堀の開墾……………九〇
- 第三節 大胡馬と大胡氏……………九三

第四章 建武政権と上野

- 第一節 橋合戦と上野国御家人……………九六
- 第二節 義貞の挙兵と上野の武士……………一〇〇

第五章 二之宮の赤城神社と三所明神

- 第一節 二大明神と三所明神……………一〇三
- 第二節 地藏信仰……………一〇六
- 第三節 三夜沢赤城神社……………一〇九
- 第四節 二宮赤城神社……………一一三

第六章 総社と山王

- 第一節 総社の発展と總社本「上野国神名帳」……………一一三
- 第二節 山王と日枝神社……………一一七

第七章 守護の支配

- 第一節 上杉氏の入国……………一二〇
- 第二節 親応の擾乱と宇都宮氏の上野支配……………一二六
- 第三節 上杉氏の関東復帰……………一三〇

- 1 宇都宮氏のの上杉氏復帰阻止行動例 2 宇都宮氏と平一揆の反乱留 3 上野国在地領主の動向留……………一三三

- 第四節 上杉氏の守護領国体制……………一三六
- 第五節 関東の分裂と守護領国体制の崩壊……………一四〇

第八章 民衆と信仰

- 第一節 氏神・産土神・鎮守神……………一四三
- 1 熊野神社 2 春日神社 3 神明宮 4 八坂神社 5 鏡神社・鏡宮神社 6 赤鳥神社・黒鳥神社 7 御霊神社 8 八幡宮 9 諏訪神社 10 その他……………一四七
- 第二節 遺物からみた信仰表現……………一五〇

- 1 金銅製遺物類 2 石製遺物類 (1)板井城 (2)成・五輪塔・等名塚・厩埜城 (3)多宝  
石埜城 (4)その他の笠塚塚・厩埜城 (5)笠置印塔跡 (6)輪島寺跡 (7)石殿跡 (8)石仏跡

## 第九章 戦国の世の脱橋

- 第一節 関東再注文と長野氏の脱橋領 . . . . . 九五  
第二節 上杉謙信の上野支配と脱橋北条氏 . . . . . 九五  
第三節 武田氏の西上野支配 . . . . . 九七  
第四節 若海城・勝山城等の盛衰と石倉の攻防 . . . . . 九八  
第五節 滝川一益の脱橋進出 . . . . . 九八  
第六節 大胡領と上泉伊勢守秀綱 . . . . . 九八  
第七節 那波氏と力丸城 . . . . . 九八  
第八節 戦国末期の農民と武士 . . . . . 九九  
第九節 環濠屋敷 . . . . . 九九  
1 環濠屋敷の分布概 2 現況例 3 構造上の特色 4 環濠の成立期 . . . . . 九九

## 第一〇章 城 砦

- 1 脱橋城 . . . . . 一〇一  
2 若海城 . . . . . 一〇二  
3 石倉の砦 . . . . . 一〇三  
4 勝山城 . . . . . 一〇三  
5 輪田城 . . . . . 一〇三  
6 大友館 . . . . . 一〇三  
7 村山城 . . . . . 一〇三  
8 中尾城 . . . . . 一〇三  
9 関根の寄居 . . . . . 一〇三  
10 嶺城 . . . . . 一〇三  
11 勝沢城 . . . . . 一〇三  
12 小坂子城 . . . . . 一〇三  
13 栗巻戸の砦 . . . . . 一〇三  
14 上泉城 . . . . . 一〇三  
15 荻窪城 . . . . . 一〇三  
16 新土塚城 . . . . . 一〇三  
17 今井城 . . . . . 一〇三  
18 赤石城 . . . . . 一〇三  
19 大室城 . . . . . 一〇三

20 大室元城 . . . . . [108]

21 荒子の砦 . . . . . [108]

22 小神明の砦 . . . . . [108]

23 宿阿内城 . . . . . [108]

24 宿阿内古城 . . . . . [108]

25 力丸城 . . . . . [108]

26 新堀城 . . . . . [108]

古代・中世主要年表

あとがき . . . . . [102]

図 版

一 空から見た市役所付近 . . . . . [112]

二 関東における前橋市の位置 . . . . . [112]

三 群馬県における前橋市の位置 . . . . . [112]

四 市内の等高線図 . . . . . [112]

五 市内の地形的区分図 . . . . . [112]

六 利根川流路の変遷 . . . . . [112]

七 赤城斜面の関東ローム層 . . . . . [112]

八 関東地方の主な墓石層 . . . . . [112]

九 関町における大群火碎流産産物と関東ローム

層との関係 . . . . . [112]

一〇 前橋台地(利根橋左岸)の火山灰質シルト層及び  
前橋泥流堆積物の重産物組成 . . . . . [112]

一一 前橋台地の表層地層柱状図 . . . . . [112]

一二 前橋台地の試験柱状図 . . . . . [112]

一三 広瀬川発電水路沿いの試験柱状図 . . . . . [112]

一四 前橋市の忠土層の模式的柱状図と重産物組成 . . . . . [112]

一五 深井戸のストレートナー位置 . . . . . [112]

一六 前橋山の模式的原質断面図 . . . . . [112]

一七 不良土壁内訳 . . . . . [112]

一八 水糸図 . . . . . [112]

一九 一〇年間平均風向 . . . . . [112]

二〇 日最高最低気温月別平均値比較表 . . . . . [112]

二一 月間降水量比較表 . . . . . [112]

二二 積雪比較表 . . . . . [112]

二三 前橋市縄文土層分布図 . . . . . [112]

二四 小神明遺跡発見 . . . . . [112]

二五 産業道路西遺跡発見 . . . . . [112]

二六 産業道路西遺跡出土縄文土器 . . . . . [112]

二七 前原遺跡出土器出土状態 . . . . . [112]

二八 前原遺跡出土の土器 . . . . . [112]

二九 後岡町出土弥生礎礎、同弥生礎 . . . . . [112]

三〇 大塚小学校跡第二遺跡土器出土状態 . . . . . [112]

三一 新原遺跡土器出土状態 . . . . . [112]

三二 荒堀東小学校\*原遺跡A号住居跡 . . . . . [112]

三三 荒堀東小学校\*原遺跡A号住居跡 . . . . . [112]

三四 寺畑遺跡住居内土器出土状態 . . . . . [112]

三五 寺畑遺跡住居内磁器 . . . . . [112]

三六 前田遺跡電線 . . . . . [112]

三七 前田遺跡住居跡 . . . . . [112]

三八 荒子小学校原遺跡第一号住居跡 . . . . . [112]

三九 第四号住居跡、土器を築道に利用 . . . . . [112]

四〇 須藤遺跡正副、分銅柱及びその奥部 . . . . . [112]

四一 稲荷塚北遺跡第一号住居跡出土土器 . . . . . [112]

四二 前橋市内古墳分布図 . . . . . [112]

四三 旧市域古墳分布図 . . . . . [112]

四四 上川遺(船町町)古墳分布図 . . . . . [112]

四五 同(後岡町)古墳分布図 . . . . . [112]

四六 上岡(西野町東善町山王町)古墳分布図 . . . . . [112]

四七 總社古墳分布図 . . . . . [112]

四八 滑里古墳分布図 . . . . . [112]

四九 南橋古墳分布図 . . . . . [112]

五〇 桂登東北部古墳分布図 . . . . . [112]

五一 同西側同 . . . . . [112]

五二 芳賀古墳分布図 . . . . . [112]

五三	萬城古墳分布圖……………	二五
五四	小豆那古墳……………	二六
五五	オブ塚古墳石室遺跡……………	二五
五六	愛宕山古墳南方より望む……………	二五
五七	同石室内部及び石棺……………	二五
五八	同石室東側……………	二五
五九	蛇穴山古墳石室入口……………	二五
六〇	同 石室正面……………	二五
六一	同 側面……………	二五
六二	同 平面図……………	二五
六三	前二子古墳墳丘実測図……………	二六
六四	同 石室実測図……………	二六
六五	前二子古墳石室……………	二六
六六	前二子古墳出土品……………	二六
六七	後二子墳石室……………	二六
六八	同 実測図……………	二六
六九	前橋二子山古墳実測図……………	二六
七〇	前橋二子山古墳……………	二六
七一	不二山古墳……………	二六
七二	不二山墳実測図……………	二六
七三	塩原塚古墳玄室入口、奥壁……………	二六
七四	山王大塚古墳墳丘実測図……………	二六
七五	山王大塚古墳……………	二六

七六	瓦使用幅……………	二六
七七	正門寺古墳……………	二六
七八	正門寺古墳盛穴式石棺……………	二六
七九	同 古墳実測図……………	二六
八〇	同 石室実測図……………	二六
八一	オブ塚西古墳石棺……………	二六
八二	朝倉I号古墳石室発掘調査……………	二六
八三	朝倉II号古墳……………	二六
八四	同 粘土層……………	二六
八五	同 雲石……………	二六
八六	同 墳頂面醜陋の石田川式土器……………	二六
八七	同 古墳実測図……………	二六
八八	同 第五トレンチピット実測図……………	二六
八九	同 出土品……………	二六
九〇	同 出土土器……………	二六
九一	今井神社古墳(西南から)……………	二六
九二	同……………	二六
九三	同 後内郡出土石棺の葬……………	二六
九四	同 古墳実測図……………	二六
九五	朝倉I号古墳墳丘断面平面実測図……………	二六
九六	八影山古墳……………	二六
九七	同 実測図……………	二六
九八	蛇穴二子山古墳……………	二六

九九	同 実測図……………	二六
一〇〇	同 墳丘実測図……………	二六
一〇一	同 前方部石室実測図……………	二六
一〇二	同 後内郡石室実測図……………	二六
一〇三	宝塚山古墳(西南側)……………	二六
一〇四	同 古墳現形図……………	二六
一〇五	同 石室支門……………	二六
一〇六	同 石棺……………	二六
一〇七	同 石棺、塔婆間の一部……………	二六
一〇八	天神山古墳墳丘実測図……………	二六
一〇九	同(発掘前)南から望む……………	二六
一一〇	同 出土土器……………	二六
一一一	同 粘土層……………	二六
一一二	同 粘土層内鏡類混存状態……………	二六
一一三	同 出土土器四角格帯銅鏡……………	二六
一一四	同 変形鏡形鏡……………	二六
一一五	同 三角縁四神四獣鏡……………	二六
一一六	同 鉄製太刀……………	二六
一一七	同 鉄製、やりかな……………	二六
一一八	同 銅鏡、碧玉製初穂串……………	二六
一一九	同 鉄製、釣針状金具外……………	二六
一二〇	板が丘遺跡実測図……………	二六
一二一	天神山古墳粘土層周辺の構造……………	二六

一一三	塩原塚古墳玄室内より入口を見る……………	二六
一一三	宝塚山古墳石室……………	二六
一一四	カワト山古墳の家型石棺……………	二六
一一五	上川瀬川倉及び後内古墳群……………	二六
一一六	山王古墳群……………	二六
一一七	西大塚町東大塚町二子山付近古墳図……………	二六
一一八	西大塚町付近古墳分布図……………	二六
一一九	西大塚町鬼子町の一連古墳分布図……………	二六
一二〇	中二子古墳……………	二六
一二一	同 古墳実測図……………	二六
一二二	赤塚神社古墳……………	二六
一二三	同 本地仏……………	二六
一二四	元徳社小学校遺跡(四府跡)発掘調査……………	二六
一二五	同……………	二六
一二六	丁間遺跡……………	二六
一二七	山王塚寺跡遺物出土地図……………	二六
一二八	日枝神社境内山王塚寺跡基礎……………	二六
一二九	山王塚寺跡塔心礎……………	二六
一三〇	同実測図……………	二六
一三一	石鏡類実測図……………	二六
一三二	石鏡類(都九方、日枝神社境内)……………	二六
一三三	根巻石……………	二六
一三四	同 実測図……………	二六

一四九	並介七葉軒丸九拓本	六元
一四八	康興蓮花文軒丸九拓本	六元
一四七	單弁四葉軒丸九拓本	六元
一四八	重形復弁珠文帶付軒丸九拓本	六元
一四九	重張文軒平瓦拓本	六元
一五〇	文字瓦拓本	六元
一五一	山玉銅寺出土陶製銅軸水瓶及び噴壺	六元
一五二	佐渡陶器	六元
一五三	山三郎寺出土釘	六元
一五四	同 觀音像部	六元
一五五	学校若獅子明神位取図	六元
一五六	二ノ宮町付近から見た志城山	六元
一五七	六供宮安寺付取図	六元
一五八	荒口町出土の石鏡	六元
一五九	石製湯骨器	六元
一六〇	上野岡分佛寺跡実測図	六元
一六一	同 伽藍配置推定図	六元
一六二	同 金堂跡実測並びに復原図	六元
一六三	同 塚跡実測並びに復原図	六元
一六四	同 金堂内安置菩薩の推定図	六元
一六五	日輪寺十一面觀世音像	六元
一六六	日輪寺旧境内図(明治初期)	六元
一六七	善勝寺鉄造阿弥陀仏像	六元

一六八	同 仏像背銘	六元
一六九	赤城山南麓地帯の荘園と公領	六元
一七〇	女堀用水路断面図	六元
一七一	明和五年の二宮井成神社境内地図	六元
一七二	二宮井成神社の區區	六元
一七三	同 塔跡心礎	六元
一七四	同 塔心礎実測図	六元
一七五	同 赤城塔	六元
一七六	上野岡神名帳(總社本)の一部	六元
一七七	總社神社の彫仏佛尊像、普賢像、同雲版	六元
一七八	引間妙見寺の梵鐘	六元
一七九	上野における杉氏所領と守護官	六元
一八〇	東宮寺梵鐘	六元
一八一	同 現存寸図	六元
一八二	橋本寺跡口	六元
一八三	前橋市域内中世金石文化財分布図	六元
一八四	上福井給川氏藏梵字版碑	六元
一八五	乘明院西面版碑	六元
一八六	同 実測図	六元
一八七	小島町町の弥陀像佛尊像	六元
一八八	同 銘文	六元
一八九	五代町木福様境内板碑	六元
一九〇	上泉町宝篋寺の板碑	六元

一九一	大福寺の多宝塔(赤城塔)	六元
一九二	二百赤城神社の多宝塔	六元
一九三	山王町関根氏境内の多宝塔	六元
一九四	西大室町觀音寺の多宝塔	六元
一九五	富田町福岡山古墳の多宝塔	六元
一九六	江本町南江本古地の多宝塔	六元
一九七	熊鷹寺町鹿嶋寺前の多宝塔	六元
一九八	古市町和尚塚の多宝塔	六元
一九九	公田町堂崎寺の多宝塔	六元
二〇〇	同 実測図	六元
二〇一	魚里町輪寺境内五輪塔	六元
二〇二	総社町總社の堂梁師	六元
二〇三	光嚴寺境内の佛塔	六元
二〇四	同(台座)	六元
二〇五	同(左側)	六元
二〇六	同(右側)	六元
二〇七	西善町觀音寺の宝篋印塔	六元
二〇八	總社町光嚴寺境内の輪軸塔	六元
二〇九	元徳社町徳蔵寺境内輪軸塔	六元
二一〇	同 茶臼部	六元
二一一	荒口町觀音寺跡地輪軸塔	六元
二一二	魚里町庚申塚輪軸塔	六元
二一三	青梨子町正法寺輪軸塔	六元

二二四	鶴光野町善光寺跡銅塔	六元
二二五	西大室町水村氏屋敷の石版	六元
二二六	二ノ宮町藤部氏屋敷の石版	六元
二二七	魚里町三圓堂の薬師三尊	六元
二二八	總社町福野元堂寺の地藏像	六元
二二九	関東寫字文化による在地風分布図	六元
二三〇	澤澤屋敷現存図	六元
二三一	上佐島町中沢一氏屋敷図	六元
二三二	同 澤澤屋敷	六元
二三三	上佐島町福鳥居二郎氏屋敷付近図	六元
二三四	同 添断図	六元
二三五	魚里町矢野石やしき	六元
二三六	鶴光野町相田孫平治氏やしき	六元
二三七	力丸町羽島升平氏やしき	六元
二三八	徳丸町新井孝雄氏やしき	六元
二三九	同 井野氏やしき	六元
二四〇	同 新井直則氏の一廓	六元
二四一	後閑町北庭藤原氏やしき	六元
二四二	同 藩の断面図	六元
二四三	鳥羽町大福寺付近崖線地	六元
二四四	前橋市内の古城跡分布図	六元
二四五	旧澤澤城址、石倉跡	六元
二四六	善海或図	六元

表

一	地点別標高	二二七
二	地質年代区分と群馬の地質	二二八
三	前橋泥炭層の花粉分析表	二二九
四	砂礫の粒度と組成	二三〇
一	石倉岩園	二二七
二	勝山城跡	二二八
三	榎田城跡	二二九
四	大友塚跡	二三〇
五	村山城跡	二四一
六	中尾城跡	二四二
七	四原の宮跡	二四三
八	岩成跡	二四四
九	鹿野城跡	二四五
一〇	鹿野城跡	二四六
一一	小坂子城跡	二四七
一二	兎籠戸の砦	二四八
一三	上東城跡	二四九
一四	萩窪城跡	二五〇
一五	新土塚城跡	二五一
一六	今井城跡	二五二

一	赤石城跡	二五二
二	大室城跡	二五三
三	大室元城跡	二五四
四	荒子の砦	二五五
五	宿阿内城跡	二五六
六	宿阿内古城跡	二五七
七	力丸城跡	二五八
八	新堀城跡	二五九
一	口絵図版	
一	前橋市街	
二	後園天神山古墳出土二箇一既録	
三	山王崎寺跡出土水原釜並びに埴と皿	
四	総社神社本殿	
五	日輪寺の十一面観世音像	
六	利根川原の竈(前橋付迄)	
七	前橋市の第四紀編年表	
八	不良土分布一覽表	
九	大正用水原管地区及び面積	

表

一	地点別標高	二二七
二	地質年代区分と群馬の地質	二二八
三	前橋泥炭層の花粉分析表	二二九
四	砂礫の粒度と組成	二三〇

一	利根川原の竈(前橋付迄)	二二七
二	前橋市の第四紀編年表	二二八
三	不良土分布一覽表	二二九
四	大正用水原管地区及び面積	二三〇

九	天鈿岩用水遺蹟面積	二二七
一〇	広瀬橋本用水遺蹟面積	二二八
一一	中群馬用水関係地区及び面積	二二九
一二	赤城山南麓地帯地日別利用状況	二三〇
一三	利根川流域地帯地日別利用状況	二三一
一四	總面積対照表	二三二
一五	中央部の地日別面積推移表	二三三
一六	地区別地日別土地利用状況	二三四
一七	日差気温極月平均値	二三五
一八	日最低気温月平均値	二三六
一九	平均湿度	二三七
二〇	降水量	二三八
二一	一〇メートル以上の風の吹いた日数	二三九
二二	月平均風速	二四〇
二三	最多風向	二四一
二四	年間降雪日数	二四二
二五	降雪日数	二四三
二六	結氷日数	二四四
二七	最近一年間のひょう・あられ日数	二四五
二八	日照時間	二四六
二九	六〇年間の有感地震平均回数	二四七
三〇	昭和三九―四三年月別有感地震回数	二四八
三一	石巻時代の遺跡とローマ屋の竈年	二四九

三二	土師器遺跡分布一覽表	二五〇
三三	古墳(壙)一覽表	二五一
三四	横井古墳石室規模	二五二
三五	榎降古墳の主な出土品	二五三
三六	石室の幅・長比較表	二五四
三七	オブ塚古墳石室規模	二五五
三八	オブ塚古墳の長・幅尺度比較	二五六
三九	オブ塚古墳出土品	二五七
四〇	オブ塚古墳出土土刀一覽	二五八
四一	オブ塚古墳出土小刀一覽	二五九
四二	横穴式古墳、竪穴式古墳比較表	二六〇
四三	前二子墳内無標識の規模	二六一
四四	前二子出土品	二六二
四五	後二子古墳内部構造の規模	二六三
四六	後二子古墳出土品	二六四
四七	不二古墳玄室規模	二六五
四八	塩原塚古墳内部構造の規模	二六六
四九	塩原塚古墳出土品	二六七
五〇	山王崎古墳内部構造の規模	二六八
五一	朝倉寺古墳出土石田川式系十器	二六九
五二	古墳実測値比較表	二七〇
五三	総社二子山古墳出土品	二七一
五四	総社二子山出土の大刀比較表	二七二

五五	宝塔山古墳石室復原	三五
五六	天神山古墳出土品	三六
五七	古墳諸要素比較表	三六
五八	支室の長さとの比較表	三六
五九	角閃石塚山岩使用の有無比較表	三六
六〇	天神山、朝子塚比較表	三六
六一	箱式棺状内部構造の比較表	三六
六二	浮石質粉砕状角閃石安山岩使用の古墳一覽	三六
六三	横穴式古墳長幅の比及び石室比較表	三六
六四	二ツ橋廻廊により較新される横穴式石室	三六
六五	箱式棺状内部構造	三六
六六	横穴式古墳の石室	三六
六七	塚原塚古墳出土の曲	三六
六八	塚原塚古墳出土の耳環	三六
六九	朝倉の古墳(一)	三七
七〇	朝倉の古墳(二)	三七
七一	後岡の古墳	三七
七二	山王の古墳(一)	三七
七三	山王の古墳(二)	三七
七四	総江町の古墳	三七
七五	田口町の古墳	三七
七六	上藤井村の古墳	三七
七七	塚穴式古墳の比較表(一)	三七

七八	塚穴式古墳の比較表(二)	三七
七九	西大塚町の古墳	三七
八〇	前中後二子比較表(一)	三七
八一	古墳の規模別比較表	三七
八二	前二子、中二子、後二子比較表(一)	三七
八三	心齋寺五比較表	三七
八四	知行園主表	三七
八五	上野日吉藤原氏略系	三七
八六	大新部内村名表	三七
八七	大胡氏一族について(一)年表	三七
八八	大新部内の長業寺大通庵への法却(光修)の 四品在家	三七
八九	楠合歌洋文に見られる上野園御家人	三七
九〇	郡別神名比較表	三七
九一	上野園における上杉氏略系	三七
九二	白井長尾世系略	三七
九三	鹽社長尾世系略	三七
九四	鹽社長尾系図	三七
九五	高津長尾	三七
九六	「上野地方古刹社文」中の上野園の在地領主 の系譜	三七
九七	上杉方の軍事力構成	三七
九八	狭仏、梵唄、節口、騷仏、粟飯一覽表	三七

九九	前橋市域内中世金石遺物一覽	三三
一〇〇	坂碑一覽表	三三
一〇一	定塚、五箇塚、笠塚裏、扇塚	三三
一〇二	宝塚印塚	三三
一〇三	鐘廻塚	三三
一〇四	輪廻塚分布一覽表	三三
一〇五	石塚一覽表	三三
一〇六	石仏一覽表	三三
一〇七	関東真言文の諸士の同別統計	三三
一〇八	華法文の上野(古下野足利)諸士一覽表	三三
一〇九	毛利北条系譜	三三

一一〇	関東における上杉鎌倉の活動	三三
一一一	畷橋北条氏の寄進、安集、廻行歌	三三
一一二	武田氏の所領安堵および廻行	三三
一一三	那波氏系図(一)	三三
一一四	那波氏系図(二)	三三
一一五	上川瀨地区源流源数一覽	三三
一一六	下川瀨地区源流源数一覽	三三
一一七	上北地区源流源数一覽	三三
一一八	市内城郭の築城刻別	三三
一一九	市内城郭の規模	三三

前  
橋  
市  
史  
第  
一  
卷

## 第一編 自然

### 第一章 前橋市の自然地理的環境

#### 第一節 関東における總体的位置

前橋市は、木州のはげ中央、関東の北西を占める群馬縣城の中央部よりもやや南にあり、首都東京をへだたる約一〇〇<sup>海里</sup>のところ位に位置する。これを関東總体からみれば、市域は関東平野の北部を占め、奥利根に源を發した利根川が、上流の利根、北群馬兩郡を経て瀬く中流に入ろうとするところに發展した市である。従つて、往古から関東と上信越を結ぶ要地、表日本と裏日本をつなぐ要衝とされて来た。現在市中には、群馬・栃木を結ぶ國鉄両毛線及び東京・新潟を結ぶ上越線、前橋・桐生を結ぶ私鉄上毛電鉄が通じている。市域は東西一八・〇<sup>海里</sup>、南北一九・三<sup>海里</sup>、面積一四七・三九平方<sup>海里</sup>で、県下十一市中最大である。

市域の東・西・南・北四極の経度・緯度は次のとおりで、市役所所在地は、東経一三九度〇四分、北緯三六度一三分となっている。

極東 東経約一三九度二二分四四秒 (東大塚町字上多田山の東端)  
北緯約 三六度三分〇秒



第1回 空から見た市役所付近

などを運送することができる。市域の中央には坂東太郎と呼ばれる利根川が、北から南東へ流れている。

利根川から取り入れる広瀬・桃ノ木及び天狗岩の各用水は、それぞれ分水して市内を縦横に流れ、なかでも広瀬川は、満々たる水をたたえて市の繁華街を貫き、桃ノ木川は市の北東部、天狗岩用水は西部の各農地帯をうろちとして、「水の都前橋」を形成している。

地勢は利根川の東が赤城山麓、西が榛名山麓にかかり、東は南方へ、西は南東方へなだらかに傾斜して関東平

西。東経約一三九度〇分二七秒  
北緯約 三六度二五分〇秒

極南。東経約一三九度六分五〇秒  
北緯約三六度一八分〇八秒

極北。東経約一三九度〇八分一〇秒  
北緯約三六度二九分〇秒

また、市域は、東は勢多・佐波兩郡及び伊勢崎市に、西は北群馬・群馬の両郡及び高崎市に、北は勢多・北群馬兩郡、南は佐波郡に接し、上毛三山の赤城山は北に、榛名山は西にそびえ、妙義山は遙か西南に眺めることができる。このほか、北から西にかけて小野子・子持の山々や、浅間その他上宮越の山々、南には秩父の山なみな

野に合している。

市はまた、「水の都」であるとともに「米の町」としても知られて来たことあり、占くから薄蚕・製糸が盛んであり、市域内に養蚕用の桑園が多い。最近では工場誘致等により、養蚕も次第に変貌はしているが、現在でも依然として市の周辺地帯で盛んに行なわれ、随所に桑園を見ることが出来る。市域は工場や住宅団地造成等のため、耕作地の漸減を見てはいるが、それでも米作も依然として熱心に行なわれており、耕作地の四九・三〇％は田、二二・八％



第2回 関東における前橋市の位置

は畑、二七・九％は樹園地(昭和四十二年)となっている。山林は主として北部に残り、平坦地では、利根川東岸及び東部の独立丘陵地帯その他に、若干散在する程度である。

このように、本市は市街の周辺に耕地や山林をもつが、市の繁華街は、その中央にあって、広瀬川の分流である馬場川を境として、その南が台地、北が低地になっている。この低地は往古利根川の流路であったところで、台地はその兩岸にあたり、古利根川の北岸は南橋・芳賀・桂並及び永明地区をつらねる赤城山麓の一連の段丘となつている。



第3回 群馬県における前橋市の位置

この低地のうち南の台地寄りとその台地が、旧市城であり、市の中心地として発展し、官公庁、各種団体、会社及び商工業の中心地帯となっている。そして旧市域をとりかこむ周辺が新市域である。

道路は、国道第一七号線と第五〇号線が二大幹線をなし、第一七号線は、東京都中央区を起点として新潟市に達するもので、高崎市を経て前橋市の西南部から中央部に入り、それより北進して渡川市に向かう。また、第五〇号線は、前橋市を起点として茨城県水戸市に達するものであるが、この線は、市の中央部を東進して桐生市及び栃木県小山市を経過する。このほか、前橋古河線、前橋大間々桐生線、前橋秩父線、前橋赤城線、前橋停車場線、高崎渡川線

等の主要幹道が、市を中心に放射状線をなして、四方に通じている。  
 前橋市から関東各県の主要都市への距離をあげると、東京都(東京駅)へ鐵路一四・八、神奈川県横浜氏市へ同一四三・六、千葉県千葉市へ同一五〇・六、埼玉県浦和市へ同九〇・六、栃木県宇都宮市へ同一〇・八、茨城県水戸市へ同一四八・六キロである。

## 第二節 標高

前橋市の地勢は北西に高く、南東に傾斜して、中央が繁華街、周辺が耕地あるいは山林でいわゆる農業地帯になつてゐる。

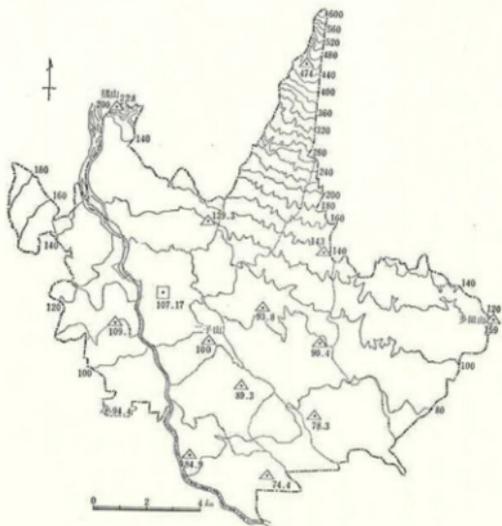
この農業地帯について、昭和三十一年経済企画庁が群馬県に依託して行なつた土地分類基本調査書に「前橋地方は関東平野の北辺にあつて、赤城・榛名の両火山体と利根川沖積面とにより構成されており、わが国における自然地域の典型をなす所であり、群馬県内の農業地域としても重要な所である」と記されているが、まさにそのとおりである。

市域の中央を北から南東に流れる利根川が、水源の山間部を離れて関東平野部に移る中間地点に本市があつて前橋の北では河床の幅が広く、最大一キロに及ぶところがあるが、その南では次第に河床が狭まらまつてゐる。河床の兩岸はその殆んどが高さ一〇メートルにも及ぶ傾斜崖を有し、山間を流れて来た余勢を保つて、やや急流性を示している。

利根川東岸の緩斜地帯はその大部分が赤城南麓の裾野にあたり、市街地の標高は大体一〇〇メートル内外であるが、それが北に向かって次第に高度を増し、市域の最北端にあたる金丸町の北部駒山が海拔六三〇メートルに及んでいる。また利根川の西岸は榛名山東麓の裾野にあたり、西に向かって高度を加えるが市域内では大きな高低はなく、最西端の清野町でも海拔二〇〇メートルに過ぎない。

市の中央繁華街は、現在の利根東岸にある。この地域は、利根川が直接、間接に働いたために生じた旧河床の低地と、台地から成っている。広瀬・桃ノ木の両川は、市の西北部から流下してこの繁華街の中央と北部を流れている。

その他市内の水系は別記のとおりであるが、市域全般から見て土地は高燥のところが多く、湿地性のところはほとんど無い。ただ赤城藩野の斜面下部に灌溉用流下水の溜池が若干分布している。(発行一土地分類基準)



第4図 前橋市内の等高線図

〔本調査〕

市域内の標高を更に具体的にあげると、中央街の本町一丁目前橋郵便局付近の一〇七呎であるのに対し、利根川東岸の北端、金丸町の中心部はそれより三〇〇〜四〇〇呎以上も高く、標高四〇〇〜五〇〇呎を示し、それより小坂子町二〇二、上細井町二二九、端気町一一〇、上栗町一〇〇、小島田町九〇、後閑町八八、下阿内町七十二呎というように市域の北から南へと傾斜している。また利根川の西岸の市域では清里地区の二〇〇呎を最高として、総社町が一五〇呎となり、次いで元総社町一〇九、古市町一〇六、下新田町九〇呎というように、南東へゆるやかな傾斜を示している。これを地点別に標高を示すと次のとおりである。

第一表 地点別標高

清里地区	芳賀地区	下川端地区
西北部 二〇〇 m	上野田町の南端 九〇 m	下川端地区
東部 一五〇	金丸町東山 六三〇	公田町付近 八四
総社地区 二〇二	小坂子町 二〇〇	力丸町付近 七四
総社町端野字新井の北端一五〇	端気の段丘上 一一〇	下阿内町付近 七二
北部から西北にかけて 一四五	南橋地区 二二八	清里地区 二四三
大渡橋付近 二二〇	橋山 二二八	江木町既橋病院北方 二〇一
元総社地区 二〇九	片石山 一六七	三原町付近 一九三
元総社町福寿付近 一〇九	田口町付近 一四〇	東片貝町付近 九三
東地区 二〇六	上細井段丘上 二二九	永明地区 九〇
古市町付近 一〇五	上細井町付近 一一〇	小島田町付近 七八
江田町付近 九八	上小出町付近 一一六	駒形町付近 七八
出雲所付近 九八	上川端地区 八八	上福地区 八〇
川曲町付近 九四	後閑町付近 八八	西善町矢田付近 八〇

第一章 前橋市の自然地理的概観

また市内には、各所に独立丘陵があるが、南橋地区では、田口町の北端、勢多郡北橋村との境界に橋山(標高二二八尺)がそびえ、その付近に片石山(一六七尺)八幡山(一七〇尺)があり、城南地区では勢多郡粕川村との境界に七ツ石山(一七四尺)佐波郡赤堀村との境界に多田山(一五九尺)がある。

市内内の等高線は別図のとおりで、利根川東側一〇〇尺の線が、赤城川脱末端の段丘層を示している。

## 第二章 地形・地質

### 序 節

前橋市は利根川が赤城・榛名の裾合谷をへて関東平野にのぞむところに位置し、北に赤城、西に榛名の両火山をおいて南は関東平野を一望するところにある。市街地の標高は一〇〇尺前後であるが、市内の最高所は金丸町北端にあってその標高は約六三〇尺に達し、市全体としての地形や地質はかなり変化に富んでいる。しかし、大きくみれば平坦地帯と第四紀火山斜面とからなっているため、具体的に調べることでできる範囲ではその地質はすべて第四紀に形成された各種の地層からなっている。したがって本稿に述べることは前橋市の第四紀地質

地質年代	絶対年代(年)	生物界	群馬の地史	群馬にある主な地層と岩石
新第三紀	0-0.01	人類	完成の時代 白土の時代 古火の時代 山形山形 丘陵代	沖積低地、下位段丘堆積物(広瀬川 低地帯) 関東ローム層、台地、中・高位段丘堆積物、湖成層(沼田・中之条) (前橋砂堤層、沼田泥流) 秋田・砂森・本宿・中之条の火砕岩層
第三紀	1	植物	古第三紀 河川時代 河川時代 河川時代	赤城・榛名などの火砕岩(野石山山頂) 三峰・大峰石美安山岩
第三紀	13	動物	白土の時代 白土の時代 白土の時代	菅川片石英岩 菅川英岩
第三紀	25	動物	白土の時代 白土の時代 白土の時代	下仁田中生層 山中部溝岩中生層 戸倉中生層 岩室中生層 奥利根中生層
第三紀	70	動物	白土の時代 白土の時代 白土の時代	関東山地、足尾山地 三城川結晶片岩、上緑変成岩
第三紀	135	動物	白土の時代 白土の時代 白土の時代	これより古い時代の地層は未発見
第三紀	180	動物	白土の時代 白土の時代 白土の時代	
第三紀	225	動物	白土の時代 白土の時代 白土の時代	
第三紀	270	動物	白土の時代 白土の時代 白土の時代	
第三紀	350	動物	白土の時代 白土の時代 白土の時代	
第三紀	400	動物	白土の時代 白土の時代 白土の時代	
第三紀	440	動物	白土の時代 白土の時代 白土の時代	
第三紀	500	動物	白土の時代 白土の時代 白土の時代	
第三紀	600	動物	白土の時代 白土の時代 白土の時代	
第三紀	1000	動物	白土の時代 白土の時代 白土の時代	
第三紀	2000	動物	白土の時代 白土の時代 白土の時代	

第2表 地質年代区分と群馬の地質

の記述ということになる。

第四紀は今から約一〇〇万年前にはじまり現在をも含む最も新しい地質時代で、現在みられる自然景観の完成された時代であり、人類の発展した時代でもある。また、世界的にみて、この時代には地球史上にもまれな寒冷気候（氷期）がくりかえし訪れているので大氷河時代とよばれることもある。前橋市の自然はこのような大氷河時代の中で育てられてきたともいえるのであって、川岸の露頭一つをみてもその時代のありさまを如実に物語っている。なお、参考までに地質年代の区分と群馬県の地質系統のあらましを第三表に示した。

以下記述にあたっては、前橋市の地質の解説と同時に今後の研究や開発に役立つ資料としての役割も果せるよう留意したつもりである。そのため本文中にも既存の深井資料や試錐調査資料などを用いるだけ活用し、代表的な深井資料は末尾に一括して表示した。それらの資料収集に当たっては、群馬県企業局、前橋市水道局および田中製菓重工株式会社の各位から多大な御協力をいただいた。

### 第一節 地形・地質の概説

地形および地質の特徴から前橋市の地域を区分すると、北東部の赤城火山斜面、南西部の洪積台地（前橋台地）、前記兩者の間に夾まれて地溝状をなす沖積低地（広瀬川低地帯）、および現利根川氾濫原の四地域に区分することができる（第五図）。

#### 1 基盤岩層（先第四系）

市内の各地域とも第四紀の各種堆積物が厚く累積しているので、先第四紀の基盤岩層は地表部の露頭ではまったく見られず、最も深い深井戸の資料を見てもそのような基盤に達している例はみいだされない。しかし、群馬県全般の地質構造から判断すると、前橋市付近で第四系の基盤をなすものは、高崎・富岡地域に広く露出している新第三系の最上部層（秋間層または板鼻層）



第五図 市内の地形的区分図

にあたるものと推定できる。これら其整層の伏在する深さは不明であるが、おそらく二〇〇層以上の深度にあるものと予想される。

## 2 赤城火山斜面

赤城火山斜面は平均勾配二度内外の緩斜面で、一般の火山原野におけると同様に各種の火山砕屑岩層（以下、火砕岩層とよぶ）からなっている。放射谷はかなり密に発達しているが、それぞれの放射谷は比較的浅いものが多く、その谷底部はかなり高いところまで水田化されており、尾根に当たる部分には古くから集落が発達している。斜面の末端は、比高二〇層前後の直線的な山麓崖をなしており、旧利根川のつくった広瀬川低地帯に接している。

## 3 前橋台地

市の南西部で広瀬川低地帯の面より一段高く高台をなす地域は洪積層からなり、この地域を前橋台地とよぶ。現利根川流路より西部の懸社、箱田、川曲などの地域もすべてこれに含まれる。また、市の北西端にあたる清里地域は、前橋台地面と榛名火山東麓斜面との移行部にあたっており、東に緩く傾斜する地形面をなしているが、この付近では前橋台地の原面をおおって、より新期の榛名火山起源の火砕岩類が堆積しているためと考えられるので、便宜上、前橋台地に含まれることにする。

台地面は詳しく見れば多少の起伏をもっているが、ほとんど平坦である。後に述べるように、その原因は火山泥流堆積物（前橋泥流堆積物）の堆積面と見なされ、その上を数枚以内の火山灰質シルト・粘土（次成土部）<sup>1</sup>が<sup>2</sup>おおっている。ただし、清里地域の湯崎町・清野町などで、前に述べたように台地面を被覆して榛名火山起源の火砕岩層が見られ、薄い上部ローム（気成）におおわれている。

台地の北東縁は北西―南東にのびる直線的な崖をなし、北側の広瀬川低地帯と接している。前橋中央児童公園、前三百貨店、市商工会議所付近などに見られる坂道は前橋台地から広瀬川低地帯に移行するところにあるもので、両地形面の高度差は一般に数層程度である。台地を貫流する利根川の現河床から台地面への比高は約一五層に達する。

## 4 広瀬川低地帯

本低地帯は赤城火山の山麓崖と前橋台地の北東縁をなす崖の間に夾まれ、約一・五―三層の幅をもって前橋市の北西部から南東部に帯状にのびている。一見地溝状をなすこの低地の表層は過去の利根川の泥濘原堆積物である沖積砂礫からなっている。現在は広瀬川、桃ノ木川、および白川その他の小河流や用水がそれぞれ合流あるいは分流しつつ流下しているが、いずれも地形に制約されて南東流している。

低地帯の面も詳しく見ると必ずしも平坦ではなく、各所に自然堤防（砂礫堆）、または小扇状地とみなせる高まりが見られる。低地帯内で集落や桑園が発達しているようなところは、そのような高まりの部分に当たっていることが多い。

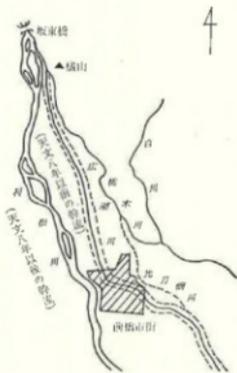
これらの微小地形からみると、過去の利根川が広瀬川低地帯の中を南東流していた当時は、その河道は赤城の山麓寄りのところからだんだんと南方の前橋台地の崖下に行かって移動したことが推察される。現在の広瀬川の

河道に近いところは利根川がいまの河道に大移動する直前の河床に当たっていたと考えられる。

昭和二十二年のカスリーン台風の際には天川大島その他一部の高所を残して、この低地帯のほとんど全面が洪水の被害をこうむっている。この洪水は赤城山水系その雨がこの低地帯に集中したためにおこったものである。通常の降雨では氾濫することはほとんどないがカスリーン台風程度の大雨量になると、当時の排水系（広瀬川、桃ノ木川）では、それをさばききれなかったためである。そのような年で近年、桃ノ木川の改修工事が施工されたことは驚深い。

### 5 現利根川氾濫原

前橋市における現在の利根川は、大渡橋付近にいたるまで沖積低地の西縁部に幅広い氾濫原をもって南下しているが、大渡橋のやや下流からは突然に広瀬川低地帯から離れて前橋台地内に入り込み、これを刻んで兩岸に高さ一〇層以上の野原をもつ峡谷をつくって南流している。地学的には自然の流路とみさせる広瀬川低地帯から急に台地内に入っている姿はいかにも不自然である。



第6図 利根川流路の更遷

史実によれば、過去の利根川は比万、柳川と称されたこともあり、いまの出口町付近から現在の広瀬川の流路をとって南流し、前橋―伊勢崎をはばぬる縁に沿って尾島町世良田にいたっていたという(第六頁)。利根川が流路を現在に変えたのは応永年間から一五三九年(天文八年)および一五四三年(天文一二年)の大洪水によるものとされ、そのうち田口から元総社までは一四二九年(永享元年)長尾氏の開墾による用水路に沿ったものといわれている。前橋台地内への流入に関しても自然とは解し難く、ここに古い小河川を利用した用水路のようなものが先在していたことが推察されるのであるが、これについての正確な史実はないようである。

現在の前橋市街地は、利根川が突然台地内へ流入する部分にひらけ、南西の半分は前橋台地上に、北東の半分は広瀬川低地帯の上にあつて、両者はいわば「山の手」と「下町」の関係にある。

## 第二節 各地域の地質

概説に述べた地域区分にしたがい、ここではそれぞれの地域の地質をやや詳しく記載する。

### 1 赤城火山斜面

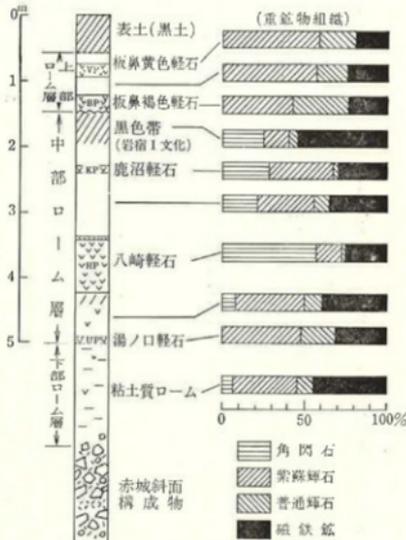
赤城南麓斜面のうちで前橋市に含まれる地域は、金丸町北端(標高六三〇層)を頂点とし、ほぼ上細井―小島田を連ねる山麓岸線を低辺とする南北に長い三角地域である。西隣の富士見村の斜面(白川扇状地)に比較すると地形はやや複雑で起伏に富む。この地域の地質は主として成層火砕岩類からなり、それらは関東ローム層によっておおわれている。

(1) 関東ローム層

前橋市の赤城斜面における関東ローム層の代表的柱状図と重鉱物組成を第七図に示した。

群馬県に分布する関東ローム層は洪積世にさかんに活動した赤城・榛名・浅間などの諸火山の火山灰層が風化したもので、換される軽石層や暗色帯を鍵にして上部ローム層・中部ローム層および下部ローム層に三区分けされている。

①上部ローム層 上部ローム層は浅間火山給源の火山灰や軽石からなり、現地形に沿って前橋市赤城斜面の全域に分布している。層厚は約一・五層。一般に黒土との移行部付近に細粒(○・四角形)の板鼻黄色軽石が薄層をなすか、または断続的にみとめられ、下半部は全般に細粒軽石質で、その中に板鼻褐色軽石が明瞭な層(層厚約



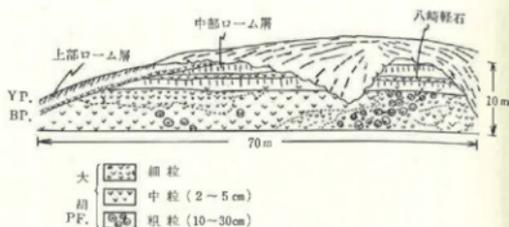
第7図 赤城斜面の関東ローム層

一五センチ、粒径○・五センチ)をなしている。中部ローム層以下のローム層に比べて粘土化の程度が低く、色調も淡色で断層面では淡褐色を呈し、往々にして上部ローム層の部分だけがやが突出する傾向が見られる。重鉱物組成は紫蘇輝石・普通輝石・磁鉄鉱などからなり、角閃石は含まれないことが特徴である。上部ローム層の上部に夾まれる板鼻黄色軽石の降下年代は放射性炭素(14C)による年代測定によって約一、〇〇〇年前と推定されている。したがって上部ローム層の最上部は洪積世と沖積世の境界を示す指標となる。

②中部ローム層 前橋地域の中部ローム層は主として榛名火山起源の火山灰や軽石からなり、赤城火山起源の火山灰はむしろ少ない。これは現在における浅間火山爆発時の降灰状況からもうかがえるように、火山の大噴発によって噴出した火山灰や軽石は瞬間的に高空に吹き上げられるので、一般に上層気流のつて火山の東方の地域に運ばれるためである。参考までに関東地方における主要軽石層の分布状態を第八図に示した。

中部ローム層は上細井・小神明・端気・上泉など赤城斜面末端部の地域を除いて、それより高いところにはほとんどを域に分布している。層厚は約三・五層。上部ローム層よりやや粘土質で、重鉱物組成は紫蘇輝石・角閃石・普通輝石・磁鉄鉱などからなる。上部ローム層との境界部には一般に三〇〜四〇センチの厚さをもつ暗色帯が認められる。この暗色帯は中部ローム層堆積後、上部ローム層堆積前の火山灰降下休止期に形成された過去の土壌(古土壌または埋没土)と見なされるもので、岩屑1文化包含層に当たっている。

暗色帯の下位約五〇センチには八崎軽石層が夾まれる。八崎軽石層はこの地域で中部ローム層を指す最も重要な地層で、一般に灰白色を呈する風化軽石(粒径一〜二センチ・角閃石安山岩質)からなり、金丸・小坂子付近で層厚は五〇センチ前後である。この軽石層は赤城南麓の西部にゆくほど厚く、粒径も地す傾向があるので榛名火



第9図 富士山における大胡火砕流堆積物とローム層との関係

③下部ローム層 大胡火砕流堆積物によっておわれなかった地域、たと

噴出した直後に形成されたと考えられる。  
 亦城火山の山頂カルデラは、きわめて大量におよぶ大胡火砕流堆積物を噴出した直後に形成されたと考えられる。  
 ③下部ローム層 大胡火砕流堆積物によっておわれなかった地域、たと

山から供給された降下軽石であることがわかってい



第10図 関東地方の主な軽石層

- |     |                 |     |        |
|-----|-----------------|-----|--------|
| FP. | 二ツ峰軽石層          | KP. | 鹿沼軽石層  |
| YP. | 櫻井赤色軽石層         | HP. | 八崎軽石層  |
| YP. | k 平洋赤色軽石層       | UP. | 湯ノ口軽石層 |
| BP. | 1 新井赤色軽石層 (上部部) | OP. | 湯貝軽石層  |
| BP. | 2 (下部部)         | TP. | 東京軽石層  |
| ▲As | 浅間山             | OU  | 宇都宮    |
| ▲Ha | 雄略山             | ONU | 岩田     |
| ▲Ak | 赤坂山             | OM  | 前橋     |
| ▲N  | 芳井山             | OK  | 別所     |
| ▲H  | 碓氷山             | CKa | 碓氷     |
|     |                 | OS  | 下野     |
|     |                 | OMI | 水戸     |

えは鳥取・五代・萩原などの地域の一部では、中部ローム層の下位につづいて厚さ数尺以内の下部ローム層が堆積している。この地域では中部ローム層の下限を必ず湯ノ口軽石（赤城火山給影）が明瞭な層をなすほどに堆積していないため、野外で中部ローム層と下部ローム層との境界をきめることが難しいが、一般には八幡峠右層の下位約一層付近に求められる。詳しく観察するとこの付近に薄いレンズ状をなして断続する赤褐色の湯ノ口軽石が認められることが多い。

下部ローム層は中部ローム層よりもさらに粘土化がすすみ、所によって土石流堆積物とみなせる大小の安山岩礫を混え、やがて下部の成層火砕岩層に移行するようになる。下部ローム層の重鉱物組成は中部ローム層に類似し、一般に紫蘇輝石・角閃石・普通輝石・磁鉄鉱などからなるが、風化変質されたものを含み、磁鉄鉱の量比が増すことが特徴である。（第七圖）

### (2) 成層火砕岩層

表層をなす関東ローム層や大洞火砕流堆積物などの下位には、前にも述べたように成層した火砕岩層が厚く堆積して深層にまで達し、裾野斜面の主体を構成している。ローム層が開削されている谷沿いや、大正用水路などでローム層の下にそれらの一部が露出していてもあるが、現在地表に露われているのは最上層のごく一部分にすぎない。江木や芳賀における側湯水通水脈その他の深井資料から見ると、約一五〇層の深度までさまざまな火砕岩類の成層からなっていて、すくなくとも層岩流らしいものは全く認められない。それぞれの火砕岩層は分級の悪い火山礫岩からなるものが主で、火砕流堆積物と考えられるものも若干夾む。ところによって埋木を含む

ことなども知られ、洪水時における土石流堆積物と思われるものも多い。

したがって、これらの火砕岩層は赤城火山の活動によって直接にもたらされた一次の堆積物というよりは、むしろ赤城火山の成長とともに、山頂部で激しく行なわれた剝削作用による崩壊物質が、火山山麓に運ばれて堆積したいわば二次的堆積物が主となっているものと考えられる。

### (3) 田口付近の孤立丘群

本市の北西部にあたる田口町の一部も、赤城斜面の一部に含まれる。この付近では桶山（二二八〇）や城山（二二〇〇）で代表されるような孤立丘に富む地形が目立つ。これらの小丘は極輝石安山岩質の塊状岩・凝灰角礫岩、熔岩などの成層からなっている。その成層面の示す構造は変化に富んでいるが、一般に急傾斜をなす時には直立していることもあり、構造上から見て赤城斜面の一般的傾向とは著しく異なっている。一方凝成岩石をみると、その一部には後に改めて述べる「岩神飛石」と岩質的に類似した熔結凝下火砕岩や、大小の火山礫のみからなる集塊岩も見られるので、もともとは火山の噴出口からさほど遠くない所で形成されたものにもちがいない。

したがって、この孤立丘群の成因については次の二つの考えかたができる。その一つは、かつてこの近くに噴出口をもつ古い火山体が存在し、それが開削されて一部が残っているという考えかたである。第二は、元来は初別の赤城火山山頂部付近で形成された堆積物が、大規模な火砕流にのって山麓におし込まれたといゆる「流れ」をみなす考えかたである。

現段階では、孤立丘群が赤城山麓末端部に位置していることや、この近くにかけて独立火山が存在したことを考えるに充分な資料が得られていないことなどから、最近筆者は大規模な「流れ山」である可能性の方が大きいのではないかと見ている。そのいずれにしても、きわめて興味深い問題であり、今後の研究が期待される。

各孤立丘の間はその後の堆積物である安山岩質の火山円礫層や、湖成層を思わせるようなラミナの発達した砂層などによって埋積されており、一般に中部ローム層以上の関東ローム層によっておおわれている。

(4) 白川扇状地砂礫層

竜蔵寺・上福井・勝沢西部・小神明・端気などの地域は白川扇状地の末端部に当たり、表層に土石流的な砂礫・粘土層が分布し、それらは上部ローム層だけにおおわれている。

白川扇状地は富士見村大河原付近を扇頂として白川兩岸の広い緩斜面をふくむ火山山麓扇状地である。一般に前記したと同様な土石流的堆積物や、火山砂礫層からなり、上部ローム層によって整合におおわれている。したがって、扇状地の形成時代は上部ローム層堆積期のやや前(約二五〇〇年前)と考えられる。

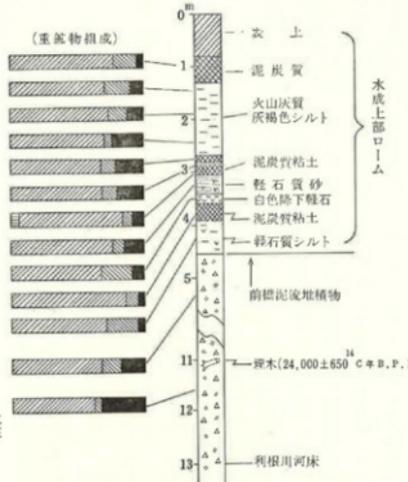
このように白川扇状地は比較的新期の堆積物からなるため、その堆積原面はまだほとんど開析されずに残っており、起伏の少ない平坦緩斜面をなしている。前に述べたように、嶺・小坂子・金丸などの地域が白川扇状地とは対照的になり起伏に富むことは、これらの地域では、新期の堆積物による古い谷の埋積が行なわれず、逆に削割だけがすすんだためである。

東上野から小島田にいたる山麓崖上面にはきわめて平坦な地形面がみられる。平坦面は山麓崖線に沿って約五

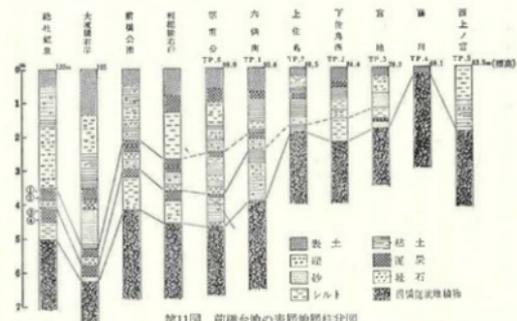
〇〇〜七〇〇分の幅をもつ地域にひろがり、北は赤城山の緩斜面と連続しているようにみえるので、従来は赤城火山斜面の末端部と考えられてきた。しかし、この平坦面の部分は後に述べる前橋泥流堆積物と、それをおおう上部ローム層からなることが明らかとなった。したがってこの面は赤城斜面に接した前橋台地面の一部が削割のがれて残存しているものと考えた方がよい。二面の広瀬川低地面との比高は五層前後で、前橋台地面のそれとはほぼ等しい。

2 前橋台地

前橋台地を構成する地層は利根川兩岸の崖によく露わっている。露頭で観察できる範囲では、上部から表土(黒土)、褐色火山灰質シルト層(水成上部ローム層)、火山泥流堆積物などからなっている。火山泥流堆積物(前橋泥流堆積物)の低位層についてはボーリング資料によるほかに、泥流堆積物はさ



第10図 前橋台地(利根川沿岸)の火山灰質シルト層および前橋泥流堆積物の重鉱物組成



第11圖 前橋台地の表層地層状況図  
TP.1-6は黒金炭素試料ピット断面、①-⑥は花粉分析試料の採取

ほど厚いものではなく、その下位には少なくとも一〇〇層以上の深さまで砂礫層（前橋砂礫層）が続いている。次にそれらの地層について概要を述べておく。

(1) 褐色火山灰質シルト層（水成上部ローム層）  
前橋市街地付近では一般に湿潤地の堆積とみられる特徴を示し、粘土、シルト、軽石質砂などからなっていて、ライナの発達するところもある。その代表的な柱状図を第一〇図に示した。全体的に火山灰質で、有色鉱物の組成をみると各部分とも角閃石をほとんど含まない点で上部ローム層に類似し、下部部に多い軽石質砂層は、典型的な褐色土層の一部に對比できる。したがってこれらの地層は一括して水成の上部ローム層とみなすことができる。層厚は一般に三層前後であるが、六供町付近では四・五層に達することがある第一層。

本層の中部には層厚一〇〜三〇センチをもつ一〜二枚の泥炭質粘土シルト層を夾むことがあり、前橋泥炭層と呼ばれている。

前橋泥炭層

本層については放射性炭素（<sup>14</sup>C）年代が測定され、花粉分析も行なわれているので、北関東の上部ローム堆積当時の環境を知る上で重要な資料となっている。

総社温泉付近の木層中に含まれる埋木を試料として測定された<sup>14</sup>C年代は、一三、一四〇年前という結果が出されている。花粉分析結果は第三表に示した。

花粉構成は試料採取地点や層厚によって多少の差異があるが、*Picea* (トウヒ)、*Abies* (スギ)、などの頻度が高く、*Quercus* (マクナシ) や *Fagus* (クヌシ) の頻度もあわせて考へると、前橋泥炭層を残した過去の前橋付近における森林構成は、現在一、〇〇〇〜一、五〇〇層の高度にある落葉広葉樹林帯のそれに類似している。ところで前橋（一〇〇層）における過去六〇年間の年平均気温は摂氏一三・九度で、それに対して現在、落葉広葉樹林帯が発達している平洋（一、二〇〇層）における過去五三年間の平均気温は摂氏七・三度、赤城大洞（一、三四〇層）における過去六

植物名	試料地点	総社 温泉				大洞
		1	2	3	4	
<i>Picea</i> (マツ)	14.2	21.0	21.3	47.5	43.3	10.5
<i>Picea</i> (トウヒ)	1.9	13.7	19.1	17.0	14.4	—
<i>Abies</i> (スギ)	5.9	29.3	41.5	16.9	17.9	6.3
<i>Taxus</i> (ツカ)	1.0	—	1.0	1.5	4.1	0.8
<i>Fagus</i> (クヌシ)	18.1	3.2	4.3	2.8	3.0	6.5
<i>Quercus</i> (マクナシ)	38.0	5.0	6.4	—	0.5	66.9
<i>Cryptomeria</i> (スギ)	1.0	0.7	—	1.5	—	—
<i>Illex</i> (ユキ)	2.8	0.7	—	—	—	2.4
<i>Alnus</i> (ハシナ)	8.5	9.4	6.4	6.8	13.8	—
<i>Juglans</i> (クルミ)	2.8	—	—	—	—	—
<i>Carpinus</i> (シメ)	3.8	0.7	—	—	2.0	1.6
<i>Betula</i> (シラカバ)	—	1.4	—	1.5	—	3.2
<i>Corylus</i> (ハシバネ)	—	10.1	—	2.0	—	—
<i>Acer</i> (カエデ)	1.0	—	—	—	—	—
<i>Salix</i> (ヤナギ)	—	3.6	—	0.5	—	1.6
Spore (孢子)		+++	+++	++	++	+
Diatom (硅藻)		<i>Cymbella</i> <i>Euxoa</i> <i>Epithemia</i> <i>Finnularia</i> <i>Cocconeis</i>	<i>Nitzschia</i>	<i>Cocconeis</i>	—	<i>Pinnularia</i> <i>Euxoa</i> <i>Nitzschia</i> <i>Gomphonema</i> <i>Navicula</i>

第3表 前橋泥炭層の花粉分析表

年間の平均気温は摂氏六・二度である。

したがって、上記の花粉分析の結果から古気候を推定するならば、前橋泥炭層の堆積したころは現在にくらべて年平均気温で六・七度は低温な寒冷気候であったことが想像される。前に述べた年代などもあわせて考えると、この寒冷気候は著積世末の最終氷期(ウルム氷期)の一時期にあたることは疑いなく、おそらくその最盛期にあたるであろう。

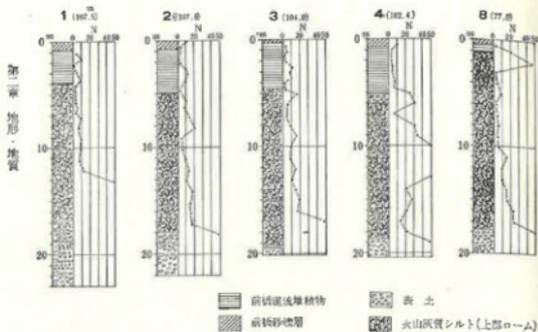
このころ群馬県では既に旧石器文化がかなり発展を遂げており、前橋泥炭層は層位的な対比からすると、赤城山麓でいわゆるポイント(尖頭器)文化の発展した時代に当たる。しかし、当時の前橋付近は低湿地性の環境にあつたので、人類の生活には適さなかつたことであらう。

(2) 前橋泥炭堆積物

総社町植野から大渡町にかけての利根川右岸、前橋公園付近より下流部では利根川の兩岸に垂直な崖をつくり露出している。その堆積面はかなり平坦で前橋台地の原面をなし、前に述べた上部ローム期の水成堆積層によっておおわれている。岩質は火山泥流堆積物に一般に見られるような極めて分級の悪い無層理の凝灰角礫岩である。

(3) 断面 利根川河岸の崖では本堆積物の下低まで観察できるところはないが、試験調査資料によると本堆積物の下低面は一般に地表下二・三〇層の深さにあることが知られ、それより下位は利根川系の円礫層からなっている第八段。本堆積物の上面をおおう火山灰質シルト層の層厚は一般に約三〇程度であるから、前橋泥流堆積物の厚さは一〇〜一〇数層ということになる。ただし、大規模な火山泥流堆積物は、その堆積前にあつた地形の凹凸を一度に埋積して平坦化するのが常であるから、泥流の流出直前に河川流路となつていたような凹所では局部的にさらに厚層をなしていることが想像される。

(構成物質) 次に構成物質をやや詳しく見ると、角礫質の岩片はほとんど安山岩質で粒径は一般に三〜五〇センチであるが、時に数層以上に連する岩塊を含むこともある。後に詳しく述べるように「岩神飛石」や数島公園内にある「お魁ヶ岩」などの巨岩も、かつて本泥流によつて現位置にもたらされたものと考えられる。含まれる岩片のうち本質岩片と見なせるものは、黒色・赤褐色を呈するガラス質複雑石安山岩で量的にも最も多い。異質岩片には円礫をなすものもかなり認められるが、それらは現在の利根川河床に見られるものと同様に利根川上流系の礫



第12図 前橋台地の試験柱状図

- 1: 東山町内北 2: 南山町 3: 原1中宇北 4: 東前分(1中南)  
 5: 西前町下西東 N: 標準貫入試験N値 ( ) 内は断面

〔石英閃緑岩・流紋岩〕に富み、粒径は五—一〇センチ程度のもが多い。このような円礫は前橋泥流の流下時に当時の河床礫の一部が泥流中にまき込まれた結果と考えられる。

角礫や円礫の間を充填している基質は細粒火山灰質で白色軽石の小片を含み、自然露頭における乾燥断面では淡灰褐色を呈しているが、新鮮な断面などで暗灰色を呈する。

岩片と基質との量比はほぼ四対六である。基質の重鉱物組成を見ると、平均して紫鉄輝石五〇%、普通輝石二五%、磁鉄鉱二五%程度で複輝石安山岩質的な組成を示し、角閃石はほとんど含まれていない。重鉱物組成におけるこのような特徴は上部ローム層のそれと極めてよく類似している(重〇図)。

〔埋木と泥流の時代〕 前橋泥流堆積物中には所どころに埋木を含んでいる。それらは泥流の流出時にその流路にあたった地域に生育していた樹木がなぎ倒され泥流中にまき込まれて運ばれてきたものと考えられ、径一〇—三〇センチの針葉樹幹であることが多い。熱による炭化はまったく認められないので前橋泥流が低温な流れであったことを物語っている。

利根橋付近の左岸の崖から採取した埋木の14C年代は二四、〇〇〇ブラスマイナス六五〇年前と測定された。したがって前橋泥流堆積物もいまから約二四、〇〇〇年前に形成されたものと考えてよい。

〔給源火山〕 前橋泥流をたらし給源の火山については、これまで地理的条件から莫然と梅名火山であろうと考えられてきた。しかし、近年の研究によると、基質の重鉱物組成が浅間火山起源の上部ローム層の組成と極めて似ていることや、本質岩片と思われるものが浅間火山の熔岩に似ていることなどから、給源はむしろ浅間火山である可能性の大きいことが指摘されている。この場合、浅間火山における腐葉泥流が前橋泥流に対比される

可能性がある。この問題については現在も研究がすすめられているので、近い将来に明らかになることであろう。

〔工学的性質〕 前橋泥流堆積物の工学的性質について一言すると、第一二図に一例が示されているように、標準貫入試験におけるN値は一般に低い値を示している。それにもかかわらず建造物などに対する支持力は、むしろかなり大である。このことは火山泥流堆積物について一般的にいえる特徴であるが、大小の岩片を多量に含むことや、やや固結した細粒の基質が岩片の間を密に充填していることなどによって、全体としての支持力を増しているためと考えられる。

### (3) 前橋砂礫層

前橋泥流堆積物の下位に重なる地層は、地表の露頭では観察できない。しかし、深井資料によると、少なくとも、一〇〇以上の深さまで主に洪積砂礫層からなっていることはほぼ確実である。これら古期の砂礫層を一括して前橋砂礫層とよぶ。

市内の深井戸はほとんどローピング掘鑿によるものであるため、地質の詳細は不明であるが、ボーリングの記録から判断すると、前橋砂礫層は層準によって粒径がさまざまに変化し、所によってはほとんど礫を含まない砂層や粘土層を夾み、古い火砕岩層とおもわれる地層を夾むことがあるようである。また、砂礫層を構成する円礫は利根川現河床のそれと類似していると見られる。

したがって、前橋砂礫層はおそらく前橋泥流の流出以前に形成されていた過去(洪積世)の利根川の扇状地堆

積物と考えられる。

木砂礫層中には豊富な地下水が存在し、前橋市における工業用水、水道用水の大部分を供給しており、今後の開発も期待できる。地下水位などについては深井資料を参照されたい。

### 3 広瀬川低地帯

すでに述べたように広瀬川低地帯は沖積世における旧利根川の氾濫原であるから、一般に関東ローム層の初生の堆積は見られず、表土の下部は直ちに沖積砂礫（広瀬川砂礫層）に移行していることが多い。

しかし、この沖積低地の上でも、過去の自然堤防（砂礫地）と見なせる比較的高まった地城では、一見初生的な関東ロームに似た褐色火山灰質砂・シルト層などが、約二層以内の厚さで、礫層上位に堆積していることがあつる。これらは洪水時の窪水によって形成されたものである。

また、赤城山麓に接する付近では、赤城斜面をきる放射谷の末端に形成された新期扇状地ともいえる高まりが見られ、そのようなところでは主として放射谷から供給された火山性の砂礫物からなつていて、利根川系の要素に乏しい。蕨蔵寺町や青柳町付近の高まりは白川による新期扇状地で、その代表的な例である。

#### (1) 広瀬川発電水路沿いの地質

田口町から前橋公園にいたる広瀬川発電水路沿いの地質については、群馬県企業局の倉沢辰巳氏らによって試験や記録による調査が行なわれている。発電用水路は広瀬川低地帯を断り、横断しているため、この調査資料は広瀬川沖積低地全般の地質を知る上で手がかりとなる。次にその概要をまとめておく。第一三図に代表的な試

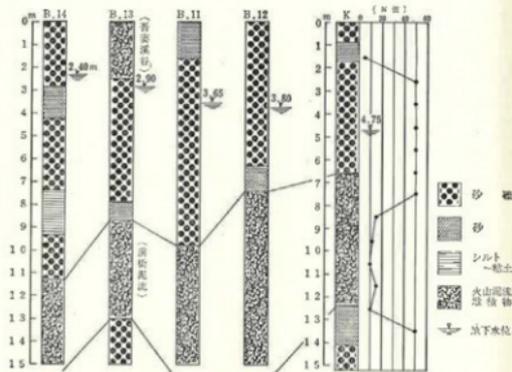
錐柱状図を示した。

(a) 田口町から岩神町までの間の四方所でおこなわれた穿孔断面（深さ約五尺）の概略によると、一般に地表から三尺内外の深さまでは最大径二〇センチ以下の玉石を含む砂礫層からなり、未固結ではあるが地下水位より上にあるので、全般的に圧密の程度はかなり高い。

(b) 地下水位は地表下三〜七尺の深さにあり、発電水路完成前の広瀬川の水位よりかなり低い。

(c) 前橋市浄水場の北方約三〇〇尺（第一区）の深さ四〜五尺間の砂礫の粒度組成は第四表のとおりである。全般的にもこれとは同様の傾向と見えてよい。

(d) 礫層は利根川現河床礫の組成と類似する。すなわち、安山岩類が過半を占め、他は



第13図 広瀬川発電水路沿いの試錐柱状図

B-11: 小糸発電所 B-12: 前水道水源地北方 B-13: 蕨蔵発電所  
B-14: 田口発電所 K: 岩神気象台管内

第4表 砂礫の粒度と組成

粒徑 (mm)	重量比 (%)	
	注	重
以上	15	
350~250	8	
250~100	17	
100~40	15	27
40~5	5	18
5以下		

広瀬川低地帯沿いには分布していない。

(4) 試験調査によると深さ六層ないし一層のところに砂礫層の低位に重なって、火山泥流堆積物が伏在していることが確かめられる。その厚さは充分別らにはなされていないが、荒牧発電所付近(第三回B)では約四層で、その下位は再び砂礫層となる。岩質や基底の深度などから見て、この泥流堆積物はおそらく前橋泥流堆積物の下部が削割されきれずに残っているものと考えられ、今後広瀬川低地帯の各所で見いだされる可能性がある。

すでに明らかなように、前橋泥流堆積物の時代(約二四、〇〇〇年前)は洪積世後期にあたっているから、広瀬川低地帯の地下に本泥流堆積物が削割されきれずに伏在していることは、低地帯地下の砂礫層を洪積砂礫と沖積砂礫に区分する場合の重要な鍵となる。すなわち、本泥流層より下位にある砂礫層は、礫質はたとえ上位の沖積砂礫のそれと類似していても、前橋台地における下部の砂礫層(前橋砂礫層)に対比すべきもので、時代的には泥流層より上にある沖積砂礫と明らかに区別できる。泥流層が完全に削割されつくしている場合には、低地帯

の地下で洪積砂礫層と沖積砂礫層との境界を求めることは困難である。

## (2) 広瀬川砂礫層

広瀬川低地帯の表層を構成し、前橋泥流堆積物より上位にある沖積砂礫層を広瀬川砂礫層とよぶことにする。砂礫層を構成する礫の種類や粒度については、前記した広瀬川発電水路沿いの資料から全般を推察することができる。

層厚については同じく発電水路沿いの試験資料からみると、試験孔内に前橋泥流堆積物らしきものあらわれ、深さは、田口付近(第三回B)で地表から約一層、荒牧発電所付近(B・13)で約九層、小出発電所付近(B・11)で約一〇層、市水道浄水場北方(B・12)で約六層、前橋気象台構内で約七層である。これらの地点を結ぶ線は広瀬川低地帯を横断しているので、上記の深さが低地帯全般における広瀬川砂礫層の厚さを代表していると考えることができる。資料はなお不充分であるが総じて見ると、広瀬川砂礫層の厚さは一般に一〇層前後と見られ、前橋台地の北東縁に近いところほど厚さがやや減少する傾向がうかがえる。

一方、広瀬川低地帯における多くの深井資料をみると、少なくとも一〇層以上の深度まで砂礫層が続き、従来はその大部分を沖積砂礫とする考えかたもあつたが、さきに述べたような事実から、むしろ大部分は前橋砂礫層に相当する洪積砂礫層と見なければならぬ。

## (3) 岩神の飛石・お鮫ヶ岩

昭和町三丁目飛石稲荷神社境内の巨大な安山岩塊は「岩神飛石」とよばれ、昭和十三年に天然記念物に指定さ

れている。「お艶ヶ岩」は敦島公園の池の中に頂部をのぞかせている同一岩質の巨岩である。あだかも水河の「捨子石」のように、火山から遠く離れた平地に、このような巨大な岩塊が孤立して存在することは珍らしいので、昔からいろいろの伝説が語りつがれている。それらロマンに富んだ伝説はしばらくおき、ここでは巨岩のもつ自然科学的な意義について述べる。

①岩塊の大きさ 岩神飛石は広瀬川砂礫層に埋れており、まず地表露出部分だけについて見ると、高さ約九・六五尺、最大周囲約六〇尺である。

岩塊の下底部は後に述べるように広瀬川砂礫層下位の前橋泥流堆積物中にまで達しているものと予想されるので、埋没している部分を含めた岩塊の体積は、地表露出部分の少なくとも二倍以上に達するであろう。

②岩質 「岩神飛石」と「お艶ヶ岩」はまったく同一岩質で、かつては何れかの場所でも同一岩体をなしていたものにちがいない。赤褐色を呈し、一見ガラス質的な安山岩熔岩のように見えるが、詳しく観察すると、扁平なレンズを密着させておしつぶしたような塊状の熔結構造が見られ、一つ一つのレンズに相当する部分は熔岩餅 (Culb) が歪形されたものと考えられる。したがって熔岩液の一部というよりは、高温の降下火砕物質からなる特殊な熔結硬岩と考えた方がよい。このような熔結硬岩は、火口から一たん空中に抛出された熔岩片が高温のまま、すなわち粘性を保ったまま地上に落下、堆積し、自重のために圧縮され、破片同志が熔結しあつてできるものである。したがって火山の火口付近においてのみ形成され、火口から遠く離れた所ではできないのが特徴である。

頭取段下では一般の熔岩と区別することは困難である。複輝石安山岩質で、斑状組織をもち、斑晶は斜長石、顕微鏡下では一般の熔岩と区別することは困難である。複輝石安山岩質で、斑状組織をもち、斑晶は斜長石、普通輝石、紫輝石などの自形／半自形結晶からなり、斜長石が最も多く、普通輝石と紫輝石はほぼ等量に含まれる。石基は著しくガラス質で流理構造が発達し、赤鉄鉱その他赤褐色に汚染されている。

③成因 次にこの巨大な火山岩塊が、いつどのようにして現在の場所に来たかという問題と、現在のところには述べられる以前にはどこにあつて、何の火山の噴出物であるか、という二つの問題について考えてみよう。

(運搬機構) まず運搬機構については、前橋泥流が最大の役割を果している可能性が大きい。前橋付近の平坦な地形的条件から見て、単なる洪水時の水流では、このような巨岩を長距離にわたつて運搬することはほとんど不可能である。そこへゆくと火山泥流の場合は、山津波を大規模にしたような高密度の乱流であるから、一般の洪水の水流などと比較にならない運搬力をもち、「岩神飛石」程度の巨岩をまき込んで流下することも特に珍しくない。現に郷社館界付近の利根川右岸などは、前橋泥流堆積物中に、径数尺に達する類似岩塊を含む例も見られる。

ところで、「岩神飛石」のある付近は現在広瀬川砂礫層によつて広くおおわれているが、沖積砂礫の厚さは数尺程度で、その下には剛剣がのれた前橋泥流堆積物が伏在していることはさき述べてきた。至近距離にある前橋気象台構内の試錐調査資料(第三圖)によると、広瀬川砂礫層の厚さは約六・七尺で、それ以下は泥流堆積物からなっている。「岩神飛石」はおそらくこの泥流堆積物中に根をおろしているものと予想される。一見、「岩神飛石」をのせているかに見える広瀬川砂礫層は、過去の利根川による剛剣によつて前橋泥流堆積物からこの巨岩が閉りだされた後、それを再び埋没しているものであろう。

前橋泥流の14C年代は約二四、〇〇〇年前であるから、「岩神飛石」が現位置にいたつた年代もそれと同じと

いうことになる。

「お艶ヶ岩」についても同様と考えられる。

〔起源〕 岩塊の起源については次のような推察ができる。まことに赤城斜面の項で述べたように、坂東橋付近の赤城斜面末端部には「流れ山」とも考えられる孤立丘が散在し、それらの構成物の一部に「岩神飛石」などよく似た岩相をもつところがある。坂東橋の上流約二〇〇呎付近の左岸の断崖に見られるものはその例で、熔結した熔岩餅集塊岩を見せるものである。色調も赤褐色を呈する。また多少検討を要する問題が残っているが、おそらく「岩神飛石」や「お艶ヶ岩」は上記の岩体の一部が崩壊して、前橋泥流によっておし流されたものと思される。なお、坂東橋付近の岩体も本来は赤城火山山頂部をつくっていたものが、「流れ山」となって現位置にきた可能性の大きいこともまことに述べた。そのような意味では、「岩神飛石」や「お艶ヶ岩」のそもその起源は、カルデラ形成前の赤城火山山頂部付近にあると考えることもできる。

#### 4 現利根川の氾濫原

現在の利根川の氾濫原は、大渡橋付近より上流では幅が広く、田口付近では七〇〇呎以上にも達するが、前橋台地に入り込んでからはその幅を急減し、一〇〇～二〇〇呎となる。したがって両地域は河相上に著しい変化が見られ、上流部では比較的浅い網状流路が発達しているのに対して、下流部では水深は大きく、単一の急流となつて激しく台地の側壁を攻撃し、現在も川幅を拡げつつある。

氾濫原は現在の利根川の運んだ砂礫によつておわれているが、その表面にはかなりの凹凸が見られる。氾濫原の幅の広いところでは凸部は自然堤防（砂礫堆）の形をとり、随所に紡錘状の堆積地形を示している。幅せまい南部では小規模な河岸砂礫段丘の形をとるが、この段丘は利根川の水量の変化に応じて生成してはまた破壊され、完全な形を残すものはほとんどない。

〔現河床礫〕 前橋市内における利根川現河床礫の構成について見ると、礫は円礫に富み、一般に中礫（一〇～五〇ミリ）および大礫（五〇～一〇〇ミリ）からなり、巨礫（二〇〇ミリ以上）も多数まじえている。礫の岩性別の平均組成を第五表に示した。

第5表 利根川原の礫（前橋付近）

分	類	量(%)	形	大きさ	計	
火 成 岩 類	深成岩類	花崗岩	2	円礫	小～中	94%
		閃緑岩	11	＃	＃	
		はんれい岩	1	＃	小	
	脈岩類	石英斑岩	6	＃	小～中	
		斑岩	3	＃	小	
		輝緑岩	9	＃	＃	
	火山岩類	流紋岩	14	＃	小～中	
		安山岩	48	円礫	大	
		玄武岩	0	一	一	
		支	0	一	一	
堆積岩類	古層	4	円礫	小	4%	
	中生層、 生起原					
変成岩類	熱変成 岩類	2	＃	小	2%	
	(ホルス エル ンフ 成岩)					

このように安山岩類が過半をしめ、一般に粒徑も大きい。これは最も近いところに赤城・榛名・子持などの第四紀火山が存在しているためである。ついで流紋岩、石英斑岩、閃緑岩などの酸性火成岩類が目立つが、これらは主として利根郡地域に広く分布している第三紀火成岩類を起源としている。古生層ないし中生層起源の堆積岩や変成岩の礫も少量認められるが、これらは利根川・片品川の上流部に起源をもつもので、粒徑の小さい円礫をなすことが多い。

利根川現河床の礫は上流部の地質を克明に物語る

っているが、上流の地質の概要については二〇万分の一の群馬県地質図を参照されたい。

### 5 黒土層（腐植土）の層序

利根川の現況氾濫原のような地域は別として、そのほかの地域では、地表部は数一〇センチメートルの厚さをもつ黒色土壌におおわれている。このような黒土は、従来の土壌学の立場からすると、一般に地表部で営まれた生物の諸作用により、上から下へだんだんと腐植化が進んだ結果、形成されたものと言われている。この場合、公式的な考えかたをすれば、現在見られる黒土の母材は黒土化される以前にすでに現在の場所に堆積を完了しており、そのような母材が次第にその上部から腐植化されて現在に至ったということになる。

しかし、前橋付近の黒土には腐植化の進行と同時に、それと併行して母材の累積がおこなわれている事実が認められる。例えば前橋市における黒土断面（深耕されていないもの）を詳しく観察すると、年代を決定できる比較的近年の降下軽石や火山灰の薄層が、新旧の順序正しく夾まれており、黒土層の中の細かい火山灰対比も可能である。また、考古学的遺物（土器文化）の出土状況を見ると、一般に古い時代の遺物は層位的に下部の黒土層に含まれるといった経験的な事実も、黒土が上へ上へと厚さを増したものであることをよく示している。

一方、赤城南斜面の地域などでみると、黒土と赤土（関東ローム）との境界部（移行部）付近には、板鼻黄色軽石（約一、〇〇年前）が介在していることが一般的に認められる。したがって、大局的にみれば、黒土と赤土（関東ローム）との境は沖積世と洪積世の境界をあらわしているといえることができる。

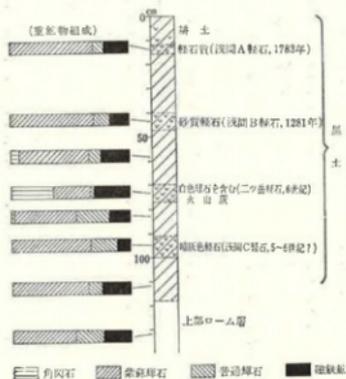
このように前橋市で見られる黒土は、いわば「沖積世の地層」という概念でとり扱うことのできる性格をもつ

ているのであって、黒土一般の成因を考える上でも貴重な資料となりうる。また、黒土の中での火山灰対比や層序細分が可能であることは、考古学その他の応用面で今後大いに活用できるとおもわれるので、次に代表的な層序と境界の特徴をあげてみよう。

碓氷町における黒土層の模式的柱状断面図を第一四図に示した。黒土全体の厚さは地域によってかなり差異があるが、第一四図に示されているような層序は前橋市のほぼ全域で共通して認められる。

黒土層中の層位の対比に当たって有力な鑑層となりうる降下軽石/火山灰層は全部で四枚あるが、いずれも薄い層で明瞭な層をなさないことが多いので、それらの識別にはかなり注意深い観察が必要である。

〔浅間A軽石〕 最上部にある浅間A軽石は天明三年（一七八三年）の浅間火山大爆発による降下軽石で、灰褐色を呈し、粒径は〇・二〜〇・五センチメートル、平坦地では多くの場合、耕土中に散在し、層をなすことは少ない。重鉱物組成は紫蘇輝石約七〇%、普通輝石約一〇%、磁鉄鉱約一〇%で角閃石は含まれない。



第14図 前橋市の黒土層の模式的柱状断面と重鉱物組成

〔浅間B軽石〕 浅間B軽石は軽井沢方面への追跡によって、一二八一年に噴出した浅間火山の軽石に対比できる。一見火山砂のように見える灰色細粒軽石（径径 $0.1-0.3$ セシ）で、層をなす場合には厚さ数センチに達することがある。重鉱物組成の特徴はA軽石と類似し、紫輝輝石約七〇%、普通輝石約一五%、磁鉄鉱約一五%で角閃石は含まれない。

〔二ツ岳軽石〕 浅間B軽石の下位約一〇—二〇セシのところに、比較的大きな（最大三セシ）白色軽石がまばらに散点する細粒火山灰質ゾーンがある。この含軽石火山灰は赤川—伊香保付近で軽量プロットの骨材として採掘されている軽石層に対比されるもので二ツ岳軽石とよばれ、榛名火山—二ツ岳の成立直前に現在の二ツ岳の位置におこった爆発によってたらされたものである。その年代は古墳を被覆する関係から六世紀末ごろと考えられている。重鉱物組成は、角閃石三〇%、紫輝輝石三三%、普通輝石三三%、磁鉄鉱三〇%等からなり、角閃石を多量に含む点で浅間火山源の他の軽石と著しく異なっている。

〔浅間C軽石〕 二ツ岳軽石の下には、同じく黒土中に夾まれて、暗灰色細粒軽石（径径 $0.3-0.8$ セシ）が、厚さ一〇セシ以内のかなり明瞭な層をなしていることが多い。軽井沢方面への追跡によって浅間火山のC軽石に対比される。その年代は明らかでないが、おそらく五—六世紀ごろのものと推定される。重鉱物組成は、紫輝輝石約六五%、普通輝石約二五%、磁鉄鉱約一〇%で、角閃石は含まない。

以上あげたように、浅間火山給源の軽石はA・B・Cの三軽石層とも、重鉱物組成においてはともに複輝石安山岩質で類似しており、重鉱物組成だけで三者を区別することは困難である。したがって、浅間B軽石とC軽石の間に夾まれてきわめて特色のある二ツ岳軽石が存在していることは、黒土層の中で火山灰層位学的な検討をす

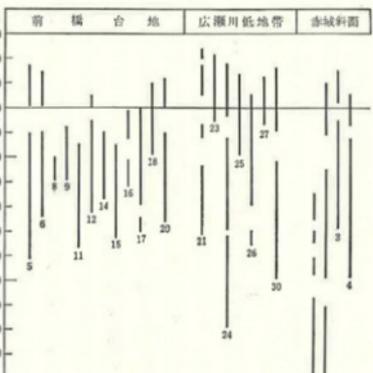
る場合に最も重要な鍵となる。

また、上記したような軽石質の部分以外の諸層土の重鉱物組成も比較的均一で、浅間火山給源の軽石の組成とはほぼ同様である。このことは、前橋付近の黒土層が、主として浅間火山の沖積世火山灰からなることを示している。

## 6 地下 水

前橋市は比較的良質な地下水に恵まれているといえる。特に広瀬川低地帯や前橋台地では、深層まで古期扇状地砂礫層（前橋砂礫層）が存在し、その中の所どころに不透水性の細粒堆積層を夾んでいるので、地下の浅所から深所にいたる多くの層中に潜水層が発達し、全体としては極めて豊富な地下水を保有している。赤城火山斜面に属する地域では、前記の地域にくらべると地下水量はすくなく、それが、地下地質が粗粒および細粒物質の交互する未固結成層火砕岩層からなっているため、通常の火山斜面にくらべればかなり豊富な地下水をもっている。

第一五区に前橋市内の主な深井戸におけるストレーナーの位置を比較できるようにまとめて示した。これから各地域における潜水層の状態をほぼうかがうことができる。たとえば前橋台地では広瀬川低地帯の深井戸にくらべて三〇層以浅にストレーナーをおいている例が少ない。このことは前橋台地では広瀬川低地帯にくらべて浅層地下水に乏しいことを示している。地下水の量などについては、深井資料にある揚水量、揚水水位などが推定の手がかりとなるので参照されたい。



第15図 深井戸のストレーナー位置  
(番号は深井戸資料の番号と一致させてある)

(1) 広瀬川低地帯の地下水

広瀬川低地帯は前橋市のうちでも最も地下水の豊富な地域である。市水道の主要水源地もこの地域内にある。

この地域内では最も表層にある広瀬川砂礫層(沖積砂礫層)の中にも利根川の伏流水とみなせる豊富な地下水が存在し、小規模工業用水や家庭用水などは、この浅層地下水によっても充分かなうことができる。しかし、この地域内でも深井戸で採水している地下水は、大部分が前橋砂礫層(洪積砂礫層)中のものである(第一五五図。川原・野中・田口などにある市水道の水源や、その他工

業用水の大部分はこれらの深層地下水に依存しており、その量はきわめて豊富である。一例を野中町にある市水道水源地の一号井にとれば、深さ一〇〇層の深井戸(井径五〇センチ、ストレーナー長さ七三層)で、毎分約五〇〇リットル以上に達する大量の採水が可能である。

ボーリング孔における自然水位は他地域にくらべて一般に浅く、地表から数層以内の深さにあるが、天川大島や野中付近などではさらに深く地下一〜二層のところにある。

(2) 前橋台地の地下水

すでに明らかなように前橋台地では、前橋泥流堆積物が一〇数層の厚さをなして台地表面部を構成している。この泥流層は粘土質の緻密な基質をもって半固結の状態にあるので、不透水性の性質をもっている。そのため泥流堆積物をおおっている最表層の火山灰質シルト層の中には部分的に少量の地下水を保有し、ときにはその地下水が地表にまであらわれていわゆる湿田地帯を形成していることもあるが、泥流堆積物中にはほとんど地下水は存在していない。しかし、泥流堆積物の下位に伏在前橋砂礫層は、広瀬川低地帯の深層にあるものと連続しているものであり、この中には広瀬川低地帯の深層におけると同様に豊富な地下水がある。前橋台地の地域内にある深井戸は、すべてこの深層地下水を採っており、それらは深さ数一〇層のボーリングで毎分数一〇〇リットル〜二、〇〇〇リットルの採水が可能なものが多い。

前橋泥流堆積物の上にある浅層地下水は量も少なく、水質も一般に良くない。

前橋公園「さちの池」の北東端にある湧泉は、前橋泥流堆積物が不透水性であるため、前橋砂礫層上部の地下水が弱被圧水となって湧出しているものと考えられる。

前橋台地における深井戸の孔内における自然水位は一般に地下一〇数層のところであり、広瀬川低地帯のそれとくらべてかなり低い。

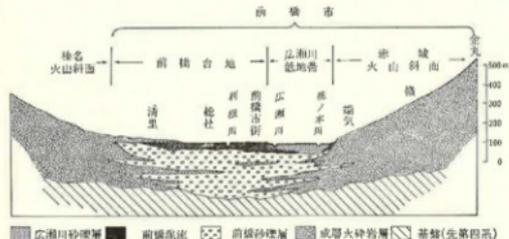
第三節 自然の推移

これまで述べてきたことがらを、前橋市の自然の発達史にてらしながらまとめてみよう。(第一六四頁 第六表参照)

1 赤城・榛名火山の成立

第四紀洪積世のはじめには群馬県東部の海成新第三系(高崎層群・富岡層群)を堆積させた海は遠く退き、前橋市のあたりもすでに内陸の一部と化して次第に削平が進行していた。このころから北関東では激しい火山活動がはじまり、前橋付近では赤城・榛名の両火山が現在ある場所を中心性の火山活動をくりかえしながら円錐形の美しい山体を成長させていった。

両火山とも主として複輝石安山岩質の熔岩や火砕岩類を噴出したがそれらの噴出物によって火山の中心部が高まるにつれ、一方では山頂部の侵食・崩壊などもはげしく行なわれるようになった。そのようにして生産された一次の火砕物質は、洪水や火山活動のたびごとにより下方に運ばれて堆積し、美しいスロープをもつ火山裾野を築いていった。



第16図 前橋市の模式的地質断面

時代区分	前橋付近の主なできごと	群馬県・日本の主なできごと	氷河時代
沖積世	利根川現形基盤形成 吾妻系(浅間大噴発, 1783年) 利根川運流線に大移動 広瀬川低地面形成 二ツ庄礫石(榛名)	弥生文化 ↑ 縄文文化 ↓ 土器出現 旧石器 マンモス(北進道) 大型動物群(海産魚類) 元宿文化(ポイント)	後氷期 ↓ 最盛期 ↑ ウルム氷期
後氷期	上層ローム層 前橋泥炭層形成(寒冷気候) 広瀬川低地帯に沿う古利根川誕生 前橋台地原形形成 前橋泥炭(浅間?)	若宿I文化(掘券) 立川段丘形成	ウルム氷期
中氷期	中部ローム層 大洞火砕流 橋ノ口礫石降下(赤城カルデラ形成)	権現山I文化(梨形掘券) ナウマン象(各地)	ウルム氷期
前期	下部ローム層 赤城・榛名の外輪山成長 赤城・榛名活動開始	不二山文化(掘券) 武蔵野段丘形成	ウルム氷期
鮮新世	秋田層堆積	沼田湖成層形成, 下木官段丘形成(温暖気候) 多摩段丘形成 中之条成層形成 上野層群(房総), 境積 大飯層群(大飯)	リヌ・ウルム間氷期 リヌ氷期 リヌ氷期 ミンデル氷期 グンツ氷期 ドナウ氷期

第6表 前橋市の第四紀年表

後期赤城世には、両火山ともすでにその山体の大部分を完成したが、赤城火山ではそのころ大規模な火砕流の噴出があいつぎ、それらの噴出とともに山頂部に大陥没がおこって、現在見られる山頂カルデラを形成した。金丸・巖地帯で見られる大胡火砕流堆積物はこの時期のもので、山頂カルデラの形成に直接関与したと考えられる意義深い噴出物である。その後はかなり長期にわたる活動休止期をへて、やがて地蔵岳で代表されるような中央火口丘群の活動（角閃石安山岩質）が行なわれたが、上部ローム層地質初期（約二五、〇〇〇年前）にはすべての活動を終了している。

榛名火山の山頂カルデラは赤城よりもややおおく形成され、前橋市の赤城斜面で普通にみとめられる八崎軽石の降下期がそのカルデラ期に当たっている可能性が大きい。また榛名火山では有史時代にはいつからも二ツ岳軽石の噴出や二ツ岳の噴起などが行なわれている。

## 2 古期扇状地の形成と前橋砂礫層の堆積

赤城・榛名両火山の成立の過程においても、両火山の間に挟まれた前橋市の付近には、過去の利根川とも言える大きな河川が存在していたことが予想される。この過去の利根川は、やがて澁川付近を扇頂とし、両火山の山麓末端をそれぞれ北東限および南西限として南に開く大規模な扇状地を形成していった。前橋市はこうして形成された過去の扇状地のはば扇中央部に当たっており、現在、前橋台地や広瀬川低地帯の地下深所に伏在している前橋砂礫層は、この当時の扇状地堆積物の一部とみなせる。前橋市街地付近で、それらは少なくとも一〇〇層以上の厚さをもっていることが深井戸の資料などでたしかめられており、砂礫層の中には良質で、しかもきわめて豊

富な地下水を含んでいる。

## 3 前橋泥流の流出と前橋台地原面の形成

洪積世後期のある時期に至り、前橋付近は突然大規模な火山泥流のおしだしにおそわれ、前橋砂礫層からなっていた古期扇状地地面の一角は瞬時にして厚さ一〇数層もある火山泥流堆積物の下に埋没してしまった。このことでことによつて前橋付近の自然環境は急激に変化し、古期扇状地の時代は終わった。

前橋泥流堆積物とよばれるものがこのときの堆積物で、それに含まれる埋木は14C年代から約二四、〇〇〇年前のことができると考えられる。この時代に赤城山麓の一部では、すでに岩宿—文化を残した旧石器人類の生活がはじまっていたことも明らかにされている。

前橋泥流の流出する直前の古期扇状地地面には、おそらく大小の網状流路が発達してかなり凹凸に富んでいたことが予想されるが、それらは泥流堆積物によつてすべて埋没され、平坦化されました。現在みる前橋台地の原面はこうして形成されたものである。

前橋泥流の起源については、なお検討を要するが、浅間火山に発し、吾妻川の谷沿いに流下して前橋付近の古期扇状地の一角をひろがったという可能性が大きく、地学上大いに興味がある。「岩神飛石」や「お勝ヶ岩」など伝説の巨岩は、もとは坂東橋のやや上流付近にあったものが前橋泥流にまき込まれて現位置にいたり、その後侵食によつて泥流堆積物中からあらいだされたりえ、再び新期の砂礫（広瀬川砂礫層）中に埋められたものと考えることができる。

浅間山は現在もさかんな活動を続けている活火山であり、二四、〇〇〇年前の過去に、一瞬のうちに前橋を埋めつくしたような火山泥流が今後再び流出しないという保証は一つもないことを忘れてはならない。

#### 4 湿地帯の出現と前橋泥炭層

前に述べたように古期層状地面にあった凹凸が、前橋泥流堆積によって埋めならされ、かなり平坦な地形面（前橋台地原面）が出現したため、この地域では一時的にそれまでであった排水系が消失し、いたるところ沼沢のある溼潤地があらわれた。現在、利根川兩岸の崖で前橋泥流堆積物の上位に重なる火山灰質シルト層（水成上部ローム層）は、このようにして形成された湿地帯の堆積物とみなせる。ただし前橋市の北西部にあたる清里地域では、このころ榛名火山から供給された新期の火砕流や土石流などの堆積がひきつづいて行なわれ、現在見られるような緩斜面地形をつくり上げたので、湿地性の環境からは比較的早く解放され、気成の上部ロームの堆積も行なわれている。

湿地性の環境におかれた地域ではかなり普遍的に前橋泥炭層の堆積が行なわれた。前橋泥炭層の一部は14C年代測定によって今から約一三、〇〇〇年前のものと考えられ、花粉化石からみると当時は現在より摂氏六〜七度も低温な寒冷気候の下にあったと推定できる。この時代はウルム氷期の最盛期にあたり、世界的に大規模な海水準低下がおこったため、日本ではシベリヤのマンモス象が干あがったタール海峡を越えて北海道まで渡来した時期にも当たっている。そのころの前橋市街地付近は現在の尾瀬ヶ原をしのばせるような寒ざむとした湿地帯をなし、人々の生活には不向きな自然環境であったと考えられる。

#### 5 旧利根川の流路と広瀬川低地帯の形成

やがて時がたつにつれて、前橋泥流堆積面（前橋台地原）と赤城斜面の交叉する付近、すなわち現在の赤城山麓崖に沿うところに、南東流する旧利根川の流路が形成された。その下刻と同時に南西側の前橋泥流堆積物をも削って川幅を拡大し、つぎつぎに流路を移動しながらいに現在みられる広瀬川低地帯をつくりあげた。この過程で旧利根川の幹流は北東からだんだんと南西寄りに移動し、そのあとに新期の砂礫層（広瀬川砂礫層）を残した。現在の広瀬川水路はその最終河道に当たっている。なお、広瀬川低地帯のうちで比較的早期に氾濫原と化した赤城山麓寄りの地域には、白川をはじめとする赤城斜面の放射谷から供給された砂礫が小規模な新期扇状地を形成した。

このようにして旧利根川の水路が確立されたことにより、前橋泥流堆積面における排水系も自然に整い、かつての湿地性の環境からやがて乾燥化して現在の前橋台地面をつくるにいたった。

#### 6 現在の利根川

現在の利根川の氾濫原と近年における流路の変遷については、はじめに詳しく述べたので省略するが、前橋市街地付近で利根川が急に前橋台地内に峡谷をつくって流入していることは明らかに不自然である。史実には残っていないようであるが、地形や地質からみると、比較的近年における半ば人為的な流路と考えるはかない。今後これを自然のなすがままにまかせて放置したと仮定すれば、広瀬川低地帯形成の経緯からもうかがえるように、

利根川は激しい削食侵食によって川幅をますます狭げてゆくにちがいない。

しかし、現在利根川はダム建設や近代的な護岸工事など人為的な方法によってほぼ完全に制御されており、自然の状態にはおかれていない。そのような人間社会の努力が今後、ますます続けられる限り、利根川を現在の姿にとどめておくことは可能であり、あるいは社会の要請に応じてより激進な処置を講じてゆくことでもあらう。

#### 第四節 地下水（深井資料）

市内の各所で行なわれた各種工事のためのボーリングによる地下水の探査は、赤城斜面、前橋台地、広瀬川低地帯等におおむね、次のとおりであつて、これにより、自然水位、水脈、地質の状態を究明することができよう。

No. 1

赤城斜面

No. 2

No. 1		No. 2			
ボーリング位置	金丸町水源	坂町第2水源			
管 理 者	市水道局	市水道局			
施 工 業 者	東海製業社	田中製鉄工区			
ボーリング開始	昭和38年6月25日	昭和41年12月19日			
ボーリング完了	昭和38年8月31日	昭和42年2月23日			
井 径	200mm	350mm			
自然水位	-53.6m	-8.3m			
掘水水位	-61.77m	-31.7m			
揚水流量	210ℓ/分	1672ℓ/分			
水 温	14.3°C	18°C			
深 度	地 質 名 称		深 度	地 質 名 称	
9.0 <sup>m</sup>	コ ー ム		2.0 <sup>m</sup>	表 土	
38.0	石混り砂(大割PF)		41.0	大玉石、砂 利	
41.0	砂質粘土		51.0	火山系砂、土混り	
62.0	石混り砂		55.0	黒 粘 土	
68.0	粘土混り石		75.0	火山系砂利、砂	
70.0	石		102.0	火山系砂利	
75.0	粘土混り砂		110.0	黒 土、小砂利	
146.0	泥 砂		120.0	赤 砂 利、砂	
150.0	砂		142.0	赤 砂 利、砂	
			150.0	硬質砂、土混り	
ストレーナー位置	65~76m	91~98m	20~42m	55~100m	111~142m
	80~85m	107~140m			

No. 3		No. 4	
ボーリング位置	小坂子町	江木水源	
管 理 者	ニュー赤城パノラマ	市 水 道 局	
施 工 業 者	田中監泉重工Ⅹ	田中監泉重工Ⅹ	
ボーリング開始	昭和39年2月28日	昭 和 年 月 日	
ボーリング完了	昭和39年3月25日	昭 和 年 月 日	
井 径	200mm	390mm	
自然水位	-2m		
揚水水位	-17m		
揚水流量	230 l/分		
水 温	16°C		
深 度	地 質 名 称	深 度	地 質 名 称
1.0 <sup>m</sup>	表 土	1.5	赤砂土
9.0	灰土混り砂利 (PF)	5.0	赤砂土
19.0	玉 石、砂 利	8.0	赤砂土
23.0		11.0	赤砂土
27.0	玉 石、砂 利	15.5	赤砂土
38.0	荒 砂	18.0	赤砂土
52.0	砂、玉石混り	20.0	赤砂土
61.0	砂 利	21.5	赤砂土
80.0	砂利混り荒砂	28.0	赤砂土
		31.0	赤砂土
		40.0	赤砂土
		41.5	赤砂土
		44.5	赤砂土
		53.5	赤砂土
		63.0	赤砂土
		65.0	赤砂土
ストレーナー位置	15~27m 35~80m	25~38m 42.5~99.5m	

No. 5		No. 6	
ボーリング位置	沼端町 清里簡易水道水源No.2	総社町高井	総社No.2
管 理 者	市 水 道 局	市 水 道 局	
施 工 業 者	日本地下開発Ⅹ	田中監泉重工Ⅹ	
ボーリング開始	昭和36年11月17日	昭和37年5月16日	
ボーリング完了	昭和 年 月 日	昭 和 年 月 日	
井 径	400mm	400mm	
自然水位	-3.0m	-15.6m	
揚水水位	-25.0m	-18.85m	
揚水流量	700 l/分	1050 l/分	
水 温	°C	°C	
深 度	地 質 名 称	深 度	地 質 名 称
2.0 <sup>m</sup>	表 土	1.0 <sup>m</sup>	表 土
3.0	黄色砂質粘土	2.0	赤 土
7.0	砂利、粘土混り大玉石	8.0	玉 石、砂 利
25.0	玉石、粘土混り	12.0	砂
28.0	荒砂混り砂利	20.0	玉 石、砂 利
40.0	玉石混り粘土	36.0	荒砂利 (青色系)
44.5	青色砂利粘土	40.0	砂 利、玉 石
60.5	灰色玉石混り粘土	65.0	砂利、砂、玉石 (赤色系)
65.0	青色玉石混り荒砂	72.0	安山岩系玉石
68.0	軽石混り砂利砂	73.0	黒 色 土
100.0	玉石混り砂利	75.0	安 山 岩 玉 石
ストレーナー位置	13~30m 40~93m	15~30m 40~75m	

No. 7

No. 8

ボーリング位置	元 総 社 町 12	總社町總社
管 理 者	梅 田 商 店	三 洋 音 響 社
施 工 業 者	田 中 鑿 泉 重 工 社	田 中 鑿 泉 重 工 社
ボーリング開始	昭和41年11月15日	昭和40年12月1日
ボーリング完了	昭和41年12月10日	昭和 年 月 日
井 径	245mm	196mm
自然水位		-15.0m
揚水水位		-28.0m
揚水水量	800 ㍓/分	500 ㍓/分
水 温	16°C	°C

深 度	地 質 名 称	深 度	地 質 名 称
8.0 m	表 土	1.0 m	表 土
18.0	玉石、火山系砂利	7.0	黒土系砂利
20.0	茶 色 土	16.0	火山系砂利
23.0	玉石、火山系砂利		
28.0	砂 利 (小)	19.0	火山系玉石
40.0	赤 砂		
54.0	小玉石、赤砂利	36.0	玉 石、砂 利
59.0	石、砂 利		
61.0	玉 黒 土、玉 石 利	57.0	中玉石、砂 利
68.5	青土混り	60.0	玉 石、砂 利
69.5	砂 利 火 山 系 砂 利		
80.0	茶色土、玉 石		

ストレーナー位置		50~60m
----------	--	--------

No. 9

No. 10

ボーリング位置	總社町總社	鳥 羽 町
管 理 者	中 与 通 信 機 社	北 日 本 精 工 社
施 工 業 者	田 中 鑿 泉 重 工 社	田 中 鑿 泉 重 工 社
ボーリング開始	昭和38年7月20日	昭和 年 月 日
ボーリング完了	昭和38年8月16日	昭和 年 月 日
井 径	196mm	392mm
自然水位	-14m	
揚水水位	-16.75m	
揚水水量	500 ㍓/分	
水 温	17°C	

深 度	地 質 名 称	深 度	地 質 名 称
1.0 m	表 土	1.5 m	表 白 土 化 砂 利
6.0	赤 土	4.0	山 系 砂 利
16.0	火山系玉石、砂利	9.0	青 火 山 系 砂 利
19.0	大玉石、砂 利	19.0	大 火 山 系 砂 利
28.0	玉 石、砂 利	25.0	大 火 山 系 砂 利
60.0	砂利 (赤) 砂混り	53.0	大 火 山 系 砂 利
		59.0	大 火 山 系 砂 利
		69.0	大 火 山 系 砂 利
		73.0	大 火 山 系 砂 利
		85.0	大 火 山 系 砂 利
		100.0	大 火 山 系 砂 利

ストレーナー位置	38~60m	
----------	--------	--

No. 11

No. 12

ボーリング位置	古市町新前橋駅	无総社町水源地 4井号	
管 理 者	新 前 橋 駅	市 水 道 局	
施 工 業 者	田中鑿泉重工業	田中鑿泉重工業	
ボーリング開始	昭和40年2月8日	昭和38年4月18日	
ボーリング完了	昭和40年3月18日	昭和38年7月5日	
井 径	300mm	350mm	
自然水位	-10.8m	-11m	
揚水水位	-27.5m	-25m	
揚水水量	1400 l/分	1500 l/分	
水 温	16.5°C		
深 度	地 質 名 称	深 度	地 質 名 称
10.0 <sup>m</sup>	表 土	6.0 <sup>m</sup>	表 土
16.0	砂 利 (青)	9.0	砂 利、砂
20.0	火山系砂利	12.0	玉 石
25.0	赤砂利、玉石	17.0	火山系玉石、砂利
71.0	砂 利、玉 石	20.0	玉 石
88.0	火山系砂利、玉石	38.0	砂 利
100.0	火山系砂利、土含む	43.0	赤 小 砂 利
		48.0	玉 石、砂 利
		57.0	砂、小砂利
		73.0	火山系砂利、青土
ストレーナー位置	45~88m	25~30m	35~73m

No. 13

No. 14

ボーリング位置	総社町総社	千代田町一丁目7	
管 理 者	日新電機工業	群馬メヂカルセンター	
施 工 業 者	田中鑿泉重工業	田中鑿泉重工業	
ボーリング開始	昭和37年3月12日	昭和42年5月24日	
ボーリング完了	昭和37年4月12日	昭和42年6月24日	
井 径	254mm	300mm	
自然水位	-12.4m	-11.9m	
揚水水位	-16.15m	-14.2m	
揚水水量	1600 l/分	1500 l/分	
水 温	17°C	16.5°C	
深 度	地 質 名 称	深 度	地 質 名 称
8.0 <sup>m</sup>	表 土	0.5 <sup>m</sup>	表 土
13.0	砂利、粘土混り	9.5	玉 石、砂混り
28.0	砂 利	14.0	火山系砂利
31.0	大玉石、砂 利	37.0	玉 石、砂 利
35.0	砂 利、玉 石	39.0	砂、砂 利
63.0	砂利、玉石含む	57.0	玉 石、砂 利
68.0	玉 石、砂 利	62.0	砂 利
72.0	玉 石、粗 砂	68.0	砂 利、玉 石
81.0	砂 利、粗 砂	70.0	玉石、砂利混り粘土
89.0	砂 利		
100.0	砂、(硬質)		
ストレーナー位置		40~68m	

No. 15

No. 16

ボーリング位置	紅葉町二丁目19	大手町三丁目2 自治会館	
管理者	県立前橋女子高校	自治会館	
施工業者	田中懸泉重工業	日本懸泉工業	
ボーリング開始	昭和41年4月9日	昭和36年6月26日	
ボーリング完了	昭和41年5月10日	昭和36年7月31日	
井径		300mm	
自然水位	-5.0m	-11.2m	
揚水水位	-18.0m	-22.5m	
揚水量	1000ℓ/分	2000ℓ/分	
水温		17°C	
深 度	地 質 名 称	深 度	地 質 名 称
2.0 <sup>m</sup>	表 土	1.0	表 土
5.0	赤 土	5.1	褐色 土
13.0	黒 土、砂混り	16.6	褐色 土混り砂利
22.0	火山系砂利、玉石	18.8	砂 石
31.0	砂 利、玉 石	30.8	玉 石 混 色 土 混 り 砂 利
35.0	玉 石	42.1	玉 石、粘 土、粘 土 混 り
46.0	火山系砂利	50.3	玉 石、粘 土 混 り 赤 砂 利
50.5	赤砂利系大玉石	53.3	砂 利、石
66.0	砂 利	65.6	砂 利、玉 石、粘 土 混 り
90.0	砂 混 り 砂 利	73.4	褐色 土、砂 利 混 り
100.0	砂	78.0	褐色 土、玉 石、砂 利 混 り
		80.0	粘 土、石
ストレナー位置	45~83.5m	31~43.2m	52~62.8m

No. 17

No. 18

ボーリング位置	紅葉町一丁目7	表町二丁目18	
管理者	群馬中央総合病院	群馬中央バス	
施工業者	田中懸泉重工業	田中懸泉重工業	
ボーリング開始	昭和37年7月26日	昭和38年5月2日	
ボーリング完了	昭和37年11月24日	昭和38年6月5日	
井径		196mm	
自然水位	-14m	-9.3m	
揚水水位	-16m	-15.0m	
揚水量	600ℓ/分	300ℓ/分	
水温	16.5°C	15°C	
深 度	地 質 名 称	深 度	地 質 名 称
2.5 <sup>m</sup>	表 土	2.5 <sup>m</sup>	黒 土
5.0	赤 土	16.0	塊 石 (混流)
18.0	火山系砂利、玉石	20.0	玉 石
30.5	砂 利、大玉石	37.0	小砂利、混り砂
47.5	砂 利、玉 石	40.0	荒 砂 混 り 砂
66.0	赤土混り砂利	42.0	玉 石 混 り 砂 利
69.5	赤土混り砂利、玉石	44.0	粘 土 混 り 砂
71.5	砂 利 混 り 赤 土	49.0	玉 石 混 り 砂 利
81.5	砂 利 混 り 土	50.5	玉 石 混 り 赤 土
87.5	砂 山 系 砂 利		
89.0	砂 山 系、砂 混 り		
100.0	砂		
ストレナー位置	30~70m 75~81m	20~50m	

No. 19

No. 20

ボーリング位置	表町2丁目30	六供町1331	
管 理 者	倉我釜砂工区	前橋市下水処理場	
施 工 業 者	田中鑿泉重工区	田中鑿泉重工区	
ボーリング開始	昭和43年1月5日	昭和 年 月 日	
ボーリング完了	昭和43年2月3日	昭和 年 月 日	
井 径	200mm	350mm	
自然水位			
揚水水位			
揚水量			
水温			
深 度	地 質 名 称	深 度	地 質 名 称
4.0 <sup>m</sup>	表 土	1.0 <sup>m</sup>	表 土
8.0	火山系砂利、玉石	1.3	砂
14.5	火山系砂利、玉石 混流	2.7	赤 土
20.0	火山系砂利、玉石	17.7	玉石混り砂利
25.0	砂 利	21.2	転石混り砂利
32.0	青 砂 利	26.0	玉石混り砂利
50.0	砂 利	60.5	砂 礫 層
		80.0	粘土混り砂礫層
ストレーナー位置		18~30m	40~77m

No. 21

広瀬川低地帯

No. 22

ボーリング位置	田口町水源	荒 牧 町	
管 理 者	市水道局	群馬大学教育学部	
施 工 業 者	田中鑿泉重工区	田中鑿泉重工区	
ボーリング開始	昭和35年9月1日	昭和42年3月19日	
ボーリング完了	昭和35年11月21日	昭和42年5月7日	
井 径		250mm	
自然水位	-7.0m	-8.75m	
揚水水位	-30.0m	-14.64m	
揚水量		1500ℓ/分	
水温		13.5°C	
深 度	地 質 名 称	深 度	地 質 名 称
0.3 <sup>m</sup>	表 土	1.5 <sup>m</sup>	表 土
3.5	礫 砂 利、玉石、砂	13.0	大 玉 石
9.4	赤 土、砂	23.0	玉 石、砂 利
11.6	赤 土、砂	26.0	火 山 系 砂 利
12.6	赤 土、砂	33.0	玉 石、砂 利
15.0	赤 土、砂、玉石	38.0	火 山 系 砂 利
14.0	赤 土、砂、玉石	40.0	火 山 灰 土、赤 砂 利
25.0	赤 土、砂、玉石		
29.0	赤 土、砂、玉石		
37.0	赤 土、砂、玉石		
42.0	赤 土、砂、玉石		
53.5	赤 土、砂、玉石		
67.0	赤 土、砂、玉石		
68.0	赤 土、砂、玉石		
85.0	赤 土、砂、玉石		
83.8	赤 土、砂、玉石		
ストレーナー位置	6.5~9.5m 12.5~25.5m	37.0~42.0m 54.0~82.0m	

No. 23

No. 24

ボーリング位置	関根町 363	川原町 10号井	
管 理 者	高橋鋼工業KK	市 水 道 局	
施 工 業 者	田中豊泉重工業KK	田中豊泉重工業KK	
ボーリング開始	昭和41年5月 日	昭和39年4月20日	
ボーリング完了	昭和41年6月 日	昭和39年8月18日	
井 径	250mm	450mm	
自然水位	-6.5m	-5.5m	
揚水水位	-9.0m	-19.0m	
揚水水量		3000 l/分	
水 温	16.5°C	16.2°C	
深 度	地 質 名 称	深 度	地 質 名 称
2.0 m	表 土	4.0 m	表 土
9.0	玉 石、砂 利	9.0	砂 利、砂
11.0	大 玉 石	20.0	砂 利、玉 石
17.0	玉 石、砂 利	40.0	大 玉 石
23.0	火山系玉石、砂利	42.0	砂
32.0	玉 石、砂 利	55.0	玉 石、砂 利
47.0	火山系玉石、砂利、粘土混る	61.0	火山系砂利
50.0	粘 土	65.0	青 粘 土
		121.0	火山系土丹層、礫含む
ストレーナー位置	8.5~36m	12~34m	42~80m 82~120m

No. 25

No. 26

ボーリング位置	岩神町三丁目1	千代田町二丁目5	
管 理 者	新達食料工業KK	前三デパート	
施 工 業 者	田中豊泉重工業KK	田中豊泉重工業KK	
ボーリング開始	昭和42年2月15日	昭和38年4月10日	
ボーリング完了	昭和42年3月22日	昭和38年5月16日	
井 径	380mm	355mm	
自然水位	-11.2m	-6.5m	
揚水水位	-18.8m	-9.86m	
揚水水量	2500 l/分	2500 l/分	
水 温			
深 度	地 質 名 称	深 度	地 質 名 称
1.0 m	表 土	2.0	表 土
9.0	大玉石、砂 利	8.0	砂利、玉石、砂
11.0	灰色土、砂	11.0	中玉石、砂 利
13.5	玉 石	14.0	黒粘土、砂
50.0	砂 利	30.0	大玉石、砂 利
		36.0	砂 利
		45.0	砂 利、玉 石
		55.0	砂
		64.0	小 砂 利
		72.0	火山系砂利、土質り
		80.5	粘土質り砂利
		86.0	砂 利、玉 石
		100.0	火山系砂利、砂 (実質)
ストレーナー位置	16.5~50m	25~70m	80~86m

No. 27

No. 28

ボーリング位置	千代田町二丁目	朝日町三丁目21
管理者	スズラン	日赤病院
施工業者	田中勘泉重工業	田中勘泉重工業
ボーリング開始	昭和41年4月13日	昭和42年9月30日
ボーリング完了	昭和41年5月14日	昭和42年10月25日
井径	300mm	300mm
自然水位	-6.2m	-4.35m
揚水水位	-12.0m	-12.06m
揚水量	1200ℓ/分	1500ℓ/分
水温	17°C	17°C

深 度	地 質 名 称	深 度	地 質 名 称
m		m	
1.0	表 土	2.5	表 土
11.0	玉 石、砂 利	8.0	玉 石、砂 利
13.0	黒 土、砂 利	14.0	火山系玉石、砂利
16.0	大 玉 石	47.0	玉 石、砂 利
47.0	玉 石、砂 利	50.0	大 玉 石
55.0	中玉石、砂 利		

ストレーナー位置		
----------	--	--

No. 29

No. 30

ボーリング位置	天川大島町	野中町 野中1号井
管理者	赤城乳業XX	市水道局
施工業者	田中勘泉重工業	田中勘泉重工業
ボーリング開始	昭和41年10月28日	昭和 年 月 日
ボーリング完了	昭和41年11月20日	昭和 年 月 日
井径	200mm	510mm
自然水位	-2m	-1.65m
揚水水位	-3m	-14.6m
揚水量	500ℓ/分	5046ℓ/分
水温	15.5°C	

深 度	地 質 名 称	深 度	地 質 名 称
m		m	
1.0	表 土	1.0	表 土
7.0	砂 利、玉 石	14.0	大 玉 石
17.0	火山系砂利(泥流?)	39.0	砂 利
32.5	砂 利	47.5	土 混り砂 利
40.0	砂利、青土含む	75.0	中玉石、砂 利
		97.0	小 砂 利
		100.0	灰 土

ストレーナー位置	18~37.5m	14~39m	52~100m
----------	----------	--------	---------

## 《参考文献》

- 新井房夫・赤城火山西側部の関東ローム（地理学誌、二八号、一九五六年）  
 新井房夫・関東盆地北西部地域の第四紀地層（前掲六年誌、一〇号、四号、一九六二年）  
 新井房夫・群馬県の高尾と地下資源（二十号の二群馬県地質調査報告、内外地四九一六四号）  
 新井房夫・前橋泥炭層の14C年代（地質科学、七〇号、一九六四年）  
 関東ローム研究グループ・関東ローム、その起源と性状（地質学報、東京、一九六三年）  
 経済企画庁・群馬県・土地分類基本調査、「前橋」（一九五五年）  
 新井房夫・前橋泥炭の噴出年代と地質文化期（地質科学、二二号、二号、一九六七年）  
 小出・博・野口肇一・赤城火山の崩壊および土石流（カスリーン颱風の研究、一九五〇年）  
 大田良平・赤城火山帯岩の研究（地質調査所報告、一五二号、一九五七年）  
 農本治雄・日本地方地質誌「関東地方」（朝倉書店）

## 第三章 土壌と土地利用

## 第一節 土 壤

本市の土壌の分布と、土壌の利用状況を見ると、前橋地方の土壌は、赤城火山灰質土壌と同火山灰質水積土壌、榛名火山灰質土壌と同火山灰質水積土壌及び前橋・高崎両沖積土壌等に分けることができる。

市域のうち最北端の金丸町は赤城山南麓斜面上部に位置し、ここは勢多郡大胡町の金丸と同郡宮城村及び富士見村と接するところであるが、この付近は暗褐色の赤城火山灰質土壌が多い。これに続く赤城山南麓斜面の中下の東北部にも見受けられる。

これらの土壌をさらに分類すると、赤城火山灰質土壌（黒色）が四種類、同火山灰質土壌（暗褐色）が五種類、榛名火山灰質土壌（暗褐色）が五種類、赤城火山灰質水積土壌が五種類、榛名火山灰質水積土壌が五種類、高崎沖積土壌が二種類、前橋沖積土壌が八種類となる。そして赤城南麓斜面の上部金丸地方は厚い火山堆出物でおおわれ、最上層には堆上質の火山灰が堆積し、これを母材とする土壌が多い。従ってこの地帯には造林が早くから行なわれ、草地もあるが、その一部は入植による開墾も行なわれ、畑作が営まれている。

また赤城南麓の中・下部には、芳賀地区と桂宮・城南両地区の各一部を含むが、土壌の大部分が厚い火山灰性堆積物でおおわれているので、これを母材とした腐植層が上部に発達している土壌が多く、谷間及び河川の氾濫地には、これらが再堆積した土壌が分布する。これらの地域では水田、畑作と桑の栽植が主に行なわれている。

榛名東麓斜面にあたる本市の清里・殿社・元総社等の地区は土壌はおおむね火山灰質堆積物から成り、その大部分は水的作用を受けて火山灰に砂礫を混して堆積したと考えられるところで、普通畑作と桑の栽植や水田が営まれている。

前橋沖積面は前橋・桂宮、旧水瀬地区の各大部分と旧荒砥地区の一部を含むが、ここに分布する土壌は灰褐色

(第7表)

不良土分

区分 町村名	酸性土壌		不良火山成土 (畑)	泥炭土 (田)	重粘土	
	田	畑			田	畑
	前橋市 (旧市)	42.25	28.86			
上川酒		25.88				
下川酒		124.56	69.42			
芳賀	24.40	85.68				
桂萇	42.45					
南橋	105.72	58.51				
荒砥		153.52				
木瀬	25.39	26.38				
元総社	16.56	36.20				
総社	34.91	40.76				
清里			44.63			
旧新高尾	51.17	48.79				
旧上隅						
計	342.85	629.14	114.05			
	54.2%		6.0%			
県	30.6	26.6	2.6	5.5		
対全地	8.2	7.1	0.7	1.5		

注 旧新高尾、旧上隅については、旧町村のままの数字をおげた。単位ヘクタール

布 一 覧 表

(耕土培養事業10年一群馬県耕土培養事業10周年記念会発行による)

砂質及び硬質土		特殊成分 過不足する 土壌 (マンガン等) 微量元素欠 乏土壌)	計		合計
田	畑		田	畑	
	14.88		42.25	43.74	ヘクタール 85.99
	39.67			65.55	65.55
	44.62	39.67		278.27	278.27
	59.50	14.88	24.40	160.06	184.46
14.88	39.67	14.88	57.33	54.55	111.88
39.67	39.67	9.92	145.39	108.10	253.49
59.50	74.38	6.94	59.50	234.84	294.34
	25.39		25.39	26.38	51.77
		14.88	16.56	51.08	67.64
	14.88	19.83	34.91	75.47	110.38
		39.67		84.30	84.30
			51.17	48.79	99.96
99.17	19.83		99.17	19.83	119.00
213.22	347.10	160.67	556.07	1,250.96	1,807.03
30.2%		9.6%			
20.3		14.3	99.9%		
5.4		3.8	26.7		

或いは灰色を呈し、主として水田に利用され、ほかに果樹、桑園、普通畑作などが行なわれ、土壌の種類も複雑に  
なっている。その表層土は旧利根川による河泥堆積物を母材とする土壌が多いが、一部には下層土が緻密な壇  
土層ともなっている。これが特に旧市及び旧市の東、桂寛地区の南東北に分布していて、しかもこれが次のよう  
に三つの地帯に分かれている。すなわち田口から竜蔵寺を経て上原に至る地帯（褐色乃至黄褐色を呈する砂の堆  
積物を母材とし、腐植含量が少なく地下水位のやや低い土壌及び河泥堆積物を母材とし灰褐色を呈し主として二  
毛作田として利用される土壌）と、利根川に沿い、田口から下小出、西片貝、長磯、小屋原を経て両毛線に沿った  
だけに存在する中山地帯とである。この地帯では水田、畑作、果樹、桑園等その利用面も複雑である。

このほか、市内には高崎台地面の土壌が分布するところがある。それは利根川の東部の旧市と市の南部にあた  
る上川隈、下川隈及び旧上隈地区で、これらの地域には深さ一層以内に緻密な壇層の下層土があり、その下層土  
は明黄褐色を呈する場合と、灰褐色を呈する場合と、ほとんど黒色を呈し、或いは黒泥に近い外觀を呈する場合と  
があるが、このうち黒色を呈しているものは有機物の含量が多いことによるのであらうと見られている。これら  
の地域では市街地以外では水田が多く、そのほか桑園も相当多く占めている。

以上は経済企画庁の委託により群馬県が行なった土地分類基本調査によるものである。

この調査によっても知られるように本市は赤城・標名両火山灰質の土壌が多いため、農作には不良の土壌が各  
地区に相当多く見られるので、これを改良するために、昭和三十一年以降不良土壌の調査が行なわれ、その結果  
に基づいて各地においてその事業が進められ、農作物の増産が図られているのであるが、事業開始直前の昭和三十

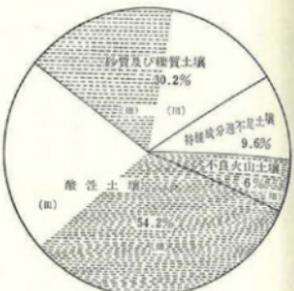


図17 不良土壌の構成

十一年における本市の土壌の調査結果は第七表のとおりである。  
(注：この表中上川隈地区の欠けているのは、当時調査が行なわれなかつたためである)

またこの前橋地方に桑園が多いのは、火山灰土壌が多く、赤城  
おろしの北風や浅間おろしの西風が強いため、土砂が吹き飛ばさ  
れるので、その風防的役割として桑の植栽が行なわれ、それで養  
蚕が盛んになったという説があるが、必ずしもそうしたことによ  
るのではないという説もあって、これは将来の研究課題として残  
された興味ある問題となっている。

## 第二節 土地利用と水利

土地は、土壌の項でも述べたように、本市では主に水田、普通畑、桑園及び山林等、その土地の土壌に相応し  
て利用されている。これを地域別に見ると、赤城山南麓地帯、標名山東麓地帯、利根川流域地帯等に分けられ  
るが、土地の利用は先ず水利との関係であらう。

本市には、利根川の分流である広瀬・桃ノ木の両川、天狗岩用水、大止・中群馬の両用水等が灌漑用水として  
利用され、その流域の耕地をうるおしているが、近く赤城中腹を群馬用水が流れることになっている。昭和三十

第8表 大正用水関係地区及び面積

地区	地目	受益面積
芳賀	田	ヘクタール 53.55
桂	葦	110.07
旧木瀬	葦	7.93
旧荒砥	葦	428.41

第9表 天狗岩用水灌漑面積

地区	地目	受益面積
総社	田	ヘクタール 117.02
元総社	葦	75.37
東	葦	280.65
旧新高尾	葦	195.36

(旧新高尾分は旧村全額の数字である)

第10表 桃木川瀬間用水灌漑面積

地区	地目	受益面積
南橋	田	ヘクタール 159.61
桂	葦	358.00
上川酒	葦	325.28
下川酒	葦	355.03
旧前橋市	葦	215.20
旧木瀬	葦	562.29
旧荒砥	葦	8.93
旧上陽	葦	411.56

(旧上陽分は旧村全額の数字である)

一年の経済企画庁及び群馬県農土地分類基本調査によると市内の各用水の灌漑面積は第八表から第一一表のとおりである。

右の表のうち赤城山南麓地帯は、荒砥川、神沢川、白川その他の小河川があるが、土壌が保水力に乏しいので、豪雨などの場合は忽ち氾濫して農作物に被害を及ぼすのと、旱魃の場合には水源が涸渇して、早害を受けることが多い。そうした被害をなくすために各地に用水がつけられ、市民はそれを利用して利用しているものであるが、このほか地区によっては小規模の溜池の水を灌漑に用いているところもある。この地帯では主として水田、普通畑、樹園等が営まれている。

利根川流域地帯である広瀬・桃ノ木両川及び天狗岩用水等の流れる地域は、生産力の高い二毛田が多く、群馬県内でも、水稲生産力の最も高い地帯である。果樹園も相当の面積を占めている。榛名山東麓地帯は、午王頭川、染谷川等の河川があるが、これも豪雨時には氾濫などがあつたため、最近新たに中群馬用水が作られ、それによって水田の達成が行なわれているが、昔からの普通畑、桑園等も営まれている。これら地区の土地利用状況を、同じく土地分類基本調査によつて見ると、表のとおりである。

第12表 赤城山南麓地帯地目別利用状況

地区	水田率	普通畑率	樹園率	計	林地	土地利用度
芳賀	25.8	32.1	42.1	100	168.59	141
旧荒砥	29.0	42.0	29.0	100	31.73	142

第13表 利根川流域地帯地目別利用状況

地区	水田率	普通畑率	樹園率	計	林地	土地利用度
南橋	31.8	35.7	32.5	100	63.47	135
旧前橋市	61.6	18.2	18.6	100	7.93	164
桂	45.8	27.7	25.1	100	18.84	133
旧木瀬	50.0	20.0	30.0	100	25.78	124
上川酒	61.9	7.3	30.8	100	3.97	152
下川酒	61.2	9.7	28.9	100	1.98	163
旧上陽	59.7	11.5	28.8	100	10.91	167
東	64.9	13.5	21.6	100	1.98	131
元総社	37.2	28.9	33.9	100	0.99	157
旧新高尾	56.5	16.4	27.1	100	2.98	173

(旧上陽、旧新高尾は旧村全体の数字である)

上の二表は昭和三十一年の調査であるから、その後の上場誘致等により、現在は当時の状況とは事情を異にするところもあるが、ここでは原表のままとした。

以上によつてもよくわかるように、前橋市の土地の利用は、比較的水利に恵まれて効果的に行なわれているが、ここで過去の状態を少しふりかえつて見ると、右のうち赤城山南麓の裾野にかかる部分は、明治の中葉までは、林が至るところに見られ、裾野を刻む細長い放射状谷の谷底のみは、相当奥深くまで水田化し、これによつて集落も営まれた。また前

第11表 中群馬用水関係地区及び面積

地区	開田	畑地灌漑	補給田	計
清里	565.27	4.96	123.96	ヘクタール 694.19
総社	103.14		14.88	118.02
元総社	72.39	1.98	2.98	77.35
鳥羽	(22.81) 32.73		15.87	(22.81) 48.60
計	(22.81) 773.53	6.94	157.69	(22.81) 938.16

カマコ内草園

(この表は中群馬用水土地改良区調査)

橋東南端の後岡・山王付近の台地でも明治中期には山林が相当あり、それが次第に桑園化して来た。天川大島付近の山林が開発されたのは、昭和十九年から二十年にかけての戦時中であり、現在の利根川沿岸にあたる岩神町黒立前橋工業高校付近の山林が開発されたのは、大正後期から昭和の初期にかけてである。現在なお中央部の周辺で林地の残存を見るのは平橋地区の川原町付近、六供地内の若干があげられ、その南部では新堀地内があげられる。そのほかの市域はすべて耕地に開発され、更にこれが急速に宅地化している。それは戦後の町村合併と宅地団地の造成及び工場誘致に原因するところが多い。そのため地目の変換が頻繁に行なわれ、その実体の把握が非常に困難であるが、昭和四十三年一月現在の本市の総面積である一四七・三九平方メートルの土地が、現在どのように利用されているかを地目別に見ると

田	四〇・六四平方メートル
畑	五五・三四
宅地	二七・〇四
山林その他	二一・三三
(内山林)	四・五五
計	一四四・三四

となっている。しかしこの数字は前掲の総面積一四七平方メートルと若干の相違があるが、これは河川、道路等の関係によるものである。これを明治十年調査の町村誌その他に記載された数字に比べて見ると次のようになる。

九 第二四表 総面積対照表

	明治一〇年	昭和四三年	増減(△印感)
田	三八・四五	四〇・六四	二・一九
畑	三五・四七	五五・三四	一八・八七
宅地	九・四五	二七・〇四	一七・五九
山林	二一・七六	四・五五	△一七・二一

(注) 明治一〇年の分は、現在の市域(左の分を調査したが、資料不足のため、上川郡の下牧集と下川郡の三友集及び島野地区は推定)によ計算し、四町区は町村議本の別冊(七年の分を、また旧市の岩神町については、明治三年の岩神村の区別を補充して計算した)。

最近の本市は、明治十年に比して、畑と宅地が増加したのに対し、山林は約五分の一に激減した。これはいうまでもなく明治から大正期にかけて、順次開墾が行なわれたためと、太平洋戦争中に開墾が強力に推進され、また終戦後の住宅建築、工場誘致等によるものと言つてよからう。田も明治十年より各地区で次第に増加したが、その後はまた下降の線をたどった。しかし差引きすると、結局明治十年よりも増加しているといふことになる。次に宅地だけについて見ると昭和四十三年の総計二七・〇四平方メートルのうちには、もちろん一般住宅・商店・工場・官有地等が含まれるが、これを細別すると次のとおり利用されている。

一般住宅地	七・一一平方メートル
併用住宅地	二・二七
農家の住宅地	六・八一
その他の宅地	一〇・四一
計	二七・〇四

以上のうち、市の中央部(旧市)だけの推移を、市制施行以来の主なる年度について見ると、昭和二十九年に  
おいて畑はすでに少なくなり、山林原野の如きは皆無にひとしくなってきたことがわかる。

第二五表 中央部の地目別面積推移表

年	中央部の地目別面積推移表					
	田	畑	宅地	山林	原野	池沼
明治25	一、四六六	一、九六一	一、九八八	〇、三七七	〇、〇七〇	〇、〇〇一
大正40	三、一八八	二、七四〇	二、〇〇三	〇、四一四	〇、〇三三	〇、〇〇三
昭和元	二、九二二	二、五〇〇	一、九六六	〇、三三八	〇、〇三三	〇、〇〇三
昭和14	二、一六九	一、四三二	二、七九〇	〇、〇八八	〇、〇〇六	〇、〇〇四
昭和29	二、一一一	一、〇三一	三、六九九	〇、〇五八	〇、〇〇八	〇、〇〇三

(注)この表は市の資料によるが、この資料には開墾年期地を含んだものがあり、各年計算の基礎に多少の相違がある。

こうして昭和二十九年の町村合併を迎えたわけであるが、二十九年以降に行なわれた合併時における各地区の土地の利用状況を主なる地目別によって見ると次のとおりである。

第二六表 地区別、地目別土地利用状況

区 分	地区別、地目別土地利用状況					
	田	畑	山林	宅地	備 考	
前橋	二、一一一	一、四一四	〇、〇〇九	三、六九九	昭和二十九年現在	
上川	三、四四四	二、五四四	〇、〇〇八	〇、四六六	昭和二十九年合併当時	
下川	三、一八九	二、三三六	〇、〇〇八	〇、五七七	昭和二十九年合併当時	
芳賀	二、一九九	七、五八八	二、三三九	〇、六六六	昭和二十九年合併当時	
植野	四、九九七	六、八二二	〇、七九九	〇、九八八	昭和二十九年合併当時	

地区	地区別、地目別土地利用状況					
	田	畑	山林	宅地	備 考	
東 社	二、八一	一、七九	〇、〇〇三	〇、三三八	昭和三十一年合併当時	
南 橋	〇、一八六	一、一八四	〇、〇〇二	〇、六四〇	昭和三十一年合併当時	
南 里	一、一六六	三、〇八二	〇、〇〇二	〇、三九九	昭和三十一年合併当時	
南 橋	三、五六六	五、八八八	〇、〇五四	〇、八八八	昭和三十一年合併当時	
島 羽	〇、〇二二	二、〇四七	〇、〇一一	〇、〇三二	昭和三十一年合併当時	
島 羽	〇、〇一〇	〇、〇〇八	〇、〇一一	〇、〇二二	昭和三十一年合併当時	
木 野	六、一一九	六、〇〇八	〇、〇〇一	一、二四四	昭和三十一年合併当時	
上 野	二、〇〇四	一、二〇八	〇、〇〇四	一、三〇七	昭和三十一年合併当時	
荒 野	五、四七七	二、二〇八	〇、〇七五	一、三〇七	昭和四十二年合併当時	
計	三八、九一一	五五、〇四一	四、一八〇	一一、一八〇		

これを現在にくらべると、合併後宅地において一五平方メートル多くなり、山林は若干減少したこととなる。田畑は数字上では合併後増加したことになるが、畑の中には、普通畑のほか、桑園・果樹園・樹園地等も含まれている。これを昭和四十三年前橋市発行の「前橋の農業」の百分率によってみると、普通畑が四五・四六%、桑園が五二・一九%、果樹園が二・〇二%、その他の樹園地が〇・三三%という割合で、桑園が依然として首位を占めている。次に昭和四十三年一月現在の市域全体の住宅の土地面積(宅地)を地区別によけると、次のとおりである。

商業地区

繁華街

五三五アール

高度商業地区

一、三二九

第三章 土壌と土地利用

普通商業地区 一、六三八

計 三、五五二

## 工業地区

大工場地区

一五、〇三八

中小工場地区

計 一五、〇三八

## 住宅地区

併用住宅地区 一〇、七五〇

高級住宅地区 一、三一六

普通住宅地区 五八、九三三

計 七〇、九九九

## 村落地区

集団地区 一〇、七五六

村落地区 六八、一三三

計 七八、八八九

合 計 一六八、四七八

道路・河川・橋梁 道路・河川・橋梁について見ると、道路は昭和四十二年現在国道二四・三三<sup>号</sup>、県道九六・九九<sup>号</sup>、市道一七九・二<sup>号</sup>、延長一九一九・四<sup>号</sup>であり、河川は大小合わせて三の河川に、河川法の一級河川一五、この延長九七<sup>号</sup>、市管理河川七、この延長三八・六<sup>号</sup>に対し、橋梁は市の管理にかかると一七五橋、この延長三・三<sup>号</sup>である。本市にはこのほかの橋梁として農 国の管理にかかると群馬大橋の二八〇<sup>号</sup>、大渡橋の五二五<sup>号</sup>及び利根橋の二〇〇<sup>号</sup>等がある。

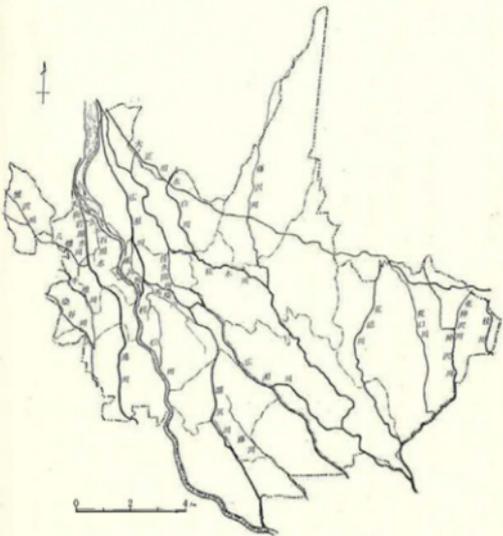
以上のように、総面積一四七平方<sup>号</sup>という広大な市域をもつ前橋は、土地利用の面から見ても、耕地も宅地も、未だかつて見ないような速さで、著しく変転を続けているのである。

## 第三節 水 系

市域内の主なる水流をあげると、先ず利根川は、往時は現在の繁華街の中央を北西から東南へ流れ、その後現在の市域内を市街地の西に漂流した。市内にはこのほか広瀬・桃ノ木両川をはじめ、大小多数の用水が通じているが、これらは亦城・標名から匯下する水流のほかは、大部分利根川の水を分けたものである。そしてこの水は、主として市街地の防火用水となり、農業地帯では水田の灌漑（かんがい）用水となり、広瀬川では発電用に利用されている。往時はこの水が、器械製糸場や織糸工場・米穀換精・製粉或は木工用の水車の動力原となっていたものである。

1 利根川 利根郡水上市刀根が源を発するこの川は、関東平野を流下して千葉県銚子で太平洋に注ぐま

での全長三二二キロ、このうち群馬県内の流程一五二キロであるが、前橋市内では南橋地区の田口町から下川淵地区の下阿内町に至る流程およそ一八七キロである。この川は、昔は田口町の横山の山裾から東に流路を向けて、南橋地区内を流れ、それより東南に向かった。このため現在の前橋市の中央繁華街もその河道であったと言われ、川が現在のように県庁裏を南へ流れるようになったのは、いつであるか、明らかではない。近世の諸書は天文年



第182図 水系図

間(一五四〇頃)とされている。昔は大洪水が度々あり、そのため年々被害があった。江戸初・中期の前橋城主であった酒井氏にかつて前橋城主となった松平氏が、在城わずか十九年で川越へ移城したのも利根川の洪水による。城の本丸付近が欠け落ちたためといわれる。河川改修は酒井時代から明治・大正・昭和にかけてしばしば行なわれた。最近の上流に幾つものダムが建設されるようになったため、そうした洪水も少なくなってきた。現在の前橋市内での川幅は県庁裏から利根橋に至る中間の最も広い箇所で五三〇呎で、川の勾配は県庁裏で三三〇分の一である。

2 広瀬川 もとは勢多郡北橋村の利根川坂東橋の下流で同川の水を取り入れたが、現在では同橋上流の佐久発電所の放水を取り入れ、田口町の制水門で広瀬橋ノ木西川に分かれ、広瀬川はそれより田口、関根、荒牧、上小出の各町を経て旧市域に入り、繁華街を貫いて東部の三河町と朝日町の境にある十六木橋で端気川を分水し、更に東部に流れて永明地区に入り下大島地内で蓮川と分かれ、小原原地内で桃ノ木川を合わせて駒形町の北を流れ、伊勢崎市に入って荒砥川と粕川及び大川(重川)を合わせ、佐波郡境町で利根川に注ぐ。全長二・六五キロ、前橋市内の流程一七・五キロである。この川は、桃ノ木川とともに旧利根川の河道を流下しているが、昭和の初期この流水を利用して発電事業が上小出に起こされ、最近また田口、関根、小山、柳原の四カ所に県営発電所、このほか田口に自家発電一カ所が建設されるに至った。川幅は中央繁華街の中心比刀根橋で一三・八呎である。

3 桃ノ木川 広瀬川と同じく、利根川の佐久発電所の放水を取り入れて、田口町で広瀬川と分かれ、それより南橋地区の田口、関根、川端、日輪寺、青柳及び北代田を流れて旧市の北部に出で、下細井町を経て特産地区に入り、さらに永明地区から南橋地区に流れ、小原原で広瀬川に合流するまで全長一四・七キロ、この大部分が市内

を流れており、川幅は北代田地内で一六呎である。この川は南橋地内で赤城山から流出する諸川を合せている関係から雷雨などの際洪水となることがしばしばあるので、最近全川にわたって改修が行なわれている。なお分流に延命寺川（役館川）、四ヶ村堰用水、五衛門用水、荒牧用水、天神用水などがある。

## 4 天狗岩用水

広瀬、桃ノ木両川と同じく、佐久発電所の放水を利用根川坂東橋の東側で取り入れ、これをサイフォンで利根川の河底を潜らせて西側の北群馬郡吉岡村へ送り、それから南下して総社地区に入り、総社町総社字大屋敷南の八幡川（山沢川）を合してその名も濁川となる。濁川は総社、元総社、東地区を流下し、高崎市の一部を流れて佐波郡玉村町川井地先で鳥川に合流する。この用水は、その昔総社城主秋元長頼が住民のために開鑿したのがはじまりで、その分流に総社地内では五千石用水がある。五千石は総社町厩野の元誓寺西北で天狗岩用水から分かれて同町を南流し、幾つかの分流を出したのも元総社地区に入り、それより高崎市に合併した旧新高尾、田中川等を経て井野川に合流する。この河川のうち天狗岩用水として市内を流れる延長は九三三呎、同じく濁川は七・一呎、川幅は元総社の上石倉地内で五呎、総社、東地内で九呎である。なおこの川は、総社町立石地内で、前橋の有志によって明治二十七年発電事業の起こされたことがある。利根川の洪水はこの川の取入口および流路にも毎回損害を与へ、そのため取入口や一部の水路の変更を行なったこともある。中群馬用水もこの天狗岩の水を揚水して清里、総社、元総社、鳥羽地内（七頁参照）を流している。

## 5 風呂川

上小出町地内で広瀬川から分流し、柳原の土手上、児黨公園の北を流れ、大手町三丁目（山北曲輪町）地内で馬場川を分水し、それより裁判所付近を流れ、桃井小学校の西で矢田川と分れて市の南部に向かい、六俣町地内で利根川に合流する。この川は、その昔厩橋城築城の時、城の防備及び城内の防火、その他生活用水

を兼ねて開鑿されたものといわれ、入番に利用した伝説から風呂川の名がつけられたと考われる。

## 6 馬場川

大手町三丁目（山北曲輪町）地内で風呂川から分かれ、木町一、二丁目の下を流れて木町三丁目（旧天川原町松竹院裏）で南流への農耕用水を分かち、文京町一丁目（旧高田町）で濁川と合流する。馬場川の名は、千代田町四、五丁目（旧船屋町）地内に旧幕時代馬の調練場があったので古くから馬場通りの名があり、未だにその名は残っており、そこを流れるので馬場川になったと言われる。

## 7 佐久間川

下小出町地内で桃ノ木川から分かれ、下小出町から若宮町（旧才川町）と園領町地先を南流し、

## 8 野宮川

荒牧町と上小出の境で桃ノ木川から分かれ、下小出町、群馬大学付属森野村近を流れ、昭和町（旧

## 9 端氣川

朝日町一丁目（旧百軒町）、十六本堰で広瀬川と分かれ、朝日町二丁目（旧新町裏）から文京町一丁目（旧高田町）北を流れ、同町四丁目（旧天川町）から上川洲地区に入り、市の最南端下阿内町地先で利根川に合流する。この川は、分水から合流点まで約九哩にわたり、南部農耕地帯の重要な用水で、利根川に合流するまでに多数の堰があり、欄間用水その他の用水を分流している。

## 10 白川

赤城山から放射状に流出する水系のうち、最も代表的な川で、川底が水田面より高い天井用のため平常は水量も極めて少ないが、雷雨等の場合、たちまち出水するので有名である。この川は赤城山地蔵岳の西南付近から赤城附近に沿って南下し、勢多郡富士見村の中央部を断断して市内南橋地区に入り、上柳井町と青柳町の境界を流れて、北代田町で桃ノ木川に合流する。このほか赤城山からこの地区に流下する川に十王堂川、法華

沢、細ヶ沢、庚申川、滝ノ口川（大川、赤入道川）、鎌倉川などがあり、これらはいずれも同地区内で桃ノ木川に合流する。

11 藤沢川 この川は赤城山鍋窪山の西南に源を発し、市域内芳賀地区の旗町に至って東南に流れ、同地区の中央部を貫流し、鳥取町で金丸川轄射谷を横断して五代町に入り、ここで北方から流出の金丸川、小坂子川などの谷川をすべて合流して桂置地区に至り、そこで桃ノ木川に合流する。金丸川は赤城山荒山の麓から発し、南流して本市最北端の金丸町を経て小坂子町に入り、鳥取町地先で藤沢川に合流する。小坂子川は同町の新沼を水源として南下し本流と支流に分かれるが、五代町で藤沢川に合流する。

12 蟹沢川 榛名山から流下する水流で、本市最西端の清里地区に流れ込んでいる。このほか榛名山から同地区に流入するものに神戸川、山沢川がある。水源はいずれも北群馬郡榛東村で、蟹沢川は同地区内で八幡川（山沢川）に合流し、それより総社地区に入り天狗岩用水に合流する。

13 山沢川 水源は北群馬郡榛東村（旧桃井村）で、榛名水系の小流を合わせて東南に流れ、清里地区青梨子町付近を東へ向かって総社町に入り、同町大屋敷の東南で天狗岩用水に合流する。全長は約二キロで、この川は、八幡川とも言われ、分流に東西相がある。

14 牛池川 群馬郡群馬町（旧金古町）東牛池沼に発し、群馬町の西半分、東半分を過ぎ、總社と元鶴社の境を南流し元鶴社南部字落合で栗谷川に合流する。

15 牛王瀬川 北群馬郡榛東村（旧桃井村）から東南に流れ、同郡古岡村（旧明治村）から清里地区に入り、再び吉岡村大久保を経て總社町に至り、同町元京寺北方で利根川に合流する。

16 栗谷川 北群馬郡榛東村に源を発する榛名山水系の一つで、豪雨などの際たまち出水し、このため沿線に害を及ぼすことがしばしばであった。この川は群馬郡群馬町と元鶴社地区を経て東地区に入り、高崎市域で井野川に合流する。

17 藤川 上川湖地区朝倉町の東北で小水降の水を合して同地区を南下し、下川湖地区の房丸、徳丸、力丸三町の東隅に接してさらに南流したのも、佐波郡玉村町に入りここで利根川に合流する。なおこの川も合流点に至るまでの間に、松の塚その他幾つもの堰で分水する。

18 宮川 文京町四丁目（旧天川町）で、端気川から分かれ、それより上川湖地区朝倉、後園を経て上陽地区に入り、山王町日枝神社付近で二本に分かれ、一本は西善町を南流してから東藤川に合流し、一本は山王、東善、中内等をうるおし、伊勢崎市上の宮町で利根川に合流するが、この川の上流は従に後園用水と言われ上川湖と上陽地区の重要な水路となっている。

19 柳島用水 文京町三丁目（旧天川町）二子山の東で端気川から分水し、天川原、六供、上佐島の各町を経て柳島町に流入し、同町飯玉神社付近で二分して一本は上佐島から公田町に至り、新堀町から利根川に合流し、他の一本は公田町で利根川に合流する。

20 松葉川 勢多郡富士見村地内から流下するこの川は、南橋地区の上細井町の急崖下を東へ流れて桂置地区に入り、上沖町を経て下沖町で桃ノ木川に合流する。この川も過去水害を生じた川で、南橋地区では松葉川と言い、途中で大川となり、桂置地区に入って赤入道川となる。

21 寺沢川 勢多郡大胡町の北に発し、市内の西沢窪町、亀泉町を南流して石岡、東上野の両町を越、女屋町の

南で桃ノ木川に合流する。この川の流域は昔は一毛作田であったが、約三十年前耕地整理を行ない、川を改修したので二毛作田となった。

22 清水川 市内野中町の湧水を源にしたこの川は、俗に「野中の清水ツ川」と言われ、明治初年までは野中、上大島等で利用していたが、野中町の清水及衛等の耕地整理施行により、野中をはじめ上大島、下大島、小原原等旧木瀬地域をうるおし、途中三カ所の堰もあって、下増田町で広瀬川に合流する。現在では、その水源は広瀬川の分水によっている。

23 大正用水 大正七年県会で議決されたが、その実現を見ず、昭和十八年四月、太平洋戦争の真つ只中に施工を企てられ、翌十九年農地開墾営団の事業として着工され、同二十一年営団の閉鎖により開墾事業に移され、更に同二十五年開墾となり、二十六年土地改良区となって現在に至っている。水は坂東橋上流で広瀬橋ノ木両川とつしよに取り入れ、田口で広瀬両川と分かれてから赤城の南麓を東へ流れ、佐波郡赤沼村香林で早川に合流する。全長二四キロで、このうち前橋市域では南橋地区の田口、竜蔵寺、上廻井各町、芳賀地区の小神明、鳥取、五代各町及び桂置地区の荻窪町、江木町等がその流路にあつている。

24 荒砥川 勢多郡宮城村梅之沢地先を水源とし、同村、同郡大胡町を南下して市内の城南地区に入り、泉沢町と富田町の境を流れ、荒口、今井、上増田の各町を経て下増田町で広瀬川に合流する。この川は全長二三キロのうち、城南地区を七・五キロ流れ、途中神沢川、宮川などを合流する。

25 神沢川 勢多郡宮城村三夜沢橋で荒砥川から分水し、城南地区に入つては下大屋、西大室、東大室、飯土井、新井各町を経て、下増田町で荒砥川に合流する。全長一四キロのうち、五・三キロは、城南地区を流下す

る。このほか、この地区に荒口川がある。

26 東神沢川

勢多郡宮城村苗ヶ島地先を水源として城南地区に入り、西大室町で、神沢川に合流する。

27 桂川

勢多郡粕川村新屋から城南地区に入り、東大室町を経て佐波郡赤沼村に流下し、粕川に合流する。

28 八坂用水

箕井町から上増田、二ノ宮、新井の各町を経て、伊勢崎市八坂、新宿方面へ流下する。

29 貫船川

勢多郡大胡町から城南地区に入り、桃ノ木川に合流する。

30 群馬用水

未だ完成の域に達しないが、芳賀地区の中央部を東へ流下している。

## 第四章 気 象

本市は関東平野の北西部に位し、北西に連なる赤城・榛名・上信越の山々に囲まれて、気候はやや内陸性を帯びている。そのため寒暑の差が大きく、四季の変化に富んでいるが、降水量は少ないほうである。風は秋冬は北西または北の風が強く、春から夏にかけては東または南寄りの風が吹く。冬の風は、いわゆる「上州のからっ風」である。このからっ風の吹きすさぶころは、晴天の日が続き、空気が著しく乾燥するのが常で、降水量が蒸発量よりも遙かに少ないという現象を示すことになる。

本市は、雷も多いので知られていて、栃木県地方と大体同じか、年によっては多いことさえある。

このようにあげて来ると、一見本市は災害の多い市のようにであるが、事實は住みよい地とされている。雨が降

つても時々大洪水に襲われる危険は少ない。地震はあつても大被害の騒動はなく、雪はさほど降らず、風や雷雨の害も毎年たくさんあるというほどではない。

夏は暑く、冬は寒く、春秋は大体温暖適風と言つたのが前橋である。

月をおつてあげて見ると、一月が最も寒きびしく、一月から四月にかけて名物のからっ風が吹きまくるが、三月も末になると漸く気温も上昇して、早くも木蓮や彼岸桜が咲き出し、四月月上旬にはつばめが飛来し、蝶が舞い、染井吉野桜のつぼみがほころびる。しかしこの時分、西または北の季節風が突然吹き流れたりすることもあ

る。四月もなかなばを過ぎると、あたりは花の世界から一斉に若葉の世界に変わり、農業地帯では春蚕の準備が始まる。五月蠶が空を彩るようになる、移動性高気圧によつて、五月晴れの好天に恵まれるが、そんな時、農作物が晩霜に不意を衝かれることもあるし、時には春雷や降雹の害にあつたりもする。このためこの地方の農家で、農作物の母付けや春蚕の掃立て時期を加減する。

六月から七月にかけては、麦刈り田植の季節で、麦刈りは梅雨の晴れ間に行なわれ、それが済むと田植となるが、田植は六月末から七月にかけて行なわれる。

七月、八月の盛夏の暑さは特別だが、八月も朝の涼風が立つと俄に秋らしくなり、九月の二十日前後から下旬にかけて、台風の影響を受けることがある。そして台風期が過ぎると間もなく北西の秋風が吹き出し、郊外では秋晴れの空にとんぼが群れ飛ぶのが見られる。その反面天気の変化が多く、陰うつな日も続いたりする。

こうして十月に入ると、空気が澄んで天いよいよ高く、さわやかな日が続く。秋の菊が咲き出し、街路樹を

じめ草木も次第に秋の美いを醸し、田には黄金の穂波がゆれ、間もなく稲の収穫がはじまる。

そして十一月ともなると早い年には月なかなば以前にすでに霜が降り、時には上旬に結氷を見ることもある。

こうして十二月に入ると、寒さも次第に加わつて、あつたらしいうちに年を送るのである。

前橋地方の気候について、明治二十四年以文会発行、保岡申之編の「前橋繁昌記」に

此地夏秋の二季は和種の良日多し、冬春にいたりては、時々北風発しにはかに気候を變ずることあり、南軒に背を曝す老翁も遽て、知辺へ逃込の奇麗なきにあらず、併し極寒も華氏四十度内外にして、極暑も同じく九十度前後なり、霜は十一月十日頃に降りはじめ三月三十日頃にふり止る、積雪は一尺より高からず、降雪の度は一年に大凡三回なり、風は春は西又は北、夏は東より吹く、秋冬は北風最多の方位を占む。

とあるが、これは前橋地方の気候の状態を、よくあらわしてゐる。

以下前橋市の気温・降水量・風速・その他の気象状態について述べてみよう。

## 気 温

前橋の一年中の平均気温は、過去三十年間（一九三〇年以降）の記録では一三度四で、これは熊谷より〇度三、東京より一度三も低い。しかし、宇都宮よりは〇度九、水戸より〇度六高いことになる。年間では一月が一番低く八月が一番高い。そして一月の平均気温は二度四、八月の平均気温は二五度三である。

本市における過去の最高気温は明治三十年（一八九七）以降昭和四十三年に至る間の調査によると昭和三十

第17表 日最高気温月平均値

年	明治30年	明治45年 大正元年	昭和2年	昭和20年	昭和30年	昭和40年	昭和42年	昭和43年
1	7.8	8.6	7.8	6.2	8.7	8.7	8.1	9.3
2	8.4	11.0	7.4	5.3	11.0	9.1	8.1	7.6
3	10.2	12.4	10.7	11.3	12.4	10.4	14.0	13.0
4	15.6	18.2	18.0	19.3	17.8	15.9	17.4	18.5
5	22.0	21.7	21.9	20.0	21.7	21.8	24.4	21.6
6	23.4	24.1	26.0	24.3	27.5	25.9	27.3	24.5
7	26.9	28.0	29.9	25.3	31.2	28.5	29.1	28.2
8	28.8	29.9	30.2	30.1	29.6	30.8	31.6	29.4
9	24.6	23.7	24.7	25.4	25.3	25.2	25.2	25.1
10	19.9	20.5	20.9	20.0	20.6	21.5	20.1	19.2
11	15.1	13.8	15.5	16.0	16.0	16.4	15.5	18.1
12	9.5	9.5	10.8	10.4	13.0	10.7	10.5	13.3
年	17.7	18.5	18.6	17.8	19.6	18.7	19.3	18.9

第18表 日最低気温月平均値

年	明治30年	明治45年 大正元年	昭和2年	昭和20年	昭和30年	昭和40年	昭和42年	昭和43年
1	-1.5	-2.6	-3.2	-5.2	-2.2	-1.4	-2.4	-2.1
2	-1.7	0.2	-3.6	-4.6	-0.3	-1.8	-1.6	-3.8
3	1.1	-1.9	0.0	0.4	3.3	-0.1	1.5	2.4
4	5.5	5.7	7.1	5.7	7.5	4.2	7.1	7.4
5	11.4	10.9	10.4	9.9	12.5	11.6	12.4	11.4
6	14.9	15.4	15.3	16.4	17.8	17.4	16.9	13.6
7	19.6	20.3	21.9	18.0	22.7	20.4	21.7	20.6
8	21.2	21.2	21.5	22.4	21.5	21.5	22.6	21.8
9	16.7	16.1	16.8	17.3	17.0	16.8	18.0	17.3
10	9.5	10.5	11.1	11.8	12.9	10.0	10.7	10.6
11	4.8	4.2	5.3	5.2	4.7	5.9	5.4	6.3
12	-2.1	-0.2	-0.6	-0.7	2.5	0.9	-0.3	3.9
年	8.3	8.6	8.5	8.1	10.0	8.8	9.3	9.1

年八月九日の三七度六（昭和十七年三七度四）で、最低は大正十二年一月三日の氷点下一一度八であった。  
また過去の主なる年の月別最高気温、最低気温の平均値は前表のとおりである。

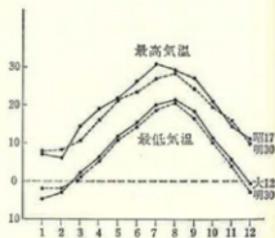
## 湿度

前橋地方の湿度は、冬季に小さく、春から夏にかけて大きくなるが、過去三十年間の平均湿度は六九%である。これは熊谷よりも四%、東京より二%、宇都宮より八%、水戸より九%、いずれも少なく、それだけ近県都市より前橋が乾燥しているのである。

本市が最も乾燥するのは二月と一月で、二月の湿度は五七%、一月は五八%である。このうち二月だけの湿度を前述の各都市にくらべると、熊谷は六〇%、東京六〇%、宇都宮六九%、水戸は六九%であるから、これらの都市は何れも前橋より高く、それだけ前橋の真冬の乾燥状態のひどさが知られるわけである。

## 降水量

前橋の降水量は、過去三十年間の一カ年の平均二四六ミリで、これを月別に見ると九月が最も多く、次いで

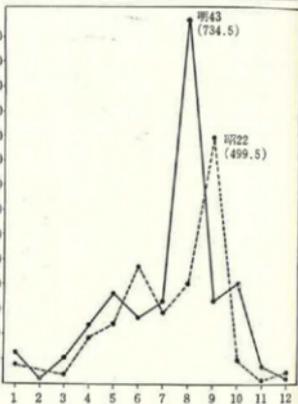


第20図 日最高最低気温月別平均値比較表  
昭和17年は最高気温37.4をあらわした年  
大正12年は最低気温氷点下11.8をあらわした年

第20表 降水量

年	明治30年	明治43年	明治45年 大正元年	昭和2年	昭和20年	昭和23年	昭和30年	昭和40年
1	48.9	54.9	21.6	0.5	0.5	32.2	28.0	33.1
2	31.1	9.4	92.9	15.0	29.1	11.3	55.6	3.7
3	40.2	45.2	102.2	112.4	23.6	40.7	98.9	18.7
4	105.4	35.9	47.4	158.4	52.2	97.8	52.5	49.1
5	105.8	176.0	122.4	72.1	90.3	62.0	174.1	255.4
6	176.7	124.8	331.2	70.3	232.7	278.4	64.1	186.8
7	204.5	159.7	213.6	151.2	137.3	373.1	221.6	87.0
8	89.8	734.5	87.2	227.0	299.6	221.2	464.2	183.3
9	375.4	159.4	187.6	292.0	102.9	210.1	251.0	152.7
10	106.6	196.5	102.7	73.7	316.9	110.4	303.6	66.3
11	100.2	27.4	46.7	49.9	67.0	68.5	62.1	84.4
12	0.0	9.3	70.1	11.0	4.3	40.1	0.9	27.7
年	1,384.6	1,733.0	1,425.5	1,233.5	1,356.4	1,545.8	1,776.6	1,148.2

年	昭和42年	昭和43年
1	26.4	2.5
2	42.2	30.0
3	39.3	58.5
4	100.7	133.5
5	73.9	135.5
6	249.6	182.0
7	144.3	283.5
8	41.1	235.0
9	174.0	72.0
10	126.8	97.5
11	36.2	8.5
12	12.7	106.0
年	1,067.2	1,344.5



第21図 月間降水量比較表

八月、七月といふ順になり、一月が最も少ない。年間では、降水量〇・一ミリ以上の日数が一四四日、このうち一・〇ミリ以上の日が一〇九日、一〇ミリ以上の日が四一日、三〇ミリ以上の日が八日もあり、三〇ミリ以上の日が七月に一・四日、八月に一・六日、九月に一・五日というように、降水量が夏から初秋の候に多いのは、雷雨台風その他によるものであらう。

前橋気象台開設(明治二十九年)以来現在に至るまでの最大の降水量は、昭和二十二年九月十五日のカスリン台風による三五七・四ミリであった。また一時間の最大降水量は、昭和三十年八月六日の九四ミリ、十分間の最大降水量は、昭和四十二年六月二日の二八ミリであった。

このように本市の最大降水量の記録は昭和に集中しているが、それ以前の明治四十二年八月の大洪水の際には、一カ月間の降水量が実に七三四・五ミリ、大正三年八月の台風の際には、月間の総量三四七・一ミリを示している。これを近県他都市の一年間の平均降水量とくらべて見

第19表 平均湿度 (カッコ内はその月の最小湿度)

年	明治30年	明治45年 大正元年	昭和2年	昭和20年	昭和30年	昭和40年	昭和42年	昭和43年
1	65	57	58	57	52	53(19)	52(16)	51(19)
2	58	62	57	55	54	47(15)	60(24)	51(16)
3	59	60	61	57	65	48(13)	53(13)	56(20)
4	69	60	70	60	64	51(12)	61(11)	63(18)
5	72	75	69	75	74	69(17)	63(19)	70(23)
6	80	81	71	84	73	77(25)	70(30)	75(26)
7	85	82	82	83	79	78(34)	81(46)	81(37)
8	86	82	81	84	80	73(39)	74(30)	82(37)
9	86	83	83	84	78	75(21)	82(40)	77(33)
10	73	79	75	75	76	64(14)	72(28)	72(34)
11	73	69	69	70	63	61(27)	64(24)	58(14)
12	59	64	63	60	55	57(21)	58(16)	62(24)
年	72	71	70	71	68	63(12)	66(11)	66(16)

と熊谷が一四九ミリ、東京が一五六ミリ、宇都宮が一五二ミリ、水戸が一三九ミリと何れも前橋より多い。また県内では制生が一四四ミリ、伊勢崎が一三三ミリ、館林が一三七ミリであるから、これらは前橋よりもさらに少ないことになる。

過去の主なる年の前橋の降水量を示すと第二〇表のとおりである。

風

風は上州の名物とされている。いわゆる「上州のからっ風」であるが、この風は冬から春にかけて吹き荒れる。そして晩春から次第に東南東の風にかわり、これが七月八月と続き、秋九月に入ると次第に北寄りとなって冬に入るのであるが、本市における過去十年間（一九五一年以降）の風向の百分率は

北々西二五%、北一五%、北西一二%、東南東一〇%、東六%、南東六%、西北西四%、西三%、南々東三%、北々東二%、東北東二%、南二%、南々西二%、南西二%、西南西二%、北東一%、静穏五%この数字は四捨五入してある。

となつてゐる。また本市における年間平均の風速は秒速三・九毎で、月別に見ると一月が五・一毎、二月が四・九毎、五月六月は三毎台となり、七月から九月にかけては二毎となる。

本市の年間平均風速を東京、熊谷、その他近隣都市と比較すると、東京二・二毎、熊谷三・七毎、宇都宮二・五毎、水戸三・二毎で何れも前橋以下である。



第19図 10年間の平均風向

第21表 10以上の風の吹いた日数

年	月							年間の日数
	1月	2月	3月	4月	4月計	年間の日数		
昭和33	14	16	15	12	57	88		
34	15	8	15	12	50	77		
35	20	13	14	13	60	95		
36	10	13	6	9	38	66		
37	7	10	9	9	35	53		
38	6	7	5	1	23	42		
39	6	5	12	5	28	42		
40	10	10	15	10	45	65		
41	7	9	10	8	34	59		
42	10	6	10	9	35	55		
43	8	1	11	4	24	35		

本市のからっ風は大体一〇層内外の風速でそれ以上のももあるが、過去における本市の最大風速の記録を見ると、実はからっ風でなく台風時に出ているのである。すなわち明治三十年以降の資料によれば明治三十三年九月二十八日の台風時に出た二九・九毎（風向北）が最大で、最大瞬間風速は、昭和四十年九月十七日の台風二十四号の際の四二・三毎（風向東南東）であった。

また本市でからっ風の吹くのは一月から四月で、この四カ月間の一〇層以上の風の記録を見ると、明治三十年から六十一年の平均は一月が一四・三日、二月が一三・八日、三月が一四日、四月が一〇・七日である。

第22表 月平均風速 (カッコ内は最大風速)

年	月平均風速 (カッコ内は最大風速)							
	明治30	明治45 大正元	昭和2	# 20	# 30	# 40	# 42	# 43
1	4.5 (13.4)	5.3 (22.5)	4.8 (15.8)	4.4 (13.9)	5.4 (16.1)	4.4 (12.8)	4.5 (12.3)	4.3 (15.2)
2	5.2 (17.6)	4.6 (20.5)	4.4 (14.1)	5.2 (16.6)	5.2 (18.7)	4.9 (16.3)	3.6 (12.7)	4.0 (11.3)
3	5.5 (18.3)	5.4 (24.2)	4.6 (16.7)	4.9 (22.9)	4.2 (20.2)	4.5 (13.0)	4.2 (14.7)	4.0 (13.5)
4	4.2 (18.3)	4.7 (18.7)	3.9 (16.0)	4.2 (18.5)	3.9 (18.0)	4.2 (14.3)	3.6 (14.0)	3.2 (11.5)
5	3.8 (14.0)	3.5 (13.1)	3.5 (15.3)	3.5 (13.8)	3.6 (14.5)	3.0 (11.7)	3.2 (12.2)	2.9 (12.0)
6	2.5 (9.2)	3.0 (18.8)	2.9 (13.8)	2.5 (10.9)	2.9 (13.7)	2.3 (9.0)	2.9 (12.0)	1.6 (6.8)
7	2.1 (7.6)	2.9 (12.6)	2.1 (7.1)	2.5 (11.9)	2.5 (12.9)	2.3 (9.0)	2.1 (7.8)	2.6 (9.2)
8	1.8 (8.5)	2.4 (11.9)	2.1 (10.0)	2.4 (12.6)	2.9 (11.5)	2.6 (9.5)	2.5 (8.5)	2.0 (8.7)
9	2.6 (11.8)	2.0 (23.7)	2.1 (12.0)	2.3 (15.9)	3.2 (13.7)	2.8 (17.5)	2.1 (7.2)	2.1 (7.7)
10	3.8 (16.7)	3.6 (16.8)	3.0 (11.7)	2.3 (12.6)	3.2 (15.5)	3.1 (9.5)	2.8 (10.8)	2.7 (8.8)
11	3.4 (13.5)	4.3 (16.1)	3.8 (14.5)	4.1 (16.0)	4.1 (14.5)	3.9 (14.5)	3.2 (12.8)	5.8 (14.0)
12	4.6 (16.3)	4.8 (17.0)	4.2 (15.4)	4.6 (11.5)	5.3 (16.5)	4.1 (13.7)	3.8 (12.0)	3.8 (11.2)
年	3.6 (18.3)	3.7 (24.2)	3.4 (16.7)	3.6 (22.9)	3.9 (20.2)	3.5 (17.5)	3.2 (14.7)	3.2 (15.2)

単位メートル(秒速)

最近十カ年間に於ける前橋地方の風の月別日数・風向などをあげると第二二・第二三表のとおりである。

雪

前橋は、雪は少ない。過去三十年間の一カ年の平均日数は一六・二日であるが、このうち一〇センチ以下の積雪日数が七・七日、一〇センチ以上の積雪日数が一・六日、二〇センチ以上となる積雪日数が〇・三日に過ぎない。平均日数一六・二日は、この地方としては多いようであるが、これは微量な雪、たとえば風花等を含むものである。

月別に見ると近ごろの本市で雪の多いのは二月と一月、これに次いで十二月であるが、明治三十二年以降の積雪状況を見る

第23表 最多風向

年	月							
	明治30	明治45 大正元	昭和2	# 20	# 30	# 40	# 42	# 43
1	NW	NNW	NNW	NNW	NNW	NNW	NNW	NNW
2	#	#	N	#	#	#	#	#
3	N	#	NW	#	#	NW	#	#
4	N NW	#	NNW	#	#	NNW	#	#
5	SE	#	#	#	#	#	#	ESE
6	#	#	ESE	ESE	NW	SE	#	S
7	#	ESE	ESE NNW	#	ESE	E	ESE	ESE
8	#	#	ESE	#	E	NNW	NNW	#
9	#	NNW	NNW	NNW	NNW	#	#	NNW
10	NW	#	#	#	#	NW	#	#
11	#	#	NW	#	#	#	NW	#
12	#	#	NNW	#	#	NNW	NNW	#
年	NW	NNW	NNW	NNW	NNW	NNW	NNW	NNW

第24表 年間降雪日数

年	日数	年	日数	年	日数	年	日数
明治30	14	大正4	16	昭和8	19	昭和26	15
31	20	5	21	9	22	27	25
32	18	6	16	10	24	28	13
33	27	7	22	11	21	29	15
34	17	8	20	12	13	30	12
35	16	9	23	13	12	31	20
36	16	10	18	14	11	32	15
37	25	11	28	15	13	33	12
38	15	12	21	16	14	34	13
39	25	13	16	17	12	35	10
40	16	14	20	18	15	36	12
41	21	15	21	19	26	37	18
42	27	15元	2	20	22	38	25
43	25	昭	3	21	15	39	23
44	14	和	4	22	16	40	9
45	17	元	5	23	7	41	16
元	21	2	6	24	14	42	19
2	19	2	7	25	9	43	12
3				18			

と、昭和のはじめころまでは、十二月に毎年何回もの積雪を見ているのに、それ以後は十二月の積雪は、次第にまばらになって来ている。

本市において過去雪の最も早いのは明治三十七年十一月七日、最も遅いのは同じく三十七年四月十六日と昭和四十二年、四十四年の四月十六日夜から四月十七日である。一番多く積もったのは昭和二十年二月二十六日の三七・四センチ、次は昭和十二年二月二十三日の三四・五センチ、昭和二十九年一月二十四日の三一・五センチ、昭和十七年二月二日の三一・五センチ、明治四十一年四月九日の二八・八センチという順位になる。

これを県外各地と比較して見ると、年間の雪日数は前橋の一六・二日に對し、熊谷は一〇・三日、東京は二・三日、宇都宮は一八・

七日、水戸は一四・四日となっている。明治三十年以来の前橋の降雪日数は、第二四表のとおりである。

雷

上州の雷は、栃木県とともに有名である。前橋の

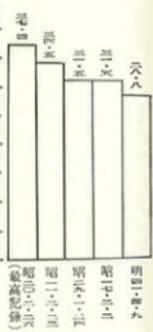
過去三十年間の一カ年の平均雷日数は二四・四日となっているが、これを東京その他近県各地と比較して見ると、東京は一〇・四日、熊谷は二・六日、宇都宮一四日、水戸一九・五日であるから、前橋よりは何れも少ないことになる。

本市で雷の一番多い月は八月で、次は七月、六月である。

前橋の雷は、市の西方榛名山から来るものと、市の南西方御荷鉢山からのものが多く、中でも御荷鉢山のもの「御荷鉢の三束雨」と言ってお入道雲が湧いたかと思うと麦三束作る間に、もう大粒の雨がやって来ると言われる。また、市の北方赤城山に湧く入道雲は前橋方面に雨を降らせ、本市の東方桐生・大間々方面へ流れることが多い。これは気流の関係からである。

第25表 電雷日数

月	5月	6月	7月	8月	9月	年間
明治30	2	2	7	9	—	22
31	1	12	7	10	14	34
32	3	3	3	4	14	40
33	4	2	2	2	14	12
34	2	2	3	13	6	35
35	2	1	3	4	5	17
36	0	3	1	3	4	15
37	3	15	9	5	5	47
38	3	10	5	11	2	34
39						32



第22図 雷日比較表

## 霧

前橋の霧は夏から秋にかけて見られるが、東京その他に比べると遙かに少ない。  
すなわち前橋の年間平均値かに八・六日である。これに対し、熊谷は一八・八日、東京は三六・八日、宇都宮は二七・三日、水戸は四五・五日となっている。これを月別にすると、前橋の七月、八月、九月に対し、熊谷も七月、八月、九月、東京は七月から十二月、宇都宮は七月、八月、水戸も七月、八月に多い。  
以上は過去六十年間の平均記録によるのであるが、本市の昭和四十二年の霧発生日数は七月、同四十三年は九月となつてゐる。

## 結 氷

前橋に結氷を見るのは、過去六十年間の平均では十一月二十三日、終日は四月六日となっている。

しかし記録によると、最も早かったのは大正六年の十一月六日、最もおそかったのは明治三十七年五月五日である。

年間の結氷日数は、昭和二十六年から三十五年までの

第26表 結 氷 (昭和43年)

月	結氷日数
1	30
2	27
3	12
4	0
5	0
6	0
7	0
8	0
9	0
10	0
11	2
12	8
計	79

十年間の調査によると年七〇・五日、昭和四十二年は八四日、同四十三年は表のとおり七九日となっている。

## 霜

前橋地方の霜は、例年十一月に入ると薄霜が降り、翌年四月または五月まで遅霜を見ることはある。

過去最も早かった結霜は、昭和十一年十月二十三日で、最もおそかったのは、明治三十五年の五月十三日であった。

前橋地方は、農村地帯で養生をするので、霜は早いよりもおそい霜、すなわち春の晩霜の時に被害が大き

い。  
昭和二十六年以降十年間の調査によると、前橋地方の年間の平均結霜日数は四四・四日、昭和四十二年は五三・〇日、同四十三年は三七日となっている。

## ひょう・あられ

前橋では、ひょうは三月から七、八月ごろに降ることが多く  
時によっては、これが農作物その他に大損害を与えるが、年間を通じて見るとその日数は極めて少ないほうである。

第27表 最近11年間の  
ひょう・あられ日数

年	ひょう	あられ
昭和33	—	—
34	2	—
35	—	—
36	—	2
37	1	1
38	1	1
39	—	—
40	—	1
41	3	1
42	1	—
43	2	—

第28表 日照時間

年 月	明治32		昭和2		昭和20		昭和23		昭和40		昭和42		昭和43			
	〃	43	〃	43	〃	43	〃	43	〃	43	〃	43	〃	43		
1	230.4 (75)	159.2 (52)	226.8 (73)	228.6 (74)	210.2 (68)	220.4 (72)	214.1 (70)	234.9 (76)	185.2 (61)	242.3 (80)	197.6 (65)	221.8 (73)	208.9 (66)	230.4 (76)	181.2 (60)	228.1 (73)
2	222.5 (60)	246.3 (67)	233.2 (60)	241.5 (65)	188.6 (51)	250.5 (68)	224.9 (61)	196.5 (53)	217.6 (55)	237.4 (60)	222.3 (57)	245.3 (62)	183.1 (47)	196.0 (50)	163.7 (42)	197.2 (50)
3	219.2 (50)	220.6 (51)	258.7 (59)	208.4 (48)	194.0 (45)	181.8 (42)	523.6 (58)	173.6 (40)	191.1 (44)	170.6 (39)	252.6 (58)	143.5 (33)	169.4 (39)	142.6 (33)	196.4 (45)	171.0 (39)
4	110.5 (25)	142.8 (32)	190.6 (43)	144.1 (32)	167.3 (38)	143.1 (32)	122.7 (28)	131.5 (30)	216.1 (52)	160.7 (38)	216.1 (52)	201.9 (48)	148.5 (36)	244.8 (59)	178.8 (43)	118.9 (28)
5	111.6 (30)	121.3 (33)	141.2 (38)	120.6 (35)	163.3 (44)	148.2 (40)	111.6 (30)	123.9 (33)	202.6 (58)	127.0 (37)	186.1 (54)	113.3 (38)	142.7 (41)	218.2 (63)	150.2 (43)	120.0 (34)
6	222.7 (73)	219.0 (72)	194.5 (64)	189.4 (62)	183.9 (60)	185.8 (61)	176.6 (58)	223.4 (73)	192.7 (64)	252.4 (84)	212.0 (71)	220.8 (74)	175.5 (59)	178.5 (60)	211.4 (70)	163.2 (54)
年	2,322.2 (52)	2,299.6 (52)	2,531.7 (57)	2,279.4 (51)	2,135.4 (48)	2,340.3 (53)	2,185.2 (49)	2,082.2 (47)								

(カッコ内日照率)

## 日照

前橋地方の、過去三十年間の日照の平均値は、年間の日照時間二、一〇九・八時間、日照率五〇%、不照日数五一・五日となっている。

これを近県各地と比較して見ると、熊谷の日照時間二二〇五時間、日照率五〇%、東京二〇一八時間四五%、宇都宮二〇四九時間四六%、水戸二一五時間四八%で何れも前橋より少ない。年間の快晴日数も前橋の六九・一日に對し、東京六一・八日、宇都宮六三・一日、水戸六六・六日であるから、これも前橋に晴天が多いことを物語っている。

なお本市における昭和四十二年の記録は、日照時間二二八五・二時間、日照率四九%、不照日数五二日、同四十三年は異状天候と言われ、日照時間二〇八二・二時間、日照率四七%、不照日数五七日であった。

## 地震

前橋には地震も余りない。地震計に記された地震の総数は、明治三十年以降四十四年までの十五年間の年平均回数四五回、明治四十五年から昭和七年までの二十一年間の年平均回数二四六回、昭和八年以降二十二年間の一カ年平均回数は六三二・二回になっているが、人体に感ずる有感地震は明治三十年以降六十年間の年平均回数

第29表 60年間の有感地震平均回数

月	平均回数
1	0.8
2	0.8
3	0.9
4	0.9
5	1.4
6	1.1
7	1.1
8	0.9
9	1.7
10	1.0
11	1.1
12	1.0
年	12.8

第30表 有感地震回数

年	昭和35				
	40	41	42	43	
1	0	2	3	3	3
2	1	2	1	2	0
3	0	0	0	3	0
4	1	2	7	0	0
5	2	1	5	1	3
6	2	0	9	1	1
7	0	1	3	1	3
8	0	0	7	2	2
9	0	8	4	2	1
10	2	1	6	1	1
11	7	2	2	6	1
12	2	0	2	0	0
年	17	19	49	22	17

一・二・八回で、これは一カ月にすると僅か一回位にしか当たらない。  
過去における記録を見ると、有感地震の一番多かったのは大正十二年九月一日の関東大地震で、この時は九月中に三七回を記録している。

これに次いで多かったのは、昭和六年九月二十一日の北埼玉を震央とする地震で、この時は有感地震二七回を数えている。昭和三十九年六月十六日の新潟地方の地震の際は、前橋地方でも相当強く感じられたが、この時の記録は一回であった。

過去六十年間の有感地震の年平均回数を月別にする上での表のとおりである。

また最近の回数を示すとこれも上の表のようになる。

参考文獻

前橋地方気象台の「群馬県気象年報」(1897-1956)並びに前橋台の「群馬県気象月報」及び気象台の「日本気象史」の、地震別月別年値(1931-1960)。

## 第二編 古代上

### 序 章

#### 一、前橋の地

前橋市は群馬県の南半部の中央にあつて、東西一八・〇キロ、南北一九・三キロの広い範囲を占め、その中央を北から南にかけて利根川が流れている。昭和二十九年からの町村合併によつて、旧前橋市に勢多郡南橋村、芳賀村、桂野村、木郷村、荒砥村、上川瀬村、下川瀬村と、佐波郡上陽村の一部と、群馬郡郷社町、清里村、元郷社村、東村などのほか、同郡新高尾村の一部を包括したものである。「延喜式」(平安時代の「記載の郡名によれば、勢多郡、群馬郡、那波郡にまたがっている)のであり、これらの郡界も現在までに変遷しているので、上川瀬、下川瀬両村は旧前橋町とともに、東群馬郡と称した時もある。利根川もとは勢多郡と群馬、那波両郡との間を東南方に流れていたのである。

これらの広い範囲にあつて、勢多郡に属した地域は赤城山南麓の緩傾斜地帯の西半部と、その裾部を削つていた利根川の旧流路の沖積地帯にあつている。群馬郡と那波郡に属した地域は洪積地帯の平坦な地で、その西方は榛名山の裾部に近い。北に赤城山を、西に榛名山を仰ぎ、その間で利根川が吾妻川を合わせて関東平野に流れ

出したその地帯を占めているのであって、この前橋市の地から関東平野は東南に展開しているのである。

利根川は前橋市からはほぼ東南方向に流れて、関東平野を斜めに横切り、太平洋にそそいでいる。赤城山から東方には山が連なり、北部山岳地帯の高嶺を隔て、関東平野の北に屏立しており、榛名山の南方の諸山も関東平野の西を限っている。関東平野は北と西が山脈、東と南が太平洋ではほぼ方形であり、その対角線を利根川が流れているのである。この山脈の基部には東西、南北に交通路が推定され、利根川の水路とあわせて、前橋市は古くから東上州における交通の要として考えられる地である。

また、前橋市の地は本州の吾妻山脈を北から掃いて、関東平野にとりつくところに位置している。新島県からは清水峠、三國峠を越え、福島県からは尾瀬を抜けて、利根川沿いに沼田市で合し、それが赤城、子持の両山の間に縫って南下したところが前橋市である。この道は茨川市のところで、長野県から島原峠を越えて、吾妻川沿いに下る西方との通路を合わせている。前橋市からは南に、関東地方の西部の山脈の麓を伝って埼玉、東京の両都県にいたり、東に関東地方の北部の山脈の根に沿って、栃木県を経て茨城県にいたる。なお、利根川は関東平野を斜めに流れて舟運の便もあつた。前橋市はこのように交通路の要地にあつていて、太平洋と日本海との中央に位置し、しかも日本列島のはば中央である。

ところで、日本の国土は、現在東経二八度から同一四八度まで、北緯二五度から四六度までの間に、東北から西南にかけて、斜めに細長く連なっている島国である。狭い島国ではあるけれども、東北と西南との両端部では、気候に非常なちがひがあり、それにつれて風土に差がある。その中間の地方でも、地形、気候、潮流等によつて、それぞれ多少の特色をもっている。それゆゑ生活の条件がちがっているのである。すなわち先ずこれらの

条件にもとづいて古代の生活を考えていかなければならない。

## 二、旧石器期の前橋

古代と言っても、さかのぼることのできる限度をきめてかからねばならない。そこで、ここでは、人が生活した痕跡が認められるところまでとし、その痕跡にしたがつて記述することにした。その痕跡は遺跡や遺物から知ることができるので、それによつて生活を推定していくのである。痕跡がないからといって、全く人が住んでいなかったというわけではない。人が住んだか、住まなかったかということについてのよりどころがないだけである。

群馬県では、さきに日本で最初の旧石器が発見され、従来、人類が住んでいなかった、住むことができなかったと言われていた関東ローム層の中から、人類が住んだ痕跡が発見された。本県の相沢忠雄氏が新田郡等郷村大字岩宿で発見したもので、この石器を含む一連の文化を、相沢氏がその後の研究によつて体系化した。このこともまた日本で最初の試みなのである。これを岩宿文化と称している。この時期を無土器文化(土器を伴わない石、先土器文化) (文化の意)、プレ縄文化(縄文化より前の文化の意) などとよばれている。

この岩宿文化に属する遺跡は勢多郡宮城村大字苗ヶ島字辨形、同郡大胡町茂木字三ツ屋からも発見された。宮城村も大胡町も本市に隣接した赤城山南麓地帯を占める町村であるので、本市にも旧石器が出土するであろうし、遺跡が存在しないことはなからうと考えられるが、まだ発見されてはいない。本市でも旧芳賀村や旧桂野村

などの同じような地理的条件のところでは、発見される可能性はあろう。この旧石器の発見と研究との結果、従来、日本の文化は新石器以降とされてきたのが、旧石器までさかのぼることができるようになった。しかし、市内には未発見なのである。

### 三、縄文期の前橋

石器のみの使用は岩宿文化のところである。石器に土器が加わって、日常生活が営まれるようになる、生活は一大発展をしたことになる。この変化はきわめて大きくとりあげらるべきであろう。

相沢忠洋氏の旧石器の発見も、ローム層中に人工の加わった石器があったことと、その石器が土器を伴っていないからと云って直ちに旧石器と断定することはできない。伴出した土器と地層上によらねばならない。相沢氏も土器を伴う石器の研究から土器を伴わない石器へと、その探求を進めたのである。したがって、土器のうち最も古いものを求め、かつ石器の工法に着目して、その発展を知り得た上での研究である。

土器は最初に注目されたものは縄文がつけられていた。そこで縄文土器と名づけられたのである。しかし、調査が進むに従って、縄文を着けないもの、縄文を磨り消したものが発見されてきたが、総括して、この時期のものを縄文土器と呼んでいるのである。

縄文文化期になると、岩宿文化と異なつて、土器が加わつたばかりでなく、住居跡がたしかめられてきた。生活の中心である住居を知ることができてきたことは、生活をかなり具体的に推定するいとぐちが見出されることで、その社会的な生活もうかがうことができ、歴史的な考察が加えられるのである。しかし、社会的な生活といつても、はじめは少数の集団であつて、次第に村落をつくつたものであろうが、土器の文様や製作法などに、広い範囲での共通点や変化が見出されるので、集団間の緊密な交渉も考えられてくる。

土器の発生については、まだはっきりしたことは考えられてはいない。自生か継受かの区別もつけられてはいない。縄文文化期の中ごろのものに、中国の殷の時代の銅器の文様に類似した彫刻文がわが国でも発見されており、銅器の文様の影響を受けたようにも思われる。その他脚台付の土器、コップ型土器など、大陸文化の影響と見られるものもあるので、大陸からの文化の継受が考えられ、あるいは土器の発生も大陸からの継受と見ることが出来るようである。

土器を使用するに至つたことは典型的なことであり、これにより煮沸や貯蔵という生活上の営みも、一層発展したことであろう。その上、住居跡があることは、家を造つていたことがたしかであり、「冬は穴に宿、夏は棚に住む」ということが、未開人の生活のよりに考えられている点からすれば、これは格別の文化の発展を示すもので、縄文文化期には、いわゆる未開人の生活をすでに脱していたものと言わねばならない。また、この時期のものと思われる土器を出土する住居跡が隣接して発見されることもあるが、これは、集団生活をしてきたこととも考えられるであろう。その早期のころのものとしては、本県ではまだ調査されていないが、前期といわれるころになると、集団的な傾向が認められるようである。この傾向は次第に村落に発展するのであるから、やがてこれらを統率するもの出現も推定される。

石器、土器、住居跡にはおのおの種類が多い。それぞれにそれらの傾向にしたがって分類し、発掘の跡をたどることが出来る。同じ傾向が長く続いたこともあるし、短日月の間に消滅したものもある。同じ傾向が各発掘段階で、同じ年数継続していたとは言えない。石器の変化は短い間に急に起こることはあり得なかつたと推定はできて、土器の変化はそれに較べて急速に進歩したことであろう。現在では、土器を早、前、中、後、晩の五期にわけて、その傾向の期間を一、〇〇〇年ぐらいに当てている。この一期間のうち、早期を除いて、大体五期式の変化を認めている。ただし、この推定ができたのは、縄文文化の研究が進んでいる南関東地帯のことであつて、本県ではまだこのような研究にまでいたつていない。前述のように四方からの影響も考えられる上に、特殊な形式のものも発見される。南関東の傾向に準じて考えられているが、早くこの地方のみの変化の系列を造りあげることが必要である。

縄文土器が使用されたのは七、〇〇〇年ぐらゐの間と見られている。この長い期間には気候の変化もあつたと考えられる。赤城山の中腹の標高六〇〇呎（大胡町金丸）のところまでは、縄文土器の早期及び前期といわれるものが発見され、住居跡も発掘調査されている。中期のものはそれよりややさがり、後期になると最も高いところで二五〇呎である。これがし気候との関係として見られるならば、早、前期のころは気温が全般的に高く、後期になると、山の高気には任みにくくなつたとも見られよう。しかし、晩期のものになると、一五〇呎以上のところにはほとんど見当たらぬし、一般に出土地も稀であり、出土物も少ない。人口の移動・過疎化が考えられる。

本市での縄文文化の遺跡地は、赤城山麓地帯に集中している。その地帯で現在記録されている遺跡数は、早期五箇所、前期三箇所、中期五箇所、後期四三箇所、晩期五箇所である。中期、後期が著しく多く、前期がこれに次ぎ、早期、晩期は少ない。中期、後期は器型も大きく、器内も厚いので注目され易いが、早期は薄く、小破片が多いので目立たないことにも関係があらう。しかし、晩期は稀である。人口が中期、後期にくらべてずつと種薄になつたためであらうか。それにしても余りにその差が大であり、他の文化期と併存していたものである。人口が大差なかつたとしたならば、後期と併存していたか、あるいは次の弥生文化と併存していたことにもなる。

#### 四、弥生期の前橋

石器と土器との使用は、土器の形式が変わつても続いたのである。西の方北九州で新形式の土器が起り、銅器の使用と米作とが同時に発生したと見られているが、この西の弥生文化といわれる新文化が東に伝へられてきた。そして、先ず弥生土器が東国地方に入つてきたが、銅器と米作はこれより遅れたものようである。

銅器は弥生文化の一条件のように言われているが、本県ではいわゆる銅器がまだ発見されておらず、銅器らしいものすら弥生遺跡からは伴出してない。土器は一般的に作り得るものであるが、銅器は既製品を持ち込まない以上、原料を求めることからは伴出しなければならない。銅剣に似た石製の剣は発見されているが、銅製品は堅穴式古墳から発見の銅剣にはじまる。ところが、弥生文化の末期の遺跡と考えられる水沼住居跡（新橋村）からは、その床面に鉄製の破片があり、砥石も同時に出土して、かえつて鉄製の刃物が使われていたことが推定

される。この弥生土器は樽式土器と言われるものであるが、同じ樽式土器であっても、その古い形式と見られるものが出土した有笠洞遺跡(古野町)では、大型な半磨製石斧が伴出した。

弥生文化では一般に農耕が行なわれていたとされている。樽式土器には櫛目の波状文と夔状文が着けられているが、この文様をもった土器類は本県では西部や北部の山間部に分布しているのであって、東部の平地には極めて稀である。山間地の住居跡発見例も、はたしてこのようなところで、農耕すなわち米作が行なわれたか疑がわしいような地である。米作には適地と水と、その上気候が関係してくる。弥生土器と米作とが同時に北九州に発生しても、その二者がいっしょに東國に移ってきたものときめてしまえないのはこのためである。土器は運搬も自由だし、どこでも製作することができるが、米作はいつ、どこでもと言うわけにはいかない。静岡の登呂遺跡からは櫛目文の土器が出土しており、水田の遺跡も発見され、米作が行なわれていたものであるが、東海地方では可能であっても、中部山地——本県地方で可能であるとは言えないであろう。

樽式土器はその系統が長野県のものと同様しているようである。東海地方から中部山地帯に入って、米作を伴っていたものであろうか。本県の西部に入るまで、米作と離れて移動してきたものではなからうか。有笠洞窟の住居跡からは、おびただしい骸骨が出土しており、とっくり穴遺跡(古野町)でも骸骨が認められた。これらの周囲には到底水田耕作をする余地もないし、気候も寒冷地帯である。水沼遺跡では、靱皮をもった土器の底面が発見されており、靱皮も伴出した。靱皮はいわゆる蒸器である。この甑と埴型土器、片口型土器等はその製作の面から見て、土師器的な要素があり、土師器に直接先行するものと思われる。すなわちこの遺跡は農耕とのある程度の接触があつたのではなからうか。

このように弥生土器使用の遺跡であっても、一般に考えられている条件にあわないものが多い。その社会状態や社会的階層を知ることには非常に困難と言わねばならない。

## 五、石田川式土器と前編

樽式土器の使用が終わるころに浅間山が噴火して、浮石を平埴部一円に降らしたようである。その層が本市には数カ所発見されて、層下から樽式土器使用の住居跡と土師器の最も古い形式である石田川式土器とが別個の場所から発見され、層上には直接古墳が置かれ、その古墳の墳頂には石田川式土器が配列されているという弥生遺跡と石田川式土器と古墳との関連を証明する好資料が見出された。

この関連からすれば、樽式土器使用の住居が廃棄されて、まだ埋没しきれないところに、浮石層が堆積したのであり、その浮石層が汚染されないうちに古墳が造られたのであり、石田川式土器が使用されている間に浮石層が堆積したことになる。この浮石層によって弥生文化と古墳文化との時代がはつきり区別がつき、土師器は古墳築造よりもやや先に、この地方に伝えられてきたものであることが知られる。

右の浮石は浅間山噴火のもので、地学ではCスコーリアとよばれているものである。このCスコーリアは水沼遺跡でも発見されたものであり、浅間山噴出であることは地学研究の諸氏のすでに認めているところであるが、その噴出年代は一世紀ないし五世紀といわれて、明確でなかった。そこで従来土師器及び古墳の研究から追いつけて、かつ弥生文化の下限をも勘案して、浮石堆積の時を四世紀始めころと推定されたのである。

そこで、土師器の最も古い形式と考えられている石田川式土器は四世紀始めころより前に発生していることになる。この土器は昭和二十七年に太田市大字米沢の石田川沿岸で発見されたものから始まる。(本井新次・松島榮一)「研究」石田川式その後、関東の平坦地域で、各所に発見されたが、純粹の形式で多量に出土したのは石田川流域のみである。それが四世紀以前にこの地方に入っていたことになるのであって、前橋市内の洪積台地に発見されていることは、すでにこのように発展した土器を使用した人々が住んでいたことになる。

土師器は弥生土器の延長といわれていた。石田川式土器の先駆と見られる土器も、高崎市下佐野町や、伊勢崎市等多野に出土しているが、これは石田川式土器のように、本県内でも、利根川及び海川沿岸各所に見られるもので、古墳の最も古い形式と考えられている大志寺古墳(高崎市)、小谷場小古墳(太田市)などの石塚の縁と同高の層の面からもすでに発見され、横穴式古墳の設置面より下層からも見出されている。玉村町からは竪穴式古墳の墳丘を利用した横穴式古墳のその旧墳丘の下から、石田川式土器使用の住居跡も発見されている。この石田川式土器は、従来の弥生式土器である樽式土器とはもちろん異なり、樽式土器よりも古い形式といわれる高崎市荒見町出土土器、吾妻郡鷹之巣河原出土土器、群馬郡倉瀬村土ノ久保出土土器、勢多郡大田町金丸出土土器、本市荒川町前原出土土器などの系統とも言えない。全くこの地方では新しいものである。その石田川式土器発見のころには、この種の土器はあまり知られていなかった。奈良県桜井市の茶臼山古墳の墳頂に同種の土器が配列されていて、その発見で一躍注目されるようになったのである。

本市では後閑町の団地造成工事に際し、浮石層下から発見されており、それ以前に、朝倉町の古墳(後閑町)の墳丘上で認められ、昭和四十三年には前橋・後閑天神山古墳で、墳頂面の配列が調査された。この土器の発見は多くが古墳と関係ある地域であり、太田市の石田川のみが古墳からやや離れた低湿地の岸辺で発見されている。また、古墳自体も古いものは平坦地の河川の沿岸や低湿地の周辺に多く、ことに川の合流点付近の溺水池の縁辺に分布しているの、このような地帯に、まず石田川式土器使用の人々が住みついて、やがて古墳を築造したように思える。

この川の合流点付近の溺水池の周辺は、初期の米作には最も格好の地と考えられる。春先の増水期になると、支流の水は本流に呑み切れないで溺水池にたまる。落水期になれば溺水池は次第に乾上がるのである。この期間には、米作の灌漑と同じ現象を呈するのであり、自然灌漑と見られる。このような地に石田川式土器が発見されているのである。

樽式土器やそれより古いと考えられる他の弥生土器の大部分が山岡地に発見され、米作の不可能と思われる地帯に多いのに対し、平坦地の低湿地付近に石田川式土器が認められることは、この地帯の米作はこの石田川式土器とともに入り込んだできたように考えられる。もし西方から来たものとするならば、柳目文をもった弥生土器が長野県を通過してきて、群馬県の西部から北部の山岡地に分布している間に、この弥生土器を飛び越えて、土師器である石田川式土器が移ってきたものであり、それが平坦地に広まって、弥生土器の分布をはばんだかの感があるので、この土器の分布地帯には、古墳の前身と見られる小石塚が発見されている。これらは墳丘をもたないもので、地下に埋設されている。土器の分布面から掘り込んで構築されており、墳丘をもつ古墳の石塚と同様な構築法に よっている。土器と同じ時期のものと思われる。これらの上にはやがて墳丘をもった竪穴式古墳、次いで横穴式古墳が造られ死屍の埋葬地帯が設定されていったようである。

この土器が米作を伴ってきたものと推定されているのであるが、そうなるに耕作地が重要視されてくる。米作の可能な地を多く占有することが起こり、財力や権力の基準になる。それらは、その財力、権力によって造った古墳の大小により知り得られるのであり、ここに支配層の発生が推定される。しかし、本県においては、大古墳の発生が石田川式土器発生後あまり時を経ていないように思われるので、すでに先兵としての移住者が石田川式土器、あるいはその先行の土器をもって徐々に入っていたところへ、大古墳の構築能力者が多数の人を引き連れて、大挙して移住してきたように見える。したがって、石田川式土器はその純粋性を保って分布して行った。弥生土器に縄文をつけたものがあり、形も縄文のものがあるのと比べて、石田川式土器はその形のまま使用されたようであり、太田市牛沢の棚子塚古墳墳頂からは、この土器を真似た埴輪等が出土しており、太田市鶴山古墳の墳丘からは、この種の土器の器形が発見されている。土器器発展上のこの後の形は、須恵器の影響のあるまで、この系統に属しているのである。

## 六、古墳と前橋

古墳はその墳丘の型から見て、円墳、前方後円墳、方墳、前方後方墳などに分けられる。円墳は古墳築造の期間中始めから終わりまで造られていた型であり、最も一般的なものである。前方後円墳は円墳の前に平面台形の墳丘をつけたものと見られており、円墳に次いで、この地帯では始めから造られ、数が多く、大古墳が多い。方墳は方形の平面をもっている截頭角錐状のもので、小型のものは平面形に比べて低く台状をしているものがあり、この小型のものはかなり古くから造られている。しかし、大型のものは数が少なく、古墳の末期にあらわれている。前方後方墳は前方後円墳のように方墳の前に前方部をつけたもので、木市朝倉町の八幡山古墳のように、口本最大の前方後方墳もある。これは五世紀ごろの築造と見られているが、数は極めて稀である。

また、古墳は、その内部構造からは、竪穴式、横穴式の両古墳に区別される。竪穴式古墳は竪穴を掘って、そのうちに粘土椀、石椀などを造り込んで、土をかぶせたものであり、横穴式古墳は石室に外部に通じる出入路をつけて、これに土を盛り、墳丘の形をととのえたもので、墳丘の掘部に開口しているものである。竪穴式古墳には墳丘のあるものと、これを欠いたものがあるが、その内部構造の類似によって、墳丘を欠いていても、古墳として取扱われており、なお、横穴式古墳と同じころのものに、崖に横穴を掘り込んだものもあるが、本市内にはまだ発見されておらず、恐らく、存在していないものと思われる。

墳丘をもった古墳で最も古いものは、竪穴式古墳の粘土椀である。後関天神山古墳は前方後円墳で、朝倉Ⅱ号古墳は円墳で、ともに粘土椀をもっていた。後関天神山古墳は現在発掘調査されているものの中最も古いものと推定され、浅湖山の浮石層上にあり、石田川式土器を墳頂面に配列してあった。これに反し最も新しいものは横穴式の総社町の蛇天山古墳である。これは截石で磨きをかけられた石室をもっている。大体、竪穴式古墳は六世紀終わりごろまで、横穴式古墳は六世紀中ごろからで、本県古墳築造の期間は、全部を通して四世紀中ごろから八世紀中ごろの約四〇〇年間と考えられる。

この四〇〇年間のうち、竪穴式古墳の築造期間は約二五〇年で、一墓穴に一屍体を納めていたが、墳丘をもた

ないものが多かつたようである。その上、内部構造を特に造らないで素掘り直竊というものがあつたと見られる。このような埋葬法では発見しにくいので、ただ推定するだけである。大化改新のころ（七世紀中ごろ）でさえ、その頃のうちに「庶民亡むる時は、地に躬め埋めよ」とあり、「封かすして平ならしめよ」ともあつて、素掘りで墳丘を盛りあげないものが続いていたものであろう。しかし、横穴式古墳になると、一石室に多数を納入することになつてくるのであつて、竪穴式古墳の内部構造での一穴一体を、その後は一石室にまとめて埋葬したように思われる例もある。これは大体最初に石室を造つて、順次納入したもののようである。

古墳から当時の社会を見る場合には、すでに階層が存在していたことを前提としなければならぬ。米作を伴つた土器の発生とあまり時間差がなく古墳が造られていたからである。この意味からすれば、弥生土器使用の間ですでに階層が起つていたことにならう。しかし、本県ではそのような状態はまだはっきりしない。

古墳は、本県で自生したものであるまい。古墳の発生していた地域から継受したものであらう。それは近畿地方から伝わつたものと考えられる。すでに円墳や前方後円墳が成立していた地域から移されたものであらう。これによつて急に大前方後円墳が出現したのであるから、それには有力な豪族が多数の人員を率ひて移動してきて、その集団の習慣をこの地帯に植えつけて、繁栄させたものと見られる。先住の人々の風俗習慣に改変されたり、圧倒されることなく、築造されたものであらう。

古墳は言うまでもなく墳墓であるから、保守的なものと考えられる。これを改変することは精神的な面までの改造が必要とされる。もし、その改造がなされないならば、先住者はその習慣を固執するであらうし、外観は新形式を採用するとしても、内部構造は従來のしきたりを踏襲するであらう。それが新形式で、先遣地帯のそのまゝの受容であるならば、この地帯の旧習によつたものとは言えない。本市の後園天神山古墳も朝倉Ⅱ号古墳も本県最古の古墳と考えられるものであり、いずれも粘土槨で、先遣地帯のものをそのまま受容したと見られる。やがて白石稲荷山古墳の槨部（石槨部）や鶴山古墳の石槨があらわれる。これらは近畿地方のいわゆる竪穴式石室とは異なつたものであり、鶴山古墳の石槨の如きは箱式石棺の系統のもので、後園天神山古墳に比べて、かなり時代のさがつたものと考えられ、ともに五世紀終わり乃至六世紀始めごろの築造と見られる。すなわち、白石、鶴山、阿古墳は、ともにこの地の旧習を加味した築造ではなからうか。

横穴式古墳でも、継受の型は合葬用のものであつたと推定されるが、現在発見されているもので、竪穴式古墳の単独葬の習慣を受けた単独葬用の石室は、合葬用の石室の広さの二分の一となつてゐる。長さ等はしいが、幅が二分の一なのである。すなわち、この単独葬用の石室の埋葬部の長さも幅は、竪穴式石槨の寸法とはほぼ等しくなつてゐる。保守性のあらわれと見られる。しかし、石室入口の構造は、本県にあっては近畿地方と同じであるが、埼玉県の荒川以南及び行田市から栃木県の栃木市を結ぶ線より東側では、横穴の入口の構造に似てゐる。横穴の構築の影響のように思われる。このような意に新文化の移植と旧習との接合が、その移植の速度と実施力とにより表現が異なつてゐることが知られる。これらの点から見れば、本県への古墳の移植は、すでに前住地において階層化の行なわれていた集団が、大勢力を以て移住してきたものと見られる。もちろんこの大集団の先行者としてすでに多少の移住があつたであらう。ただし、古墳文化をもつた集団の移動は漸進的に行なわれたものではなく、近畿地方から一挙に群馬の地に移つたものと考えられる。近畿地方の大豪族が隴西をあげて移住してきたものであらう。

本市には、かつて古墳が至るところに見出された。そのうち特に密集しているものを古墳群とよんでいる。利根川の旧津路の沿岸及び赤城山麓地域は、その密集の度が大である。これらの古墳群は、一期に成立したものはない。古墳の発生期から徐々に造られて、遂に密集したのであって、その内容も竪穴式、横穴式の別のみならず、外形もあわせて大小多種多様である。ことに横穴式古墳になると、その構築上、墳丘を必ずもっているのに注目され易く、急激に墳墓が増加したように見えるがその実は、竪穴式系の墳墓の多数を一穴にまとめた形であるので、大古墳構築能力が増したものと見ることは早計であろう。

これらの古墳群内には大小、各種の内容が含まれているのであって、大は小よりも階層の上位のもの墳墓と一応考えられよう。この大古墳もその周囲の小古墳にあわせてはじめて権力、財力の象徴として見る事ができるのであって、この点からその古墳群地帯に権威を張っていた大豪族の墳墓と見ることが可能となる。本県にはこの種の古墳群乃至大古墳が各所に存在しているのであって、これを一系の豪族の墳墓とすることにについては疑問が起る。各古墳群について、その地の豪族を考えて見る必要がある。

## 七、地方豪族と前編

『日本書紀』(わが國最初の歴史)には、崇神天皇の四十八年に、皇子豊城入彦命が東國を治めることを命ぜられたとあって、その注に豊城入彦命は上毛野君、下毛野君の始祖であると記してある。同書の景行天皇五十五年には、彦狭尾王(彦狭尾王)東山道十五國都督としたが、王は途中で病死し、東國の人々が上野國に葬つたとある。同じ五

十六年の条には彦狭尾王の子御評別王が東國を治め、その子孫が繁栄していると書いている。これらの記事は上毛野君の伝承によったものであろうが、豊城入彦命にしても、彦狭尾王、御評別王にしても、その名はいずれも七世紀ごろの作成とみられるのであって、実在の人物としては摸えないものである。なお、崇神天皇四十八年は西暦前五〇年、景行天皇五十五年は同一二五年にあたる。

この『日本書紀』の皇子の東行の記事は、年代から見てもはるかに差のあることであって、土師器や古墳からの推定年代とは合致しない。特定の人物が天皇の命によって一世紀あるいは二世紀ごろにこの地に来たと考えることはできないが、上毛野君には、その祖先達が近畿地方から多数移住してきたという伝承があったのではなからうか。それが七世紀始めごろから系図や歴史書が作られるようになって、祖先の名が求められ、作り出されたものと見られる。

日本の歴史も七世紀の始めごろからはかなりはっきりしている。それさえも聖徳太子の事については七世紀の終わりがさうでできた伝説化された伝記から採用された部分が多く、事実を記しているとは言えない点が認められる。ましてそれ以前の事については神話化され、伝説化されたものが多いのであって、欽明天皇の紀でさえ、百済の歴史書からとったものが多い。どこまでを史実として見てよいかは、一々について検討しなければならぬ。

上毛野の地方について記されている部分はきわめて少ない。上野野君についても天皇の側近にあつたような書きぶりであり、上毛野地方に住んでいたと見えるのは、安閑天皇紀にある上毛野君小嶋についてだけである。上毛野地方には大小の古墳が八千五百基も調査されているのであり、大豪族が住んでいたことは推定されるけれど



毛野君は、毛野の地方が大君の朝廷の組織に入れられ、國を稱するようになると、その支配者として國忌になつたはずである。それ以後上毛野君というのは氏族の尊称となつたのであろう。

このようなわけで、七世紀の始めからは、特定の個人にはあてはまらないが、上毛野君というようなすずで氏族の名となつていたものと古墳とをあわせて考えることができるのであり、六世紀の後半にもしてさかのぼることができよう。それゆゑ、七世紀以後はすずである歴史書によつて、多少の批判を加えながら歴史を書くことができようが、それ以前については全く古墳やその地の考古学の研究結果などを資料として、社会状態を推定していかなければならない。

そこで以下考古学の研究結果をまとめながら、社会状態を述べ、文献にあるものをこれに加えながら、社会の發展、やがて政治上の問題に触れて、大宝律令によつて確立する国司政治に及ぼすことにする。

## 第一章 古代人の生活

### 石器と土器との使用

#### 序 節

古代人の生活というと石器と土器とがすぐ浮かんで来るが、石器と土器とを使用した生活といっても、食物を

得るための石器や、これをいれる器があつたのであるから、一般に考えられているように、生血を吸つていたのもなく、年中、裸でいたわけでもない。『日本書紀』の景行天皇四十年の条には、「其の東の夷（蝦夷）の中に、蝦夷（蝦夷）は是尤（是）た強し。……冬は穴に宿（宿）、夏は磯（磯）に住む。毛を衣（衣）き血を飲（飲）みて、……山に登ること飛ぶ鳥（鳥）の如く、草を行（行）ること走（走）ぐる獸（獸）の如し」などと記している。「東夷」と「蝦夷」とに書き分けてあるが、夷も蝦夷も、また別に毛人とも書いてあるが、いずれも「えみし」と訓んで、同じものを指しているのである。

景行天皇四十年というのは、『日本書紀』の年代の立てかたから見ると、西暦一〇年にあたるので、その編修者は、八世紀のはじめごろに、それから六〇〇年前のことを、右のように想像して書いたのであろうが、そのころには、実際はこの地方でもすずで弥生文化が傳播していたと見られるのである。もはや、獸や鳥と同じような生活ではあり得なかつたのであつて、さらにそのころよりもはるかに古い七、〇〇〇年前ごろには、人の智慧の發展に応じて工夫された家に住んでいたと見られ、裸で土器を作っている画が教科書にさええのせられたことがあつたが、寒さを防ぐことも知っていたらうし、衣類も考えられてきていた。

石器というのは、生活用具として利用された石なのである。それには未加工のもの、加工されたものがある。刃物として使われることが生活上は最高の利用であり、石は大部分が刃物に作られているので、石器と言へば多くの場合刃物と見られている。しかし、刃物でなく利用されているものももちろんある。

石器では石斧といわれるものが最も一般的であり、形は色々変化しているが、石器のはじめころから終わりまで使用されていた。次に石鏃が長い間使用され、その他石鏃、石匙、石剣など刃物に類するものである。石斧はその名のように斧として使われたと言われていたが、最近は鏃として用いられたという説も出てきた。斧とし

ての使用は、そのまま樹木を切斷できたでもあろうし、大木は焼き焦がして、炭の部分を削り落としたこともあろう。大型の薄刃のものは薪のように用いられることも可能である。石鏃は篠竹につけて使用されたが、小さなもので猛獸を射とめることは困難であらう。これには「とりかぶ」という種の根をすって、毒矢として用いられたといわれている。この毒を「ぶす」というのである。石鏃には大型のものは手鎧に、小型のものは投鎧に用いられたかも知れない。石鏃は肉はぎであると言われている。石剣は剣を模したものであるが、はたして刃物として使用されたかどうかは不明であり、むしろ、一種の權威の象徴的なものではなかつたらうか。

このほか、石器には石鏃、石皿、蜂巣石、凹石、叩石、磨石などがある。石鏃は小型のものは穀粒や木の実を粉末にするために用いられたと見られるが、大型のものには巨大なものがあり、これも權威の象徴物であらう。石皿は粉末にするための容器、蜂巣石は発火用具、その他それぞれの用途があつたものであろう。このうち大型の石鏃は石剣と同様に石器使用の終わりごろに出現するもので、そのころには權威を示す必要が起つていたものとみえる。

石器は土で器を造り、これを焼いて仕上げたものである。はじめは尖り底であつたが、縄文文化の前期からは平底となつた。平底のはじめごろのものには、胎土に纖維を入れたものがある。その後のものはたいい紐作りになされ、捲き上げや積み上げの方法で、紐状にした土を積み重ねて形を造つたものである。これらの石器の表面には山型や穀粒状の型を押したり、捲り糸状をつけたり窪の先で引掻いたり、糸を入れたり、籐竹を割って筋を引いたり、その先を逆にして爪型を置いたりしたのから、粘土の研をはりつけたもの、貝殻の縁で傷をつけたものなど各種の方法で模様をつけている。しかし、總体的に縄文がつけてあり、紐を捲り合わせたものを器面に

ころがして、整形した結果とされている。後期からはその縄文を部分的にすり消して模様を表現したものが出て来た。

石器の形をはじめは深鉢型であつたが、腰型が起り、壺型が加わり、浅鉢型、皿型、埴型などが次第にでき、後期には現在の土瓶のような注口土器と云われるものまでも出来て、器種はますます多様になつてきた。同じ基本型でも、口縁部のデザインの變化や模様の置き方などによつて、さらに複雑になつていく。これらを分類して、その製作の発展に従つて新百の順序をつけて、それにおおよその年代をあてたものが考え出された。これを土器の編年というのである。縄文土器の編年は、南関東地帯では早くから調査研究が進んでいて、大成され、東北地方でもほほ出上がついて、長野県でも縄文文化の研究は近年著しい發展をした。本県では、滝沢遺跡のように早く学術的に調査されたものがあるが、その後の調査が停滞して、まだ、この地方のもの編年をするまでに至つていない。目下は南関東の編年を基準として、発掘調査に努力されている。よつて、本県では細分類された編年によらずに、早、前、中、後、晩の五期の区分が取り扱つていくことになつた。

弥生土器については、土久保(群馬県)、有笠山(群馬県)、上人見(群馬県)、藤之果湖窟(群馬県)、藤之果湖窟(群馬県)、前原(本市)、龍見町(群馬県)、福(群馬県)、などの遺跡からも発見されている。このうち飯野遺跡を除いて、ほとんど平坦地の西北周辺から西部の山地にかけての分布であり、有笠山及び前原の二遺跡以外では住居跡の発掘調査がなされてない。龍見町、福の両遺跡は平坦で、烏川の左岸の台地上であり、前原遺跡は赤城山南麓の緩傾斜の裾野で、龍見川の左岸に位置している。水田耕作との関係も考えられるが、飯野遺跡は利根川本流の河川敷地帯とも見ら

れる低地である。上人見遺跡は藤水川の左岸の台地、金丸遺跡は標高六〇〇呎の赤城山の中腹、上ノ久保遺跡は烏川上流の溪谷上の台地、鷹ノ巣及び有努山の河遺跡は吾妻部の奥の岩山の山頂に近い洞窟である。これらの遺跡の解釈についてはむづかしく、一概に水田耕作を基盤にして解決することはできない。竜見町、幅及び飯野等の遺跡については南関東との関係も考えねばならない。

弥生文化に入っても、石器は土器とともに使用されていたようである。有笠山遺跡からは槍刃状の半磨製の巨大な石斧が二個出土して、石器の使用が裏付けられる。この有笠山遺跡の土器は埴形土器や埴形、片口型などがあり、この組み合わせは幡遺跡や水沼遺跡などとやや似ているが、埴形土器は縄文文化的であり、口縁部に縄文がつけてあり、胴部には櫛目で装飾が施されて、縦線で区画され、そこに横に波状文が置かれている。縄文土器の影響が強い。小形の埴形土器には全面に縄文がつけられた。埴形土器の先駆として見られよう。

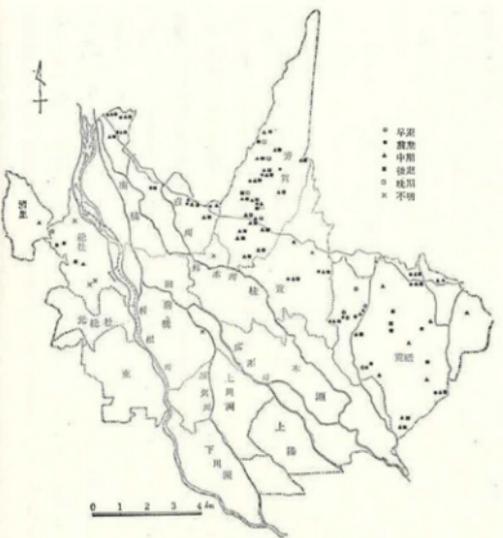
水沼遺跡からは棒状の鉄器や磁石が出ており、石器は全く見当たらず、すでに鉄器使用になったようである。また、土製の紡錘車が発見されている。土器には二種が認められ長頸の壺型土器、頸部がゆるい曲線状であり、赤じまりのない埴形土器、脚付の壺型土器等の櫛目文付のもの、埴形(あるいは埴形、片口型などの無文、赤焼きの土器に似たものである。これらの土器の組み合わせは剣崎遺跡(碓氷町)の土器に似ているが、長頸壺型、埴形、片口型などの土器は幡遺跡の組み合わせに通じる。この埴形及び片口型の土器は幡遺跡のは他の土器類と同じ焼きを示しているが、剣崎及び水沼河遺跡の焼き方は櫛目文のあるものとは全く異なっている。むしろ、土師製のと見た方が妥当である。すなわち、これから総合して見ると、水沼遺跡は弥生文化の最末期の様相を示すものと評せよう。

この水沼遺跡は埴形と名された勢多郡赤城村大字佛の遺跡と類似しているものであって、埴形土器を使用する住居跡のうちで、発掘調査された最も典型的なものである。この土器に付けられた櫛目文には、胴部一杯につけられた波状文、頸部にめぐらされた棒状文が特長であり、他の地域で出土したものも、この文様によって判別されている。これに土師製のもの加わっているものであり、あるいは石田川式土器と併行していたものではないか。

水沼の使用も考えられないことはない。ことに弥生文化のころには、静岡市の登呂遺跡や同県の狩野川地帯の遺跡及び千葉県製の遺跡からは、多数のまた多種類の水器が発見されているので、群馬でも発見されていはずであるが、まだ水器として確定にきめることのできるようなものが、出ていない。本市に近い高崎市の井野から、昭和二十八年に、加工された木片を埴形土器片とともに発掘したが、何に使用されたものか不明である。そのほかにはそれらしいものをまだ見ていない。それゆゑ木器が使用されたということは、はっきりしないのである。

## 第一節 縄文土器

市内の縄文土器を出土する遺跡地としては、現在明らかにされているだけで八〇個所以上にある。このほかに、赤城山麓にあたる地帯である。このほかにまた旧上川瀬、旧下川瀬両村にもあるであろうし、芳賀の金丸地区にも見出されるであろう。宮城、大胡、富士見、北橋などの勢多郡の町村で、前橋の周辺に



第23図 前橋市縄文土器分布図

繋がる地帯をもあわせ考えなければならぬ。古代人の生活が、現在の行政区画ではっきりと区別されてはいたわけではないからである。

市内の縄文文化の遺跡地のうちで、発掘調査されたところは、総社町総社の産菜迫路西遺跡、岡東遺跡、小神明町の敷石住居跡、箕井町八日市の箕井遺跡の四個所だけであり、箕井遺跡は完全発掘はなされず、他の三遺跡のみが群馬大学史学研究室によって、辛うじて学術的発掘調査を遂げ

る。なお、幸塚町の北部白川右岸の水田地帯で、土地改良工事中、多数の土器片や石器の出土を見た。土器は主として縄文後期のものであるが、精巧な耳飾りもあり、そこは利根川の旧流路の一つである橋ノ木川にも近く、低地であるので、その遺跡の性格は判断しがたい。白川の流れによる漂着物にしては狭い範囲に多数出土しているし、住居跡とも考えられない。

また旧高田町字林(現在の文京町三丁目)には住居跡が発見され、中期の土器を多く、印跡もあったと伝えられている。この遺跡の発見された場所は、洪積台地の上で、旧利根川の流路にあたる広瀬川の岸の崖上にあたっている。白川沿岸の沖積地とちがって、洪積紀に覆もった地層から発見されたのであるから、この台地上からは縄文文化の遺跡がさらに発見されてもよさそうであるが、土師器使用の遺跡が諸方に発見されているの比べて、右の遺跡以外は目下のところ見聞していない。住居の占地について差異があるためであろうか。

本市における縄文土器出土地は次表のようである。

早期	五箇所
中期	五箇所
後期	五箇所
不明	五箇所
合計	二十箇所

前期 二二箇所

第一章 古代人の生活

- 田口町岡市
- 〃 入田
- 〃 天神座
- 日輪寺町諏訪
- 上畑井町正間久保
- 〃 丑子塚
- 巖町桂正田
- 〃 東公田
- 小坂子町四門戸
- 〃 十二
- 龜泉町如意寺西
- 江木町農樂試験場付近
- 富田町吹地
- 〃 中富田
- 〃 高石
- 〃 中前
- 今井町道上
- 下大盛町八光
- 〃 大正用水北

- 西大室町五料山
- 蓮子町舞台
- 飯土井町二ノ堰

中期 五九箇所

- 田口町岡市・橋山
- 〃 入田
- 〃 天神座
- 〃 千手堂
- 青柳町
- 上畑井町新田
- 〃 正間久保
- 〃 荒屋敷
- 〃 田ノ口
- 鹽沢町高鼻
- 〃 番旗
- 嶺町八幡前・麻小春
- 〃 十二原・入替戸
- 〃 東公田

- ＊ 桂正田
- ＊ 東公田
- ＊ 島取町北原
- ＊ 宮原・藤塚・庚中塚
- ＊ 前原
- ＊ 東原
- ＊ 端氣町後原
- ＊ 五代町大日
- ＊ 中原・老久保山街道
- ＊ 江戸屋敷
- ＊ 小板子町白鳥
- ＊ 下大平
- ＊ 老町田・釜の口・鍛冶皆戸
- ＊ 四門戸
- ＊ 上京町
- ＊ 江木町県立養老所北
- ＊ 江木町養老試験場付近
- ＊ 亀泉町如意寺西
- ＊ 富田町次第

- ＊ 中前
- ＊ 荒口町浦田
- ＊ 二之宮町千足
- ＊ 新土塚・前原
- ＊ 萩原
- ＊ 泉谷町中島
- ＊ 下大屋町八光
- ＊ 大正用水北
- ＊ 西大宮町小稻荷
- ＊ 大稲荷
- ＊ 二子山
- ＊ 五料山
- ＊ 菟子町阿久山・舞台
- ＊ 新屋
- ＊ 飯土町樋口
- ＊ 二ノ塚

後期 五三便所

神社町高井字香薬

第一章 古代人の生活

第二編 古代上

一三六

- 總社町總社大屋敷
- 田口町岡市・福山
- 〃 入田
- 〃 天神座
- 〃 千手堂
- 日輪寺町諏訪
- 上福井町天主・天王補
- 〃 造屋敷
- 勝沢町高鼻
- 〃 新次郎
- 〃 番城
- 嶺町八幡前・藤小暮
- 〃 大林下
- 〃 十二原・入替戸
- 〃 裏公田
- 〃 桂正田
- 小神明町
- 鳥取町北原
- 〃 宮原・藤塚・庚申塚

- 〃 萩原
- 〃 東原
- 五代町大日
- 〃 中原・芝久保山街道
- 〃 江戸屋敷
- 小坂子町白鳥
- 〃 下大平
- 〃 老町田・釜ノ口・鍛冶屋戸
- 〃 四門戸
- 上泉町
- 鳥泉町如意寺西
- 江木町稲葉試験場付近
- 富田町吹地
- 筑井町八日市
- 鹿口町前田
- 下大屋町八光
- 〃 大正月水北
- 宍子町中鶴ヶ谷
- 〃 下鶴ヶ谷

第一章 古代人の生活

一三七

飯土井町下天神

＊ 二ノ塚

二之宮町新土塚・龍原

＊ 萩原

晩期 六福所

徳社町高井字下道

溝沢町教夜郎

巖町大森下

＊ 十二原・入替戸

小坂字町四門戸

## 1 筑井遺跡

筑井町字八日市にある遺跡で、その地は利根川の旧流路と荒砥川の合流点に、西川が削りあげた三角尖り状の低台地の突端近くに位置している。大正十五年二月に発見されたもので、早くからその名が知られていたけれども、学術的に発掘調査をなされたものではなさそうである。現在はそのまま埋藏されて畑となつてゐる。

この遺跡については、柴田常忠、谷川努雄共著の「石器時代の住居跡」に報告されている。それによると「開鑿の結果として現われたものである。石をもつて開める炉の工合などは、溝沢のものと同じ様なるが、床に

は石が敷かれて居つて、高ヶ坂に於けると同じであつた」とある。高ヶ坂とはこの報告の写真を見ると、石はいずれも河原石、炉は五角形で、石材を平らに使用しているように見られる。住居の規模、柱穴、伴出遺物等は不明である。

これらのことから、筑井遺跡は敷石住居跡とみられるが、時期を判定する材料はほとんどない。しかし、敷石住居跡である点では時期が限定されてくるし、炉の形、その石材の使用法からみて、本縣地方では、敷石住居跡の時期の後半に属するものと考えられる。したがつて、縄文文化後期の前半とみられよう。

## 2 小神明遺跡

小神明町にある遺跡で、ここは赤城山南麓の西によつた裾野の傾斜地に位置している。付近を雁沢川が流れ、その右岸にあたる。昭和三十七年十二月一日と同十八日の両日に、発掘調査された。開田作業のため露出した石囲い炉と敷石を清掃し、住居跡の規模を確かめて実測されたものである。

炉は直径七〇センチの円形の石囲い炉である。円形といつても、河原石で六角形に囲つて炉を造つてゐる。敷石はその炉縁を延長したように東や南の方向に、幅約一層、長さ二層二〇で、先端が少し細くなるように、河原石が敷かれていた。この敷石はその縁石の縁を意識して置いたようである。



図24 小神明遺跡敷石

この伊及び敷石を基準にしてみると、伊縁から北へ五〇センチ及び一八〇センチのところに穴があり、後者は直径二五センチ、深さ三六センチである。また、伊の西と南にも伊縁からそれぞれ一五〇センチ、一六〇センチ離れ、径二五センチ、深さ三一センチと径四〇センチ、深四九センチの穴がある。東側は開田作業のため攪乱されており、明確にすることができなかった。これらは伊縁から距離がほぼ等しく、柱穴ではないかと考えられる。柱穴とするならば、住居の形状ははつきりとしなが、敷石とも考えあわせて、その住居跡の規模は直径五拵前後と推定される。

伊は深さ三五センチ、安山岩の河原石を平らに使用しており、伊の内側は攪乱されていたが、多少鏡土も残っており、伊縁の石にも火熱の痕跡が認められた。出土遺物には石器は認められず、土器破片だけで、それも数が少ない。敷石の近くの凹状の穴から出土した破片が四片のみである。一片は口縁部破片で、渦巻状の弱い隆起文が施文しており、他の破片には地文の縄文を磨り消し、その上に沈線文が加えられていた。

この遺跡は概略石のような状態であるが、敷石は礫石の使用法からみて、伊を中心とした周西全体にあったとは見られないし、さらに東方に延びているものとも見られない。この敷石に似た敷石遺構は寸嵐遺跡(神奈川)や小室遺跡(北相模村)などにも見られるもので、これは伊を中心とした敷石住居跡にさらに柄鏡の柄のように造り出した部分である。しかし、これらに比較するに、小神明遺跡の敷石部分は伊から直接造り出した感じがする。

また、この遺跡には柱穴と見られる穴が三個あり、東側は調査不能であったが、三個の柱穴からみるならば、上座がその構造は兎も角構築されていたことは推定され、伊は使用された痕跡が見られ、住居の機能をはたした遺構である。この意味から小神明住居跡とよぶことができる。ただし、他の当時の一般の住居跡と比較した場合、一部にのみ特殊な敷石を有することは異例である。小室遺跡においては、その造り出し部の端の前方に峰

果石を石組みで囲った遺構があり、特殊な通路と見たが、小神明遺跡においては住居の内にも包含される部分であり、通路とはしがたい。しかし、屋内にあっても、宗教的な特殊な場であり、あるいは神事執行のための通路であったかも知れない。

この遺跡は敷石を有する点、伊の形状及びその石材の使用法等が、笥井遺跡、築瀬遺跡(安土)等に類似していることと、出土遺物等からみて、縄文文化後期前半と考えられる。

### 3 産業道路東遺跡

總社町総社丁間福荷の北にある遺跡である。この地は榛名山東麓から緩く緩傾斜地の東縁が浸蝕されて幅広い水田地帯を作り、その上に、緩傾斜地の東縁が東流する八幡川、流川などの小河流によって、開析されたところの低台地の南端にあつてゐる。水田地帯から比高二―三拵である。この中央をほぼ南北に産業道路が新設され、その道路敷に面した遺跡地の東側で土取り作業が始められ、石置いの伊が発見されたのである。昭和四十四年七月二、三日の二日間調査が実施された。

遺跡付近の地層は、上部ローム層の上にさらに堆積層が存在しているのであるが、遺跡地では、小河流の浸蝕、新堆積などによって、局部的に異なっており、ローム層は認められなかった。この地層の状態は、土取り作業による破壊と相俟って、住居跡の床面の周縁または壁を正確に把握することができなかった。伊を中心とした径六拵の範囲が調査されたが、大小の穴が多数存在して、いずれが住居の柱穴であるのか決定できなかった。しかし、伊から二拵五〇の付近に、土の硬さや色の相違の見られるところがあり、その内方(うちまへ)での穴の存在も限られ

るので、床面を推定し、この住居跡は径五尺程度と考えられる。

炉は石で囲われ、東側西側ともに二石、南側は一石で、間隔をとって設置されている。北側は石を置いた真跡があった。その規模は南北で八〇センチ、東西で五〇センチの長方形である。出土遺物は縄文土器破片が十数片にすぎなかったが、いずれも地文の縄文に沈線を施したものと、その沈線の間を磨消したもので、縄文文化中期後半、南関東の編年の加付利E式に比定されるものである。

以上のように、住居の形、規模、柱穴等明確にはしがたいが、炉を中心とする径五尺程度の縄文文化中期後半の住居跡と考えられる。

#### 4 産業道路路西遺跡

船社町船社二八八四、二八八五番地にまたがる遺跡である。産業道路東遺跡の西北方約一五尺の低台地のほぼ中央、産業道路の西側にある。この遺跡も土取り作業中に石囲いの炉が発見され、調査に至ったものであるが、すでに炉の面まで掘り進められ、炉内の埋設土器は取り上げられており、床面も確認できない状態になっている。炉から南の畑は所有者が異なり、急な調査には間に合わず、発掘調査はされていない。

遺跡付近の地層は東遺跡と同様である。土取り作業による地層の断面から見ると、上から第一層は浮石混りの耕作土、第二層はやや黒味をおびた土層、第三層は茶色の土層、第四層は硬い茶褐色土層、第五層はローム層となっている。炉縁の石からみると第四層の上面を床面としていたものであり、また、この断面からすると、住居の掘り込みは認められず、平地式の住居と判断される。その住居の周縁ははっきりしない。しかし、炉を中心

して、東二層六〇、東やや北二層七〇、西やや北二層六〇のところ  
に穴があり、主柱穴と認められ、これから推測すると、一边が六  
尺前後の規模と考えられる。

炉は方形の石囲い炉で、外側幅八〇センチ×九〇センチ、内側方五〇  
センチ、深さは床面から二五センチで、炉内には土器が埋設されてい  
た。炉は玉石で構成されており、石材を縦または横に使用し、二隅  
には補助石をあてている。炉縁は床面から七乃至一〇センチ高い。炉  
内は埋設土器を取り上げる際に、攪乱されたと思われる状態であっ  
たが、隅に焼土が残存し、炉縁の石も加熱のための割れ目や剥離痕  
が認められた。

出土遺物としては炉内の埋設土器がある。この土器は口縁が開く  
深鉢型で、底部は欠損しているが、口縁径一六センチ、現存高一四  
センチである。その文様は、頸部に半截竹管状の弱い沈線と、爪型文  
状の刺突文があり、頸部から上は無文、下部は櫛目文状の弱い沈線  
を地文にして、その上に、半截竹管による横の大きな四条の波状文を施した。口縁部付近には加熱のための  
割れ目が認められる。その他にも二、三の土器片が発見された。

この炉内の埋設土器は縄文文化の中期以後の住居跡に見られるもので、「五徳」のように用いられたものと



第25図 産業道路路西遺跡炉跡

見られる。この上に、浅鉢型、壺型、鉢型などの土器を置き、煮沸に用いたものであろう。これらの炉の形状、炉内の埋設土器から見、縄文文化後期前半のものとして推定される。

なお、土取り作業が西方に進み、さらに炉が発見されたという藤社町の新井哲夫氏の報告により、昭和四十四年三月二十八日から三十日まで調査が実施されたが、すでに炉は破壊されていた。しかし、土器が設置されていて、周間に大小の穴が発見され、新井氏撮影の写真と照合して、石材を横に使用した石組い炉があったことが知られる。したがって、続いて同時期の住居が隣接していたものであろう。

## 第二節 弥生土器

市内で弥生文化に関する遺跡が発掘調査されたのは、荒口町と藤社町の二箇所のみであり、土器が発見されているのは島羽町、六供町、及び下川瀬地区等の数箇所すぎない。荒口町で発掘調査された住居跡から出土の土器は、この地方での弥生土器としては古いものであるが、藤社町での住居跡その他の地域で発見の土器は、樽式土器と特によばれているもので、弥生土器の末期にあたるものであ



第266図 産業道跡西濃跡出土縄文土器

樽式土器は勢多郡赤城村大字樽からはじめて発見されたので、杉原狂介氏によって樽式と名づけられた。この土器の最初の発見地は

赤城山の西麓で、利根川の左岸にあたっている。この土器は利根川右岸の山間地で多く発見されるもので、赤城山南麓以東での発見例は極く稀である。本市でも藤社町、島羽町など、榛名山の東南麓の伏流の湧出地帯の線に限って、それより平坦地側からはわずかに六供町及び下川瀬地区などの本市南部地域に点在するにすぎない。その地域から東方の朝倉、後閑、山玉の諸町の地域には土師器の古い型といわれる石田川系統のものが分布している。赤城山南麓の地域にもこの分布が見出されはじめている。つまり、弥生土器と古式の土師器とが、同一地域に併存していたことがありそうにも見えるが、まだ断定するところまでには調査がすすんでいない。

いわゆる樽式土器のうちには縄文が加えられているものがあり、吾妻郡中之条町大字上沢渡の有笠山洞窟出土の壺型土器に至っては、縄文が残存しているばかりでなく、その形もかなり縄文的で、他の地域出土の樽式土器と差異があることが認められている。ところが、この土器と伴出したものに壺型土器があるが、これは群馬郡谷澤村の水沼遺跡や高崎市の幅沢跡から出土したものと類似で、後の土師器につながるもののようにも考えられる。こういう現象はこの地においては、弥生土器使用の年代があまり長くないことを示しているものではないか。

### 1 荒口前原遺跡

荒口町字前原にある遺跡で、ここは荒尾川左岸の地にあたる。藤生正雄氏宅地内に発見されたために、昭和三十一年一月には完全な発掘ができなかったのであり、住居跡と認定されるものの西北隅の一部が調査されただけであった。このような狭い範囲であったが、土器類は完形なものがあり壺型土器一〇個、壺型土器五個のほか、

高坪など数も比較的多く出土した。昭和四十四年八月に再度発掘調査が実施され、ほぼ住居跡の規模を知ることができた。住居跡は方四角六〇の竪穴式住居跡であり、桁跡と見られる箇所は明らかではない。

壺型土器には主として縄縹の幾何学的な文様が施されており、それに頸部に楕円の藤状文が加えられ、あるいは胴部に縄文が残されている。土器の写真(1)、(2)、(3)に見られるようなもので、胴部の最大径の部分は中位にあるが、(4)の如きは無文で赤色の塗彩があり、胴部の最大径は下位にある。壺型土器は大体縄文あるいは縄目文がつけられており、小型のものにコ字状の縄縹文がある。

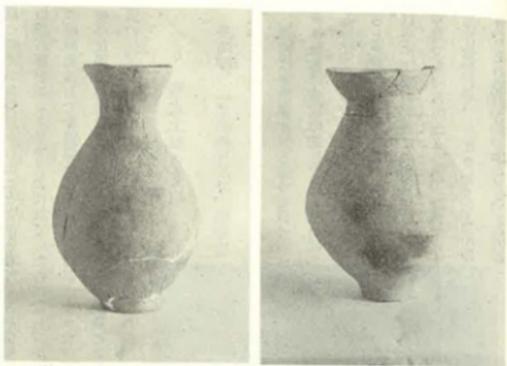
これらの土器はそれぞれ特種な様相を示しており、周囲の諸地方の出土土器と各共通点を有しているように見える。本県においては群馬郡倉淵村の上ノ久保、碓氷郡松井田町の上人見、吾妻郡吾妻町の藤之原洞窟、勢多郡大柄町の金丸等の遺跡に次ぐものとして、赤生土器の古い部類に入り、二世紀乃至三世紀ころに属するものである。

2 桜が丘遺跡



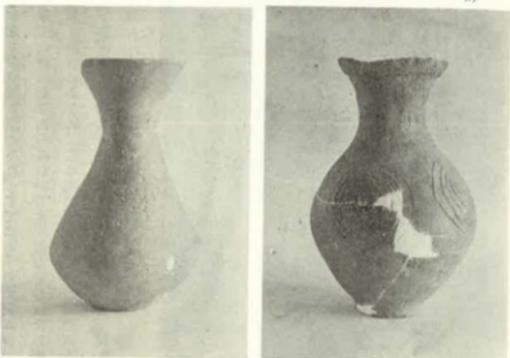
第27図 前原遺跡土器出土状態

総社町植野の桜が丘団地に発見された遺跡である。樽式土器使用の住居跡であるが、団地造成のため破壊され、その一部が調査され得たにすぎない。しかし、この調査によって浅間山噴火による浮石層が、住居跡を埋めた上の層の断面から検出されたことは、群馬郡倉淵村の水沼遺跡の樽式土器使用住居跡の同



(1)

(2)



(3)

(4)

第28図 前原遺跡出土の土器

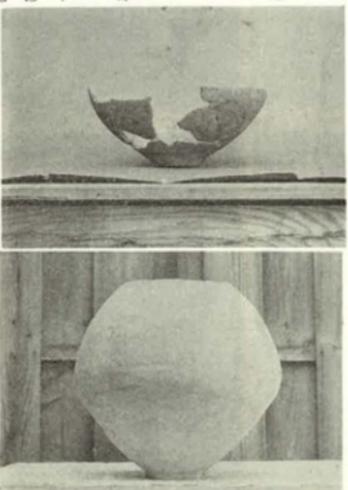
様の断面から発見されたこととあわせて、住居廃棄後間もない堆積と認められ、すでに地字の研究においてこの浮石層をスコリアとよばれていたのに対し、かなり確実な年代を与えることができ、考古学のみならず、地字の研究の上でも重要な基準を得たことになった。その上、別章のように、この浅間山噴火の浮石層の直上に前橋の後園天神山古墳が築かれていたことの発見によって、弥生土器使用の時代と古墳築造の時代とが、この浮石層の直下と直上であるという重要な区分の境界線が求め得られたので、非常に重要な調査となった。

### 3 樽式土器の発掘

後園町の広瀬団地付近で、宅地造成中に出土したものである。

蓋棺は身と蓋とから成っている。身は頸部に波状の櫛目文をもっている樽式土器の蓋であり、その頸部から上を取り去っている。文様は頸部以外にはない。蓋は破損していた。

写真でも明らかのように、身の下半部と比較して、かなりふくらみがあり、その形から推定すると、土師器



第29図 (上) 後園町出土弥生土器蓋  
(下) 同 弥生土器

の石田川式土器に近いものである。

この蓋棺の出土状態は不明である。身の方の蓋も上半部にはかなりのふくらみがあり、櫛目文の盛き方も頸部の一部にとどまり、胴部には及んでいない。弥生土器の最末期のものであろう。あるいは石田川式土器との接触によってできたものであろう。

この後園町付近には、土師器のこの地方での最初の型である石田川式土器が出土し、後述のように、後園町の天神山古墳や朝倉町の朝倉貝古墳の墳丘には、石田川式土器をすでに仮器（儀器）に転用して、後の墳頂円筒列のように配列している。また樽式土器のよい発見例がない。朝倉町の西方六供町からは、やはり毛地造成によって、土器類の破片が掘り出され地上に散乱していたが、その中に多少樽式土器がまじっていた。今のところ、榛名山麓の樽式土器分布の東辺と見られるところで、さらに、その東方にこの発掘が出土したのは、珍しい例である。

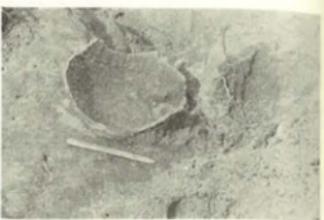
### 第三節 土師器の初現

土師器は一般に、古墳の築造と同時に使用がはじまると、従来説かれていた。しかし本市における調査から厳密に言えば、土師器の使用は古墳の築造よりも少し前になるのであるが、これも比較の問題であって、現在最古の古墳と認定されたものよりも、さらに古いものがあるかも知れないのであって、それは古墳とは言えないというよりな事情もからんでくると、容易にきめることはできなくなる。大局からみて、従来の考え方に一応従って

置くことが混乱が起らない。しかし、研究者にとっては重大な問題であるから、今後さらに調査され検討されるばならないことではある。

土師器のうち最も古いものと考えられているのは石田川式土器である。昭和二十七年三月に太田市大字米沢の石田川左岸ではじめて発見されたもので、松島榮治氏の研究によって世に紹介された。この種の土器はその後、烏川沿岸の高崎市倉賀野町、佐波郡玉村町等で発見され、本市でも朝倉町、後閑町、荒子町、総社町等で発見されており。倉賀野町では大応寺古墳とよんでいる墳丘のない小石櫛を造り込んだ当時の地表面から発見されており、玉村町では横穴式古墳の石室床面下の住居跡から出土した。朝倉町では朝倉Ⅱ号古墳の墳丘上に配列されていたのであり、後閑町では天神山古墳の墳丘上に配列されており、かつその付近の地表下の浮石層の下から出土している。荒子町及び総社町では井上唯雄氏によって、その土器を使用して住居跡が発掘、調査されたのである。

この天神山古墳、朝倉Ⅱ号古墳の墳丘上に環輪円筒列のように配列されていたことは、その墳丘が浅間山の噴火による浮石層の直上に構築されていたこと、この浮石層の下から石田川式土器が出土したことによって、石田川式土器は当然これらの古墳に先立って存在していたことを証明していると同様に、この浮石層は石田川式土器が使用されている期間のある一時期に堆積したものであることを知ることができる。また、この浮石層は総社町の板が丘団地においては、弥生土器の樽式土器使用の住居跡を埋めていた土の間に挟まって堆積していた。この状況は群馬郡合瀬村の水沼遺跡からも発見されている。末期の弥生土器を使用していた住居が廃棄されて、あまり年を経ないころに浮石層が堆積したのである。古墳の墳丘の直下にある浮石層と同じであり、古墳は浮石



第30図 大室小学校庭第二遺跡土器出土状態

層ができて間もなく築かれたことになる。この浮石層が塊となって、弥生土器使用時期と古墳構築時期とがはっきりと区切られるが、その間には経過があまり多くはないようである。

これらのことから、樽式土器と石田川式土器とが一時期に併存していたことも考えられる。本市と高崎市を結ぶ線から東には、樽式土器は極く稀で、石田川式土器が諸所に発見されており、すなわちこの地区はいわゆる平坦地である。これに対して、その線から西の山間部には樽式土器が到る所に発見されていると言っても過言ではない。樽式土器よりも古いと考えられている弥生土器もその多くは右の線に及びそれより西の山間部に発見されており、荒子町前原の発見例は平坦地例としては稀な例である。この事からすると、この地方では、水田耕作は石田川式土器使用に伴って起こ

ったもののようにも考えられる。

### 1 大室小学校々庭第二遺跡

大室小学校はもとの荒砥村東小学校のことで、その校庭で昭和二十七年に土師器使用の住居跡を発掘し、これを荒砥村東小学校々庭遺跡と名づけられた。その同じ校庭で、昭和三十三年七月にやはり土師器使用の住居跡が発掘されたが、この方は前者よりも彌生土すつと古く、石田川式土器に属しているものである。出土品は壺の底

部、高杯の破片などで小規模である。これらの土器は石田川式土器関係のもので、五世紀ごろのものと思われる。

## 2 新屋遺跡

荒子町字新屋甲八五番地にあった住居跡である。新屋部落の西端に位置して、荒砥川の支流が開削した東西幅一帯ほどの舌状台地上にあたってゐる。

住居跡の形は長方形で、その中軸線は北四七度東であり、東西幅三厨九〇、南北幅三厨一九である。炉の位置は中央西寄りで、西南隅に貯蔵穴があり、柱穴は七個であった。床面は比較的整っており、炉は四本の支柱穴の中央にあり、炉の脇に上面が磨滅した長径三〇センチほどの平石一個が据えられていた。このすぐそばから煮湯用の御行壺型土器が出土している。

炉の西北部から御行壺型土器、埴、壺等が出た。貯蔵穴の周縁から高外、壺等が見出だされている。なお、四側の支柱穴は住居跡平面においてやや西に偏っていた。生活上の必要から炉を西にかたよらせ、その上部に屋根を設けたものであろうか。

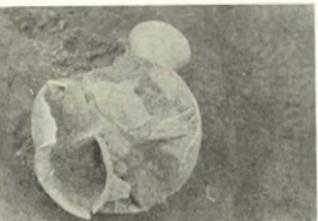


図34四 新屋遺跡土器出土状態

## 3 稲荷塚北遺跡一号住居跡

磯社町稲子稲荷塚北にある土師器使用住居跡の集まっている地で、五個の住居跡の発掘の結果の一号にあたるものである。東方約一帯に利根川が流れ、その右岸の低台地になっているところである。ここには縄文、弥生、土師器片が多く散布している。

一号住居跡は東半部が破壊されていたので、その西半部のみが調査された。形は隅丸の方形で、西壁の辺長三厨二〇、主軸の方向は北五〇度東である。壁近くの床面が相当広範囲に焼けており、その上部に茅のような炭化物が三センチほどの厚さで堆積していた。南壁に近く、西角から一厨東寄りに、粘土を意識的につきかためたところがあり、一辺一厨五〇〇の方形の造り出し状である。何に使用されたか不明である。遺物は西の角部を中心に埴三個、高杯脚三個、小甕一個、石製模造品一個が出土した。

## 第四節 土師器と生活

### 1 土師器の使用

本県の土師器は古墳の項で記したように石田川式土器からはじまる。この土器が常用のものから儀式的なものになったり、形や器種や使用方法などに多少の変化があったり、年代が経つとともに、同じ土師器でも新しい形のものなどが地から入ってきたりして、形式の上からもいろいろと変わってきた。この変化を井上唯雄氏は石田川式土器も加えて次の六種にわけてゐる。

- 1 四世紀から五世紀初めまで (石田川式)
  - 2 四世紀末から五世紀末まで (第一型式)
  - 3 六世紀初めから七世紀末まで (第二型式)
  - 4 六世紀中ごろから七世紀末まで (第三型式)
  - 5 七世紀中ごろから八世紀中ごろまで (第四型式)
  - 6 八世紀初めから一〇世紀まで (第五型式)
- このわけ方がもちろんきまっただけではない。これからの研究でかわってゆくかも知れないが、現在の段階では種々なものである。この区分に従って説明することにする。
- 土師器は古墳とともにほじまっただけで言われている。前方後円墳で最も古いものは後円天神山古墳であるが、この古墳の墳丘上に並べられていた石田川式土器には、壺の底部に五があげられていて、儀式用に作られたものである。それゆえ、日常生活の器が儀式用にも使われて、さらに作る時に儀式用に変化したものであるから、すでにそれ以前にその形式の壺があったものである。もっとも、本市の後円天神山古墳の築造と同じころの墳墓と見られる高輪市有賀野町の大応寺古墳からも、石田川式土器が出土している。墳丘をもたない墳墓でも、梯が墳丘のあるものと同じ傾向のものであったならば、古墳と言つて差支えないものと考えられるので、石田川式土器は古墳と同時に起こつたものと言えらるであらう。
- 石田川式土器については、序章五にも述べてあるので、ここでは五世紀から七世紀までの間、土師器が日常生活器として、階級の上下の区切なく、最も多く用いられた時代について述べる。

この期間内には、新しく須恵器が伝えられて、土師器と一緒に使用されるようになっていった。須恵器は西部(祝部一いらい)土器と言われ、はじめは、祭礼用にあてられていたようであるが、次第に一般化したようである。この須恵器は形などで土師器に影響を与え、八世紀ごろからはだんだん焼き方などにも変化をさせていくのである。須恵器ははじめ「すえのうつわ」とよんでいた。本来の文字は「陶器」であつて、これを「すえのうつわ」と訓みつけたのは、墳墓(古墳)の前や、その石室の中に「掘え」たことから起こつていふと言われている。もっとも、土師器も掘えたものがあるので、それを「すえの」ともよんでいるから、そういう言葉から移つたものであらう。酒甕などは、はじめは土師器であつたのが、須恵器が伝えられると、もっぱら須恵器が使われたようである。

本県の古墳からは、竪穴式古墳の墳丘について出土するものは、皆、土師器であり、帯の中からはほとんど土器は出ていない。一例だけ、前橋の後円天神山古墳の大粘土帯の中から出土した。これは染料のようなものが入れて、納入されていふ。横穴式古墳では、墳丘についてはいはやりおもに土師器である。しかし例外として須恵器の大甕が墳頂や、基礎面から出ている。墳墓古墳(船多郡)の前庭から出土した須恵器の破片は、八世紀ごろに骨壺としたものであらう。これに対して、石室の中から出土する器は須恵器のみで、例外として、西大室町の前二子古墳の石室からは、須恵器にまじつて、土師器の高坏が出ていふ。前二子古墳は六世紀の末に造られたもので、横穴式の前方後円墳でははじめのものと考えられる。古墳に土師器を使う習慣が、竪穴式古墳から受けつがれたのであらう。

古墳のころの住居跡からは、ほとんど土師器が出土している。中には少量の須恵器がまじつていふものもある。

る。一般の住居では、おもに土師器を使っていたものであり、須恵埴は横穴式石室に納れるが、そのほか特別なことに使用されたものであろう。横穴式石室に納入された須恵器は、その石室内の配列の状態から見ると、歌供用とは考えられないので、死者を守る呪術用か、あるいはまた、宝葬的なものとして置かれたようである。土師器は墳丘の外から出土するものには、埴輪列とともに配列されているものもあるが、前庭から出土するものは、墓前祭に使用されたものようである。それゆえ、土師器は日常使用の器と見られよう。このほかに木器もあったことと思われるが、住居跡からはまだ出土していない。

住居跡から出る土師器は、その使用法にしたがって、配置されている場所が大体区別される。このころの土師器の住居跡には遺跡がついている。竈跡の付近にはやはり炊飯用の器が多い。湯をわかす長めの甕や、その上にのせて穀物を蒸す甗などである。貯蔵穴といわれる穴の中やその近くからは、甕や高杯や坏が出土する。大体この二箇所に出土例が多い。

その土師器の器種は弥生土器にくらべて少なくなっている。弥生土器の終わりのころには甕型、壺型、脚台付甕型、手あぶり型などの土器と、埴、片口、甗が加わっていたのが、土師器の石田川式土器では手あぶり型土器や甗、片口が見えず、高杯や器台があらわれ、その後の土師器では大体器台がなくなり、ふたたび甗が出てくる。やがて脚台付甕型土器も消滅する。また、石田川式土器などはじめのころのものには、小さい甗でも平底になっているのが多かったが、だんだん平底のものがふえてきている。石田川式土器に大型な脚台付甕型土器のあるのは、弥生土器の名残りであるが、その後のものに次第にこれが見えなくなり、大型の甗が出てくることは炊飯の方法に変化があったものと考えられる。

脚台付甕型土器は炊飯用器であり、平土間に置いて、周囲から火を焚き、<sup>甗</sup>あるいは固い粥(飩)を作ったようである。甗を使用した<sup>強飯</sup>とはちがつている。甗の字も「かゆ」の意味があり、本来、「かゆ」はこの文字といわれ、粥は俗に用いられたもの由である。粥の文字は甗に米を入れた形であり、甗の形をひであらわし、左右を弓の文字に置き替えたものである。甗は音が「レキ」で<sup>煮</sup>、<sup>浸</sup>とかいう意味であり、一般に甗は三本脚、甗はいわゆる脚台付きのもので、湯を沸かすのに用いられる。脚台付甕型土器は甗に似たものであろう。しかし、甗の文字は甗または甗の上に米の入った甗をのせた形であり、「かゆ」ではなくて、むしろ「強飯」を作ることを表わしたようである。けれども、日本語ではこれを「かゆ」としている。その上、「強飯」を「かゆ」としている。要するに炊飯には二様あって、一は米と水とを一箱に入れて煮るのであり、二は米と水とを別にして煮す方法である。脚台付甕型土器は前者に使用され、甗は後者に使用されたものである。文字の訳記にずれがあったものであろう。

甗ははじめ小形であったが、六世紀ごろから大型のものも出てくる。それにつれて甗があらわれる。その形はいわゆる長甗の形といわれるもので、湯をわかす土器も大形で長く、これを長甗(または長甗)と言っている。この長甗を使用するには竈が必要であり、恐らく、甗と長甗は一緒に伝えられてきたものであろう。この後の土師器使用の住居跡には、ほとんど竈がついている。

土師器使用の住居跡は正方形のものが多い。住居跡には大小があるが、四辺乃至六辺四方のものが一般的である。生活している地面から約五〇センチ掘り下げ、この中に四本の竈立柱を立てて梁でつなぎ、<sup>土</sup>柱を掘り型から外へ下ろして、地面へさし込み、その上に葦や草などの草類でふきおろし、上に小形の破風を作ったものであ

らう。この形は人野遺跡(多野町)で、家がやけて、屋根が床面に落ちており、掘り方の外まで棟がつづいて、その終わりにさし込んだ穴が一列に並んでいたのを見たので推定したものである。

2 土師器の遺跡の分布

土師器の遺跡の分布は密であり、広範囲である。至るところに土師器の破片が見出せるし、住居跡がある。土師器には珍奇な模様がついていないので、いわゆる「かわらけ」の破片として注意されなかった。近ごろでも一般には完形品が出土すると、珍らしいものとして取扱われるが、破片では一向に顧みられない。それゆえ、本県では調査も遅れており、研究も不十分である。その間にも、松島栄治氏や井上唯雄氏などが研究の成果をあげてきている。それらの発掘調査と表面採集による分布調査の結果について市内の状況をみると次表のようである。ただし次表は昭和三十六、七年にかけて調査され、昭和三十八年に刊行された群馬県遺跡台帳作成委員会編集の「群馬県の遺跡」から摘録したものに、多少他の調査を加えて作成したものである。

第三表 土師器遺跡分布一覽表

町名	所在	現状	地形	備考
元総社	勢谷川沿岸	畑	台地	須忠器混入
高井	字兼前、青葉、津組、観音の一带	畑	平地	
鳥羽	勢谷川左岸	畑	平地	須忠器混入 栗、舞付薬出土 第五型式(部分)

元総社	北側の横地一帯	畑	平地	住居跡
元総社	元総社町一軒馬町東四分の間の畑及び水田	水田	平地	住居跡、古瓦、器混入
元総社	二四〇六番地元総社小学校校庭等	小学校敷	平地	住居跡十数戸分
大友	県道前橋—安中橋の北側の元総社町大友町にかけての畑	畑	平地	須忠器混入
後閑	天神山古墳南	中道開界	平地	石組蔵、薬出土
青柳	字道上	畑	傾斜地	住居跡、須忠器
元総社	字道上八七一	畑	平地	住居跡、昭三七
日輪寺	字神明 神明宮の丘の北斜面	畑	平地	住居跡
日輪寺	字諏訪、日輪寺東の高台	畑	平地	住居跡
関根	字青井、赤城神社東の畑	畑	平地	住居跡
田口	字陶市、横山南斜面の下端	畑	傾斜地	住居跡
上郷井	字成俵	畑	傾斜地	住居跡、石組蔵
上郷井	字田ノ口	畑	平地	住居跡
上郷井	字五子塚細井神社東一帯	畑	平地	住居跡
上郷井	字南田ノ口	畑	傾斜地	住居跡
上郷井	字茂屋敷	畑	傾斜地	住居跡
上郷井	字志保、勢多郡富士見村との境界地帯	畑	傾斜地	古い形式
上郷井	字正間久保、富士見村から延びる丘陵の先端部	畑	丘陵	古い形式
上郷井	字西堀、鎌倉坂北側一帯	畑	丘陵	古い形式
上郷井	上野神明宮裏横地一帯 北方は小神明町、東方は谷まで	畑	台地	古い形式

端氣	字端氣前、利根川旧流路に面した台地上	水田	傾斜地	住居跡、比較的古い形式	第一型式後半
小神明	字堤下	煙	平地	燧、礫、土、高坏等出土、比較的新しい形式	
土泉	字西久保、玉泉寺裏の段丘上の傾地	煙	段丘上	住居跡	第二型式
江木	虎登藤東	水田	平地	燧、礫、出土	
東片貝	虎登藤東	水田	平地	須恵器伴出	第二三型式
堀之下	正門寺南	煙	傾斜地	須恵器伴出	
女尾	桃ノ木川東岸	煙	平地	須恵器伴出	
小島田	万福寺前の畑、利根川旧流路に面した段丘上、広義園前橋一並泰線の南側	煙	平地	須恵器伴出	
下大庭	字八光、付近に「カハクケ沼」標高一四〇m	煙	平地	須恵器伴出	
二之宮	字八玉寺、新田用水北側台地上標高八〇m	煙	平地	須恵器伴出	
東大室	字八反田、大室小学校西側邊場	煙	平地	須恵器伴出	
西大室	字八反田、大室小学校	煙	平地	須恵器伴出	
西大室	字七ツ石	煙	平地	須恵器伴出	
西大室	字二上山、二子山南傾地	煙	平地	須恵器伴出	
西大室	字福樹山、西は水田地帯をひかえた台地西斜面	煙	平地	須恵器伴出	

瓶子	瓶子小学校の庭、西水田との比高七mの台地西斜面	宅地	住居跡
飯土井	字須葉、中学校北の台地	畑	後期
荒口	字二之儀、神沢川右岸台地上の燧畑	田	中期頃
荒口	字諏訪西、葛城川左岸低台地上	宅地	住居跡
荒口	赤城神社境内、葛城川左岸低台地上	田	後期前半
荒口	字寺畑、葛城川左岸低台地上	畑	住居跡、末期
荒口	字小塚、葛城川左岸低台地上	田	古式土器器
荒口	字前田、葛城川左岸	畑	土器器中期

なお、芳賀地区については、『芳賀村誌』において、小暮邦雄氏が土師器及び須恵器の出土地を次のように表示している。

- 小神明 堤下
  - 端氣 後原、端氣前
  - 小島子 四門、鍛冶皆戸、下大平、白鳥、おくまん
  - 五代 芝久保、中原、大日、江戸屋敷
  - 鳥取 庚申塚、前原、北原、東原
  - 嶺 東公田、桂止田、西笠原、大林下、十二原
- 南橋地区については、『南橋村誌』において、松島榮治氏が土師器及び須恵器の出土地を次のように表示している。

上副井 西廻、辰後、荒屋敷、西田ノ口、田ノ口、定福、正間久保、井子塚、南田ノ口、素師

青師 宿上

川端 日輪寺東

田口 千手堂、天神窟

右のうち住居跡の発見されたものは、西田ノ口、井子塚、宿上であり、分布範囲が比較的広いものは、正間久保、千手堂である。また、田ノ口には祭祀遺跡があり、石製模造の主類が発見され、定福からは紡錘車が出土している。

『総社町誌』では土師器について記載はほとんどないが、図版の写真に見えている出土品中には土師器の壺が二個あり、総社町総社の伴兵衛塚出土の土師器腹の宋刻圖も載せてある。『赤茶色の土師式土器の破片、織色の硬い陶式土器の破片などが多く出土している』と述べられているのみであるが、両町での土師器の出土例はおびただしいものである。

このほか、下川淵にも多く、昭和三十七年以降に発見、発掘された山王町、後閑町、新倉町等の古墳群地帯内及び六供町出土のもの、総社町、大友町、元総社町にかけてのもの、鳥羽町、江田町のもの、各地の古墳出土のもの等を加えるとおびただしい数にのぼる。これらは道路構築、田地造成、地区改良等による土堀開発事業のために消滅したものである。そのほとんどが調査されずに、記録もなく、知られないうちに破壊、放棄されてしまった。ただ、後に話を聞くのみである。そのうちでも多少調査できたものもある。今までに調査されてきたものを、その報告書から摘録してみると次のとおりで、これらは大部分群馬大学史学研究室によって、発掘調査され

たものである。

### (1) 東部地区

いわゆる城南地区である。これには昭和四十四年に荒屋敷史談会発行の井上唯雄氏著「前橋市城南地区の土師器使用遺跡」がある。そのほか「勢多郡誌」に尾崎吾左雄稿「古墳築造頃の住居」の中に「荒砥村東小学校々庭遺跡」として、大室小学校の遺跡の発掘調査があげられている。なお、同書には荒砥小学校農場遺跡、荒口遺跡、荒口神社遺跡等が列挙されており、土師器の出土地としては、荒子、二之宮、今井、女屋等の諸町と前二子古墳とが記されている。

#### ① 荒砥村東小学校々庭遺跡

西大室町二八一七番地の現大室小学校の校庭にある。昭和二十七年八月に群大史学研究室によって発掘調査が行なわれた。発見の動機は、運動会の準備に、その場に、杭の穴を掘り下げ、偶然、土器の出土を見たものである。その時たまたま、群大史学研究室で、前二子古墳実測のための宿舍の交渉に行き発見に至ったもので、発掘の結果は三個の住居跡が発見され、このほかにも一〇数箇所指摘し得られた。

このような状態が示しているように、校庭の現在面は、住居使用当時の生活面ではない。北方から延びてきている舌状地面を削りとり、他方を埋めたのであり、その削りとした場所から、上部を平削りされた住居跡が発見されたわけである。この三個の住居跡のうち、一個は生活用の土器類や竈が発見されているが、一個からは全く出土品はなく、その上、小形であるので、何に使用されたか不明である。最大のもの東北隅を切つ

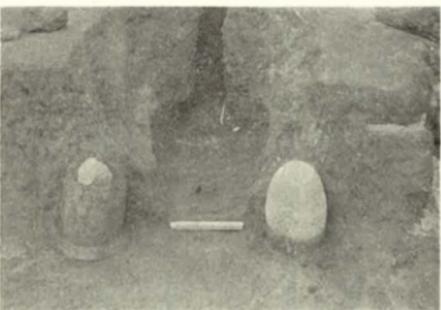
て、最小のものが床面を同高に造られており、これをA、Bとし、他の一個は最大のものに半分重なって、東方にはみ出しているのを、これをCとした。

A 住居跡

規模は相対する辺が各四辺及び四辺一五で、ほぼ正方形であり、四辺一五の辺が西南に面している。中央では四辺三〇及び四辺四〇で、現状で深さ四〇センチであり、一〇センチぐらい削りとられたようである。四隅は弧をなして、い



第33図 荒砥東小学校庭園遺跡AB号住居跡



第34図 同上 住居跡毫

わゆる隅丸であり、その弧の半径は二五乃至三〇センチである。

この住居跡には、東北隅の中央やや東寄りに、壁をくりぬいて造った竈があった。壁から住居の床に張り出しておらず、煮湯用器は壁の上面にかけたことになる。その奥に壁造りについており、屋外にぬけていたものであろう。竈の中心には、煮湯用器の足をかける格状の土の塊けたが立っていた。この竈の燃口の前後の左右の壁についた床面に、いわゆる長柄といわれる壺型土器がうつぶせに立てられていて、向かって右側の壺形の方は中が空になっており、他方は破損して土砂がつまっていた。燃口の設備ではなく、使用しない時にはかように置かれたものであろう。また、南の部分の西南隅寄りに、長径二〇センチの軽石が五個、放射状にためて置かれていた。祭祀的な意味をもったものではなからうか。

出土の土器は前述煮湯用壺型土器が完形であったほかは、全部破片で、壺型土器、壺形土器、杯等がある。完形の壺型土器は高さ二七センチ五、口径一七センチ二、復元できた杯は口径二二センチ三、高さ四センチ五、大壺は高さ二八センチ、頸径一四センチ、胴径二五センチで、口径は欠けて不明である。

B 住居跡 A 住居跡の東隅を切つて、一边二辺の四角で、深さ残存四二センチ、A 住居跡と同レベルの床面をもったもので、柱穴と認められるもの一個のみ、東北隅の床面に焼けた部分があるのみで、土器の出土はなかった。人が住んでであろうとは指定できるが、何に用いられたかはっきりしない。A 住居跡より後にできたものであり、床面が連続しているの

で、あるいはA 住居に造りつけられたものであろうとも考えられる。

C 住居跡 一边三辺の正方形で、その対角線がA 住居跡の東南辺にあたる。対角線から西北半はA 住居跡の上に重なり、東南半は自然堆積土の上に造られている。竈は僅について床面に造られており、粘土のみで構成されていたようである。出土土器は土師器の碗と漆輪の碗である。土師器碗は平底で、口縁部が外方にわずかに反った高さ四センチ、口径二二センチ、裏面径七センチのものであり、漆輪碗は大型で高さ七センチ二、口径一八センチ八、高台がついていて、その高さ一センチ二、その径八センチ八である。

この灰釉は精巧な製品で、磁器のような白色胎土で、堅く焼きしめてあり、須恵産の白色焼成のものに類したようなものである。胎は灰物で、刷毛で幅広くさつかけ、緑色に焼きあがっている。極めて豪華な感じのするものである。瀬戸市で跡本知二氏が「弘仁年間に使きはじめられ、天慶の乱ごろまで東国へ送っていた」と考えているものにあたる。氏は弘仁発掘と名づけている。

このA、C両住居跡は重なっており、Cが上であり、Aが埋まった後にCが造られている。Aの土師器は井上唯雄氏の群馬県編年によれば第三型式に属し、六世紀中ごろから七世紀末ごろと考えられている。Cの土師器は同じく第五型式に属し、八世紀初頭から一〇世紀ごろまでと考えられる。したがって、C住居跡はA住居跡に続いて造られたものであろうが、A住居跡が埋没した後であり、両者の間にはその期間が考えられねばならない。しかし、この地は季節風によって土砂が運ばれ、かなり埋没の速度は急速である。したがって八世紀の初頭までA住居跡が埋まり一〇世紀にC住居跡が造られたと仰うわけにはいかない。A住居跡を七世紀末とすれば、C住居跡は八乃至九世紀ごろと見るのが妥当であろう。そのC住居跡にいわゆる弘仁発掘が使用されていることも相当であらう。

② 荒砥東小学校農場遺跡

この農場は大室小学校の西に接しているが、校舎及び旧校庭は西大室町でありながら、農場は東大室に属している。現在は校庭に入られている。昭和二十七年十月に一個の住居跡が発掘された。農場にされる時か、それ以前か、開墾の際に土地の上面が削りとられたために、深さの残存部分は三〇センチくらいで、竈も土部は削りとられていた。甕は石を用いず、粘土のみで築かれていたようである。出土遺物は坏、長甕、小甕等で、七世紀中

ごろのものと考えられている。

③ 寺畑遺跡

荒口町寺畑にあったもので、昭和三十年十一月二十三日に、調査された。荒砥川左岸の低い段丘上にあつて、赤城神社境内、諏訪西、小塚などの遺跡が北に連なっている台地の先端部である。ここでは住居跡一個とその西北四半程の下に重なる住居跡の一部とが発掘された。上部の住居跡は方形で、東西五坪九五、南北五坪三〇中軸線方向は北三〇度東である。柱穴六個が数えられ、東側の中央南寄りに竈があり、竈の開口方向は竈に直角ではない。その竈口は五個の長甕で鳥居状に組まれていた。竈は幅五〇センチ、奥行七〇センチで、その中央やや北に偏して、粘土で造った長甕の底を受ける装置がある。その位置からして恐らく二個前後に並んでいたものであろう。竈の南に四七センチに六〇センチの方形の貯蔵穴があり、深さは五二センチである。この貯蔵穴の北東隅にかかって、小形埴型土器二個、甕一個が積み重ねられてあり、また、貯蔵穴にすべり込んだ状態で、脚付埴型土器の小形のもの、坏、長甕などが出土した。

南壁中央には、住居内に入り込んで、壁



第34図 寺畑遺跡住居内土器出土状況



第35図 竈



第36図 前田遺跡集積層



第37図 同上 住居跡竈

に存在していたものと考えられる。

④ 諏訪西遺跡

荒口町字諏訪西に発見され、昭和三十一年六月十五日、十八日に調査されたものである。この地は菅尾川左岸の台地上にあつて、寺畑遺跡から北へ遺跡地が続いているその一つである。住居跡は一個は確認されたが、それに複合したものの一部が発掘調査された。出土遺物は埴、甕型土器などで、荒子神社境内遺跡、荒子町の菅原保育園遺跡、荒口町の前田遺跡、西大室町の石原遺跡などと共通したものと認められ、井上唯雄氏の群馬県における土師の編年では第二型式に属するものであり、六世紀初期からその末期まで用いられたものと推定される。

ている。

⑤ 前田遺跡

荒口町字前田一五〇、一五一番地俗称舞台所在のもので、昭和三十二年十二月に調査された。調査の結果は、住居跡を発掘し、竈及びその周辺に竈、甕、坏などを発見している。この土器類は第二型式の後半にあたる。竈の内径実行四一センチ、幅三九センチ、中央右寄りに支石があり、右電柱との間隔二三センチ、深さ二六センチ、口は高さ二〇センチ、石組みである。

⑥ 荒子小学校々庭遺跡

荒子町一四六番地の一にあたる。昭和三十八年四月二日、五日に調査されたものである。この地はずでに昭和二十七年五月二十一日に、土師器須臾器使用住居跡として、一度調査され、荒砥北小学校遺跡」と称されていた。二十七年の調査では住居跡一個所を確認し、その一部の石敷き構造物を発見されたのであるが、三十八年には住居跡五個所と特殊な穴窯一個所とが調査された。

この遺跡は赤城山麓の舌状台地が南北に走っているもの一つで、荒口町から中鶴谷へかかる台地の中ほどの西端に位置し、それがちょうど荒子小学校の校庭にあたっている。校庭はその整地の露表面を七〇センチほど削平されているので、ローム面以下に及んでおり、その面を切り込んでつくられた竈穴の住居跡は埋没したまま上部が削りとられ、住居跡に堆積している黒色土が、雨後などには、校庭面に方形の模様を現出していた。これが発掘調査されたのであるが、その結果は次のようであった。

第一号住居跡

根拠は東西三厨八四、南北三厨六二のはほぼ正方形で、主軸の方向は北三三度西、床面は現状で深き、五坪ばかりであった。壁に沿って周縁があり、柱穴は認められない。北壁中央の側の床面に長径一五坪内外の細長い浮石(軋石)の軋石を、上面をそろえてほぼ方形に、石塊状のものが築かれていた。東壁の雨寄りのところに甍が造りつけられて、壁の外側まで廻り込んであり、幅は二五坪、奥行五〇坪で、壁口には長巻をうつぶせに立ててあった。土器としては長巻の破片と須恵器とが出てい

る。この甍の壁口に長巻の土器を使用していることは、高城東小学校(大塚小)庭遺跡や寺田遺跡にも見られ、多野郡吉井町の入野遺跡の第二号住居跡もこの類型であり、これは石を基礎状に組んだものからの遺跡と見られる。石垣状のものは昭和二十七年の発掘にも発見されていたのであるが、入野遺跡ではこの構造物の近くから平惣の粗製土器が出土しており、新田郡新田町木崎中学校庭遺跡ではその構造物の上から壊れた甍が出て、さらに強く焼けたこともあって、祭祀的なものであるかと考えられている。

#### 第二号住居跡

規模は東西三厨八二、南北四厨六七で不正の方形であり、主軸の方向は北二六度東、床面の深さは約一二坪である。第三号住居跡と同様にして、柱穴は認められない。甍は東壁の雨寄りに残骸があり、削平されていて不詳であるが、形制型にローンを切り込み、粘土をはったものである。出土土器は土師器と須恵器の破片のみであった。

#### 第三号住居跡

規模は東西三厨六〇、南北四厨七〇で第二号住居跡に似ており、主軸の方向も北二八度西、床面深さも二坪内外であ

る。第二号が第四号住居跡と三重になっており、第三号が上層、第四号が下層で、第三号は中位にある。甍も東壁の雨寄りに跡があり、削平されてしまっているが、ローンを切り込んで、粘土をはったものである。柱穴は穴が認められない。高台付の須恵器の甍が出土している。

#### 第四号住居跡

規模は東西三厨七、南北五厨五七で、やはり、不正な方形である。主軸の方向は北三三度東、床面の深さ三七坪で、第三号住居跡の下層位に重複している。柱穴は認められない。甍は東壁の雨寄りにあって、幅四七坪、奥行七〇坪で、その中央東部に支石が立てられていた。長巻を甍にかける時、その底面を受けるのが支石である。また、長巻を利用した甍道がつけられていた。出土土器としては高台付の須恵器の城二圓と長巻型土器とその他須恵器、土師器の破片であった。

この甍の層位に長巻を立てる例は、下層遺跡(赤松村)でその完全なものが調査せられ、機能的に見てすぐれたものとされており、支石のある例は眼下にすこぶる多く、土師器使用期の中期後半以降において一般的に認められる。

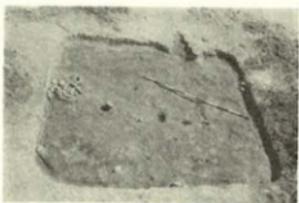
#### 第五号住居跡

規模は東西三厨三〇、南北三厨八五のはほぼ正方形で、主軸の方向は北三三度東であり、床面の深さは一五坪内外である。壁下に間隔をあけられている。甍は東壁雨寄りに、壁の奥に造り込んであり、ほぼ馬蹄形にローンを廻り込んで、その内側に粘土をはったもので、ゆるゆる粘土かまどである。その幅四〇坪、奥行七〇坪である。この前面に遺物が多く存在していた。土師器と須恵器の破片である。

右の五個の住居跡は、長巻と高台付城型土器とをほぼ共通して出している。長



第394 第四号住居跡 土器を焼道に利用



第388 高子小学校庭遺跡 第一号住居跡

遺は須部に不明瞭な段を行して、水平に口唇部を割くものと、第一号に見られるずん割型に、水平に開口縁部を付したものととの二種類あるが、後者が前者よりやや古い時期のものと考えられている。高台付壙型土器は、糸切底で、付け高台を施し、器体部は丸味を以て内彎し、口縁は小さく外反する。各部の鑿形は鋭さに欠けており、時代が下がっていることを示している。主軸の方向については、第一号を除いて大体一定しており、形状も南北軸が東西軸に比べて長いことなど共通点が指摘できる。これらことからして住居の重直などがあって、多少前後しているけれども、大体八世紀の中葉ごろと見られ、第一号だけがそれよりややさかのぼるものである。

須妻器竈跡

第四号住居跡の南側に発見されたものであるが、完備はできなかった。しかし、主体部のみは大体確認されている。形式は小規模な竈であり、焼成室は現状で開口五五センチ、奥付四五センチ、深さ二七センチ、燃焼室は開口七〇センチ、奥行一三〇センチ、分煙柱まで八〇センチ、深さ八〇センチ、灰層は開口一四〇センチ、深さ八四センチ、奥行不詳である。主軸の方向はほぼ東西であり、狭口は西に開き、この地域の卓越した西北季節風を考えて造られている。

灰層には、最上層に八センチほどの焼けた土器の粘土層、次層が四センチの暗褐色土層、さらに四センチの黄土層、六センチの織羅灰層が認められた。遺物は第四層から須妻器片が出土したが、量はごく少ない。燃焼室は、床面が非常に強く焼け、掘り込みになっており、ゆるい傾斜をもって分煙柱につながっている。分煙柱は二石あり、南壁から一四センチ、北壁から一〇センチのもので、その石の間は一一センチと大体等間隔である。壁は赤く焼け、壁の上面にはすす跡りの粘土が認められ、天井を構成していたものと思われる。焼成部は現状で二度認められ、燃焼部から二八センチ上がったところで一段、そこからさらに



第40図 須妻器竈跡正面分煙柱及びその奥部

に一五センチ上がって一段ある。上段の方には須妻器片が多数散積されていた。遺物はほとんど小片であり、完形を知り得るものはなかったが、糸切底、高台などの特徴から、時代的にはかなり下がったものと思われる。

以上の分煙柱、壁面の彎曲から修復しの様子が推察され、遺物と考え合わせて、恐らく平安中期ころのものと比定できよう。

なお、この須妻器竈は平地に築造されている筈であることが特徴である。

⑦ 荒延保所遺跡

荒子町一〇一九番の二に所在している。その庭から発見されたものである。この地は旧荒延村役場のあったところで、南北に走る舌状低台地の西端に位置している。昭和四十三年十一月に井上唯雄氏が県立伊勢崎東高等学校校地土研究部を中心にして調査された。遺跡地の西側は生垣のため、住居跡はそれにかかり、東半のみの調査であったが、東壁中央から南側の部分にかけて、ほぼ完全な土器セットが見出され、遺構の内部も比較的とのつていた。

遺構の土層は、上から第一層が厚さ二六センチの表土、第二層が厚さ一七センチで、浮石を多少含む黒色土層、第三層が厚さ三五センチで、比較的細かい砂であり、小さい浮石を多量に含み、かつ粘性を欠いている。この下層はロームである。この第三層の上面から遺構は掘り込んであり、この中を埋めている土は一様であり、水により急激に埋まったものであろう。

住居跡は東西四三二センチ、南北三三五〇センチの長方形で、中軸線の方向は北一六度西である。柱穴は対角線上に三箇所認められ、東壁の中央より南寄り一箇所があり、東南隅に貯穴が造られていた。柱穴は西北のものがはっきりし

ないが、他の三個は径二〇センチ内外、深さ三〇センチほどで、直に掘り込んであった。竈は住居内に張り出して敷設されており、燃口の部分はほとんど破壊されていた。粘土で造られていて、石の使用は認められない。竈土の量から見て、かなり大きなものであったと思われる。同時期のこの地域に見られる例からすれば、長大なものであったであろう。貯蔵穴は径九〇センチ、深さ三〇センチで、中に遺物が落ち込んでいた。

床面には浮石が密着して相当量散布しており、埴土の黒色土にも多量に含まれていた。この浮石は七世紀初頭の極名山二ツ岳の爆発により噴出、降下堆積したものである。この住居の廃棄と浮石の降下とは、さして年代の開きがないことを示している。

遺物は竈周辺と貯蔵穴に落ち込んでいたものが主である。竈周辺から出土のものほとんど竈の破片であり、貯蔵穴からは甕の口縁部二、高杯の完形品二、鋸、杯等が見出された。おそらく壁近くに置かれていたものが、なだれ込んだものであろう。他に西壁の側から高杯、鋸が出しており、貯蔵穴のすぐ西傍に多量の白色粘土のカタマリが認められた。この表面は平らになっていた。これは土器を固定させるための台になっていたものではなからうか。これらの土器類からすれば、比較的古式の要素を現存させながら、土師器盛行期への過渡的な様相がうかがえる。

住居跡の時期については、住居跡の形状、粘土のみを素材とした竈、その竈の位置が東壁中央であることが推定基準とならう。土師器使用期の当初には、住居の形は隅丸方形が多いが、やがて隅が直角になる例が一般的になり、また終末期には隅丸になる傾向がある。甕の素材が粘土のみ使用しているのは、機能的な面から甕の粗形と考えられる。次第に石を焚口や支石に使用したりして、長巻を利用するものが出現する。この遺跡はそうし

た素材が一般に利用される以前のものであろう。また、この竈が壁から離れて住居内に全体の部分を張り出して設置されていることは、住居の利用の面からも進んだものとは考えられない。

次に住居の床面に見出された二ツ岳の浮石は、自然的な条件で時期を比定する上に一つの手がかりを与えてくれる。すなわち床面に相当密に、しかも間層をほとんど含まないで住居を埋めている事実、この住居の廃棄の時期を、この浮石の降下期直前におさざるを得ないことを示している。

これらの諸点から、この住居跡の時期は六世紀後半のものに比定できる。

## (2) 北部地区

### ① 青柳遺跡

青柳町南上八七一番地に発見された住居跡で、昭和三十七年三月十四日から同月二十日までの七日間に、発掘調査が実施されたものである。

その規模は東西三層七〇、南北四層七五の長方形の竈穴住居跡で、主軸の方向は南中線と一致する。深さは三〇センチ内外である。東壁の中央にいわゆる粘土かまどが付設されており、その焚口の幅四〇センチ、竈の奥行一〇〇センチの長大なものである。竈は二次的な補修の痕跡が認められるので、長期使用されたものと思われる。竈に向かつて右側に貯蔵穴が設置されていた。遺物には完形品はなく、盃、杯等の破片のみ出土している。土師器の第三型式にあたる。

なお、「南極村誌」には石のほか、次のような遺跡が記されている。

## ② 上綱井町西田ノ口遺跡

昭和二十九年二月、上綱井の畑で発見された住居跡である。地下約一メートルのところに、多数の土師器が出土し、住居の床面が認められたが、耕作地の關係上、完掘されず、従って住居跡の規模は不明である。出土土器は壺、甕、埴、器台、高坏、埴などで、多様な器形の組合わせである。

これらの諸器形式中、特に目立つことは、甕が多数であることと、埴の口縁部の発達したものであることと、器台が組み立てられている形である。甕は飯炊用であるが、口がやや開き、底部は不完全で、器体全体を完全に支えることができないので、甕にかけて使用されたものと見られる。このうち、甕を飯炊用と見れば、甕は貯蔵用、埴は液体の容器、器台は丸底またはそれに近い埴をのせるに用い、高坏や埴は盛り器とされたものであろう。これらの組合わせは土師器の初期のものと思られるが、甕の使用以後のものであることは言うまでもない。土師器の第一型式と考えられる。

## ③ 青柳町宿上遺跡

昭和二十七年春、発見されたものである。地土約八〇センチの住居跡の床面から一括出土した。土師器の壺五個分（うち完形二個）、土師器の坏四個分（うち完形三個）、須恵器の大形の壺二個分、須恵器の提籠一個、ほかに石製製造品の小玉二個などである。

土師器の壺はいわゆる長甕であり、甕にかけて飯炊用（飯煮用）に用いられたもので、その外面にはすが付着している。第四型式に属するものである。須恵器の提籠は肩部に相對してある環状の把手を欠いているので退化的なものと思られる。七世紀ごろと推定される。

## ④ 上綱井町丑子塚遺跡

昭和二十九年春、発見され、当時甕の調査のみが行なわれた。甕は現地表面から約九〇センチ下の床面とほぼ同じ位置に底部が見出された。住居跡の東側の壁を掘り込んで造られたもので、その掘り込みに沿って壁を縦に並べ、その石の間には粘土をめじとし、その石の列の上に粘土をはりめぐらして、形を造ったものである。その規模は狭口の幅六〇センチ、奥行約一メートル、高さは現存で四〇乃至五〇センチである。

伴出の土器はいわゆるがま状の破片と糸切底の皿状のものである。がま状の破片は平底がついており、八乃至九世紀ごろの飯炊用具であり、糸切底の皿も同時期と考えられる。

## ⑤ 間根町寄居遺跡

昭和二十四年に間根町寄居の赤城神社東の埴地で発見された。土師器の坏と甕とである。発見者の話ではこのほかにいわゆるがま状の土器の破片も出土し、これら土器の埋没していたところには床面状の部分がみとめられ、その一部には埴土の堆積と疑った石とがあった由で、甕跡と推定され、住居跡と確認されたのである。丑子塚遺跡と同時期のものと考えられる。

以上のほかに土師器破片の分布地として特に広範囲に及んでいるものは田口の千手堂地域である。この地域出土の土器は比較的古いものが多く、西田ノ口遺跡に近似である。ここに大集落が存在していたであろうことは想像できるのであろう。この地は利根川の旧流路が赤城山麓の端を削り取って崖とした上面にあつた。これに対し間根町地域は地形及び地質の上から言っても、もと利根川の河原であつたと考えられる。土師器の分布により、土地の開闢も推定されるのであつて、五世紀乃至八世紀の間における利根川の流路の変化も考えられるわけ

である。

さらに、若宮町の群馬大学付属小学校校舎改築の際、その敷地出土の土師器及びその出土状態、三俣町の土毛電鉄三俣駅付近の畑地出土の土師器、東片貝町の片貝神社東北地帯の土地改良工事の際、地下二層の粘土の厚層の下部出土の土師器等の出土状態をあわせみるならば、利根川の流域の複雑さも考えることができる。この点についてはなお多くの出土例を必要とする。しかし、当時の住民は利根河原を開発して次第にその地域へ高台から移ってきたものであろう。また、南部の土地改良等で掘返えされている地域にも、全面にわたって土師器の出土がみられ、土佐島町の一本杉付近からは、土器表面に朱を塗って焼いた破片も発見されている。

### (3) 西部地区

利根川左岸の總社、元總社を中心とした地帯を意味する。この地区では、近年地区改良の工事によって発見され、発掘調査にいたったものが多い。土師器片の散布はいたるところに注目されているが、学術的発掘を経たものはわずかである。

#### ① 福荷塚北遺跡

郡山町穂社字福荷塚北の地内で調査された五徳所の住居跡である。そのうち第一号住居跡は五世紀前半と考えられるもので、石田川式土器を出しているので、古代土第一章第三節で既述した。第三乃至第五号住居跡は八世紀ごろのものであり、第二号住居跡は九世紀前半と考えられる。なお、第二、第三、第四号住居跡は第四号を最上層として第二号、第一号と順次に重なる、三層に重複しており、土師器の編年及び質の変化を知る重要な資料となっている。

#### 第二号住居跡

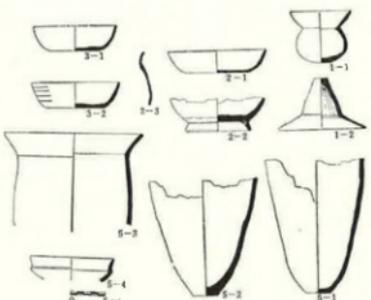
概して東西二層五〇、南北三層六〇の長方形で、主軸の方向は北八度西である。床向は東北面が覆れており、そこは他よりも四乃至五倍だけ敷けられている。その付土から高台付の埴や河原石が出土した。東壁南寄りに焼土堆積や焼け石が認められ、甕の存在が推定される。遺物は前記築のはかに甕が出土している。九世紀前半のものと考えられる。

#### 第三号住居跡

第二号住居跡の下層にあって、床面のレベル差は一〇センチである。東西三層、南北四層一〇の長方形で、主軸方向は北西二度東である。出屋の中央に甕が設置されており、壁をわずかに切り込んでいて、狭口には埴石安山岩と、羅灰岩とを組み立て、粘土を填めた。その内部の中央には支子が覆いてあり、狭口幅五四センチ、竪奥行五〇センチで馬蹄形になっていた。そこからは薄手の長壺がおしつぶされて出し、甕にかけられていたことが知られる。甕の周辺からは、灰及び木炭の堆積が認められたけれども、甕底の脱け方はあまり美しくなく、住居の使用期間の長くないことを推察させる。柱穴は東壁から一層一〇、南壁から八〇センチの位置に径二六センチ、深さ三八センチのもの一個所が認められているのみで、他は不明である。

#### 第四号住居跡

第三号住居跡の下層にあって、各主軸の長さ五層八〇ではあるが、対角線の差が一層もあるややゆがんだ方形であり、主軸の方向は北一六度東である。三個の住居跡のうち、規模も最も大で、しかも、全貌を明らかにし得たものである。甕は東壁や南寄りに認められ、壁に寄せかけた急勾配な上りで、その規模は前層六〇センチ、奥行一四四センチであり、砲弾の形のような大きなものである。素材は粘土のみで石の使用は認められない。甕の底、壁ともよく焼けており、長期間使用されたか、特殊な使用に宛てられたかであろう。狭口前には炭化物や土器片が堆積していた。また、住居の中央には径一層ほどの円形のくぼみがあり、中に灰が堆積しており、その中からは土器片とともに焼けた餅が発見されている。柱穴は住居南面の各対角線上に四個認められ、その各々は径二八乃至三五センチ、深さ三六乃至五八センチである。遺物は



第41回 稻向家北遺跡 第1号住居跡出土土器

甕型土器と杯の未定形品が甕淵から見出された。他の多くは小破片である。八世紀初めごろの住居跡を考えられる。

第五号住居跡

甕と北壁の一部を調査したのみである。北壁の一部を掘り込み、甕が設置されているが、煙道部は屋外へ、主体は内部の床面へ延びているのであり、素材は粘土であって、煙道部と主体部との境ははっきりしない。底部及び壁はまっ赤に焼けている。前幅四〇センチ、焚口から奥へ七〇センチのところを最大幅となつて四八センチあり、奥幅二九センチ、全長一四五センチになつてゐる。さらに煙道部長はほぼ七〇センチである。

焚口は細長い安山岩の河原石を両側に立て、その上に二個の赤煉瓦土器を組み合わせて、鳥居状に渡している。焚口から五〇センチ奥の中央に、炊飯用にされていたと思われるやや小形の長甕型土器が東方へ倒れかかつて出土していたが、支石は認められなかつた。この小形長甕型土器のあるところから二〇センチ奥で、壁が最大に広が

り、甕の底面は全体的に五段傾斜している。熱効率をよくするためであらうか。焚口前には炭化物が堆積していた。  
なお、東西軸の方向は西(○)東南であり、住居の形状は不明である。

第一号住居跡

- 一一一 埴輪土甕底、筒形長、黄褐色
- 一一二 高杯脚(黄褐色)

第二号住居跡

- 二一一 皿(余切底、赤褐色、土師器)
- 二一二 埴底部(はりつけ高台、暗灰色、須恵器)
- 二一三 小形甕型土器(赤褐色、薄手土師器)

第三号住居跡

- 三一一 皿(褐色、成製土)
- 三一二 皿(余切底、ろくろ痕、暗灰色、須恵器)

第五号住居跡

- 五一一 長甕型土器(甕にかかつて出土、赤褐色、細砂を含む胎土、薄手)
- 五一二 長甕型土器(焚口に鳥居状にわたつていたもの、廃棄されたもの利用であらうか、二は口縁部、三は下半部を欠いて結合している。薄手)

② 国府跡調査に伴い発見の住居跡

上野国府跡の調査は、昭和三十六年からはじまっている。これは土師器使用の住居跡の調査の実施がきっかけで、思いがけなく国府跡調査に発展したのである。

昭和三十六年に、元郷社小学校々庭に、土師器が発見されて、校長等の援助によって、土師器使用住居跡の発掘がはじめられたところ、たまたま古建築遺構にあたり、これが八世紀ごろのものとして推定されるに及んで、上野

国府に關係ある遺構ではなからうかといふことになり、土師器使用住居跡よりもむしろこの古建築遺構の方が重要視されるようになってしまった。しかし、土師器使用住居跡と古建築遺構との重複の工舎から、古建築遺構の年代も推定されたのであって、その後国府跡推定地の発掘調査が昭和四十二年までつづけられ、いずれの調査現場でも、この重複が認められているのである。

国府跡の推定地としては、元総社町の總社神社の参道の線を西端とし、大友町の大友神社から南へ直ぐぐに延びている道路及び田圃の境界線を東限とし、北は大友神社から西へ引いた境界線、南は前橋安貞線の道と一応考へられていた。このほぼ八町の中に、国府跡を求めて七回、一〇箇所が発掘が行なわれた。いずれのところでも、皆、土師器の出土を見た。あるいは土師器使用の住居跡が発見されている。多いところでは一〇数箇の住居跡が放在一起、または重複して見ることがある。土師器の型式にしても、石田川式から第一型乃至第五型式にわたり、かつ穀類灰釉のかかった須恵質の碗の破片も各所に長出された。

#### 昭和三十六・七年発掘元総社小学校々廢遺跡

昭和三十六年に元総社小学校々跡において、その表面に埋没していた土師器が発見され、群馬大学文学部史学研究室に通報された。土師器使用の住居跡の存在を予想して、同年十一月に発掘調査が実施されたのである。その結果は八世紀と推定される建築遺構の柱列痕が発見されたために、土師器使用住居跡の調査には手が及びず、翌三十七年の調査に引き継がれた。

昭和三十七年八月、右の建築遺構の確認と土師器使用住居跡の調査が実施された。土師器使用住居跡は七、八戸分の痕跡を認められたが、重複あるいは埋没があつて、完全な住居跡は一戸も残存しておらず、出土遺物も比較的少量であつた。ただ、建築遺構としての掘立柱の痕跡が、住居跡の床面を切り込んでいたので、土師器使用住居跡よりも、建物遺構の方が新しいものであることが確認され、土師器はほぼ第四乃至五型式と推定されるので、建物遺構も八、九世紀ごろのもと考えられた。

#### 昭和四十年発掘大友町村山遺跡

この調査では、建築遺構としては国府跡の倉庫の掘立柱と考えられる痕跡群が発見されたが、その特徴は七世紀初頭の権名山の二ツ岳の儀器による浮石（磁石）を配じた黒褐色土の堆積層の上面から切り込んであり、その上には一三世紀（二八八一）の浅田山頂出の浮石を配じた層が堆積しており、その上に表土がのつていた。二ツ岳の浮石配入の層の上面には、柱痕以外の竹垣、縁束等の痕跡と見られるものがあり、当時の生活面を示し、遺物としては灰釉をかけた白色の胎土で模造に焼成された甕（いわゆる弘仁瓦器）の破片が出土している。この生活面から倉庫の調査と見られる掘込みがあり、この掘込みによつて、この生活面の下層のローム層に埋められていた土師器使用の住居跡が切斷されていた。粘土で造られた甕が発見され、伴出の土師は三型式と見られる。

#### 昭和四十二年発掘の村山の雲雀街道遺跡

この国府跡調査においても、権名山二ツ岳頂出の浮石配りの層の上面が生活面と考えられ、そこに柱痕その他が発見された。その層の下部から古式の土師器が一層体分発見され、その周囲は竈穴式住居跡と見られるが、すでに上層堆積以前に攪乱された形跡があり、住居跡は明らかにできなかった。土師は石田川式系統のものである。

#### 昭和四十一年発掘の元総社小学校々廢遺跡

元総社小学校々舎改築のため、急遽発掘されたものである。校庭遺跡の北に接しているので、昭和三十六・七年調査の建築遺構の遺構をならしたものであるが、ここからは柱痕跡は多数発見されたものの、一建造物として関係が明らかにならず、むしろ、土師器使用の竈穴式住居跡の大型なもの及びこれに重複するもの、その他の発見がなされた。特に注目されたのは高杯の大型のものが出土したことである。第三型式と認められ、

昭和四十二年第一次発掘の昌楽寺北遺跡

総社町総社字昌楽寺鎮内に於ける土地である。昌楽寺の北方で、畑地であるが、近來、宅地化される傾向があり、村山地区の調査結果が國府調査と認定されるものがないので、この地を村山地区第二次の調査に併行して実施された。その結果は、八世紀と推定される建築遺構一棟が発見されたが、同時に土師器使用の住居跡一〇数戸の調査も行なわれた。この一〇数戸はほとんど重複しており、その中にさらに建築遺構である柱穴が掘り込まれていった。

昭和四十三年第二・三次発掘の昌楽寺北遺跡

昌楽寺北遺跡跡第二次発掘の地域の南に接した地域の調査が第二次であり、第一次の北及び西に拡張したのが第三次である。この調査においてはともに土師器使用の住居跡が発見された。その上層部はいずれも第三乃至第五型式のもので、七・八世紀のものに推定される。

以て七回の発掘調査において、この地帯は大體七・八世紀の土師器使用住居の集落地と見られた。ことに、元総社小学校から北へ昌楽寺、さらにその延長の低台地は集落が相当長く継続したものであり、現在でもその地帯から西に、元総社の住家が存在している。その地に、八乃至九世紀ごろの建築遺構が発見されているのであり、また、その建築遺構は官衙的な性格をもったものと推定されるのである。

なお、このほか昭和四十四年から上野園分尼寺跡の発掘調査が行なわれ、四十五年四月には付近で住居跡が発見された。

③ その他

右にあげたのは遺跡地としてある程度の調査が実施されたものである。これはか出土品としては次のようなのがあ

ア 昭和三十七年十一月に、総社町高井の畑から耕作中に出した土師器の脚台付壺型土器で、すでに脚は失われていたが、現在高一四センチ、口径一・七センチ、最大胴径二一センチ、脚のつけ根径四センチ五で、最大径は上部にあって、尻すばみの形のもの、頸部に指でおさえて一周させた太い沈線が入っている。胎土も焼成も良好で、色はこげ茶色である。内部は樋目で整形してある。この壺型土器には外面にすが一面に付着していた、小さなこの土器でも脚台がついており、煮瀝用に使われていたことを示している。この土器は土師器の第二型式と見られ、六世紀ごろのものである。

イ 昭和三十八年四月二十日、総社町高井と総社町総社の境にある日新電機境内の中央西寄りの地点で、水道の配管工事中出土した。表土面から四〇乃至五〇センチの下部で坏と甕との二個体である。第三型式にあたる。

ウ 昭和三十八年九月に、石倉町の利根橋から最初の三差路の角から北へ一〇メートルの道路上で、水道の配水管工事中、地下五〇乃至六〇センチの地点から出土した。小形脚台付壺型土器と脚台付壺型土器の脚台部である。地層はローム層ややや上部の黒色土層である。土師器の第二型式である。

エ 昭和四十三年ごろに、総社町総社の山王地区の南方、元総社町に通じる道路の傍らから、水道管設置作業の際に出土したもので、前橋市水道局工務課から届けられた。土師器の坏で第三型式にあたる。

オ 昭和四十五年二月に、総社町の間屋団地で出土されたもので、土師器の甕である。これは第一型式にあたる。これらは最近の教例をあげたにすぎないが、総社町、大友町、石倉町の地帯は、ほとんど全面的に土師器使用の住居跡が分布しているものと見られ、土師器使用時代における集落の存在を推定させるところであ

る。この地帯におけるこれらの土着の使用者たちは、多くが農業に従事していたのであることは、その住居の立地等からして耕田地帯であったことがあわせ考えられる。一方においては国府内及びその周辺に住民として、地方においては、総社町に残存する七・八世紀の大古墳や山王廟寺等の大建築を造りあげた豪族の被支配者として、この地を選びここに住んで生活を営んでいたものである。

## 第二章 豪族の支配と古墳の築造

### 序 節

本市内には、最近まで古墳がおびただしく存在していた。古墳は言うまでもなく墳墓であるから、そこに埋められていた人、埋めた人が多数住んでいたことになる。県下の他の地域と比較しても、数といひ、質といひ、他をはるかにしのいだものが多い。古墳築造のころの文化の中心地であったと言えよう。

本県は古くは上毛野國と言われていたようである。藤原宮跡(今群馬県西野村)出土の木簡によると、たしかにそのころは上毛野國と言っていた。しかし、『日本書紀』ではほとんど上野國と記してあって、上毛野國とあるのは安閑天皇と齊明天皇の兩紀に各一個所ずつだけなのである。それゆえ、いつから上毛野國と言われたのかはつきりしない。

また、この地方を支配していたのは上毛野君という氏族であつて、その祖先は崇神天皇の皇子崇城入彦命であつたと云われている。『日本書紀』には、豊城入彦命が天皇の命令で、東國を前めしめられたと記してあり、上毛野君の祖となつてゐる。けれども、上毛野君とはつきり記してあるのは安閑天皇紀の上毛野君小胸がはじめてであり、それ以前には必ず祖となつてゐる。いつから上毛野君と言つたかは不明である。

本県の大古墳は、大豪族がつくつたものであり、この地方の支配者が築いたものであることは推定できようが、それを直ちに上毛野君の墳墓であるとすることはできない。古墳には年代がはつきりしているものがほとんど無いから、いつごろのものであるか研究した結果から見る必要がある。『日本書紀』の内容も、伝説や神話的部分が多いから、検討してみなければならぬ。

「上毛野君」といふのははじめは上毛野地方の支配者といふことであつたが、上毛野國造が任命されると、その時上毛野君であつた豪族が國造になつたので、その豪族を引き続き上毛野君とよんだようである。それ以後は上毛野君といへば、その豪族の子孫を指すようになった。これを姓（な）と言ふのである。それゆゑ、國造になつた時の上毛野君であつた豪族が、それ以前に一系の血統で上毛野君であつたかどうかはわからない。本県下に古い大前方後円墳が、前橋市、高崎市、藤岡市、伊勢崎市、太田市等にあつて、前橋市のが最も古く、太田市、高崎市、伊勢崎市、藤岡市と順次、新しいものが出てきているとしても、上毛野君といふ姓の豪族の祖先が、その地を一巡して住んでいたときめることはできない。

前橋市に最も古い古墳があり、藤岡市に他に比して新しいものがあつても、他の三市には大体同じころのものがあり、太田市には数も多い。その地ごとに順次大古墳を造つたものである。すると、それぞれ地域ごとに大豪族がいたことになるのであつて、それらは一系であつたものもあろうが、他の豪族が代つてその地位を得たもの

のもあろう。上毛野地方の支配者という意味の上毛野君は一豪族一系であつたときめてしまえない。したがつて、『日本書紀』に上毛野君という姓の豪族が記載されているが、その豪族が最初から上毛野地方を支配していたものとして、古墳の新古の順序に従つて、前橋市、太田市、高崎市等の地域に順次移り住んだものとする事はできないのである。

とこが国造が置かれるようになると、上毛野君が国造に任命された。従来の支配のままに国造となつたのである。国造を置くということは、大君の統治に編入され、組織化されたことであり、それは東國を入れた統一國家の確立のことである。この時期ははっきりしないが、少なくとも「くに」という言葉の成立後であり、「くに」と「みやつこ」という両語を結び合わせるのに、「の」が用いられているころのことである。六世紀ごろのことではなからうかと思われる。上毛野国造はそれ以後は上毛野君の一豪族によつて世襲されたようであり、七世紀の中ごろの大化改新以後、中央に移つて行ったようである。

すでに天智天皇治世の始めには、上毛野君稚子<sup>チコ</sup>は新羅征伐におもむき、天武天皇九年（六八二）には、上毛野君三平<sup>ミナヒラ</sup>は歴史編修事業に關係せしめられていた。また、天武天皇十三年（六八五）には新羅征伐の姓のうち、第二位の朝臣を上毛野君に与えられて、それ以後は上毛野朝臣と稱するようになった。そして上毛野君という姓が上毛野と君とに分離されて、君の代りに朝臣という新朝の姓が使用されるようになり、上毛野という氏が起るのである。

しかし、この朝臣を与えられたのは、上毛野君を尊する一族全部ではない。特定の個人及びその子孫を対象としたものである。それゆゑ、八世紀中ごろになつても上野國に上毛野君を尊するものがあり、その使用は特に賜姓されなくとも続いていたのである。天平十二年（七四二）には多胡郡八田郷に上毛野朝臣坊というのがある（『新羅征伐の経緯』、天平十二年には勢多郡少領郡に上毛野朝臣足人という名が見えている（『新羅征伐の経緯』）。これは天武天皇代の賜姓後の分家であるか、あるいはそれを超えることあまり遠くないころの分派であろう。

大古墳はたいして小、中古墳とともに古墳群を形成している。古墳の中には壑穴式古墳と横穴式古墳とがあり、前者は六世紀終わりごろまで、後者は六世紀中ごろから八世紀中ごろまで続いている。ただし、七世紀中ごろ以後は築造の數も少なく、墳丘の規模は小型になるが、内部の構造は豪華となる。特定の豪族にのみ、構築することができたものと考えられる。横穴式古墳の築造期は七世紀前半であり、大前方後円墳から小円墳まで果々と進んでいく。この横穴式古墳は小円墳でも相つた財力と技術とを必要とするものであるが、その數と、古墳群の分布と、人口及び埴敷、地形等から推定すると、特定の豪族層によつてのみ築造されたものではなく、かなり一般的であつて、律令制のころのいわゆる郷戸層よりもさらに下層にまで及んでいたものと見られる。

大古墳の分布は、壑穴式古墳は平坦地の水辺地帯であり、横穴式古墳になつて山麓地帯にも移り、さらに七世紀後半から八世紀になると、主として平坦地及びその付近に認められる。土師器の分布も古墳の分布に依り、さらに古墳の分布を見ない地域にも発展しており、須恵器は六世紀後半から横穴式古墳に伴つて多く発見される。須恵器を混じえた土師器使用の住居跡もそのころ以後に多い。この大古墳の分布は、それらが属する古墳群の中、小古墳にも見られ、山麓地帯の古墳は横穴式のものが多い。平坦地にあつては、壑穴式、横穴式が混在している。

これらのことから古墳の始めのころは水辺地帯で、ことに游水池周辺の自然灌漑による水田耕作が行なわれ、次いで山の傾斜地を流下する水の利用による水田開墾がはじまり、やがて平坦地に用水溜による引水の利用が起ったものと見られる。これらの灌漑用水の方法は順次受容されたものであり、流下水の利用は六世紀中ごろ、用水溜の利用は七世紀後半ごろと推定される。この利用によって新しい水田の開墾が行なわれたのであるが、この時は、旧方法によっていた全農民が新地域に移動したのではなく、他より移動による人口の増加に伴って新地域が開拓されたのではなからうか。新地域はやがて、その生産が他を凌いだものと見られ、大古墳の築造が新地域に見られるのである。

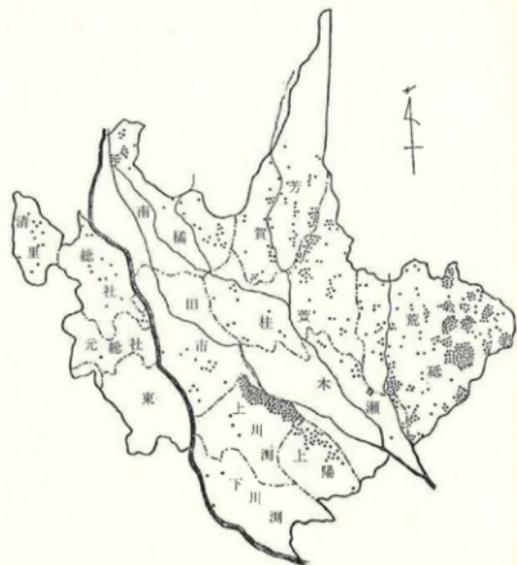
このことは異下全般についても言い得るのであるが、ことに前橋市内では、前述のとおり後四町に最古の天神山古墳があり、隣接してそれに次ぐ劔倉町の八幡山古墳がある。六世紀後半からのものは、西及び東大空町にわたる前二子、中二子、後二子の三古墳があり、七世紀後半から八世紀にかけてのものとして、總社町に宝塚山、蛇穴山の両古墳がある。また、文京町三丁目には前橋二子山、總社町には總社二子山の各大前方後円墳があり、七世紀前半のものと思われる、劔倉付近では引き続き、總社町ではそのころから豪族の居住を示すものと考えられる。その豪族としては、<sup>上毛野君、劔倉君、有馬君</sup>、<sup>阿利真公</sup>などがあげられる。

特に旧荒盛地区の、東西大空町地帯は六世紀後半における大豪族の居住を意味するもので、この大豪族は、そのころ、祖先を豊城入彦命、崇拝神を赤城とした上毛野君と推定されるのであり、その一族が勢多郡の郡司であることも、この地帯での居住を証明するものであると考えられる。このようなわけで、古墳築造のころになつて、はじめて豪族の支配がはっきりしてくる。

第一節

古墳の分布

本市における古墳の分布は旧利根川の左右沿岸地帯と、荒砥川左岸及び旧荒砥村北部に特に密である。赤城山南麓地帯は右の旧利根川左岸の分布範囲から派生して散在しているようであるが、勢多郡富士見村にあっては、白川沿岸に密集した地帯があり、市内に入つてはこれに接続していると思われる。旧利根川の



前橋市内古墳分布図

沖積地には西片貝町の大塚古墳(仮称桂堂大塚)の一基のみが現存している。旧利根川右岸地帯の古墳群は、総社町から東南に向かい、前橋市街地をぬけて、朝倉町、後岡町の東端を過ぎ、山王町の東端にまで、延々二〇餘里に及んでいる。この旧利根川に沿った洪積台地の低座の上面には幅一〇〇肩ぐらいの帯状の古墳群が存在している。

昭和十年の古墳調査台帳は県教育委員会社会教育課に保存されていて、すでに昭和十三年に「上毛古墳綜覧」として公表されている。そのうち、本市分の内容を同書から転載すれば次のようである。

前橋 第三表 古墳 綜覧

備考欄( )内は出土品

古墳番号	形状	現状	発掘	所在地	面積	大きさ	高さ	所有者	備考
1	二子山前方後円墳	雑木地	有	天川町東下一五七	畷	四・三	五・五	国有地	昭和三年史蹟指定 古墳群(大塚古墳)に属す
2	不二山	雑木林	有	高田町林三五七 三五八	畷	六・〇	五・五	国有地	昭和三年史蹟指定 古墳群(大塚古墳)に属す
3	熊鷹山帆立貝式古墳	畑	有	高台七三二	畷	九・六	三・三	菅藤 米次	土器片、土器
4	不詳	畑	有	林 不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	(墳輪破片、土器)
5	不詳	畑	有	高台四一四	不詳	不詳	不詳	不詳	
6	円墳	畑	有	高台四一四	不詳	不詳	不詳	橋本 國太	(刀、金環)
7	不詳	畑	有	九二五六	不詳	不詳	不詳	橋本 國太	(刀、金環)

8	多津塚	雑木地	有	天川原八〇八	畷	一七・三	不詳	永寿寺	
9	不詳	雑木地	有	速雀町二八	畷	三・三	不詳	国有地	
10	ボシ山	雑木林	有	評南曲輪町一〇	畷	三・三	不詳	国有地	
11	不詳	雑木林	有	曲輪町八〇	畷	二・四	不詳	八寿延寺	馬場天主閣其上ニアリト伝
12	大塚山門	畑	有	六供一、二二九	畷	二・四	不詳	八寿延寺	刀、鏡、古銭
13	不詳	畑	有	九九四	畷	六・〇	不詳	高橋 秀嘉	石佛アリシトイフ
14	不詳	畑	有	一八九	畷	三・〇	不詳	石佛アリ	小祠アリ(土器)
15	カボトウ	畑	有	一七一	畷	二・二	不詳	丸荒木 武平	稲荷社アリ

上川 湖

古墳番号	形状	現状	発掘	所在地	面積	大きさ	高さ	所有者	備考
1	円墳	現存	有	評上佐島一、二二一	畷	四・三	八・五	八春日神社	
2	覆輪墳	畑	有	一、三五七	畷	三・七	不詳	不詳	山本三石神社 石佛アリシトイフ 石佛アリシトイフ
3	正平輪	畑	有	九五七	畷	一・八	不詳	三川井 耕作	
4	湾	畑	有	上郷倉上海道一、七六七	畷	二・五	不詳	八田村 金作	
5	天神山門	畑	有	朝倉天神山一、七二四	畷	三・三	不詳	内山 岩寛	



58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42
雑草地																
無	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
九〇九																
一元																
哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

(馬ノ瓜)

76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59
雑草地																	
無	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有	有
九〇九																	
一元																	
哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭	哭
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三



下川淵

古地名	形状	現状	有苑	所在地	面積	大きさ	高さ	所有者	備	考
3	前方後円神社境内	有苑	無	三公道五四五	六・八	全長不明	後面不明	不明	石垣トナメス、後門部敷存ス	
2	円	有苑	有	龜里南門一、三六七	二・六	全長不明	石井	石井慶彦	石佛露出、毘陀ヲ存ス	
1	浅間社	有苑	有	橋手 五六二 五六二	二・六	全長不明	石井	藤太	石佛ノ一部現存	

上 陽 (但し前橋市に合併した地域分)

古地名	形状	現状	有苑	所在地	面積	大きさ	高さ	所有者	備	考
6	文珠山	前方後円	無	山王 前田	三・六	不明	不明	不明	火ノ見アリ	
5	カマ	山	有	不明	六	不明	不明	不明		
4	カマ	山	有	不明	六	不明	不明	不明		
3	カマ	山	有	不明	六	不明	不明	不明		
2	カマ	山	有	不明	六	不明	不明	不明		
1	カマ	山	有	不明	六	不明	不明	不明		

古地名	形状	現状	有苑	所在地	面積	大きさ	高さ	所有者	備	考
7	阿弥陀	山	有	不明	五・三	不明	不明	不明		
8	阿弥陀	山	有	不明	五・三	不明	不明	不明		
9	阿弥陀	山	有	不明	五・三	不明	不明	不明		
10	阿弥陀	山	有	不明	五・三	不明	不明	不明		
11	阿弥陀	山	有	不明	五・三	不明	不明	不明		
12	阿弥陀	山	有	不明	五・三	不明	不明	不明		
13	阿弥陀	山	有	不明	五・三	不明	不明	不明		
14	阿弥陀	山	有	不明	五・三	不明	不明	不明		
15	阿弥陀	山	有	不明	五・三	不明	不明	不明		
16	阿弥陀	山	有	不明	五・三	不明	不明	不明		
17	阿弥陀	山	有	不明	五・三	不明	不明	不明		
18	阿弥陀	山	有	不明	五・三	不明	不明	不明		
19	阿弥陀	山	有	不明	五・三	不明	不明	不明		
20	阿弥陀	山	有	不明	五・三	不明	不明	不明		
21	阿弥陀	山	有	不明	五・三	不明	不明	不明		
22	阿弥陀	山	有	不明	五・三	不明	不明	不明		
23	阿弥陀	山	有	不明	五・三	不明	不明	不明		



元統社

古墳番号 同名称	形状	現状	有発掘 無掘	所在地	面積 大小	高さ 尺	所有者	備考
1 弥野山円	形桑	園	有 大正二三	元統社弥野九四二	三三 三三	尺	外三三五新 内三三三	(金環大、刀一振) (小二)

清里

古墳番号 同名称	形状	現状	有発掘 無掘	所在地	面積 大小	高さ 尺	所有者	備考
1 諏訪山円	形桑	神内内園	有	青葉子 乙六八一	二二 二二	尺	諏訪神社	石佛アリシトイフ (環鏡破片) 出土品所在不明
2 五輪椽	丘	石内	有 明治二〇	青葉子 乙三八	三三 三三	尺	三松井 正一	出土品所在不明 (土刀、鹿玉)
3	森	陵	有 明治二〇	青葉子 甲一五七	二二 二二	尺	元神明宮	神明宮有
4	燧	端	有	青葉子 甲一九五	二二 二二	尺	三角田 雄二	
5 八ヶ塚	燧	端	有	青葉子 乙二〇〇	二二 二二	尺	清木末五郎	四割ノ石佛アリシトイフ (環鏡破片)
6	燧	端	有	青葉子 甲四七	二二 二二	尺	三松島伊三郎	
7 二子塚	燧	端	有 明治二〇	青葉子 甲四一七	二二 二二	尺	清水末五郎	石佛有
8	燧	端	有 明治二〇	青葉子 乙四二七	二二 二二	尺	七揚淺勝太郎	出土品所在不明 (土刀、鹿玉)
9	燧	端	有 明治二〇	青葉子 甲一四	二二 二二	尺	八ヶ塚	

13	12 塚 塚	11	10
燧	燧	燧	不詳
燧	燧	燧	不詳
燧	燧	燧	不詳
燧	燧	燧	不詳
燧	燧	燧	不詳
燧	燧	燧	不詳
燧	燧	燧	不詳
燧	燧	燧	不詳
燧	燧	燧	不詳
燧	燧	燧	不詳
燧	燧	燧	不詳

南橋

古墳番号 同名称	形状	現状	有発掘 無掘	所在地	面積 大小	高さ 尺	所有者	備考
7	円	桑	有	上細井西畑二〇ノ一	三三 三三	尺	三長谷川英七	明治三六、七年墳発掘 金環、刀剣十五挺人骨、燧
6 丑子塚	前万形	山	有	下細井鎌倉八五ノ一	三三 三三	尺	三長谷川英七	明治三六、七年墳発掘 燧、刀剣、人骨、燧
5	燧	林	有	上細井西畑二四五	二二 二二	尺	三長岡 本平	明治三〇年墳発掘 燧、刀剣、人骨
4	燧	林	有	東丑子	二二 二二	尺	三内田 伝重	環鏡
3	燧	林	有	三三七五	二二 二二	尺	三内田 伝重	環鏡
2	燧	林	有	三三七九	二二 二二	尺	三内田 伝重	環鏡
1	燧	林	有	三三七九	二二 二二	尺	三内田 伝重	環鏡

第二章 祭儀の支配と古墳の築造











58	はつこ	円	聖雑木林	有	獲渡入田九六一	二二	東西	八木村 両助	(安刀一尺三寸)
59	〃	〃	〃	〃	清木、〇二五ノ	三〇	〃	吉沢林次郎	〃
60	〃	〃	〃	〃	〃	一〇三	〃	小林儀三郎	〃
61	〃	〃	〃	〃	〃	一〇〇	〃	三井上紋十郎	〃
62	〃	〃	〃	〃	〃	一〇三	〃	小林儀三郎	〃
63	〃	〃	〃	〃	〃	一〇九	〃	岡替戸、〇七九	〃
64	〃	〃	〃	〃	〃	三〇	〃	神前前甲、三三二	〃
65	〃	〃	〃	〃	〃	三〇	〃	大目甲、二二四	〃
66	〃	〃	〃	〃	〃	三〇	〃	〃	〃
67	〃	〃	〃	〃	〃	三〇	〃	〃	〃
68	〃	〃	〃	〃	〃	三〇	〃	〃	〃
69	〃	〃	〃	〃	〃	三〇	〃	〃	〃
70	〃	〃	〃	〃	〃	三〇	〃	〃	〃
71	〃	〃	〃	〃	〃	三〇	〃	〃	〃
72	〃	〃	〃	〃	〃	三〇	〃	〃	〃
73	〃	〃	〃	〃	〃	三〇	〃	〃	〃

木 瀬

74	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
75	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
76	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
77	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
78	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
79	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

1	前方便円竹	戴明治一〇	東上野村中甲五四	三二	八松村 森平	若宮八幡祠有	〃
2	円 型上野神社	〃	〃	三二	〃	〃	〃
3	松山塚	〃	〃	三二	〃	〃	〃
4	〃	〃	〃	三二	〃	〃	〃
5	〃	〃	〃	三二	〃	〃	〃
6	〃	〃	〃	三二	〃	〃	〃

7	円	聖宅	地	有	小島田八日市五〇四	一六〇	六	云	六下田 奉	(巻)
8	〃	〃	〃	無	〃	一六	三	云	二新井卯太郎	(鏡、馬具刀、鏝、土器)
9	〃	〃	地	有	明治三九	〃	三	詳	新井卯太郎	(外三名)
10	前方移円	〃	〃	有	筑井八日市四四〇/二	〃	不詳	忘	七九橋亦存伊	(須知、土儀、鳥)
11	不	〃	〃	〃	〃	五二	詳	〃	〃	(遺骨)
12	〃	〃	〃	〃	昭和二	〃	〃	〃	奇藤登高司	(金環、人面)
13	〃	〃	〃	〃	〃	四〇/一	〃	〃	〃	(金環、勾玉、切子玉)
14	円	聖墓	地	無	上増田宮原乙、六九四	〃	〃	〃	二奈直 又一	〃
15	〃	〃	〃	〃	〃	一、七〇九	〃	〃	五奈良長太郎	〃
16	不	〃	〃	有	〃	〃	〃	〃	中島 安次	石種現存
17	古葉陣	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	須藤 浅八	(骨身)
18	諏訪山	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	八近戸神社	(直刀、人骨、軍配)
19	諏訪	〃	〃	〃	諏訪三〇	〃	〃	〃	九大山 郭江	(直刀、石鏡)

荒 砥

1	円	聖山	林	有	荒子新宿一、一九一	三・二	三	尺	荒島 英司	石種現存
2	代官	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	荒島 卓司	〃
3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	三田中 察平	〃
4	方	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
6	かね塚	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
7	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
8	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
9	デン	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
10	リ山	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
11	不	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
12	円	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
13	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
14	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
15	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃





85	門	不	有	西大宮下諏訪二、一八六	二〇〇	三山越布衣邸
86	門	不	有	小稱河二七三	一〇〇	三岡野 芳康 旗趾有
87	門	不	有	下諏訪二、二〇〇	一〇〇	高橋 広吉
88	門	不	有	小稱河甲二六九	一〇〇	三山越格次邸 稲利権有
89	門	不	有	二七七	一〇〇	三岡野 芳康 八幡陣有
90	門	不	有	丙二六九	一〇〇	三岡野 芳康 八幡陣有
91	門	不	有	大稱河甲三五四	一〇〇	三岡野 芳康 八幡陣有
92	門	不	有	三六八	一〇〇	三岡野 芳康 八幡陣有
93	門	不	有	水口山乙二四八	一〇〇	三岡野 芳康 八幡陣有
94	門	不	有	中廣庚一三三	一〇〇	三岡野 芳康 八幡陣有
95	門	不	有	上廣庚九二	一〇〇	三岡野 芳康 八幡陣有
96	門	不	有	五七	一〇〇	三岡野 芳康 八幡陣有
97	門	不	有	二七	一〇〇	三岡野 芳康 八幡陣有
98	門	不	有	五七	一〇〇	三岡野 芳康 八幡陣有
99	門	不	有	一六	一〇〇	三岡野 芳康 八幡陣有
100	門	不	有	六二	一〇〇	三岡野 芳康 八幡陣有
101	門	不	有	六二	一〇〇	三岡野 芳康 八幡陣有
102	門	不	有	六二	一〇〇	三岡野 芳康 八幡陣有

102	門	不	有	六二	一〇〇	三岡野 芳康 旗趾有
101	門	不	有	六四	一〇〇	三岡野 芳康 旗趾有
100	門	不	有	九二	一〇〇	三岡野 芳康 旗趾有
99	門	不	有	甲七〇	一〇〇	三岡野 芳康 旗趾有
98	門	不	有	甲七〇	一〇〇	三岡野 芳康 旗趾有
97	門	不	有	九一	一〇〇	三岡野 芳康 旗趾有
96	門	不	有	九二	一〇〇	三岡野 芳康 旗趾有
95	門	不	有	九五	一〇〇	三岡野 芳康 旗趾有
94	門	不	有	五五	一〇〇	三岡野 芳康 旗趾有
93	門	不	有	六〇四	一〇〇	三岡野 芳康 旗趾有
92	門	不	有	六〇四	一〇〇	三岡野 芳康 旗趾有
91	門	不	有	六〇四	一〇〇	三岡野 芳康 旗趾有
90	門	不	有	六〇五	一〇〇	三岡野 芳康 旗趾有
89	門	不	有	六〇六	一〇〇	三岡野 芳康 旗趾有
88	門	不	有	六二八	一〇〇	三岡野 芳康 旗趾有
87	門	不	有	六二八	一〇〇	三岡野 芳康 旗趾有
86	門	不	有	六二六	一〇〇	三岡野 芳康 旗趾有

135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	
伊勢山																	
山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	
無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	
四六八																	
一〇〇																	
七郎田平次郎																	

153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138	137	136	
伊勢山																		
山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	
無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	無	
四六八																		
一〇〇																		
七郎田平次郎																		

第二編 皇族の支配と古墳の発達



205	204	205	202	201	200	199	198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188
松林	雜木林	松林	雜木林	山煙木林	雜木林	松林	松林	雜木林	松林	雜木林	松林						
評	不	評	評	無	有	無	無	無	無	有	有	無	無	有	無	無	無
一、三三三																	
六六																	
評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評
石川 富榮																	
段及磯趾有																	

223	222	221	220	219	218	217	216	215	214	213	212	211	210	209	208	207	206
松林																	
評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評
一、三三三																	
六六																	
評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評	評
石川 富榮																	
段及磯趾有																	





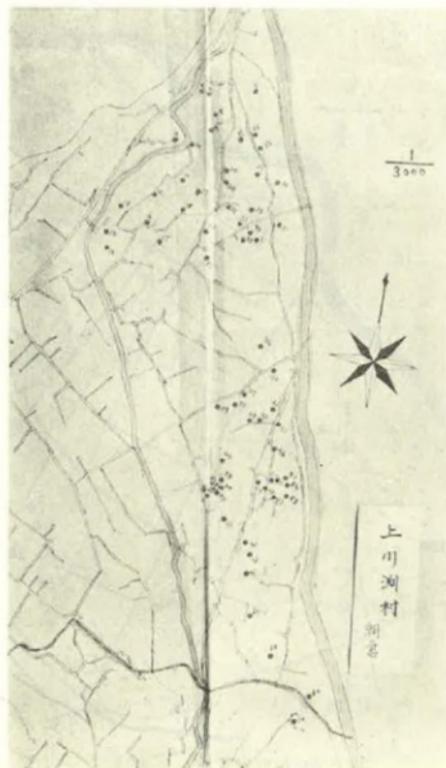




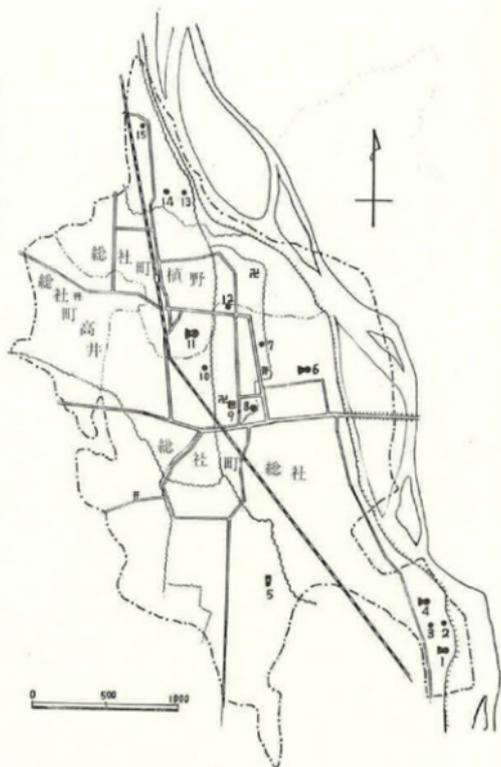




第43図 上川湖（後名）古墳分布図



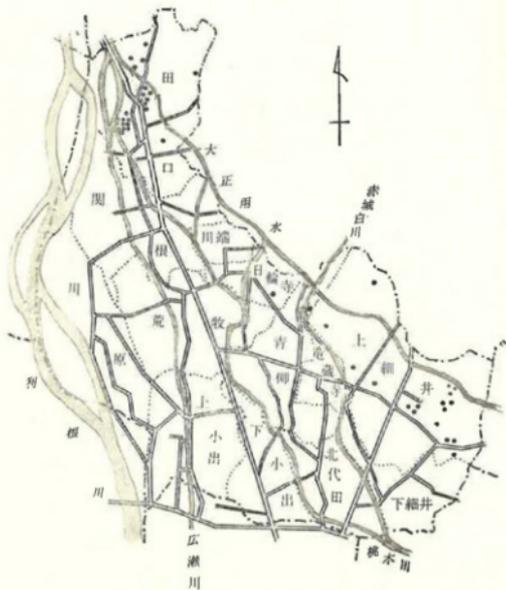
第44図 上川湖（前名）古墳分布図



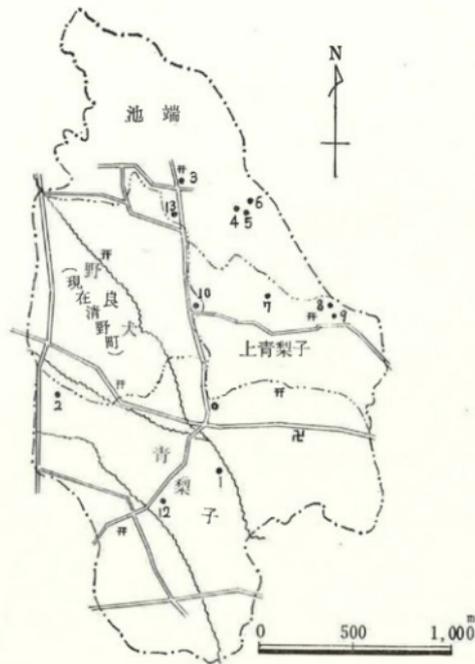
第47図 総社古墳分布図



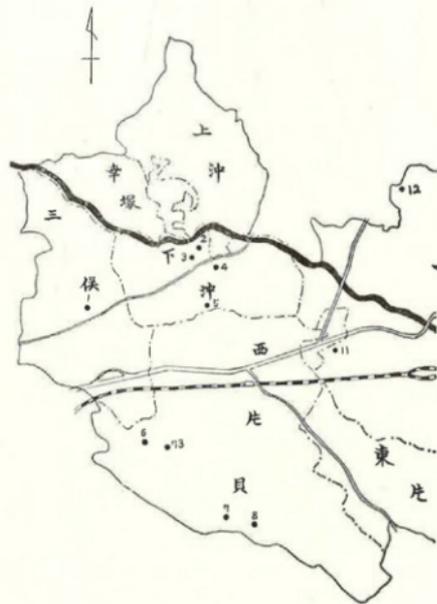
第46図 上關(西善町、東善町、山王町)古墳分布図



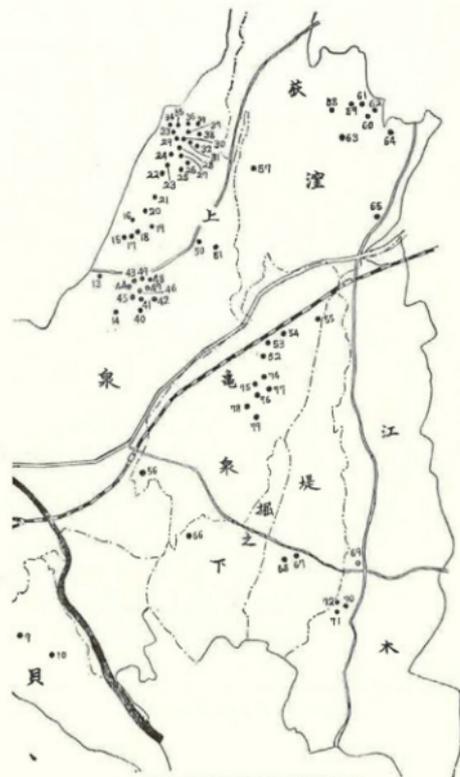
第43回 南橋古墳分布図



第48回 伊勢古墳分布図



第54図 桂置西部古墳分布図



第55図 桂置東北部古墳分布図



第55図 荒砥古墳分布図



第52図 芳賀古墳分布図

## 第二節 古墳の調査

古墳文化を知るための唯一の資料は古墳である。古墳も発掘調査を証なければ正確な資料を得ることはできない。一古墳群の一基だけを調査し得たとしても、それでその古墳群全体を推定することは誤りである。厳密に言えばその古墳群に含まれたすべての古墳を発掘調査し、比較検討し、総合的に帰納することが必要である。

昭和十年の県下古墳の一斉調査の結果では、現在の前橋市には前述のように七六五基が記録されている。県下全体では八四二三基であった。この調査は、時の群馬県知事若島清吉氏の発意によって行なわれたもので、その指導は黒坂勝美博士であり、この記録を集約して、昭和十二年に群馬県によって刊行されたのが「上毛古墳総覧」である。

この古墳の一斉調査は古墳の所在を確かめ、分布を明らかにしたものであって、発掘調査あるいは実測調査をしたのではない。この種の調査は、それ以前には宮崎県で行なわれたのみであるので、群馬県のこの調査によって、本県の古墳数は全国一位と言われた。

従来は県下で数基の古墳が発掘あるいは実測調査されたのみであった。前橋市にあっては、国の保存行政の必要上、西大室及び東大室にまたがる前二子、中二子、後二子の三古墳、天川町（現在の文京町三丁目）の二子山古墳、総社町の二子山古墳等五古墳についての実測調査が行なわれたにすぎない。これらは国から保護の指定を受けていたので、現在でも保存の処置がなされているが、他は明治初年の太政官布告によって破壊が禁ぜられて

はいなものの、全く放棄の状態であり、荒廃されているものが多かったのである。

このおびただしい古墳が現在ではほとんど壊滅に瀕している。第一の破壊は戦時中の強制開墾による。食糧補給のための米麦の作付けで、畑とすることのできる土地の開墾を強制されたためである。第二は工場誘致、団地造成、土地改良、道路新設等により、次々に壊滅しつつあることである。本市の古墳は全部で七六五基のうち調査を実施されたものが僅かに三〇数基である。これは総数の一割にも満たないものであるが、その中には県内最古のもの、最下限のものなどが含まれている。最古のものは後関町の天神山古墳で、四世紀中ごろと推定され、最下限のものは総社町の蛇穴山古墳で、八世紀前半のものと考えられる。この四百年間に、この地方の古墳は築造されたものである。これらの古墳に推定の時を与えて、はじめてこれらの古墳を歴史解釈に使用することができるのである。

よって次にまず調査された古墳について年次を追って述べることにする。

## 1 上沖上ノ山古墳

上毛古墳総覧  
調査編

この古墳は上沖町俗称上ノ山にあったが、上毛古墳群製作成時には屋敷内の竹藪にあったため、調査掘れのものであった。昭和二十一年十二月上旬から切崩しが始められ、二十日前後から石積が多く表われたので、石工によって徐々に地盤しはじめられた。十二月三十日ほどになり直刀四本が発見されたのと、石の石は石室用材であるところから、この地は古墳であったことがわかり、同月三十一日に調査されたのである。

墳丘は四角で径約七・七五〇（半径約八・八〇）、石室は横穴式で、自然石（河原石）を平積みしてあった。石材は安山岩

である。奥壁は幅一厨六、長さ三厨三〇あり、壁石は高さ約八〇センチを測り得たにすぎない。羨道部は全く失われ、規模は不明である。この壁台の裏に栗石五ないし一〇センチのもの、五〇センチぐらいの厚さに置き、その外側に土を寄せて、さらに二〇ないし三〇センチの栗石で葺きあげられていた。石室の中軸の方向は南西四五度角である。

出土品は甕戸四本が奥に向かつて右側の壁下にかためられ、壁壁から一厨四〇の辺で発見された。奥壁から七〇センチ離れたあたりは、一帯に普及び骨粉が散乱し、そのうちから甕戸耳環一箇が見出された。甕戸は大人の大口歯二六顆、その破片散開、小臼歯と思われるもの四個、小人の歯と思われるもの六個である。恐らく大人二、小人の歯と推定される。普及び歯は土庫所有者の奥寺善勝寺(町名)に納め、直刀及び耳環は群馬師範学校で保管した。この古墳は出土品のみを道し、墳丘、石室はその後破壊、平夷されてしまったのである。(この古墳は「上毛古墳総覧」桂葉村第一号ないし第三号とは別個のものである。)

## 2 今井B号古墳

上毛古墳総覧  
荒城第二二二号

この古墳は、今井町宇白山東八二九番地所在の竪穴式の円墳である。今井町には、葛城川近く、前方後円墳の今井神社古墳があり、その東方に円墳が群在している。昭和二十四年二月、堀田開墾により発掘されたので、同月六日調査され、三月三十日に隣接の今井A号古墳発掘調査に際して、このB号古墳も再調査が行なわれた。

その結果、石塔は浅い小さなもので、長軸の高は北四五度角であり、長さ一厨〇六、東北幅七五センチ、西南幅五〇センチ、河原石の長さ二〇ないし四〇センチ、短径一五センチのものを小口探みにし、両端には長さ約一厨、幅約二〇センチの石を置いて、深さは奥壁はほとんど取り除かれ、根石のみとなっているが、東北端は約四〇センチある。底部には扁平な河原石が敷かれ、西面端の短軸の外側にまで及んでいて、その部分には砂利が散乱している。

この石塔外方の状態は、佐波郡赤羽村大字今井の轟山B号古墳に酷似している。ともに一方の短軸外にまで石を敷き、砂利を置いていたのであり、石塔形もその末梢まで続いているのである。竪穴式土室の墳墓部に用いている、あるいはこれらの発掘が朝倉町小丸那古墳の羨道部としてあらわれるのではないかと考えられている。

出土品は、直刀一、土師器一で、他は不明である。なおこの古墳の裾部から、鎌倉期の慶長火製の五輪塔の部分が混在して発見された。そのうちには、ヤキ大形の土師器を兼ねた地輪もあり、鎌倉時代の葬法を知るものとして群馬大学研究室に保存されてある。

## 3 今井A号古墳

上毛古墳総覧  
荒城第二二二号

この古墳は、今井町宇白山東八二五番地であった。小洲の円墳であるが、東及び西側は削りとりたてて変形していた。昭和二十四年に、今井B号古墳に次いで、三月二十八日から三十日までの三日間、発掘調査された。調査時の規模は南北二厨、東西一八厨、高さ三厨である。横穴式石室を有し、壁は自然石乱石積みであり、天井台は西端が石室内に落下していた。奥壁前の小部分を調査し得たのみである。その際、奥壁きわから耳環一箇を発見している。

## 4 楠峰古墳

上毛古墳総覧  
桂葉第二九号

この古墳は上泉町宇津原三二四番地であり、周囲の土地とともに開墾破壊され、天井石が露出して、僅かに円墳であることが知られる程度のものであった。この土地は赤城山南麓の裾野に、谷の間にはさまれてできた高地上であって、その東端に近いところにかつて一〇数基の小円墳が散在していた。昭和十年の調査には一五基記録されているが、現在は僅かに二基で

総は墳墓のみである。その中の一基がこの古墳で、他の一基はその南一〇〇呎のところに隣接している。前橋旧市街の東北約六呎との距離で、標高一五〇呎前後である。昭和二十六年二月二日から四日間、発掘調査が行なわれた。

外形は直径一七呎五〇、高さ二呎五〇位の墳丘らしいものがある程度で、破壊しつゞされ、内部も土が別れ、天井が落ちていて、はじめは人力による破壊かと思われたのであるが、発掘の結果は左層のみの崩壊によるためのものであり、自然力によるものと推定された。石室は横式で、自然石乱石積み両袖壁のものであり、その主軸線は南中線より西へ五度ほど片寄っていた。その寸法は第三四表のとおりである。

この表によると、支室の長さは幅の二倍である。

石材は自然石といっても、おもに自然崩壊による角礫であつて、河原石の如き丸いものではない。天井石は奥の二石だけのことである。この石室で注意されるのは羨道部の構造である。この構造はおんどの積層といつぱいに施されていたもので、墳墓研究の好例である。約一呎九〇の羨道長の両端に、やや大きめの石をおの積層をあげて、その中間に大小の石塊を詰め込んだもので、いわゆる詰め込みになっている。その石積みの様子は、奥の方のは普通幅幅いばいに四〇呎の長さで積みあげられ、入口の方のは羨道の端から四〇呎が入ったところから入口にいつぱいに積まれ、かの羨道の外方にまで及んでいた。その全長七〇呎である。殊に、その入口部の石積みは二段に積まれ、下段の高さ二七呎、上段は平らになつて、

第34表 榑峯古墳石室

規模	左石	右石	高さ
全長	5.15	5.55	m
支室	3.15	3.45	3.66
支室	1.85	1.35	1.35
支室	1.50	1.20	?
羨道	1.93	1.93	
羨道	0.76	0.78	
羨道	1.20	1.00	?

石室の構造については、その平面図形に表れたところは自然石積みのため、かなり不整である。しかし、自然石といつても割れ石であるから、平らな面を出して積んであるために、壁下の線は各壁とも比較的一直線を示している。殊に支室の右壁下の線は真直であり、袖の出が約二七呎であるが、それから入口に向かつて羨道右壁は次第に外開きになっているので、入口の

第35表 榑峯古墳の主な出土品

	直刀A	直刀B	直刀C	小刀
全長	72 <sup>cm</sup>	55 <sup>cm</sup>	73 <sup>cm</sup>	26 <sup>cm</sup>
刀身	長 58 幅 4 厚 1	長 45 幅 3 厚 0.7	長 66 幅 3.5 厚 0.7	長 18 幅 2 厚 0.7
茎	長 14	10	欠損	8

右の端は支室の右壁下の線の延長上にある。これに反して左壁はかなり粗雑である。すなわち右壁は破石積みにみられるような整然さがあるが、左壁は一般の自然石積みみられるような整然さがあり、袖の出などはすでに隅石から斜めに出しはじめている。この流いの上に両袖の出はその位置が前後食い違つており、入口の端も左右一致していない。左右壁が全く別々に造られたように見える。

出土品は直刀A及び小刀一、刀子四、鉄鍔片五〇、矢鏃式脇拵のあるもの五、耳環四、玉釧、曲玉一（共一径五、幅八）、翡翠製、管玉二（長二径一、径五）、同大、切子玉三、丸玉三、小玉一〇、その他、埴輪破片、土師器及び須恵器の破片、墳丘中の土中より出た。

以上によりこの古墳の特徴をあげてみると、

- 1 自然石乱石積み両袖壁横式石室。
  - 2 石室平面図で支室の長さは幅の二倍。
  - 3 左壁が崩壊しており、その壁面に鉄線をたてると、榛名山の二ツ岳にいた。
  - 4 玉釧の副葬。
  - 5 脇拵のある鉄鍔。
- 等である。

5 小旦那古墳 上毛古墳群

上毛古墳群  
上川郡第二七号

この古墳は田勢多郎上田村大字赤倉小且那一七一(五番地)ノ一(現在市内團會町)にあって、発掘調査の結果、小且那古墳と仮称されている。四墳ではあるが、すでに築造された土に墳丘の北半分は削りとりられ、石室の壁の基部を固めた石垣状の構築が露出し、南半分も削りとりられた部分が多く、石室部のみが平らな状態で残存しているに過ぎない。

発掘の動機は、この古墳付近は年ごとに開墾が進み、優秀な古墳群地帯であったのが、見る影もない好埒に変化してゆくので、是非とも正式な調査をし、記録を残し残し残しと考へられていたと云々、いよいよこの古墳も調査平場されるというのを聞き込み、昭和二十六年三月十七日から三日間、調査が行なわれたものである。

外部は前述の如く破壊されていて、原形は推定さえも不可能である。ただ四墳であることは周囲の畑地の土の盛り上がりやあいだで幸うじて想像出来る。現存部分の長さ八級五〇、幅八級であるが、ほとんど石ばかりと云つてよい程度であった。

内部は自然石乱石積みの横穴式無蓋石室である。自然石は径三〇センチ位の板石で、恐らく利根川の河原から運んだものであろう。奥壁の石もさほど大きいものではない。石質も粗々混じっている。石材の大きくないことは、石室自体が小さいことにも関係しているのであろう。

石室の全長は四級四〇、幅奥壁下で七〇センチ、中央で約八〇センチ、高さ一級三〇である。奥壁から一級五〇の所に「しきみ石」があって、それで玄室部と羨室部とが区別される。この「しきみ石」の中央まで計るとちょうど二級となる。それより羨室入口の方へ一級の所にさらに「しきみ石」があり、その外側



第54回 小且那古墳

は四〇センチ程で殆ど破壊されているが、大体その辺で許わっているものと推定される。そこで玄室の長は幅のはば四倍になり、石室の全長は幅の六倍位になる。その長幅は南中線より東へ三〇センチ寄っている。

この奥壁に向かつて左の壁は奥壁の隙外部から破壊されて、中央部一級五〇くらいの間がすっかり崩らされていた。その場所の右壁は内方からの破壊で、後ごめのみ残っている。丁度、割裂部中に破壊せられたのであって、その部分から墳頂までは一級あり、つまりこの両者を合わせた二級五〇くらいの間が奥壁にあつた部分であつて、遺物は小刀一、刀子一、有蓋鏡一の外、誰かな鉄片、骨粉を残すのみで、ほとんど取り去られ、その上須賀器、土師器の破片などが散らばっていた。それに引きかえ、残りの五〇センチ位の間には玉環、耳環等が散布し、殊に右壁寄りの隅には切子玉、九玉等が多く、左壁寄りには密玉のみで、それぞれ一かたまりになつており、しかも、玉環が各一対ずつ出土し、右壁寄りには骨粉が著しく目立つた。なお、左壁寄りの管土及び耳環の各一組は墓石のめり出した上に発見された。

羨室の二つの「しきみ石」の間からも出土品があつた。このような土層から出土する物は極めて稀であるばかりでなく、その出土品は須賀器の破片が多く、これを混合したところ須賀となり、大きな耳がついていた。その付近には耳環一対、鏡片三のみで、他に須賀品らしいものは見出せなかつた。

石室の東面は一面に石が敷いてあり、特に羨室部の「しきみ石」の間には二重に敷いてあつた。その上から遺物が出土したのである。石は円形扁平な板石で径二〇センチほどのものが揃えてあり、羨室入口まで続いていたものである。奥壁は高さ五〇センチ及び六〇センチの二層が残存しているが、南壁の高さ一級二〇に合わせると、二〇センチぐらゐの石がその上にあつたはずである。天井石はすべてほとんど除去された。

兩壁は大小の板石小口積みにしてある。大は小口の径約六〇センチ、多くが径三〇センチぐらゐであり、これらよりやや小さいの板石で、奥ごめがつかまつられて、その厚さ約二センチに及んでいる。此等めの外側は約四分の一ほど露出してあり、大きめの石を根石にして、石室をかこむように、彫形に石積みをしてある。しかし、本泉多野塚地方にみられるような整然たるものではない。

以上によつてみると、この古墳は少なくとも四隅体が埋葬されていたことになる。すなわち、耳障の数の三対は、宮主を中心とした所に一隅体、切子玉を中心とした所に一隅体、さらに葦道部に一隅体であるが、このほか蓋棺部にも一隅体が確實である。また、宮主及び切子玉中心の各隅体とも、頭部を入口に置いて安置された形であり、葦道部のもこのようにみえる。この古墳は天井は低く、左右の間隙は狭い。もし隅体を棺に入れて埋葬したとするならば、幅七〇センチの所に棺を二つ並べるのは困難である。宮主と切子玉を中心とする二隅体に時代差を認めないとなれば、棺に入れて埋葬したのではないと云う結論になる。もし時代差があるとすれば宮主中心の隅体の方が先であり、その棺の朽ちたところ、切子玉中心の隅体をしたといふことも言えるであろう。

また、この古墳の天井はきわめて低く、棺に入れた隅体を玄室の奥へ運び込むのはこれも困難である。従つて、入口近くの二隅体は頭部を先にして、入口から入れたのではないかも知れない。この推定が可能ならば、奥の長さ二層五〇の蓋棺部分には、正式な埋葬法による隅体があったはずで、残念ながら小刀、刀子及び鉄鍬等、を我すのみで、推定の説を失つてしまつてゐるが、奥壁から一層四〇左壁から二〇センチ、すなわち小刀と葦道の部分に骨格が相当あらわれているので、これを基準にしてみると、玄室の長さのほぼ中央に当たつており、正式埋葬法による隅体の位置と考へてよいのである。

元來、汲次式石室では椀は一つであるのが原則である。椀穴式石室の形式が伝わつても、最初は一隅体を葬つたものと考へられる。二隅体を葬る際には先の隅体の上に石を敷き、その上に葬つた例は佐渡郡赤松村山古墳にみえている。しかし、大塚においても椀穴式石室においてすらも、夫婦共葬を普通として、椀穴式墓坑は家族墳として発注したものである。ところがわが國の習慣で、一人一穴が原則であつて、日本書紀神功紀には、親を二人同穴に埋葬したので、神のたたりがあつた美事を記してある。

この古墳においては、最初は一人を埋葬するために作られたものであろう。骨粉が左壁に寄りすきつてゐるからいふはるが、

第三六表 石室の幅・長さ比較表

名称	幅	長さ	長さと幅との比
小且那	〇・七〇	四・四〇	六強
洞山西北	〇・九〇	四・五〇	五
洞山	一・二〇	四・六〇	四弱
地藏山南	一・三〇	五・〇〇	四強
御守山	一・二〇	五・二〇	四
成塚B	一・四〇	四・一〇	三弱
街迫橋	一・二〇	四・三〇	三弱
オブ塚	一・六〇	五・〇〇	三強

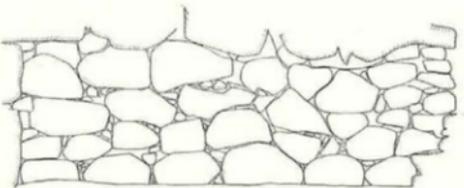
七〇/八〇センチの幅では椀を二個並べることが不可能である。たとえ椀に入れないにしても、仰臥させるためには四隅においてきわめて窮屈かあるいは安置することが出来ぬ。そこで奥には一人を埋葬したものと推定する。そして次に都合三人が埋葬されたものと考へる。葦道部では前述のとおり推定きわめて困難であり、いづれにしても最後に納めたものに間違いはあるまい。然も調査品は耳障と須恵器だけであり、埋葬法もすこぶる簡單である。他の玉環等の副葬品があつたとも見えない。この石室の規模を他の古墳と比較すると第三六表のようである。

以上のように長さと同との比が六・五、四、三といふふうに並び、幅が大となつてゆく。この表より古墳その他をあらわ考へると、比の小さなものが大のものに先行するとは限られない。やはりこれらのもより、小且那古墳は古墳であるとお考へて差支えなからう。それゆゑ、椀穴式石室から椀穴式石室に移つた当初につくられたものと考へると、偏出と思ふ。その後家族墳の流行に伴い、やはり家族墳として用いられたのであつて、従つて無理な使用法をしてゐるのであろう。よつてこの古墳は六世紀終りごろ構築されたものと推定されてゐる。

## 6 阿久山古墳

上毛古墳群録  
寛政第四六号

この古墳は、下大塚町字阿久山五三〇番地所在の小型の前方後円墳である。阿久山といふ小丘陵の南斜面に山寄せで造られていた。すでに石室の石材は抜きとられ、荒地となつて椀穴式石室を有していたことが推定される。かつ墳丘も著しく彫削せ



東 壁 断 面 図



平 面 図

7 オブ塚古墳

上毛古墳群  
万賀塚西八号

しめられて、明確な実測図を得ることも不可能であった。前方部は西北方に向かい、石室はほぼ西方に向かつていたようである。昭和二十六年七月二十三日に調査されたが、墳丘の規模は全長二八尺、前方部幅一六尺、後円部径一六尺で、高さは西南からみて、後円部は三層五〇、前方部は三層である。石室をぬかれた跡には埴輪破片が多く埋められていた。中に数枚の破片が混在していたので埴輪埴輪の存在も推定される。

この古墳は勝沢町字西曲輪二〇番地にあつて、大塚ともよばれている。赤城山西南麓の原野の傾斜地であり、西方はほとんど段状につくられた水田である。西曲輪は勝沢町の西境で、勢多郡富士見村大字沢沢との間に置野に登る県道が通っている。この古墳はこの県道に前方部の前縁を削りとられている。すなわち前方後円墳である。墳



第 55 図  
オブ塚古墳  
石室実測図

丘の前方部は西西北に向いて延ばされておき、この半軸線は西より三四度北に向いている。ちやうど置野の傾斜方に直交しているのである。このような位置に作られている墳丘の例として、下手から望めば高く、上手からは低い。しかし、この墳丘は埴輪円筒列の基部の位置から比定すると、南端では現墳丘より三層二二、東南部では三層〇

六、東部では二層二二、北部では一層九三となつて、場所によつて一層以上の土層の高低差を知ることが出来る。この埴輪円筒列の径は一尺あり、小形墳丘の径は一般に円筒列の径より両端において各一層小さいので、この古墳の墳丘の径は、七層と推定することが出来る。

また、墳頂から石室の床面までは三層四九、同じく墳塞の施設の上端までは二層五九である。したがつて石室の床は少なぐとも現墳丘より三層五〇くらい下に設けられたものであつて、傾斜面を少し切り込んだものであろう。ところで現墳丘の頂から三層の等高線は埴輪円筒列の基部から一層も外方に突出しているものであり、墳丘の現状はその原形より裾部が三層は張り出していることが知られる。このはりでたための土は後から積もつたものもあるが、しかし頂部の形埴輪の埋没の狀態からみれば、築造当時よりそれ程高かつたとは思えない。むしろ墳丘の裾部が季風で運ばれてくる砂や土で埋まつたと思つた方が要当である。

墳丘は現状で全長約三五尺、その前縁は道路敷に削りとられている。前方部幅約一三尺、後円部径約二〇尺、高さは南から前方部二層五〇、後円部三層五〇、北から前方部五〇尺、後円部二尺、前方部の高さは後円部のほぼ二分の一で外形から見れば

ば古い形に似ている。

周原(まわりの堀)はないが、墳丘の南から東にかけて、土甎が敷く。堀は塋傍裏に採土したものである。瓦石は見当たらないが、墳丘の形は割合良く保たれている。墳丘は四角列が後門部の東面から北に廻って、はっきりと発掘調査された。その門の扉柱は凡九五〇で、みごとな円礎をなしていた。ただし、石室の入口付近から西の方、前方部の間隙には発見されず、その存在は明らかではない。すでに破壊されてしまったものようである。形象墳は後門部の頂上、前方部の上面に発見された。後門部の頂上は玉縁の太刀等の器具類で、前方部からは人、馬などの棺輪が出土している。なお、後門部の頂上からは巨大な須恵器の甕の破片が見出されている。

石室は横穴式で、自然石乱積み袖無型である。石材は安山岩で、自然石の平らなものを選んで壁面を構成している。奥壁は大石二個を積みあげ、側壁にも長径一尺以上の石をところどころに使っている。天井は五個の大石を使用し、入口には特に柱石の如きものはなく、積みの石の上に、天井石が磨石のように架っている。壁面はほとんど直で、彫りはないといつて良い。輿幅より前輪がやや狭く滑られている。その寸法は第三七表のとおりである。

この表のうしろ扉部長は約五尺であるが、自然石のため、いずれも四尺を計っているものであり、全体としてみると四尺九〇前後が最も妥当なところである。輿は輿壁から二〇センチくらい離れたところから一尺四〇の長さの間は一尺六〇でありそれより入口に向かって左右から徐々にせばまっている。自然石積みとしてのみ推定したのであるが、墳墓を閉さずに残したために床土九〇センチ以上の部分での実測値であり、したがって床面においては、あるいは五尺〇より長いであろうとも考えられる。

その上で扉部長の長さと輿の決定を第三八表のように読みとみた。

第37表 石室古墳原オノ

全長	5.50 <sup>m</sup>
左壁	5.02
壁中央	5.00
壁中央	1.56
壁中央	1.15
壁中央	1.15
壁中央	1.78
壁中央	1.70
壁中央	0.58
壁中央	1.15
壁中央	1.70
壁中央	2.00

このように高麗尺使用の長さ一四尺、幅四尺五寸であり、あるいは幅は五尺を予定していたかも知れず、しかし、そのできあがりは上記の寸法である。比は三・一となり、ほぼ三とみなし得る。また、全長は唐尺で約一六尺となり、幅との比では三・五となる。これらはほぼ整った数値ではなからうか。

第三八表 オノ塚古墳扉部長・幅・尺度比較

米	唐	尺	東	魏	尺
四九〇	一六尺四九八三〇	一三九八九五〇			
一、五六	五二五三三	四四三三八〇			
一、一五	三三七二〇五	三二八三二五			

この石室の墳墓状態は一つの形をなしている。長さ五〇センチ、径三〇センチくらい、自然石で、石室の入口から約五八センチ入ったところに、内部に向けて小口に積みならべ、その高さ四〇センチで、その上は四〇センチは石の厚さにあわせて、さらに高さ四五センチつみ、その上は平らにして、そのまゝ石室外へ一段と延ばして台状のようになっている。この台状のものはその外側の端の方に、割合に扁平な径六〇センチの石を嵌めかけて、ゆるい傾斜ができるようにしてある。これらの台状の石室外側の部分は赤色粘土一面に固めてある。すなわち外から石室に入るには、この粘土で固めた傾斜面を二、三歩登って台状のものの上にも立ち、入口をくぐって、二段の階段を登りようになっているのである。

その入口の穴は幅一尺、高さ八〇センチで、これには一枚の扁平な石が嵌めかけてあった。これがはずれて石室内に倒れ込みに入り込み、その隙間から多数の土砂が流れ込み、埴輪破片、土器破片を同時にちり込んだようにもみられる。このような墳墓状態の例はほかに少ない。稀な資料としては唯一である。しかしこのような台状の墳墓は他でも注意され得るものであり、墓道の途中に転石を設け、あるいは一段の傾斜を残しているものもある。

床面には径一〇センチ以内の粒のそろった浮石が一面に敷き詰められている。その厚さは約一五センチくらいで、黄白色の美しいものであった。この例もまたきわめて少なく、珍しいものである。この浮石は丸く、転石とみられる。二ツ岳墳出土によるものである。

出土品を石室内と封土中との二種に分けてみると、石室内からは骨片、鉄製品、銅製品、土甎があげられ、石室外からは土



あったような格好になる。けれども、あるいは中央大直方の傍に、伏、それより手前左に一体、その二体は圓形並につけて非あり、その後右直下に二体並に並べて入れたとみる方がよいかもしれない。奥壇下の御祭品は中央の圓体ともいれたものであろう。このことは、輪盤型の石室をも。た洞山(津波郡、洞山西北)、小丸野(前橋市の三古墳がどれも中央に葬ったものである)、また小丸野古墳は左右両端の間に後から一体ずつおしこんで葬ったということ、街道橋古墳(前山本町)では石室の左半分からは何も出土しなかつたといふこと、片羽形ではあるが鏡手塚五墳(羽前郡)では、奥壇下に青片、音羽、圓形祭品があり、中央にはほとんどみえなかつたといふことなどから推定したものである。

封土からの出土品は須恵器と埴輪である。須恵器は大量であつて、墳丘の頂上中央から出土し、二つ山(前山本町)、磨塚(前山本町)、長塚(長岡市)、皇塚(白土町)等の諸古墳にもられるもので、祭祀用のものである。埴輪は円筒輪と形象埴輪とがあり、円筒輪は列をなして後円部の溝をめぐり、それから前方部の上縁に沿つて二本の柱が出されている。前方部前縁は削りとりである。その配列は不明であり、前方部器には配列されていなかった。円筒輪は、いずれも上方が破断されていて、完形を知ることはできないが、下縁の径は一五センチ内外であり、二層乃至三層の間に穿れてあつた。形象埴輪は墳丘の頂上に、後円部では円形、前方部では円筒列の内側に配置されていたが、これもほとんど破断され、混然として、配置状態はわからない。後円部からは玉環の太刀の柄部が二個、前方部からは埴輪馬、人形埴輪の破片が稀然と発見された。小後小のみ多くて復原することはほとんど不可能である。

### 8 荒口大道古墳

上毛古墳調査  
調査地 荒口

この古墳は、荒口町大道にあつた横穴式の小古墳である。道路敷と畑にかかつて存在していたが、すでに道路を穿られる時に石室の上部から上は除去され、残部は道路下に埋まつてしまつていた。昭和二十六年十月二十五日及び同二十七年四月五

日の二回にわたつて発掘調査された。

石室は小型な横穴式兩端型で、その軸線はほぼ南中している。壁は自然石の乱石積みである。その規模は、幅が奥壁下一層一〇、奥から三五五センチ、一層三五、前方で一層三〇であり、長さはややいびんな矩形であるので、中央で二層一〇、右壁一層一〇、左壁一層八五である。義通儀八〇乃至九〇センチ、支門の幅は四、支門の傾斜あり、その開口六五センチ、奥行は三層一四、墳室内側まで一層〇五である。義通儀入口部は畑地にかかつて、調査不能であつた。遺物は発見されていない。文字磁は一層四〇、長さは一層一〇で、高麗尺四尺、六尺と推定され、長さと同と幅との比は一・五であり、支門の設備とあわせて横穴式古墳の末期のものと考えられている。

### 9 龍海院裏古墳

上毛古墳調査  
調査地 龍海院裏

この古墳は、紅雲町二丁目字村北の龍海院の北裏にあつた。墳丘は早くから破壊されて、古墳としての形を残さず、土堤のような状態であつた。したがつて、円墳であつたのか、前方後円墳であつたのかは不明である。群馬大橋の構築にあたり、その墳頭の部周土に採土されて発見された。昭和二十七年三月二十六日に、群馬大橋工事監督の山崎義男氏からの通知によつて群馬大学字研究室において調査に着手、同三月三十日に完了した。ところが、さらに五月十七日に、再び別の内溝堀堀が出現したので、これをも緊急調査となつたのであるが、この分は石塚としての形を壊しておらず、破壊されていたものであつた。

墳丘は採土により半壊の状態であり、長径南北で一六尺、東半分が残存しており、その幅六層五〇、高さ三層三〇で、採土以前の形は脚状であつたものである。その墳丘の南半分、中軸線を約南六〇度西にとつて、縦穴式石室が発見された。

その床面は現地表から八〇センチ高である。石室の長さ四尺、幅は横六一層二〇、縦小八五センチ、高さ五五センチである。その南

西の一層五〇の部分は破壊され、明らかにしたが、長壁の礎石と短壁の礎石の一部とが残っていたので、その長さを調査し得たのである。東北二層五〇の部分は旧態が保たれていた。

石室の礎は白然石（向原石）の乱石積みである。長裾三〇ないし五〇、短二〇ないし三〇、厚さぐらゐの石を使用している。天井石は五石残っていたが、その下幅は三〇ないし五〇の厚である。床は特殊な構造をしており、左右の礎石の根から斜めに扁平な石を中継へ向けて出し、両石の中間に白色粘土をはりつけている。石室の中央に黒土を鋪設型につき、その左右両端に石の両石をはりつけて、その上部に白色粘土を敷いたものである。ところが、その両石と礎石との間の三角状の部分にも小砂利と白色粘土をつめてあった。恐らく、小砂利を満たしたのは排水設備であろうと考えられるが、それに白色粘土を混じしたのは理解しがたい。白色粘土が刷れ込むか、流れ込んだものであろうか。

出土品は南西面に鉄片が散乱していたはかばか残されていなかった。すでに監視の態にあつたものであろう。

この古墳の石室はいわゆる横穴式の石室とは違つたものとして考えられる。竪穴式石室といわれるものに似ているのであり石の扱い方はむしろ横穴式石室に似ている。幅狭く、高さが低い点では、竪穴式の構造に近しいと言へよう。発見時においては横穴式石室と見られたのであるが、検討の結果、結局善門寺東古墳（高松市）に似た竪穴式石室と認められたものである。

### 10 愛宕山古墳

上毛古墳群  
総社第一〇号

この古墳は、総社町総社大字原敷、愛宕山一七六三番地にある。総社二字山古墳の東南にあり、天狗谷用水に臨んでいる。大型の内墳で、内に巨石使用の両袖型横穴式石室がある。南に開口しており、早く発掘されたようで、石室内にはその長軸線に直角に、土壁に沿つて、家型石棺が安置されているが、正面側に蓋棺のための大穴があけられている。

石室は開口はしているが、蓋棺は半分埋没し、僅かに出入し得る程度で、この土砂を排除しなければ全貌を知ることができ



第56図 愛宕山古墳（南方より望む）



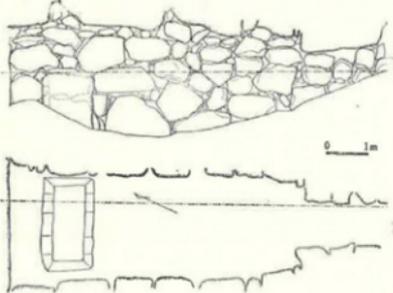
第57図 愛宕山古墳の石室内部及び石棺

ないが、蓋棺前方部は墓地になっており、したがつて、そのままの状態で、昭和二十七年七月三、四両日に、群馬大学研究室によって石室のみの実測調査が行なわれた。石室の寸法は左様長七尺、中央長七尺二、四、右様長七尺二であり、奥幅二尺四、

中央部二層九六、前部ははつきりしない。これらの寸法も埋没灰砂や礫類を除いてみなければ正確なこととはわからないが、其の方方は床面が平坦でなくとも、大体、変化はないので、奥壁と前壁との床面よりやや高い位置で測り出された。

支窓の長さが七層乃至七層二面であることは、奥壁の用石の凹凸もあるし、故に柱と支窓との溝溝部の左右壁（前壁）の支窓側を揃えないで構築している例もあるので、その見方からすれば当然起こり得る差である。また、長さは伸びる傾向があることも認めなければならぬ。すると、この長さは七層を当初予定したものと考えられる。また、尺壁を用いている点から見ると、高麗尺（二尺三五寸）を使用したものとして、その支窓は三五寸の倍数であり、七層すなわち高麗尺二〇尺みるのが妥当であろう。この立場からすれば、幅は狭まる傾向があるので、三層より大であるべきで、恐らく三五寸の九倍三層一五寸すなわち高麗尺九尺として設計されたものとみるべきであらう。

壁石は巨石を使用している。輝石安山岩の山石である。標名山の基部の構成岩石の出であるから、その付近から運搬したものであらう。ただし、その巨石に際して、積み込まれている石に角閃石安山岩が認められる。この岩石は浮石質砂岩状であり、かつ、その壁面に出る部分が削られている。正しくは浮石質砂岩状角閃石安山岩と称するもので、その一面削りを使用しているのである。この石は標名山二ツ層の噴出によってできたもので、その噴火は噴出堆積物と古墳、住居跡との調査の結果、



第588図 愛宕山古墳石室実測図

七世紀初葉または西暦六〇〇年ごろと推定されている。

したがってこの古墳は七世紀初頭として考えられ、巨石使用の巨室を構築した傾向のころであり、高麗尺（二尺三五寸）を使用しているものと思われる。

石棺は礫灰岩の家型石棺である。その形は、宝塚山古墳の石棺に似ているが、礫灰岩のため前側は磨損し、かつ大穴があらわれている。背面にはなお当初の面影がしのばれる部分がある。宝塚山古墳の石棺は堅い山岩製であり、礫灰岩は安山岩より軟かく、はるかに加工し易い。石室用石の加工についても、まず礫灰岩にあらわれ、次いで礫灰質砂岩（糸臥砂岩）に、やがて安山岩用いられてくる。この傾向からみても、礫灰岩使用よりも安山岩使用よりもあらわれている。なお、この地方の穴穴式五層の石棺がほとんど礫灰岩製であるので、その伝統を穴穴式である愛宕山古墳の石棺が受けたとも言えよう。

## 11 蛇穴山古墳

上毛市戸塚警察署  
地社第八号

この古墳は、総社町総社字戸塚敷南一五八七番地の総社小学校々野南端にある。以前は周縁をめぐらした大型の円墳であったが、周縁は次第に埋められて、北は小学校々野になり、墳丘地続きであるので、その頂上には御真影の香安殿があった。西は幼稚園の敷地とされ、東には昇平プールが造られた。そのため墳丘高部も削られ、古い形は全く失われている。石室は早く開口され、井財天が祀られていた。その奥壁面には、寛文年間刻まれた蛇の図と銘がある。優秀な工法を示す支窓、支門と、小型な前庭の設備はあるが、遺道を欠いたものである。

石室は横穴式に属し、敷石の切組積みで、両袖型に造られている。奥壁、左右壁及び天井ともに一石一つの巨石で構成され、箱状のものである。切組積みといっても壁面が一石であるから、宝塚山古墳の石室の壁の積み方とは異なっており、二層面の合わせ目は、双方の石の端を断面T状に作っており、天井石はおとしかけの状態である。それらの石の面は、削り放しではな

く精巧な増みがうかがえる。その面枿<sup>オモテ</sup>は、面に多少のふくらみをもたせ、その表上を削り痕を消すため、磨きかけたようである。恐らく俗称「びしや」という工具のようなもので叩き、その上水磨きにしたのであろう。玄室西にあっても、天井も四壁もやわらかい感じを与え、天窓のうちにあるようで、冷たいとつい思いはしない。

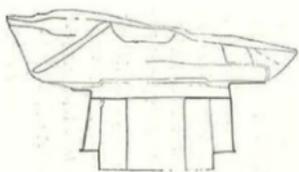
玄門は玄室の兩壁の中央に開口している。兩壁はいわば玄門の左右の石とその廻石<sup>ウマシ</sup>とからできているような状態で、外側からみると、玄門の門柱が左右の石から盛り出され、その上に廻石すなわち冠材<sup>カウザイ</sup>がのせられている形である。冠材にあたるころは竈に似た工作が施されている。これらの用石の面は、玄室壁面と同様に水磨きされたものと認められる。この冠材の上方に八の字型の彫り込みのあるのは、後世升殿<sup>ノボリ</sup>天窓<sup>テンサウ</sup>に利用された時の礼堂の破風受けと見られる。

玄門前には特殊構造がついている。いわゆる前庭と見られるので、左右に袖垣状に石積みが続いて、入口を造っている。この用石は面に削り痕を残した板石で、切組積みであり、笠倉山古墳の石室壁の石の使用法と同じである。この特殊構造の平面図形は方形と台形をつなぎ合わせたもので、外方に開いている。波川市の虚雲藏塚古墳にはこの台形のものがある。ともに蓋道を欠いているのであって、蓋道の有無から發展的に並べてみると、ともに最末期の形である。前庭の寸法は、奥幅は八呎七〇、玄門から側壁までの右側が三呎三〇、左側が三呎五五であり、いわゆる奥行は三呎六七であるが、奥行のみは後補の跡がある。

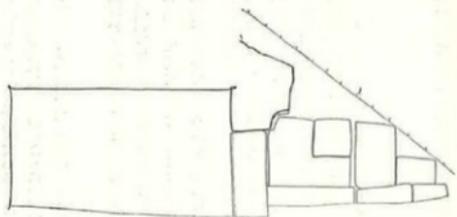


第59図 蛇穴山古墳石室入口

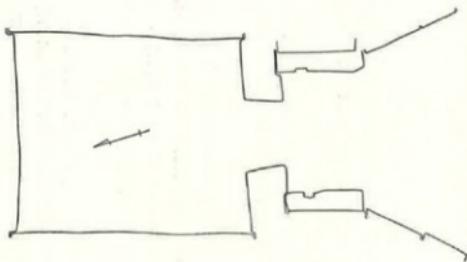
石室の寸法は、玄室の幅が奥壁で二呎五四、玄門幅で二呎五九、長さは一左壁で三呎、右で二呎九、高さは現在一呎六一、玄室長と玄門奥行との



第60図 蛇穴山古墳石室正面図

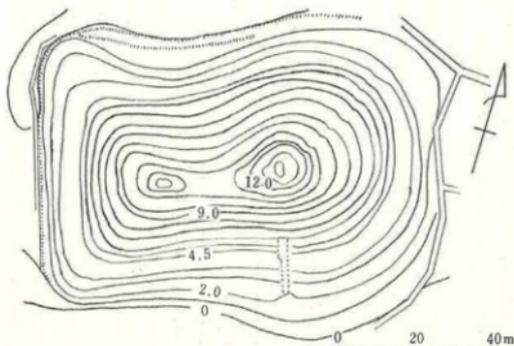


第61図 蛇穴山古墳石室側面 (右側) 実測図

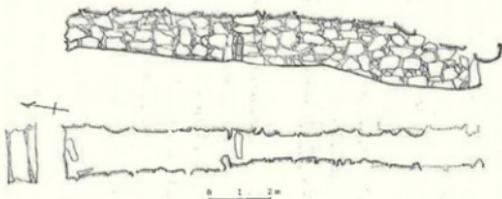


第62図 蛇穴山古墳石室平面図  
(向かって左玄室、右は入口)





第63図 前二子古墳墳丘実測図 (数字は下部より計測・単位メートル)



第64図 前二子古墳石室実測図

墓下根のものと考えられている。

12 前二子古墳

上毛古墳群  
塚第五一號

この古墳は、西大室町にある。付近の中二子、後二子両古墳とともに三塚の大古墳が並列しているので、古くから注目されていた。明治十一年三月に村民の手によって発掘された。その時の資料が県庁に残っていたので、昭和二年四月の史跡指定の記事と合わせて、「前二子古墳」として昭和四年十二月に群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告第一輯に、その詳細な調査報告が載せられている。ここではその後の調査について述べることにする。

その後の調査というのは、昭和十年の墓下古墳一斉調査と、昭和二十七年七月七日から九日までの石室の実測調査、及び昭和三十二年八月二十五日から二十七日までの墳丘実測調査の三回である。最初は上毛古墳群にまとめられてあり、次のは『勢多郡誌』に発表されている。第三回は前述の「前二子古墳」にある規模の寸法の修正である。すなわち右の二回の実測調査は群馬大学考古学部史学研究室によって実施されたものである。

墳丘は前方後円形で、前方部は後円部に匹敵する高さをもち、いわゆる二子山型式である。高き約二層の基壇の上に、積穴式石室を配置し、封土をかむせて、形を整えたものである。全長九三呎、前方部幅六二呎、後円部径



第65図 前二子古墳石室



土師器古杯



須恵器古杯



須恵器大角高杯



須恵器提瓶



須恵器罇

第663号 前二子古墳出土品

七二窟であるが、前方部の前が多少削られている。高きは前方部が一二寸、後円部は二寸である。右室入口に向かつて左側に石室に併じた穴があるが、これはその後被掘されたもので、その他は比較的保存良好である。  
従来前方後円型は、①細長い感じのするものと、②前方部幅が後円部径より小さなものが古い型とされているが、これによって全長を基準として、後円径、前方幅との比をとり、パーセントにして他の古墳と比較してみると次のようになる。

第四二表 横穴式古墳、竪穴式古墳比較表

竪穴式古墳

古墳名	前方幅	後円径	両者差
洞山	四三%	六六%	— 二一
オプ塚	三八	五九	— 二二
西山	三九	五八	— 一九
阿久山	三九	五七	— 一八
鏡手塚	四六	五七	— 一七
轟山A	四二	五八	— 一六
前二子	六七	六七	〇〇
街道橋	六五	六七	〇〇
正門寺	六七	六七	〇〇
前二子山	七三	六九	四〇
後二子	七三	六三	一〇
後二子塚	七四	六五	九
天玉山	六五	六五	〇
中二子	七二	六一	一一
總社二子山	六四	五〇	一四

古墳名	前方幅	後円径	両者差
天神二子	四四%	六七%	— 二二
浅間山	四三	六二	— 一八
大筋巻	四三	五八	— 一五
福荷山	四四	五七	— 一三
八幡山	四四	五六	— 一
朝子塚	四四	五〇	— 〇
宝泉茶臼山	四〇	五五	— 一五
鴨山	四八	五五	— 〇
太田天神山	五〇	五四	— 〇
御富士山	六〇	六四	— 〇
今井神社	七一	六二	— 〇

不二山	七六	六〇	十一六
九十九山	七三	五四	十一九
二ツ山	八〇	五九	
観音塚	九一	七〇	十二二

右の上段(竪穴式古墳)によれば、前方部幅と後門部径とが全長に対しての割合大、その両者の大小を比較することができるのであって、前方部幅が後門部径より小、同、大との三通りに分けられる。洞山、オノ塚、西山、阿久山、鶴手塚、轟山A号の各古墳は、その小の部に際し西山古墳を除いて皆山寄せの小體なもので、同じ傾向につくられていることが知られる。前二子古墳もこの比較からすれば、同じ傾向とみられよう。街道橋、正門等の両古墳は、前方部幅、後門部径が等しくなり、その他は前方部幅が大となる。この傾向を示すものと大となるものとは、後二子及び九十九山の両古墳を除くと、大體平坦な場所にある。前二子古墳もまたその傾向に属する。竪穴式古墳は小形な山寄せのものを除いて、他は前方部幅は後門部径より大であるに反し、前二子古墳はそれらのもに比べて後門部径が大であり、異例のものに属する。

下段(竪穴式古墳)についても、同様に小、同、大に分けられるが、大の部は今津社古墳のみであつて、大體小の部に入るものが多い。これと比較すれば、前二子古墳は竪穴式古墳のものに属している。これらはいずれも平坦な場所に占地しているものである。山寄せの竪穴式古墳は別に考へるべきものである。つまり、前二子古墳の墳丘は竪穴式古墳の型すなわち従来の古い型によつたものとみられよう。

次にその全長に対する前方部幅と後門部径との和は、全長よりどれほど大であるかを比較することができるのであつて、それによつて、全長に対して、前方部幅及び後門部径の和が大であるのは、墳丘の形がすままり、幅広いものであることを示している。大であれば大であるほど細長い感じがないことになり、竪穴式古墳は大體前方部幅と後門部径との和が全長に近似しており、やや細長さを示すものである。この点からすると、前二子古墳はその和が全長よりはるかに大で、寸詰りの形幅

の広いものに見えらる。

また、基壇については、前二子、磯三山、観音塚の各古墳のように、基壇上に石室が構築されているものと、築前二子塚、二ツ山、四谷A号各古墳のように、地表に直接石室を置き、封土をふせて墳丘を造り、その裾部に土寄せして基壇を造つていゝものがある。後者の場合は、基壇面から石室へは降で入るのであり、この不便をさけるために出来たのがいわゆる前庭である。前二子古墳の石室入口前には多少のスペースがあるが、これは基壇面なのであつて、前庭というわけにはいかならぬ。前二子古墳の構築は基壇の存在以後であり、前庭成立以前のことである。

内部の構造は竪穴式石室で、後門部に造られている。自然石乱石積み袖籠壁で、その自然石は硬石である。天井部から海難した照石を左右両壁にかわたし、その下に支門の設備がある。さらにその入口側に衝立のような扁平な凝灰岩の切石が立てられている。また、長い狭道の入口には武門の設備があつたように、柱状石が片側のみ残存している。石室各部の実測の数値は第四三表のとおりである。

石室は明治十一年に発掘され、遺物は全部とり出され、その位置図まであるので、その当時は一応床面まで全部出されたものであつたが、現在ではだいぶ埋まつており、支門奥ではその高さのなかに及んでゐる。

まず石室の自然石乱石積みについては、自然石といつても概石といふゆる河原石ではない。材質は安山岩であつて、赤城山麓にほそ々に、赤城山頂上による泥流に運ばれた安山岩岩塊があり、それが亀裂に従つて崩壊すると塊石となり、角の鋭い自然石が得られる。

また、袖籠壁といつても、こ

前二子古墳		古墳規模	
内部構造		規模	
全長	埋部部長	壁幅	14.05 <sup>m</sup>
左右	左中右	壁幅	13.75
	奥中前	壁幅	5.25
	奥中前	壁幅	5.20
	奥中前	壁幅	5.10
	奥中前	壁幅	1.85
	奥中前	壁幅	1.57
	奥中前	壁幅	1.58
	奥中前	壁幅	1.00
	奥中前	壁幅	1.32
	奥中前	壁幅	1.48
	左壁側	壁幅	0.40
	右壁側	壁幅	0.30
	左壁側	壁幅	7.05
	右壁側	壁幅	8.30
	奥前	壁幅	1.30
	奥前	壁幅	1.20
	奥前	壁幅	1.52
	奥前	壁幅	1.30
	門幅	壁幅	0.75





第67回 後二子古墳石室



第68回 後二子古墳丘陵実測図  
(数字は上部から目測・単位センチ)

第45表 後二子古墳 内部構造規模

全長	左壁	現長6.45
	右壁	現長8.40
支室長	左壁	5.00
	中央右壁	4.75
支室幅	奥壁	2.60
	中央前方	2.40
支室高	奥壁	2.30
	奥前方	2.20
羨道長	左壁	現長1.45
	右壁	現長3.70
羨道高	奥	1.60
	奥	2.20

第46表 後二子古墳 出土品

直	刀	2 振
	刀	1 個
	金具	1 個
	太刀破片	若干振
	小	2 振
	平	1 個
	尖	若干
	磨	若干
	耳	11 個
	高	1 個
	果	1 個
	面	3 個

この寸法のうち各部の最大は、石室の全長八厨四〇、支室長五厨、幅一厨六〇とみられ、支室の長さは幅の約二倍である。高さは埋没しているので基準にはならない。この数値を換尺すれば、高麗尺で全長二四尺、支室長一四尺、幅七尺、羨道長一〇尺、幅四尺と推定される。

壁は自然石乱石積みであり、巨大な石が用いられている。石室はもろん横穴式で、両袖型であるが、かなり不規則な点が見出される。天井は玄室、羨道ともに一平面である。このようなは両袖型の初期のもののように考えられる。前二子古墳が袖型に玄門の如きものを付した形とみられているが、この石室では、玄門を袖わず、横梁当初より両袖型として全西されたものであろう。

墳丘は丘陵を利用して築いてあるので、ほぼ東西に横たわっている北側は、高さ後四部で九尺、前方部はこれより五〇センチ低い。南側では後四部高五厨であり、墳丘周囲の土地は南及び西側で高く、北及び東側が低くなっている。いわゆる二子山形式で、前方部と後四部とに高さの差が比較的少なく、前方部削刀の線が左右に張り出して雄大である。実測図の示す高低線により墳丘の寸法をみれば、全長七六尺、前方部前幅五五厨、後四部径四八厨である。北側の最下縁と中軸線との距離から復原すれば前幅六〇厨、後四部径五〇厨ぐらいになるであろう。

出土品はほとんど失われているが、前記の報告書によると、第46表のとおりである。

これらの諸点を総合して、この古墳は七世紀前半のものと考えられる。

14 前橋二子山古墳

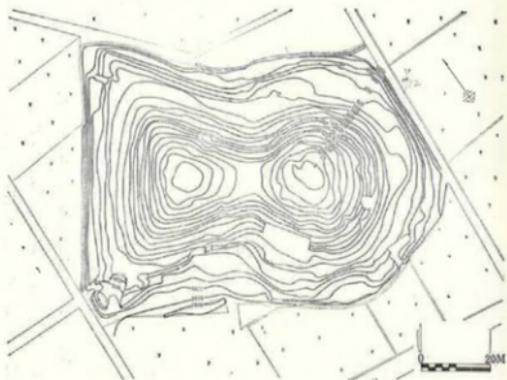
上毛古墳集  
前橋第8号

この古墳は、文京町三丁目一五七番地にある。田川町字東下一五七番地にあたり、通称前橋の二子山古墳あるいは天川の二子山古墳と呼ばれている。昭和二年の史跡指定の際には単に「二子山古墳」とされて、たものである。総社町が前橋市に合併して以来、両地区の二子山を区別したので、総社町の二子山古墳を総社二子山古墳と言ひ、それに対し、この古墳を前橋二子山古墳と表示して、便宜上取扱っている。

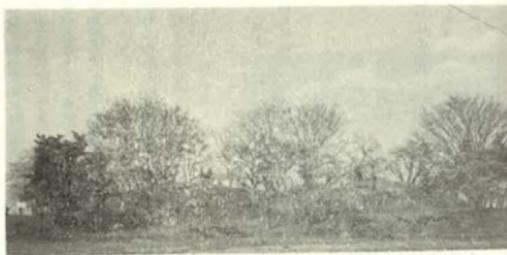
この古墳は学術的な発掘調査を経ていない。昭和二十九年三月二十四日から二十四日までの三日間、群馬大学史学研究室そのの外形実測を実施した。内部構造については、種々伝えられているが、まだ発掘されていないともみられ、恐らく横穴式石室を有するものと推定される。史跡指定の際の調査報告は「群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告」第一輯にのせられ、また「上毛古墳集」にも略述されている。

墳丘の全面には厚い葎石が見えており、葎は大体出題に近く保存されているようであるが、南斜面の一部葎石が崩れとられ、また、前方部の西南端も破壊されていた。戦時中は軍隊によって陣地化された部分もあり、戦後、墳丘に接近して、民家が建てられたりして、破損された箇所も多かったが、近年、本市教育委員会によって葎石につとめ、ようやくその体裁が整えられてきた。周濠については、早く周囲の地に耕地整理が実施されたために、残跡は地表では明らかにすることができない。将来発掘調査が実施され、これをもあわせて保存すべきものと考えられる。墳丘は版片が発見されるので、存在していたことが明らかであるが、発掘調査の結果、明確にするべきものである。

この古墳の墳丘の規模は長さ一〇四尺、後内郭径七二尺、くびれ部幅六二尺、前方部幅七六尺、高さは後内郭部高一・一尺、前方



第90図 前橋二子山古墳墳丘実測図  
(数字は上部から計測、単位センチ)



第91図 前橋二子山古墳

部高九層五である。中軸線の方向は北五五度西で、前方部は西やや北西である。前方部幅は後門部程よりも大で、前方左右に張り出した形である。しかし他の同じ傾向の墳丘に比して、この墓は大きい方ではない。これを全長に對する後門部幅、前方部幅の割合を出してみると、前者は六九割、後者は七三割で、その差は四割となつて、横穴式古墳の同傾向のものでは最も小である。この兩者の和は、四二割となつて、その數値は同傾向のものにあわせると、最大の部類に入り、長さに比して幅の広いものである。

この前方部幅から後門部程を引いたその差が小の値を示すものは、その傾<sup>〇</sup>のものから前方部が大となつてゆく傾向を示すもので、その傾<sup>〇</sup>を基準に考えた場合は、その傾向の比較的初期の形を示すものとみられるが、その兩者の和が全長よりも大で、幅が大となるものは比較的末期のものともみられる。この二つの傾向の二子山古墳が備えているということは、兩形の連続または混在を意味するもので、兩形の併存のことに志されたものであらう。ただし、この実測値から兩の數値を算じてみると、前方部幅八二割、後門部幅六八割となり、その差、四、その和一五〇割となる。総社二子山古墳と類似となる。黒下の古墳については、自然堆積土による墳丘の埋没が著しいので、嚴密な數的比較にあつては、其石の跡を出して、その根石において実測する必要がある。

15 不二山古墳

上毛古墳群  
前橋第二号

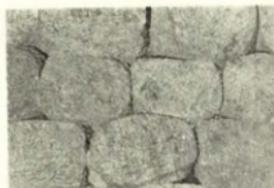
この古墳は、文京町三丁目にあり、旧高田町字林三五七、三五八、三三三番地にあたる。現在市街地の中にあつて、かろうじて形をとどめ、山林になつてゐる。やや小形の前方後円墳であり、後門部に角閃石互層の石室をもつてゐる。昭和二十九年三月二十五日から一週調査大史学研究室によって発掘調査された。すでに墓室に金つていたのであるが、それでも石の調査により各種の出土高があり、石室は奥壁の大部分が崩壊し、墳丘頂面に置かれた宗廟墳輪が別棟の跡の天井部



古墳外形



石室入口



石室壁石の一部

第71図 不二山古墳

にその基座をのぞかせていた。

墳丘は前方後円墳で、前橋二子山古墳を小形にしたようなものである。周囲から大部削りとられて、形は損なわれており、墳丘表面には墓室のための浅い穴が春所に掘られていた。墳丘の全長は五〇割、後門部幅は三〇割、その高さは七割、くびれ部の幅は二六割五〇、その高さは四割六〇、前方部幅は三八割、その高さは六割である。

これを現在の状態からみると、全長と前方部幅との比は七六割、全長と後門部程との比は六〇割となる。前橋二子山古墳の七三割、六九割とに比較すると、著しい差がある。しかし、両墳丘の平面図を置か合わすと、相似形であることに気付く。よつて、兩者を國土復原を行なつてみると、ともに各八二割、六八割となつて、その差一四割、その和一五〇割となる。これによつて、他の諸古墳との比較ができるが、他の古墳の多くは、自然堆積土をかぶつたままで、同傾向の比の値をとるものでな



第74図 不二山古墳墳丘実測図 (數字は上部から計測・単位センチ)

いと比較の操作が困難であり、墳丘実測図をあわせて見なければならぬという不便がある。この前編「二子山、不二山」古墳のように、相似形になるもの、あるいは一枚ずるものはその例が少なくない。

内部の構造は横穴式石室である。葬室を納入する空間が長さ四厨七七、奥幅三厨〇六、前幅二厨六四、高さ二厨六〇でつくられ、その前幅の中央に、幅一厨五三の出入口すなわち羨道部をあけて、その長さを四厨一〇として墳丘外に控えている。羨道の入口にも、支室の入口にも羨門、立門の設備はなく、これを省略と言ひ、羨道から支室に入ると羨道の幅よりも左右に広がっている。すなわち両横型墓型の横穴式石室である。全長は八厨八〇になっている。

この石室の寸法は、どういふふうにして割り出されたかは推定にかなりむずかしい。この支室の寸法を詳細にあげてみると第74表のようである。

表の数値のうち、石を掘んで構成される性質上、長さは伸び、幅は狭まる傾向がある。よって長さは最小の四厨六五、幅は最大の三厨〇六をとって、長さと同との比を出すと、その値は約一・五となる。次にこれらの数に共通す

第75表 不二山古墳

支室規模		m
左	壁中央	4.77
中	壁中央	4.65
右	壁中央	4.82
支室長	壁中央	3.05
支室幅	壁中央	2.85
	壁中央	2.64

る数値を求めてみると、三六歩がとなる。横穴式石室は高麗尺を伴ってきたもので、唐尺の使用時にまでかけて構築されたので、三五歩、または三〇歩を一尺として取扱うことが妥当であるが、この両者に合致しないものがある。不二山古墳の石室は三六歩が妥当とみられる。この三六歩が高麗尺の諸長と考えられるものであり、三〇歩を一尺とした唐尺の一尺二寸である。大正律令においては唐尺を採用し、その一尺二寸を大尺と定めたが、それは旧尺である高麗尺の諸長の最大のものに近かったものと考えられる。すなわち不二山古墳はこの三六歩の数値を含んでいることになる。

なお、石室全長については、羨道の入口部が補修され、長さが延長された痕跡が認められる。この延長という点では、しどめ塚古墳(藤原町)の石室に顕著であって、その石室の大部分は三五歩を一尺とした高麗尺で、羨道前方面及び前庭等は唐尺で造られており、石積みの状態からも明らかに区別ができる。不二山古墳石室の羨道も同様である。

こゝのような特殊な事情は、石室の使用期間が長く、その間に新しい構造をとり入れ、あるいは構築が徐々に実施されたために、はじめの企画に變化が起ったものと考えられる。なお初めは石室のみを造り、恐らく石室壁の裏込めの外側の石積みを行了したままで使用しており、徐々に対土をかけて、墳丘を築造したものとと思われる。しかし、不二山古墳においては、墳丘の形式は前編「二子山古墳」に似たものであり、家型墳墓も配置してあるので、ほぼ完成した形であったものに補修を加えたかとも受けとられる。ただし、石室が三六歩を一尺とした高麗尺を使用したのであれば、その構築上時代の差があり、相矛盾するところがある。形式變化の過渡期的現象を示すのであり、墳丘は旧型に作り、石室は新式によつたものである。

16 壙原塚古墳

記上毛古墳概観  
記敷  
記堀

この古墳は、田口町字千手堂五八〇の一、塩原知雄氏宅地続きの竹林中にある。田科川川の左岸の台地の端に位置し、西に急に低く南は緩い傾斜地をなしている。昭和十年の陸下古墳一斉調査に掘れたものであり、名称もない。小円墳であるが、角閃石安山岩粗石積みの完全な横穴式石室を有している。土壌所産物の名をとって、塩原塚と名付けられたものである。

墳丘は高さ約三メートル、北側で二層六〇である。径は一四メートル、ただし葎の根石のえぐり円周によつた。葎石は傾斜面のみにあつて頂上は平垣である。瓶礫は見当たらない。土簡製の破片は封土内に混じっていたが、付着して散乱していたものが入つたと考へられる。これに反し須磨の破片は復原入口部から高杯、北側の葎石の上から大妻の破片が出土した。葬祭に用いたものと推定される。

石室は横穴式両 chamber である。羨道、玄室のみで玄門はない。壁は楠名山二ツ岳噴出の角閃石安山岩の閉石及び破石で覆まれている。閉石は互目積みに、破石は切須積みにされているものが多い。石室各部の寸法は第四八表のとおりである。

羨道の入口の床面に埋め込んで、櫛石があり、東向には厚さ三〇センチに櫛が敷いてあった。羨道と玄室との床面は、羨道の壁の厚さだけ玄室の方が低く、その間に板石が敷かれている。また、羨道床面には少なくとも二回、環溝をやりなおした跡が認められた。玄室には扁平な河原石が敷きつめられ、その上に砂利が敷かれ、その砂利の上面またはその中に混じつて遺物が見出された。玄室の平面形の幅と長さの比が一・五であり、換尺すると、高麗尺で幅六尺、長さ九尺になる。壁にはいわ

第48表 塩原塚古墳

内部構造規模		m
全長	壁壁	5.90
	壁壁	5.98
左右	壁中央壁	3.27
玄室長	壁中央壁	3.15
玄室幅	壁中央方	3.10
玄室高	壁方	2.10
羨道長	壁壁	2.07
羨道幅	壁壁	1.95
羨道高	壁壁	2.01
羨道傾	壁壁	1.54
	壁壁	2.84
	壁壁	2.83
	壁壁	1.25
	壁壁	1.26
	壁壁	1.41
	壁壁	1.30

第49表 塩原塚古墳

出土品		
直小刀	刀	2
無有耳	刀	2
	刀	3
	刀	2
	刀	9
	刀	2
	刀	6
	刀	16
	刀	2
	刀	2
	刀	2
	刀	2
	刀	2
	刀	2

ゆる「ころび」が見えている。出土高は第四九表のとおりである。

骨はほとんど完全なものはなく、むしろ粉末状になつてはいるが、骨は白濁六〇、その他五、破片三六を得ている。これがセダールプになつて出ている。

以上をまとめてみる。

- 1 河原台地の傾斜地に、築造で五〇センチ掘り下げて床面とし、三〇センチあつて羨道の床を設けた。何らかの埋葬の間に羨道の床面が三〇センチも高くなり、それによつて外部も高くなったものか、その位置に葎石の根石が敷かれていた。このことは葎石が最後の埋葬の後に築造されたであろうことを物語るものである。
- 2 石室は角閃石安山岩の閉石互目積みで、奥壁のみは破石切須積みに混じりてある。構造は形形で、羨道も玄門もなく、擬似櫛石が羨道の奥壁、天井から下がっている。床は土をたたいて中央を高く掘削成りにし、その上に河原石を敷き、砂利が置かれている。湿度の調整とみられる。
- 3 石室構築の各段は高麗尺を用い、幅六尺、長さ九尺で、その比は一・五である。
- 4 出土品は直刀が各一握ずつ左右壁下から出ており、器具は玄室入口に近く、その他は骨及び銅と混在していた。玉類は



第73図 塩原塚古墳玄室入口(上)と奥壁(下)



が三石並べられて、欄石とされていた。石室前は玄室床の粘土面と両端で、その表面には壁石の隅り解が一面に置かれていた。その長さは二層七ほどで葦石にたっている。石室長五層八三であるから、石室東壁から葦石まで水平面で長さ約八層五〇になる。この面からは土師製、須磨製、埴輪片等が雑然と出土した。

石室の基石は天井石は不明であるが、壁石は浮石質砂礫状角閃石安山岩の五面削りである。砂礫状の一方の尖部を削り落として砲弾状とし、さらにその切断面を方形に整えたものである。そのためには切断面の四方が削り落とされている。この角閃石安山岩は標名山二ツ岳の礫状によって噴出したもので、砂礫状も、浮石質もその際の状況によってできたものである。それが利用用に選ばれて漂着し、石室基石として採り上げられた。その削りの加工は、石室構築の場で行なわれたものらしく、おびただしい隅り解の上につくられている。

また、別に墳頂付近には塚穴式の粘土板があったようである。すでに荒らされて、火山灰質の土の中に鉄片が散見してところどころから出ており、その上の一五センチくらいはロームと粘土のかたまわりと、黒色土が混じりあっていた。

以上の諸点からこの古墳はもと塚穴式の粘土板をもった大円墳が造られていたのを利用して、その墳丘の四分の一の部分に横穴式石室造り込んだものとみられる。その理由は①墳丘の根拠に対して横穴式石室が小さい。②横穴式石室の壁の裏込めが下方が幅狭く筒状の部分に落とされたようである。③この裏込めの状態は墳丘を切り開いて石室の壁石を露し、墳丘側の切りとりの法との間に裏込めを入れたものである。④石室の床面が高すぎる。⑤葦石の状態は墳丘下半にのみ残存している。以上のようなわけであるが、猶ほ調査時においては、まだこのようなことは考えられていなかった。その後、佐渡郡芝根村第二号古墳、第七号古墳等の調査によってはっきりしてきたものである。

### 18 上陽第一〇号古墳

この古墳は、山王町前田五八三番地である。昭和二十九年八月に、前記の山王大塚古墳とともに発掘調査が行なわれた。

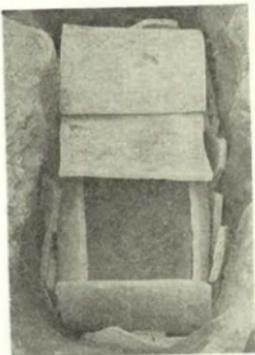
山王土埴野の發掘場にあたり、山王町の東南、水田中に突出した塚の端にある。

墳丘はほとんど破壊せられていた。残存部分は径約一〇層、高さは一層五〇余りである。このうち長さ七層、幅は奥壁下で一層八〇、入口で三〇層の袖無型（五層型）の平面をもった横穴式石室が設けられていた。石室の天井石も壁石もほとんどとり去られ、床の敷石も大半除かれていた。石室の正面は畑地と隣接位で、入口の方が低く、奥の方がやや高い。上は黒色土であり、これをたいて固めたものと見られる。その厚さ三五層、それ以下は腐質の土であるが軟かい。その上にじかに壁の基石を敷いている。入口の端及びそれから二層六〇のところに、壁に石が並べられており、塚室の内外両側で、その間に塚室の礎が置かれていた。

壁の石材は浮石質砂礫状角閃石安山岩の隅り石である。砂礫状の一端を切りとって、壁面と上下左右の四面とを削りたいおする五面削りである。中には一面削りのものもあるが、これを隅り面を下にして立てると、砲弾形になる。長さ三〇乃至五〇層、太さ徑一〇乃至三〇層である。この浮石質砂礫状角閃石安山岩は七世紀の初めごろの標名山の二ツ岳礫製の際のものである。

### 19 瓦使用棺

この瓦棺は、総社町總社字北原分で発見されたものである。通称山王古西で、北原分の中の作兵衛塚という地名の平らな畑から出土したものである。阿久津徳松氏が牛旁のカマボロを行なっていた時、深さ約三〇層のところであったのである。この地は作兵衛塚と称しているが、すでに塚らしいものはな



第76図 瓦使用棺（總社町出土）

く、一面の畑である。かつては古墳があったかも知れないが、この瓦使用層とは関係はないと考へる。

瓦使用層は、むしろ礫といった方が適切であろう。平瓦二枚を組み合わせたものである。瓦は有目瓦であり、長さ約四〇センチ、幅二乃至三八センチである。これを武部に二枚、縦長に敷き、横は各二枚ずつ、縦に一枚ずつ、蓋に二枚を組み合わせて、箱状に造ったものである。その四側、上部には平瓦の破片を覆っていた。山王岡寺かまたはそれに近い寺院建築に使用された瓦が、造墓の用材に転用されたものであろう。

20 荒口小塚古墳

上毛古墳群  
荒口第三〇号

この古墳は、荒口町諏訪西九〇五番地に所在するものと思われる。この地には同番地内に荒城第三〇号、第三三〇号の両古墳が存在していたが、諏訪西九〇九番地の第三二九号墳とともに、上毛古墳群に小塚と表示してあり、すでに第三三〇、第三三二号墳とともに平瓦されて、後者の如きは「墳丘ナン」とあり、芝地で、石群が埋められていた。第三三〇号墳も「平坦、交開間に石群有」となっていた。この公園であった地に、石類が出て、いるので、小塚という名称にも合わせて調査されたものである。

昭和三十一年六月十七日及び十八日にこの古墳の調査が実施された。この結果は、径〇三〇センチの大小さまざまな石が砂利とともにガラガラと落ちてくる状態の部分があっただけで、要込めの一部と見られるはかばかとりたてて置くべきものは見られなかった。しかしそこに立てられてあった石群は、その碑文古墳の存在していたことを伝える貴重なものであるので、これを採集する。

碑文

上州勢多荒口郡野間林鎮小郎相繼宮吉面廣此龜陸而葬宿田今臥馬村蓋浦魚野懸加野友阿部新設宮其家美好説野皇親自比古之帝皇孫祇中之親人也今故安政四年季丁巳四月某日初御泊浦村西田殿録書而所建雲屯而瓦急思樂田中之高也以

為我皇孫自彈短劍之兵士黃旗沙磧積更潮五六尺石墳面即林物有古樹及器禮敷牧上高色要、蓋其為緣子在外物掛説子論視之疑、朽而加平月形彫多折西兼冠冠之具空稱帶金光知是古昔王侯貴人魂者嘆之所宿長壽説子機而葬埋之建碑而記之鳴呼世隆輝輝冠冕野田之中童孩神物一顧一囑蓋亦冥冥之中有使之者也耶

江戸

松岡河水君撰

阿部 書

以上のとおり、安政四年に古墳が築造されて、鏡、剣、馬具類が出土したことをこの碑は物語っている。この碑の高さ約九四センチ、幅約六五センチ、厚さ約二七センチで石質は安山岩である。

21 正円寺古墳

上毛古墳群  
正圓第六六号

この古墳は、堀之下町字二子塚三八〇ノ一、三八一番地にある。赤城山の裾野の雑樹川の田流路に面した緩傾斜地を截断して築まれたほぼ西に向かっている前方後円墳である。墳丘は基壇と同様の跡とをめぐらしているが、その基壇面下の約一層のところで山側の地表面の延長とみられる堀があり、周縁はその地表面を深くえぐりとられたものである。川側すなわち墳丘南側は削りとられて、そこに正円寺の本堂及び庫裏が建てられてあり、東側は流路を隔て、自然傾斜が緩き、西側は溝がなお堀地として残存し、自然傾斜は平夷されている。その後円部には墳穴式石室が、また、くびれ部の頂上には竪穴式の石柩がつくり込まれている。

昭和三十三年十二月十九日から二十五日まで、発掘調査が実施された。すでに明治初年に墳穴式石室は発掘され、遺物は壁に入られて石室内に納められていたが、墳丘及び後円部西側等の調査によって、くびれ部頂上に新たに竪穴式の石柩が発見

された。

墳丘は再び削成されており、厚い自然堆積土によって全体がおおわれているので、井石の板石を基準に変換し、復原してみると、全長六厨五〇、前方部幅四〇厨、後円部幅四〇厨となる。高さは現在後円部は六厨五〇、前方部も同高であるが、前方部削の崩壊時の部分が、北の周濠跡から次第に低くなっているため、前方部前からもその頂面までは八厨である。この井石板石を基準とした寸法が構築時の企画に近いものと考えられるので、これから使用尺度を推定すると、高麗尺一尺三寸五分ほどとして、その一分分すなわち五尺一七五分ほどをあててみると、全長は三七厨に二五五分ほど、前方部幅及び後円部径はともに三三厨に二五五分ほど不足する。この二五五分の誤差は復原のためであらうし、土木工事による誤差ともみられよう。

また、全長に対する前方部幅及び後円部径の比



第77回 正門寺古墳

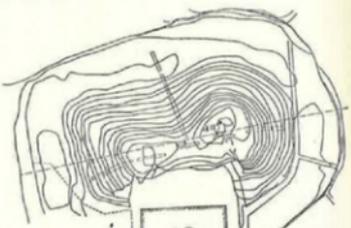


第78回 正門寺古墳竪穴式石標

の値を求めたが、これを円で表わすと六三・五五〇となる。したがって、この両者の差は〇であり、和は一七・七となる。この数値は東原の形で求めたものであり、前述の二八・二八二頁の第四二表の各古墳の数値とは同列には異ならない。その表では正門寺古墳も自然堆積のままの寸法で扱ったものである。しかし、大体において、御富士山古墳(伊勢町)の数値に似ており、御富士山古墳は首尺(首尺は一尺が二四寸)使用と認められるので、その古い型にならってつくられたものであろうか。これには竪穴式石室及び墳頂の竪穴式石標

が間助となり。ただし、この正門寺古墳の墳丘を首尺使用としてみる時には、その寸法の換尺の上での誤差が大であり、高麗尺使用と考えるのを要当とする。

墳丘には高麗尺と墳頂に土壇輪郭列がめぐらされていた。高麗尺使用と考えるのを要当とする。墳丘には高麗尺と墳頂に土壇輪郭列がめぐらされていた。高麗尺使用と考えるのを要当とする。墳丘には高麗尺と墳頂に土壇輪郭列がめぐらされていた。高麗尺使用と考えるのを要当とする。墳丘には高麗尺と墳頂に土壇輪郭列がめぐらされていた。高麗尺使用と考えるのを要当とする。



第79回 正門寺古墳実測図



第80回 正門寺古墳石室実測図

表土が厚さ三〇センチ堆積して、埋めていた。横穴式石室は両袖型の素型である。壁は直(垂直)で、自然石乱石積みであり、その自然石といふのは加工されないもので、主として河原石(礫)のうち、比較的四面なものを選び、これをそろえて重積積みとし、この積みに手ごねな丸石を用いている。支室の左右壁の大部分は崩壊し、山石の乱石を用いた天井石は一部分積土によって支えられている状態である。後重の左壁は天井石ともとり去られ、右壁の前方部も崩壊されている。その寸法は左右壁下においても三厨八八、幅は奥壁下で一厨八八、前方で一厨六五、前後長六厨六五その幅八〇センチ内外である。高さは奥で約一厨六三、天井は支室四石、奥

遺のは二石残存し、その面はほぼ一面で、欄石は見当たらない。床には灰石が敷かれていたようであり、欄石が玄室、羨道の境の差道側であり、その内側から袖石が玄室に向かつて傾斜して積み上げられている。

その玄室の長さと同との比の値は二・二乃至二・二一である。その幅は因面から見た場合は一厨六五が妥当のようであり、この数値を一厨七五の敷まったものと考えると、高麗八五尺となり、長さ二厨八七は同じく一尺とみられる。羨道の幅は八〇センチほどは二尺、その長さは一九尺となる。高麗尺使用とみることが妥当である。

竪穴式の石塔はその置かれた墳丘の土層からすると、明らかに竪穴式石室構築後に造られたものである。竪穴式石室を古い墳丘の中につくり込んだものは芝根村第一号古墳（徐土山古墳）（五原郡）、同第七号古墳（信濃山古墳）（上）、上岡第一五号古墳（山王本尊古墳）（山王町）、鹿川村第一号古墳（御伊勢山古墳）（下瀬郡）などがあり、同じ例に入るもののようにも考えられるが、竪穴式石室をおとした封土の層は、竪穴式石塔の下に続いており、階序からしても、明らかに竪穴式石室の成立後に設置されたものである。このことはこの両形式の併存使用を証明することであり、ある時期には一方に竪穴式石室が採用されているのに、他方竪穴式石塔の構築及び使用が続いていたことを示すものである。もっとも、大化改新のころには、書獃り式石室、竪穴式石塔併用も肯定できよう。

竪穴式石塔は礎を積み上げられてつくられているので、礎部とも言えよう。礎石は長さ三〇センチ、幅一〇センチ、厚さ一〇センチぐらいの扁平な口積みにし、裏込め石には四〇センチの大理石も用いている。蓋石は九石で、厚さ一五センチぐらいである。その上に五〇センチほど土がぶさって、地表となる。その石塔の長さは一厨六五、幅は東部が広く四五センチ、西は狭く二五センチ、深さは約四八センチで、底は小砂利が五センチの厚さで敷かれ、その下は一面に敷石が敷かれていた。人体を基壇としたものとしては、適当な内法の寸法である。すなわち「ものさし」の高麗尺の寸法ではない。人体に即して構築され、座は用いられなかったと推定されるものである。

出土品は、礎に入れて再納入してあった既止土のもののみで、虫、骨、大刀の破片、鉄線片、うるし薄片などである。

22 オブ塚西古墳

上毛古墳群  
調査表  
満



第22圖、オブ塚西古墳石塔

この古墳は、駒沢町字西久保の畑地から、開田作業中に発見された墳丘をもたない小型の竪穴式石塔である。7のオブ塚古墳から西南七〇度ぐらいのところに位置し、膳沢町四八八の横山虎造氏の所有地で、同地の横山佐金次氏が昭和三十四年十一月二十五日畑を水田に替える作業中に発見、同年十二月六日調査されたものである。

石塔は自然石を礎にさし込んでおり、長壁に七石、前後の短壁に各一石を用いている。石の間には白色粘土を詰め、その上部にもはりつけていた。その中軸線は北四五度東の方向をと、上幅九〇センチ、長さ二厨三〇センチ、深さ五〇センチぐらいの桶形方を通り、その中心内法長さ一厨六五、幅北側で三センチ、南側で二〇センチ、最大幅四〇センチほどの石塔を造り込んでいる。用石には裏込めは用いず、基盤の土層との間に黒色土を詰めていた。床面は攪乱されており、明らかではないが、白色粘土の敷かれていた面と推定され、礎石の上端から測って二〇センチ下とみられる。

23 朝倉1号古墳

上毛古墳群  
上川郡第四〇号

この古墳は、朝倉町字旦那坂前一四九二番地にあった円墳である。調査団地建設により平夷される山で、昭和三十四年十二月二十一日から二十四日までの四日間、急遽発掘調査されたものである。



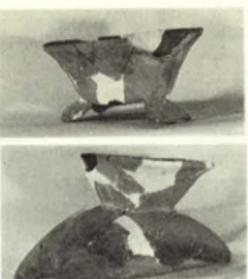


第878図 第5層Ⅱ号古墳残石

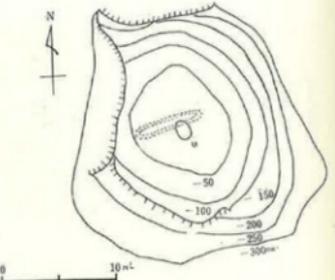
ていたのと同じであり、石田川式土器とともに後述で一括して説明する。  
ただし、墳丘と副葬との関係は、墳丘の下端が副葬の上縁になつていたのでなく、約三五センチの差があり、浮石層と黒色土層が墳丘断面のままに崩りとられ、その下層のローム層の面が第一層の下段浮石上面となつてゐるのである。下段の浮石はその上面の端からさらにローム層を掘り込んで、その傾斜面に浮石を置かれてゐるのであつて、その高さは約三五センチ、根石はローム層を削つた平坦な面の端に置かれており、すなわちこの間は副葬の底部となつており、副葬の幅は約七二センチである。したがつて下段浮石と見られるのは副葬の行部にあたり、副葬の上縁に第一層の下段上段が墳丘をめぐつてゐることになる。

これらの墳丘及び副葬は千数百年の間に自然に堆積する土砂によつて埋められたもので、まず副葬はローム層の上縁に黒色土層と褐色土層の混

合やそれにロームがまじつていて、その黒色土は墳丘下のものと違つた砂質で、下部は薄くはがれる傾向があり、土器の破片も出土してゐる。これらは水中に副葬の灰土等が沈澱したものとみられる。その上は黒褐色土で、副葬ではその上縁の高さまで埋めていて、墳丘は副葬から統いて中層まではい上がるようになつてゐる。幅一層めぐる段の面もまだ往復できるような状態に保たれてゐるが、下部は厚くなつてゐる。この黒褐色土も周囲の土地の表



第880図 第5層Ⅱ号古墳墳頂面配列の石田川式土器



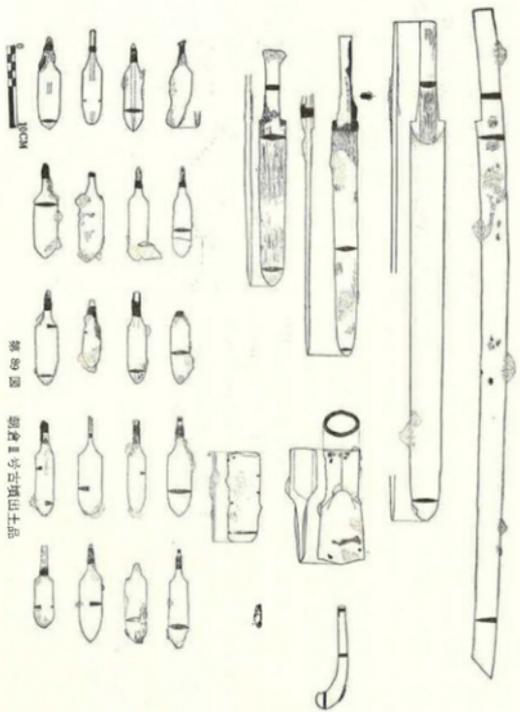
第879図 第5層Ⅱ号古墳断面図  
(数字は上面より計測・単位センチ)

土が風に吹き寄せられたものとみられる。その上が褐色土で、これは現在の表土であり、副葬も墳丘も全面的におおわれていて、墳丘を除く部分には畑として耕作されてゐる。褐色土層の厚さは、墳丘の上層部分と五センチくらいであるが、少し下がると三五センチとなり、副葬部になると五〇ないし六〇センチである。この土の層は副葬部が黒褐色土で全部埋まつた後に積もつたもので、この古墳のある地帯は褐色土が五〇センチ以上埋積してゐるのである。大体本県の平原は古墳築造のころから五〇センチ以上に自然堆積があつたとみられる。その原因は季節風により山や河原から吹き送られる土砂や火山噴出物などの堆積によるものであろう。

墳丘内の埋部は粘土層であつた。墳丘頂上の中央にあつて、その中心は墳丘の中心と一致する。粘土で造られた全長五層七三、最大幅九二センチの長楕円形の中に、内法の長さ四八八、幅五三三センチ、現在の深さ二〇センチの溝状のものがあつた。これがいわゆる粘土層である。その土層は北七一度東に傾いてゐる。この構築については、墳丘の傾土上面から深さ約二五センチ、幅約五五センチ、平円溝状に凹部を作り、その底に長さ

五層三〇〇、幅約三〇〇センチ、厚さ三ないし一センチの砂利を敷き、北半分が特に厚い。この上に黒色土層を置いて、崩形をつくつた。こゝへ屍体を受納し、副葬品を配置し、これらを灰色粘土でおおつたものである。ただし死屍はずでに滅失してゐたが、北半分の砂利の特に厚い部分には、副葬品がほとんど認められなかつたので、この部分に死屍を納めたものと考えられる。

副葬品は鉄刀一振、鉄鉞二振、鉄鏃二本、鉄鏡、鉄斧各一個、不明鉄器一面であり、例外副葬品は鉄鉞一振である。この

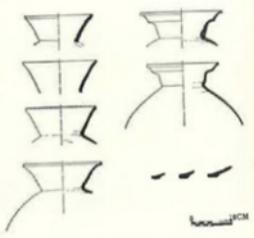


第88圖

第89圖

1/10

第90圖 朝倉Ⅱ号古墳出土の土師器



りも鉄葉はいずれも柄纏に似た形で、有茎柳葉式であり、圓のところ多くびれていて、刃がきかないのが特徴である。茎にはくつ巻のよく残っているものがある。矢柄の残存状態はそれぞれ違うが、その作りは茎の上に鉄竹の如きものがあり、その上を木皮状のものでおおい。さらに木皮でくつ巻している。鉄刀は内反りの大刀で、全長八一センチ三、茎長一二センチ三、身長六八センチ、身の幅三センチ、同厚さ六センチである。切刃つくりで、鋒は刃に対し四五度となっており、鉄剣は全長四八センチ五と三八センチとの二振

第88圖 朝倉Ⅱ号古墳第五トレンナピット実測図

第51表 朝倉Ⅱ号古墳出土石田川式系七器の寸法

形状(形)	口縁部外反		新部内径		口縁部外径		分	部	土器
	内径	外径	内径	外径	内径	外径			
①	三五度	七・八	九・一	〇・五	六・〇	一・六	①	単	口
②	三〇度	六・八	〇・〇	七・五	一・八	一・八	②	口	口
③	二八度	八・七	一・〇	六・五	六・二	一・七	③	口	口
④	二三度	八・六	一・〇	七・五	七・二	一・九	④	口	口
⑤		九・一	一・〇	六・四	六・三	二・〇	⑤	口	口
⑥					一・七	一・七	⑥	口	口

である。鉄斧は長さ一丈餘、幅四寸餘、厚さ二寸餘で、尖端に丸味があり、柄をつける方は曲っている。鉄斧は長さ一丈餘、幅四寸餘、厚さ二寸餘で、尖端に丸味があり、柄をつける方は曲っている。鉄斧は長さ一丈餘、幅四寸餘、厚さ二寸餘で、尖端に丸味があり、柄をつける方は曲っている。鉄斧は長さ一丈餘、幅四寸餘、厚さ二寸餘で、尖端に丸味があり、柄をつける方は曲っている。

墳丘は石面出土の土師器の壺蓋土器等は石田川式のものであり、第五一表のとおり岸口縁と波口縁との二種類である。

25 今井神社古墳

上毛古墳群覽  
遺跡第三〇一号

この古墳は、今井町字白山東乙八一八番地にある。荒砥川が利根川の下流路に合流し



第99図 今井神社古墳（西南から望む）



第99図 今井神社古墳（東南から望む）

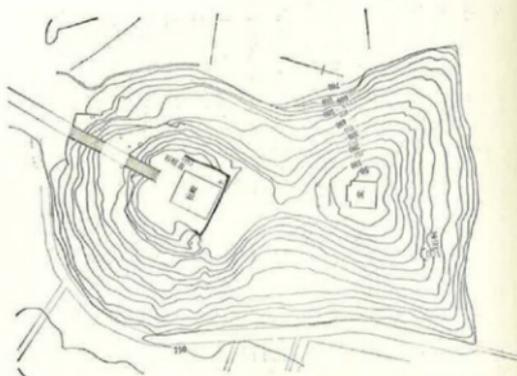


第99図 今井神社古墳後門部出土石棺の蓋

たと思われるところに深い左岸の低地にあつて、同じ古墳群の他の古墳は東方の低台地上に分布している。現在後門部上には今井神社の社殿があり、前方部上にも境内社がある。昭和三十六年十月三日から九日までの一週

間、墳丘の実測調査が実施された。墳丘は前方後円型であり、因縁をめぐらしていた跡がある。後門部頭の社殿の傍には石棺の蓋が残存しており、石棺をもった竪穴式古墳である。墳丘のみの実測値は全長七二尺、前方部前幅五〇尺、後門部径四四尺で、前方部前幅が後門部径よりも大で、前方左右に張り出し

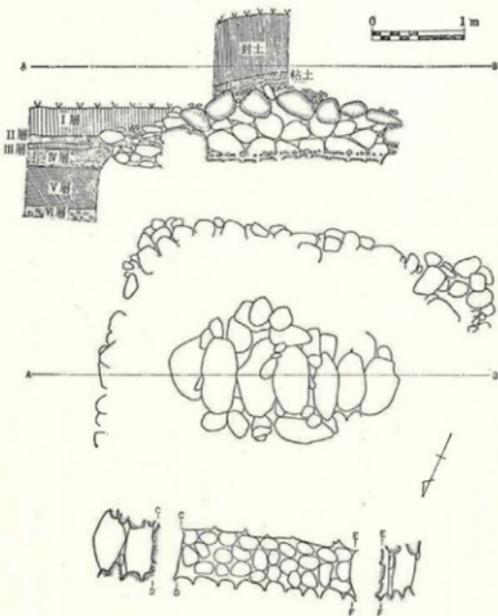
第99図 今井神社古墳実測図（数字は上部より計測・単位センチ）



遺一表 壺蓋の支配と古墳の構造

と比較してみると第五一表のようになる。この表において、a、bの差は前方部幅と後門部径との大小の比較であり、a、bの和はこの両者の和と全長との大小の比較である。すなわちa・bの差のうちaは符号は後門部径が前方部幅より大であり、bは両者が相等しく、b符号は前方部幅が後門部径より大で、左右に張





第95図 第1号古墳塚丘の断面平面図

褐色土が敷かれ、その上にならべられていた。石梯の長さ、八五センチ、最大幅五一センチ、最小幅四七センチ、深さ四二ないし五二センチの竪穴式箱式状のものである。用石は転石（河原石）であるが、横やしき石には浮石質砂状の四角石安山岩が使用されており、壁石は積みである。敷き石の上には薄く砂が敷かれ、その上には二、三センチ大の小塊、さらに四、五センチ大の塊が重ねられていた。石梯内の敷き石と外周の石組みのレベルとは同じである。この石梯は蓋石の上を砂土と小塊でおおひ、その上に約一五センチの厚さに粘土をかぶせ、土をおおっている。石梯内の敷き石や敷き石上の小塊など九石が朱で染められており特に頭骨の下にはそれが顕著であった。

石梯内出土遺物は人骨のみである、その人骨は頭骨、大脚骨、上臂骨とであり、頭骨の下からは歯が出土している。石梯外からは土師器の卍（小型丸底土器）一個が石梯南方の黄褐色土層（第二層）に肩から上の部分を出し、黒色土層（第三層）に下部を埋められてあった。なお、石田川式土器（土師器）の破片が数片と土師器破片が出土している。

石梯に朱が認められていること、用石に浮石質砂状の四角石安山岩があてられていることとは、大きな特色であった。

27 弥勒山古墳

上毛古墳群第1号  
元禄廿一年

この古墳は、元禄廿一年新編九四二番地にあった大型左内墳である。元禄廿地区唯一の古墳であり、上毛古墳群ではこの元禄廿第一号古墳のみが記載されている。その記載によれば、当時は桑園であったが、地目は雑草地であり、高さ八尺、径六尺六寸の円墳で、大正十三年（一九二四）に発掘され、金環一（ただし割れ二つになれるもの）、同中一、同小一、刀一（ただし腐蝕せるもの）の出土を伝えている。

この古墳が、昭和三十三年に土地改良工事のため石室の石があらわれるにいたり、改めて発掘調査をすることになり、同年六月十九日（金）から二十二日（日）の四日間を実施された。しかし、その時は墳丘はほとんど削りとられ、南北のトレン

子にあらわした黄色土の上面によって、対土の終わりを確定せざるを得なかつた。全長約二六呎で、残存は僅か一呎五〇にすぎない。石室はすでに早く破壊されていたものであり、その壁石は、根石が石で七石、奥で四石、左で二石残っていただけである。壁石の間隙には灰込めがあり、その外側には石積みが施されていた。玄室の幅は一呎九〇、長さ不明である。石材は浮石質凝結岩が閃石安山岩の割石で、壁の根石は壁面を隔らず自然面のままであり、土下を削って壁面に出る部分は上面の澗を削り残している。

なお、この古墳の墓蓋の地面は、沼地が自然堆積土によって埋まったような極めて不安定な状態を示していた。

### 28 植野薬師塚古墳

上毛古墳群  
植野第一五号

この古墳は、総社町植野字新井一、二四八番地にあつた内墳である。昭和四十年十二月十四、十五の両日、団地造成のために破壊、平夷されようとしたのを知って、急遽調査が実施された。もと、この古墳からは百刀、短矛など出土したと伝えられている。上毛古墳群には定日、現状とも墓壇となつており、調査時には掘削箇所全副の打痕が立っていた。一塚草二年乙丑十二月吉日の銘があるので、西暦一七四五年にあたる。また、上毛古墳群には「石塚有」となつていて、同じくしていたことになる。

墳丘は東分と南の一部がすでにブルドーザーで削りとられていた。残存部分は南北で一七呎、東西で一〇呎であり、その東側の断面は断穴式石室の崩壊したものが表われていた。しかし、調査の結果は浮石質凝結岩角閃石安山岩使用の石室であつたことが明らかになつただけである。

### 29 八幡山古墳

上毛古墳群  
上川郡第六七号

この古墳は、朝倉町字宮二三四四、一三四六及び一三四九の各番地にわたつている。前方後方墳である。朝倉町には、この古墳の付近のみで六八墓の大小の古墳が存在していたのであるが、朝倉町地の説話のため、この古墳一基を除く全部が破壊された。すなわち、この古墳は朝倉古墳群中残存の唯一基となつたのであり、貴重な存在となつたのである。もともと、前方後方墳という墳丘の形は全国的にも数少ないものであるが、この古墳はその大きさにあつては全国一と認められているものである。すでに昭和二十四年には国の指定史蹟となつており、昭和四十二年の国指定史蹟の結果、その部分も指定範囲に加えられた。現状は松林となつている。

その墳丘は後方部は築築方錐形で、その方形平面の各対角線がほぼ東西、南北の方向にあつた。前方部は台形平面の惣辺を後方部に接して、東南方に向かつており、前辺に近い方を高めにした台状につくられている。その中軸長一三〇呎、後方部幅七二呎、前方部幅五九呎、後方部高一二呎、前方部高八呎である。

後方部上面には築築の跡があり、約一呎五〇の下方に、長さ数呎ほどの玉石敷きの部分があり、また、一部分に粘土の詰りがある箇所も認められた。出土品もあつたとのみ伝えられているが、いずれもはつきりしない。未調査のままである。

奥津発掘調査の結果は、墳丘裾部で、基石が三八度の角度で、現状表から下方に傾いており、河原古で精巧に弄かれて、八〇度の深さのところその基石が置かれている。基石は比較的硬質な黄色砂岩にしっかりと据えられていて、この黄色砂岩がこの墳丘の基礎とみられ、それより五〇度下方に河原の底層が見出されている。したがって、周縁は深さ五〇度の、幅は墳丘北方で約二六呎七〇であり、同西方では三五呎と推定され、ほぼ基石の根石から三〇呎前後であり、その全体の半面は奥



第99図 八幡山古墳

横は墳丘を心として、東西約一二五呎、南北約一八〇呎の方形と推定される。

30 総社二子山古墳 上毛古墳群 総社第一号

この古墳は、総社町植野字二子山三六八番地にある。前方後円墳の大型のもので、横穴式石室を前方部、後円部各別に有して、特殊な型である。すでに既述、寛永の間に発掘されたとも伝えられているが、文政二年（一八一八）十一月には前方部の石室が発掘された。もともとこの古墳の地は辨野の元景寺檀家の墓地と元景寺所有の畑地とであった。その十一月四日に墓穴掘り最中に見されたことである。この発掘の報告には元景寺の住職が立会っており、その発掘書に詳細記されているので（附録）それ以外の出土品の類は文政二年以前の発掘のものと考えられる。これは後円部石室に関係するものであろう。

この古墳は付近の愛宕山、宝塔山、蛇穴山の諸古墳とともに、早くから注目されていたものであり、文化七年（八一〇）には徳川の字者吉田芝浜によって、その著『上毛上野古蹟記』の中で、愛宕山古墳を豊城入彦命、宝塔山古墳を彦狭野命、蛇穴山古墳を御諸別命の御墓にあてており、総社二子山古墳は豊城入彦命埋葬の御墓並を納めたものとしてい



第998号 総社二子山古墳



第998号 総社二子山古墳実測図（数字は100mを基準として計測）



第979号 八幡山古墳実測図（数字は100mを基準として計測）

る。このような伝承がすでにそのころ起つていたものであろう。それにはこれらの古墳がそれ以前に開口していたこと、二子山後円部からは豊城入彦命に相応する副葬品の出土があったこと、愛宕山古墳の石室は二子山後円部石室よりも概略と見られたことなどに起因しているものと考えられる。

山崎喬著「三子墳墓略記」は明治年間になってからの記述であり、しかも、その記事は文政二年発掘時の資料により、それ

以前のものには触れていないようであるが、副葬品については元堂寺住職の業山堂（國壽庵成）の内容とかんがりの差がある。明治三十一年（八九〇）の八木野（原述）「日本古墳考」（富貴五十年刊）に記載の豊城入彦命御太刀と記入した太刀の図面及びその解説によれば、旧前橋藩よりの書上げ國を明治四年（一八七二）に写したものの山で、この太刀とともに発見された山上品が派生型であり、その品名も「三子墳墓略記」とは異なっている。

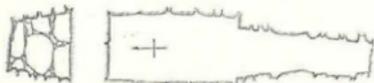
これらの出土品は明治六年（一八七三）に博物館（明治五十二年）に出品せられ、同四十二年（一九〇九）に帝室博物館に寄贈されたことになっている。昭和四年（一九二九）に群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告第一輯の補巻にあたっての調査



第99図 總社二子山古墳墳丘突部断面



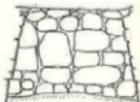
第100図 總社二子山古墳前方部石室突部断面



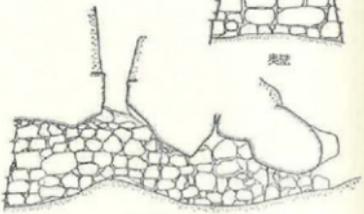
第101図 總社二子山古墳前方部石室突部断面

によれば、日鏡にある後記のものが現存している由である。この現存の品を流布にして、前記の書に記すところと比較すると第五三六条のようである。

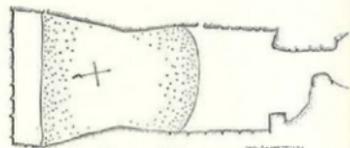
いわゆる豊城入彦命の御太刀については「三子墳墓略記」と「日本古墳考」との記事に第五四表のように差がある。まず、隨身長であるが両者の記述が一十八分も違っている。鏡及び切羽の厚さを入れても一寸以上の差になる。「鞘は朽ちて存せず、ただし金銀装合一を存す」とあるのは黄金具のようであるが、金環、銀環合一とあるのは、同じ剣に用いられたとすると不審である。この環については帝室博物館日鏡に



奥壁



東壁



石室平面図 (向かって右入口)

第104図 總社二子山古墳後円部石室突部

記されては御環とあり、この御環の記述は能にない。また、「三子墳墓略記」には銀鈿とあるが、「日本古墳考」では黄金環と記されてある。また、「三子墳墓略記」には「銅環装飾金環を纏繞」とあって、前掲「金環装合一」を存すという記事とは矛盾する上にもみえる。かつ「日本古墳考」に「六銚 帯個」とあるが「三子墳墓略記」には落ちている。

要するに「日本古墳考」に記載の類は、「六銚者個、忌部四銚、内花生者個、外に太刀折を冠しきもの數付仕」とともに出土したものととして、「一括されて書上げられたものと考えられる。その「花生者個」とあるものは帝室博物館日鏡に「陣付共須甲

六八銅鏡 銅盾 勾玉 鉄鏃 石鏃 銅釘長須眉管 管中	元寶寺並出書 二子墳墓略記 御太刀因付記	金葉 銀葉 銅葉 鉄葉 石鏃 奇金 銀片 金銀鉄金物	六路 一
----------------------------------------------	----------------------------	-------------------------------------------------	---------

寛政中築造とあるのに相応し、文政二年以前の出土のものであらう。

このように總社二子山古墳は江戸時代から注目されており、調査がくり返されてきた。墳丘の詳細な実測は日本古文化研究所の事業として、田沢金吾、後藤守、両氏によって実施され、かつ出土品の調査も行なわれ、前記報告書が昭和十二年に刊行された。しかし、まだ、石室の調査は現存したままの因面であったが、これを昭和四十二年三月に因指定跡の保存工事に付帯して、前方部の石室のみについて埋没の土砂を払って実測調査が行なわれた。

墳丘は前方後円墳であり、前方部はほぼ西についており、墳丘主軸は正しくは西よりも二度北へ振っている。前方部の石室の主軸は南より二五度西にふれ、墳丘主軸との角度八七度であり、後円部の石室は南から西へ三二度振れて、墳丘主軸との間き八〇度である。ともに墳丘に対して九〇度に近い。墳丘の主軸線の方が西のものが一般的でかつ多く、これを完成した形と見れば、西側から他の方向に著しくはずれもの不安定なものとして考えられよう。また墳丘主軸線と石室主軸線との間きが九〇度に近いものが多いのでこれを基準とした場合には、九〇度より著しく大であるもの不安定なものとして見られる。この組み合わせ、不安定が重なったものは古い型として見ることが出来る。

墳丘の規模は自然堆積土をぶつたまま、全長九八尺、前方部幅六三尺、後円部径四九尺である。基礎をもった二段築造とみられるが、墳丘の南側は墓地に使用されていたので、削りとられた痕跡があり、前掲の規模の数値も発掘による調査、実測を降なければ、正確なものを得られない。基石が斜面には見られるので、その基石の残存が考えられ、それによって測り出されることゝなる。

石室については前方部、後円部に各一ずつあることは前述のとおりであり、他の古墳においてこのような例はまだ調査されていない。埼玉県行田市付近に高槻寺古墳、富士山古墳というものがあって、ともに二個の石室をもっている。真観寺古墳は前方後円墳で、その後円部には横室の横穴式石室が後円部後方に開口し、他は前者の上方に北側に単室の横穴式石室が開口している。富士山古墳は封土が取り去られて、墳形は不明であるが、前後に石室が二個、一房ごとの距離を置いて相接している。しかし、この二古墳はその様相が總社二子山古墳とは異なる。

總社二子山の後円部石室は両廂型で、壁は左右、奥ともに浮石質凝結状角閃石安山岩の層石で五目、通目積みになっており、天井には巨大な山石を用いている。すでに東西両壁の一部が崩壊し天井石落ちかかっており、後述の前方入口部は取り去られている。その寸法はようやく全長現存八尺五九、女室長六尺八八、女室幅五尺三寸、女室高五尺三寸と測り得る。用石は一面削り、五面削りの二種が用いられ、面の最大のもの幅八二寸、高九四寸、奥壁のうらみに使用され、最小は幅一〇寸、厚二二寸、多くは幅四五寸、厚二六寸である。

女室の寸法は、長さ幅のほぼ二倍である。長さ幅との寸法から共通の長さの単位を求めてみると高麗尺の三五代が妥

第五四表 總社二子山古墳出土の太刀比較表

三子墳墓略記	日本古墳考(御太刀の部)
銀柄金葉 鍔長三・四二尺 柄長〇・九一 切刃厚〇・〇一五 總長四・三九	銀柄金葉 鍔長三・四二尺 柄長〇・九〇 切刃厚〇・〇一五 總長四・三九

(参考)

当である。すなわち使用尺度を高麗尺とみる時には、長さはその二〇尺、幅は一〇尺となる。用石の大ききについて、この種の石材を使用する古墳中でも最大である。右は利根川の下流にいたるほど次第に小さくなる。この石材利用古墳は利根川旧流跡の兩岸一帯十以内で分布してゐるのであつて、その浮石田を利用したことか、利根川岸に漂着したものを利用したと考へられる。しかもそれらの、この石材利用の石室の長さ幅との比は、ほとんどその値二以下であり、その値2のものもそれらのうち最も古い型と考へられる。

前方部石室も兩廂型であり、壁は自然石（山石）の乱石積みとなつてゐる。この石室は完存してゐるのであり、昭和四十二年に調査前方部入口部の石をほらつて実測された。全長八尺七寸、支室長四尺二寸、同幅二尺二寸、高さ奥で二尺七寸、甬道長四尺四八、同幅入口で一尺〇八、奥で一尺五五である。この数値からみれば、支室長は同幅の二倍であり、これも高麗尺を使用して築造されたものらしく、石室は高麗尺で、全長三三尺、支室長二二尺、同幅六尺、甬道長三三尺、同幅入口三尺、奥で四尺とみることができろ。

右の両石室はともにその支室の長さ幅との比が2であるので、横穴式兩廂型石室として古い型である。しかしその石室に使用された石材は、両者の間において全く異なつてゐるのであつて、前方部は安山岩の加工された大石を用ひ、後門部のは特殊な石である浮石質凝灰岩の角閃石安山岩を加工して使つてゐる。この後者の石材は橋名山の二ツ峠の礫石より積み上げられてきた石であり、その礫石は七世紀の始めごろと推定されてゐる。もしこの石材が存在してゐて、すでにその石を石室構築に使用する習慣があつたならば、前方部石室構築に際しても、どこかにこの石を使用したであろう。總社二子山古墳の東南に近い愛宕山古墳の石室は、巨石使用の巨室であるが、その巨石の間に右の石材を詰め合わせて、積み上げである。石材の使用からすれば、二子山前方部石室、愛宕山石室、二子山後門部石室となつて、利根川旧流跡各岸にはほとんどこの石材使用の石室が充ちつており、新しい型にまで続いている。つまり、二子山前方部石室構築のころはまだこの石材が存在してゐなかつたのではなからうか。

以上によつても知られるように、總社二子山古墳の前方部石室の構築は、六世紀終りころとみられ、後門部石室は七世紀であり、両石室は同時につくられたものではない。墳丘と石室との関係から、この古墳の構築について考へてみると、解決されない点が多い。か出てく。横穴式石室の古い型と考えられてゐる安中市磯部、子塚、及び柳之下町の正円古墳の石室は、前者は基礎があるが、その上面からは下に下位の地表面に石室壁の根石が露かれ、付け基礎になつてゐるのであつて、下台A号古墳（佐野）<sup>〔佐野〕</sup>、二ツ山古墳（新田）<sup>〔新田〕</sup>もの傾向で書かれてゐる。正円寺古墳にも基礎はあるが、墓室面は地表から約一尺掘り下してあるのみで、石室根石は地表に露かれたようである。高崎古墳（北野）<sup>〔北野〕</sup>は付け基礎があるが、石室は当時地表を六〇センチ掘り下げて石室床面をとつてゐる。石室が古い型も見られるものは、おむね地表直下の設置である。

ところが上毛市線線芝根村第一号及び第七号古墳（佐野）<sup>〔佐野〕</sup>、山王大塚古墳（山王）<sup>〔山王〕</sup>等は、基礎が著しく高く、その墓室面と同高に床面を築いて横穴式石室が設置されてゐる。調査の結果は、いずれも壁式石室の古い墳丘を利用して、それを切り開いて横穴式石室を造り出したものである。總社二子山古墳も墳丘の二分の一の高さに位置してゐて、その位置は墳丘に対して極めて高い。總社の愛宕山古墳も地表から積み上げられたものと推定されるが、たとへ、内陣と前方後内陣との差はあつても、愛宕山古墳は大方墳で、巨石使用の巨室であるので、この古墳に対して、二子山の前後の両石室が甚だしい墳丘をわざと造り越したといふことに疑問が出てくる。二子山古墳も古い墳丘を利用して、さらに墳形を整えたものではなからうか。あるいは前方部石室のみ古い墳丘を利用して、後門部石室はそれにならつて造られ、その上で前方後内陣に造りあげられたものではなからうか。この推定については、墳丘を発掘調査する必要がある。その上でなければ決定することは困難である。

總社二子山古墳は従来、畿城入彦命の御墓に擬せられてゐた。そして昭和十一年四月に行なわれた東国御経營奉還大祭の古墳祭も、伝承に依つてこの墳前で行つたのである。しかし、この伝承も文化七年とはまだ起こつておらなかつたらしく、吉田芝漢は愛宕山古墳を磐城入彦命の墓とし、二子山古墳はその副葬品を埋納したものとしてゐる。文政二年になつて前方部

石室が崩壊されて、急にこの二子山古墳が豊城入彦命の墓と考えられるようになった。前方部石室から剣が出て、その剣によって決定的なものとなった。山崎御以薩の志事には取扱われているが、すでに古田歩溪は豊城入彦命の盟誓品を納めたところとしていものであるから、後門部石室からも相当な貴重品が出土していたものと推定される。すなわち、剣、六輪、蓋取、いわゆる花笠であり、その剣が問題になっていたのではあるまいか。文政年中に鶴江町御誓の墓が上京して、神威伯に神号を請い、剣大神を授けられたのは(享和5)、この剣であつて、前方部石室出土のものではあるまい。その際、富小路貞直から「豊城入彦」と稱して貰つてきたが、前方部墳丘上の石碑がそれである。

しかしこの古墳は豊城入彦命の墓ではないと思われる。すなわち石室自体は六世紀終わりないし七世紀始めのつくりであり豊城入彦命についての『古事本紀』の記載は崇神天皇四十八年(西暦紀元前五〇年)にあたるので、六五〇年乃至七〇〇年の差があるからである。しかし、いずれにしても豪族の墳墓であることは誤りない。

31 宝塔山古墳

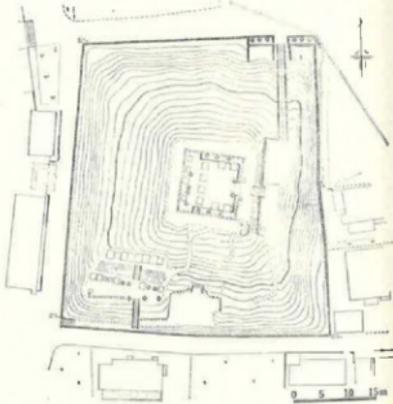
上毛古墳総覧  
總社第九号

この古墳は、鶴江町藤江町屋敷南一、六〇六番地である。鏡原偏形形で、ピラミッドの頭を水平に切つた形に似ているがこの型を方墳と称している。角錐形とは言へ、墳丘の裾部はくると高さ二メートルの垂直の石垣になっている。樹蔭の跡が石垣の根からやや離れて認められるので、樹蔭時には溝をさらに外方まで引いたものであろうが、墳頂を目標社或平杖元家の墓地とする際に、樹蔭も埋められ、墳頂も削り取られたものではあるまいか。古墳の西北に設けて、欽元家建立の光厳寺が存在し、この古墳及び東方の蛇穴山古墳等は光厳寺境内であり、壬午の敷地等にもなつていた。

この古墳はすでに早く開きされ、石棺内その他の埋葬品は不明になっている。江戸時代の寛政年間(記された山吹日記(寛政5))にも見えており、大正九年には地元の福島武雄氏によって石室が実測され、その実測図が存在している(前述)。昭和



第103図 宝塔山古墳(西南面)



第104図 宝塔山古墳実測図

に入つても墳丘の実測が行なわれ、次に昭和二十年一月五日から七日までの三日間、内部構造の実測が行なわれた。しかし、いずれも遺構入口部が埋没のままであったので、完全な実測図は得られなかったが、昭和四十三年になってようやく、遺構入口部の発掘調査が実施された。その結果は玄門が崩れて埋没しており、その下から前庭の遺構も見えた。見事な冠材が発見されたので、昭和四十四年度事業として復原された。

この古墳のように、方墳で横穴式古墳というのとは本質では極めて稀な形である。その墓室の一边の長さ五尺、各辺で多少の差がある。高さ二〇呎で、頂上に秋元家時代の墓があるので、墳墓もかなり変更されているのではなからうか。墓室もあつたようであるが、はっきりしていない。これを利用して、墓地までへの道がつけられ、また、石階がつけられている。墳丘の方形平面对角線は、石室開口部の面が北西二度西に向いているので、東西、南北の線と三度の差、ほぼ一致している。

石室は横穴で、両袖型ではあるが、他の多くのものと違って、玄室、前室、羨道を備えた複室である。その上、支門、前門、羨門が設置されている。壁はいずれも礎石の切組積みで、礎石面には削り肌があり、隅石の各角は四凸いずれも直角に截つて整えてあるが、形は正方形、長方形のもちろん凸字形、L字形のものなどがあり、いわゆる切組みになっている。石材は堅い向国石安山岩であり、天井石及び各門柱石は水磨きされたように、面が磨き

られ、ふくらみをもたして、軟らかい感じが各所に残存している。しつこい削り目のある礎石の面には、しつこいが塗られ、軟らかい感じが各所に残存している。しつこい削り目のある礎石の面には、黒い削り目のある石の面にまず塗られ、その上塗っておさえて固まらせ、磨石の上に塗ってさらに磨きおさえ、同じように高麗の上に塗って布でおさえたようである。高麗は諸所に発見され、布痕はかつて見出されていたが、現在はほぼ落ちたものようである。しつこい削り目の痕跡は他に北群馬野吉岡村の南下B号古墳にのみ認められている。



第106図 宝塚山古墳石室支門

石室の寸法は玄室の奥壁で幅三尺〇二、中央で幅三尺〇三、前幅三尺〇五であり、長さは左壁下で三尺二二、中央で三尺二〇、左壁で三尺一七である。玄室前面は厳密に言つて正方形ではない。しかし、実測図からすると、正方形を意図して設計されたものと推定される。恐らく三層が蓋葺であったのであろう。これら寸法に

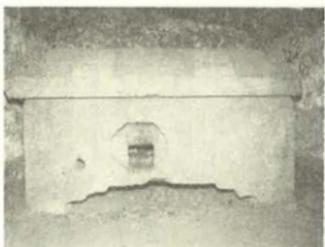
第55表 宝塚山古墳石室規模

全長	現復	10.67
支門	12.41	
支門	50	
支門	54	
支門	61	
前室	3.98	
前室	1.99	
前室	1.56	
前室	1.69	
前室	3.23	
前室	4.15	
前室	1.79	
前室	1.81	

共通に含まれている一定の長さの数値は三〇寸だけである。つまり唐尺一尺を三〇寸とするとする時には、いずれもその三〇倍にあたる数であり、唐尺一〇尺と見ることが容易である。全長及び各部分の寸法は第五五表のようであり、三〇寸だけの倍数にあたるものが多い。右により唐尺使用とみてよからう。

前室の奥壁から推定すれば、長さは幅の約二倍であり、正方形二個を縦に並べた形である。この形は奥相石室の最初のものに多くあらわれていて、総社町二山の南西部も、この形

を用いたと思われるが、矩形の平面図を設計するには正方形を無数倍連ねた方法をとつたものよりであり、(小直)やがて、長さ幅とを別幅に完全尺で定め(高直)連には正方形の一切を幅とし、その対角線を開いた形すなわち幅の寸法の倍一裏尺を使用して長さを定めたもの(高直)長さと幅との寸法を定め、その一方にその裏尺を用いたもの(高直)などがあらわれてく



第106図 宝塚山古墳石室



第109図 宝塚山古墳石室格狭間の一部